奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

内容刷新　「記念」特別号



1964・3　3月号

昭和三十九年二月二十日印刷　昭和三十九年三月一日発行三月号（第十八巻第三号毎月一回一日発行）　昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可　昭和二十五年六月十七日国鉄大阪局特別扱承認雑誌

奇譚クラブ　3月号

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Tenseisya
Osaka Japan



定価 二五〇円

代理部分譲品一覧

○妊婦女体資料の部○

- 臨月腹ヌード　大手札二枚一組　三〇〇円　安原さゆり　略号「りく」
- 臨月腹アップ　大手札二枚一組　三〇〇円　安原さゆり　略号「りと」
- 臨月妊婦の全身　大手札二枚一組　三〇〇円　安原さゆり　略号「りせ」
- 臨月腹の側面　大手札三枚一組　四〇〇円　安原さゆり　略号「りそ」
- 臨月腹の背面　大手札二枚一組　三〇〇円　安原さゆり　略号「りも」
- 臨月垂れ腹　大手札三枚一組　四〇〇円　安原さゆり　略号「りみ」
- 妊婦ヌード（九カ月）　大手札三枚一組　三〇〇円　安原さゆり　略号「やま」
- 妊婦しばり（九カ月）　大手札三枚一組　三〇〇円　安原さゆり　略号「やむ」
- 臨月妊婦三態　大手札三枚一組　三〇〇円　安原さゆり　略号「よむ」
- 産み月のお腹　大手札三枚一組　三〇〇円　安原さゆり　略号「よま」
- 動物的な腹部　大手札三枚一組　三〇〇円　安原さゆり　略号「よみ」
- 妊婦の股間縛り　大手札三枚一組　四〇〇円　児玉昌子　略号「には」
- 妊娠八カ月の緊縛　大手札三枚一組　四〇〇円　児玉昌子　略号「にあ」
- 妊娠五カ月の緊縛　大手札三枚一組　三〇〇円　児玉昌子　略号「にこ」
- 妊娠前裸縛り　大手札三枚一組　三〇〇円　児玉昌子　略号「まさ」
- 妊娠初期の緊縛　大手札三枚一組　三〇〇円　児玉昌子　略号「ぬろ」
- 妊婦の股間縛（九カ月）　大手札三枚一組　四〇〇円　児玉昌子　略号「にふ」
- 妊婦の股間縛（六カ月）　大手札三枚一組　三〇〇円　児玉昌子　略号「にと」
- 分娩後縛り　大手札三枚一組　三〇〇円　児玉昌子　略号「につ」
- 分娩後股間縛　大手札三枚一組　三〇〇円　児玉昌子　略号「にて」

○女体緊縛資料の部○

- 全裸緊縛姿態　大手札四枚一組　四〇〇円　遠藤百合子　略号「ゆり」
- 鼻をいたぶる　大手札三枚一組　三〇〇円　遠藤百合子　略号「ゆは」
- 鼻の穴責め　大手札三枚一組　三〇〇円　大塚啓子　略号「なく」
- 鼻なぶり　大手札三枚一組　三〇〇円　大塚啓子　略号「ない」
- 鼻責めの陶酔　大手札三枚一組　三〇〇円　大塚啓子　略号「なは」
- 苦悶の裸身　大手札四枚一組　四〇〇円　関谷冨佐子　略号「くせ」
- 裸身の晒し　大手札三枚一組　三〇〇円　関谷冨佐子　略号「わあ」
- 全裸股間縛　大手札四枚一組　四〇〇円　関谷冨佐子　略号「せら」
- 強烈エビ責　大手札三枚一組　三〇〇円　大塚啓子　略号「えり」
- 蒲団に悶ゆ　大手札三枚一組　三〇〇円　関谷冨佐子　略号「なき」
- 悦虐の果て　大手札三枚一組　三〇〇円　関谷冨佐子　略号「なみ」
- 椅子エビ責　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「おき」
- 六尺褌縛り　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「ろは」
- 弓吊り責め　大手札二枚一組　二五〇円　梨花悠紀子　略号「つき」
- 手足宙吊り　大手札三枚一組　三〇〇円　梨花悠紀子　略号「つた」
- オムツの股間縛り　大手札四枚一組　四〇〇円　東浦ひかる　略号「むく」
- 強烈責、被虐の果　大手札五枚一組　五〇〇円　梨花悠紀子　略号「りお」
- 乳房いじめ　大手札二枚一組　二五〇円　大塚啓子　略号「とお」
- 激痛／逆エビ責め　大手札四枚一組　四〇〇円　大塚啓子　略号「きえ」
- 美貌の裸身に縄目　大手札三枚一組　三〇〇円　細川文代　略号「きん」
- 腰元吊り責め　大手札二枚一組　二五〇円　村井知可子　略号「こり」
- 腰元間諜の拷問　大手札四枚一組　四〇〇円　村井知可子　略号「こく」
- 強烈エビ縛り　大手札三枚一組　三〇〇円　関谷冨佐子　略号「もい」
- 乳房責の苦悶　大手札二枚一組　二〇〇円　関谷冨佐子　略号「もろ」
- 全裸ムチ打ち　大手札四枚一組　四〇〇円　関谷冨佐子　略号「もた」
- 強打に泣く裸身　大手札四枚一組　四〇〇円　関谷冨佐子　略号「むち」
- 狙われた和装の娘　大手札十二枚一組　一〇〇〇円　愛川悦子　略号「ねい」
- 強烈エビ責め　大手札三枚一組　三〇〇円　水本茂美　略号「えひ」
- ゴム衣緊縛　大手札三枚一組　三〇〇円　水本茂美　略号「みす」
- バンド開股　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「はこ」
- バンド責め　大手札五枚一組　五〇〇円　東浦ひかる　略号「はん」
- 夫人の表情　大手札三枚一組　三〇〇円　関谷冨佐子　略号「せや」
- 後手吊り足挙縛り　大手札五枚一組　五〇〇円　東浦ひかる　略号「うら」
- 二つ折りエビ責め　大手札五枚一組　五〇〇円　東浦ひかる　略号「うり」
- 足挙げ椅子責め　大手札五枚一組　五〇〇円　東浦ひかる　略号「うる」
- 吊り打ち　大手札三枚一組　三〇〇円　関谷冨佐子　略号「やり」
- 股間縛法悦境　大手札三枚一組　三〇〇円　細川文代　略号「ぬこ」
- 踊り子緊縛　大手札三枚一組　三〇〇円　細川文代　略号「りこ」
- 責め衣　大手札三枚一組　三〇〇円　大塚啓子　略号「せめ」
- 猪吊り　大手札三枚一組　三〇〇円　梨花悠紀子　略号「いの」
- 足挙開股責　大手札三枚一組　三〇〇円　梨花悠紀子　略号「あけ」
- 緊縛女体撮影風景　大手札四枚一組　四〇〇円　大塚啓子　略号「むら」

○フェチ資料の部○

- 白晒六尺褌（正面）　大手札四枚一組　四〇〇円　遠藤百合子　略号「しは」
- 白晒六尺褌（背面）　大手札四枚一組　四〇〇円　遠藤百合子　略号「しろ」
- 黒褌の女（正面）　大手札三枚一組　三〇〇円　遠藤百合子　略号「くま」
- 黒褌の女（背面）　大手札三枚一組　三〇〇円　遠藤百合子　略号「くう」
- 相撲褌を締め込む　大手札四枚一組　四〇〇円　遠藤百合子　略号「すい」
- 変形六尺褌　大手札三枚一組　三〇〇円　細川アヤ子　略号「ふい」
- 六尺褌開股　大手札三枚一組　三〇〇円　細川アヤ子　略号「ふは」
- 六尺フンドシ　大手札五枚一組　四〇〇円　東浦ひかる　略号「ろい」
- 六尺褌の女性像　大手札四枚一組　四〇〇円　関谷冨佐子　略号「くろ」
- レインコートの拘束　大手札四枚一組　四〇〇円　大塚啓子　略号「いろ」
- ゴムフェチ　大手札四枚一組　四〇〇円　梨花悠紀子　略号「こま」
- バンドを脱ぐ女　大手札三枚一組　三〇〇円　遠藤百合子　略号「ゆお」
- 月経帯縛り　大手札三枚一組　三〇〇円　遠藤百合子　略号「ゆす」
- 相撲褌着用　大手札十一枚一組　一〇〇〇円　大塚啓子　略号「すま」
- 股に喰い込む黒フンドシ　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「とし」
- 股を開いた黒フンドシ　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「とひ」
- バンド晒し　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「はと」
- バンド足挙ぐ　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「はと」
- バンド見せ　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「はみ」
- 白フンドシ　大手札四枚一組　四〇〇円　大塚啓子　略号「ふん」
- 黒フンドシ　大手札四枚一組　四〇〇円　大塚啓子　略号「くふ」
- ゴムぐるみ人形　大手札四枚一組　四〇〇円　東浦ひかる　略号「こみ」
- ゴム包みの束縛　大手札四枚一組　四〇〇円　東浦ひかる　略号「こは」
- ゴムと女体アップ　大手札四枚一組　四〇〇円　東浦ひかる　略号「こあ」
- パリスバンド前開き　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「おい」
- パリスバンド縛り　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「おは」
- 携帯用白バンド　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「おか」
- サカエ軽便型バンド　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「おた」
- パリスSSバンド　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「おこ」
- パピアバンド　大型替ゴム　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「おし」
- サカエバンド　百合　大手札三枚一組　三〇〇円　東浦ひかる　略号「おえ」

限定版

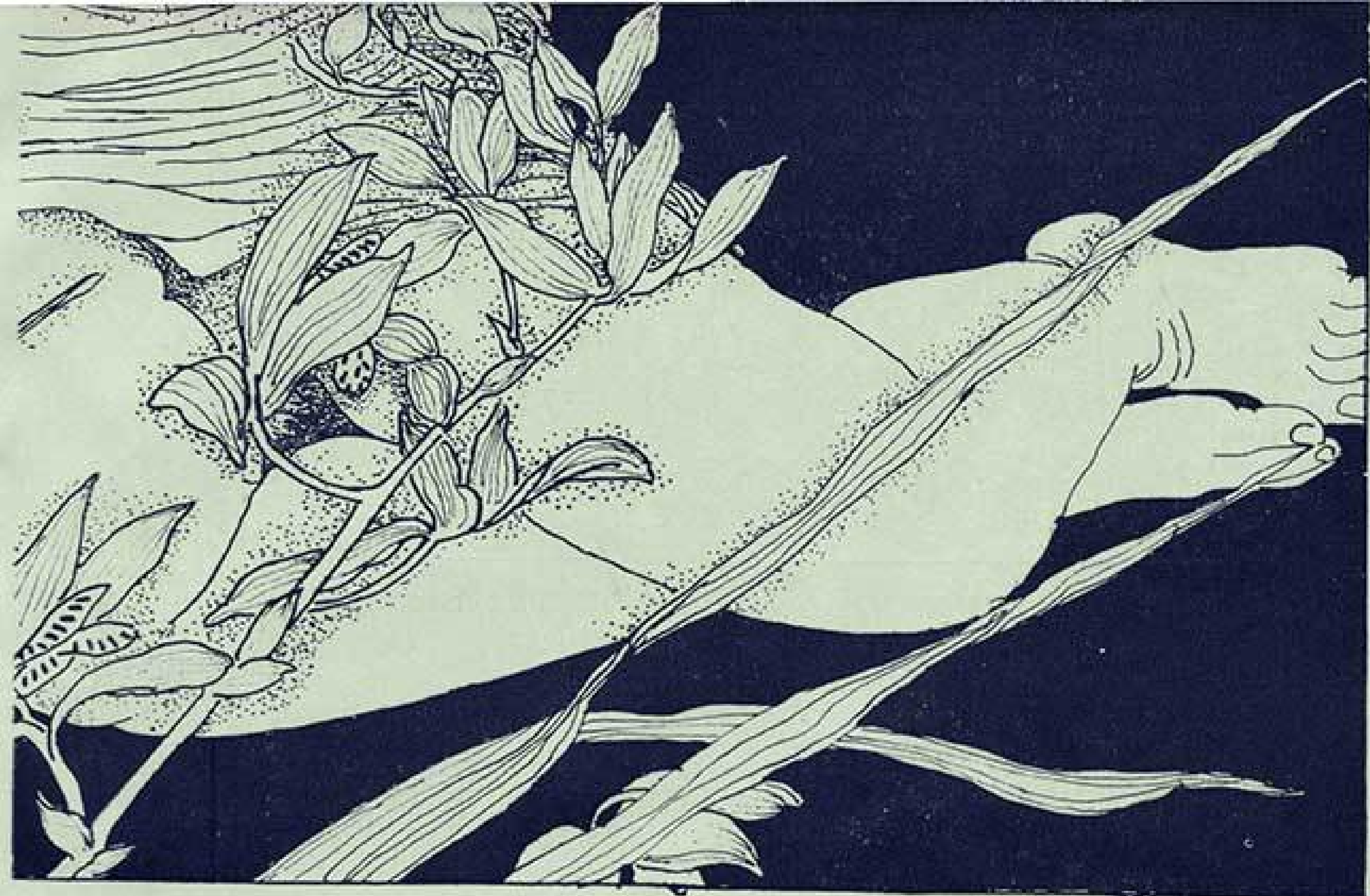
美しき縛しめ

一切書店売りをしませんから、今すぐ発行所へ代金一〇〇〇円をお送り下さい。ハガキだけの御予約でなく、必ず代金のお送りを願います。目下鋭意作成中ですから、完成次第急送いたします。局留受領の方は、二月二十九日にお出向き下さるようお願いします。

女体緊縛百二十態、一二〇葉 内容一覧

＜直接発行所 大阪阿倍野局私書函第14号 天星社へ＞

1 手錠と貞操帯と猿轡（大塚）
2 首枷のさらし者（大塚）
3 縄目と裸身の羞らい（長野）
4 後手首に喰込む縄目（梨花）
5 荷造り縛り人形（大塚）
6 バンド着用しばり（遠藤）
7 替ゴム猿ぐつわ虐め（東浦）
8 ゴム布に包まれて（梨花）
9 椅子利用エビ縛り（東浦）
10 厳しき胴絞め縛り（絹川）
11 輝く白肌をさらして（関谷）
12 荒縄黒皮フンドシ（大塚）
13 野性的な緊縛模様（絹川）
14 全裸のいましめ（愛川）
15 白晒六尺フンドシ（遠藤）
16 百CC浣腸器責め（大塚）
17 荒縄のトゲに喘ぐ（大塚）
18 両手吊りさらし（桜井）
19 M女性の本領発揮（梨花）
20 足錠をつけられる（四方）
21 美貌を踏みつける（絹川）
22 悦虐の園にさまよう（水本）
23 若肌に襲う白ロープ（若原）
24 蚊群の襲うにまかせ（絹川）
25 きびしき縄目に喘ぐ（加茂）
26 両手万才型しばり（新井）
27 猿ぐつわ黒フン縛り（愛川）
28 あえぐゴム布嵌口（大塚）
29 美しい顔をなぶる（梨花）
30 飛び出す双丘と後手（長野）
31 首縄胴縛り股間縛り（絹川）
32 被虐に耐えた表情（水本）
33 生首フォト（新宮）
34 革さるぐつわ（新井）
35 パンプス開股しばり（大塚）
36 越中フンドシ緊縛（大塚）
37 両手吊り操り責め（桜井）
38 塩水を無理に飲ます（大塚）
39 胸部と臍窩の魅力（遠藤）
40 臍窩を狙う蛇の舌（梨花）
41 顔枷の装着中（四方）
42 鼻孔ゼムピン責め（絹川）
43 鼻孔から薬液注入（大塚）
44 豊軀にまつわる黒縄（若原）
45 ピンクカバート豆絞（絹川）
46 生首フォト（新宮）
47 さらけた乳房臍部（長野）
48 後手足首逆エビ縛り（梨花）
49 ハダカ自慢屈伸姿態（長野）
50 貴衣からのぞく乳房（大塚）
51 美貌放心の表情（梨花）
52 褌姿を誇示する（長野）
53 従順なマゾの発散（竹野）
54 白晒六尺フンドシ（大塚）
55 手錠足錠首くさり（四方）
56 ガンジガラメの縄目（絹川）
57 肉体自慢緊縛模様（長野）
58 引き回される裸身（絹川）
59 豊胸を彩る茶の縄（大塚）
60 捕われの女学生（梨花）
61 被虐のマゾ女性（東浦）
62 大きな猿ぐつわ（升野）
63 可愛い足首しばり（絹川）
64 縄目に負けに豊満（長野）
65 喰い込む柔肌に縄（大塚）
66 裸身に投げたタオル（加茂）
67 緊縛の優美ポーズ（絹川）
68 くわえた赤い花（絹川）
69 エビしばり正面（梨花）
70 美貌美身の緊縛（大塚）
71 首を締めるくさり（絹川）
72 裸アクロポーズ（長野）
73 乳首に咬みつく蛇（大塚）
74 後手縛りと尻部（絹川）
75 ピンク腰巻さらし（東浦）
76 さるぐつわ哀情（大塚）
77 強烈アグラしばり（絹川）
78 ボリウムの誇り（桜井）
79 鏡にうつす裸しばり（山路）
80 惜しみなく晒す裸身（大塚）
81 ゴム帽子麗身晒し（梨花）
82 首絞めに苦しむ（大塚）
83 麗身をもだえさす（絹川）
84 猿ぐつわの苦悶（加茂）
85 祭壇のささげもの（大塚）
86 全裸の手吊り責め（大塚）
87 ゴム猿ぐつわ（絹川）
88 汚れた縄と輝く白肌（絹川）
89 手首足首椅子しばり（梨花）
90 あえぐ夫人の表情（関谷）
91 首吊りのプレイ（大塚）
92 後手しばり猿ぐつわ（絹川）
93 首じばり柱さらし（山路）
94 長髪を胸に秘めて（長野）
95 柔肌高手小手（梨花）
96 後手背高しばり（水本）
97 高手小手股間縛り（絹川）
98 柱後手縛りにて（山路）
99 黒髪いじめ（大塚）
100 十文字しばり（桜井）
101 木洩れ陽に白き肌（絹川）
102 叫ぶ捕われの乙女（大塚）
103 汗まみれの被虐（梨花）
104 洋服タンスに吊る（大塚）
105 全裸にてもだえる（関谷）
106 黒縄地獄（四方）
107 るせつの裸身（梨花）
108 セーラー服を縛る（梨花）
109 首縄から膝縄まで（大塚）
110 高々と上った後手（梨花）
111 くびれた胸と腹部（大塚）
112 カクテルドレスの女（絹川）
113 突き出した腰部（長野）
114 もだえる首の鎖（絹川）
115 吊られた可憐乙女（五月）
116 誇る若さの縄目（長野）
117 正面立姿全身縛り（大塚）
118 くさりに捕捉される（山路）
119 亀甲型股間しばり（大塚）
120 荒縄にゆだねる肌（絹川）



奇譚クラブ 3月号 目次

予約募集

限定版――**縛られた女体ばかりの超豪華アルバム**（全部実写フォト）

コロタイプ美術印刷、両面特アート使用

頒価 一〇〇〇円（送共）

略号「美 3」

アルバム↓緊縛女体百二十態

＜本誌優秀モデル陣総登場＞

鮮明なるコロタイプ印刷によって、印画紙に焼付けたと同様の美しい百二十ポーズの女体緊縛フォト「美しき縛しめ」を限定版にて企画、予約募集いたします故、直ちにお申込み下さい。すでに写真の選定に着手しております。

美しき縛しめ 第三集

必ずや皆様の御期待にそえる素晴しい逸品を作成いたします。両面特アート紙にギッシリと満載された緊縛美女オンパレードは本誌ならではの企画です。写真はいずれも、今まで一回も発表されたことのない、とっておきの未発表の秘蔵品です。すぐお申込み下さい。

「美しき縛しめ」第一集、第二集では、アート紙に対するコロタイプ印刷によって、往年の緊縛モデル達の麗姿をアルバム上に再現し広く好事家のコレクションとして珍重されましたが、ここに再び十何年ぶりで、アルバム「美しき縛しめ」の第三集を企画しました。これは限定版のため、予約御申込み下さった方にのみ頒布いたします。書店売りは一切いたしません故、必ず直接お申込み願います。

（登場モデル名）

絹川文代、長野良子、大塚啓子、梨花悠紀子、関谷富佐子、遠藤百合子、新井マリ子、五月亜紀子、東浦ひかる、竹野ひろ子、愛川悦子、加茂良子、四方清美、桜井葉子、栗本ミチ、大井小夜子、等、アルバム型式によって最も強烈な緊縛ポーズの中、素晴しい美しさを持つものばかりを選んで、皆様の貴重なコレクションの一端を担う価値のあるものを作成いたします。

二月中完成予定＝一般書店売りは一切いたしません＝直接お申込み者に限る

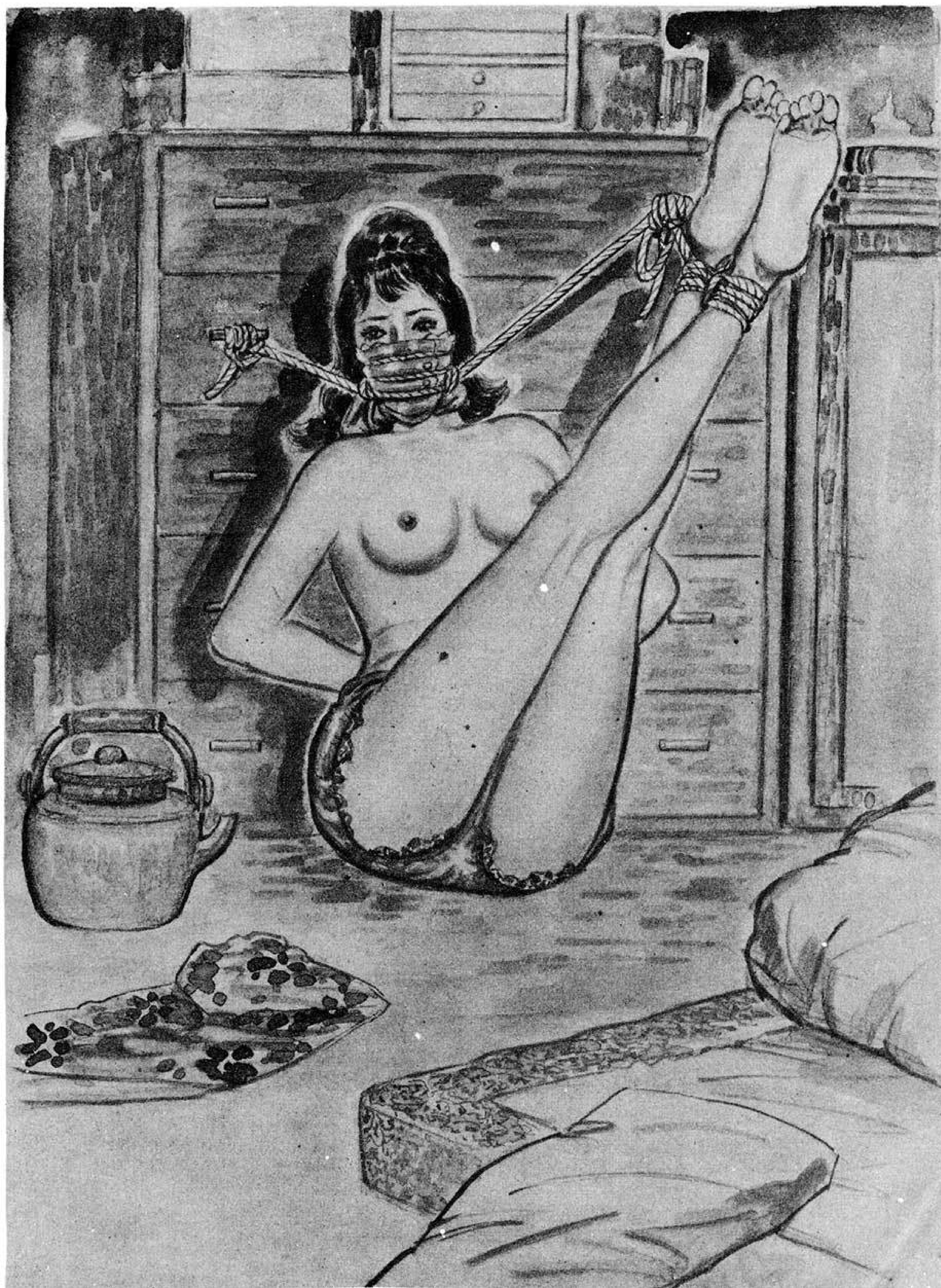


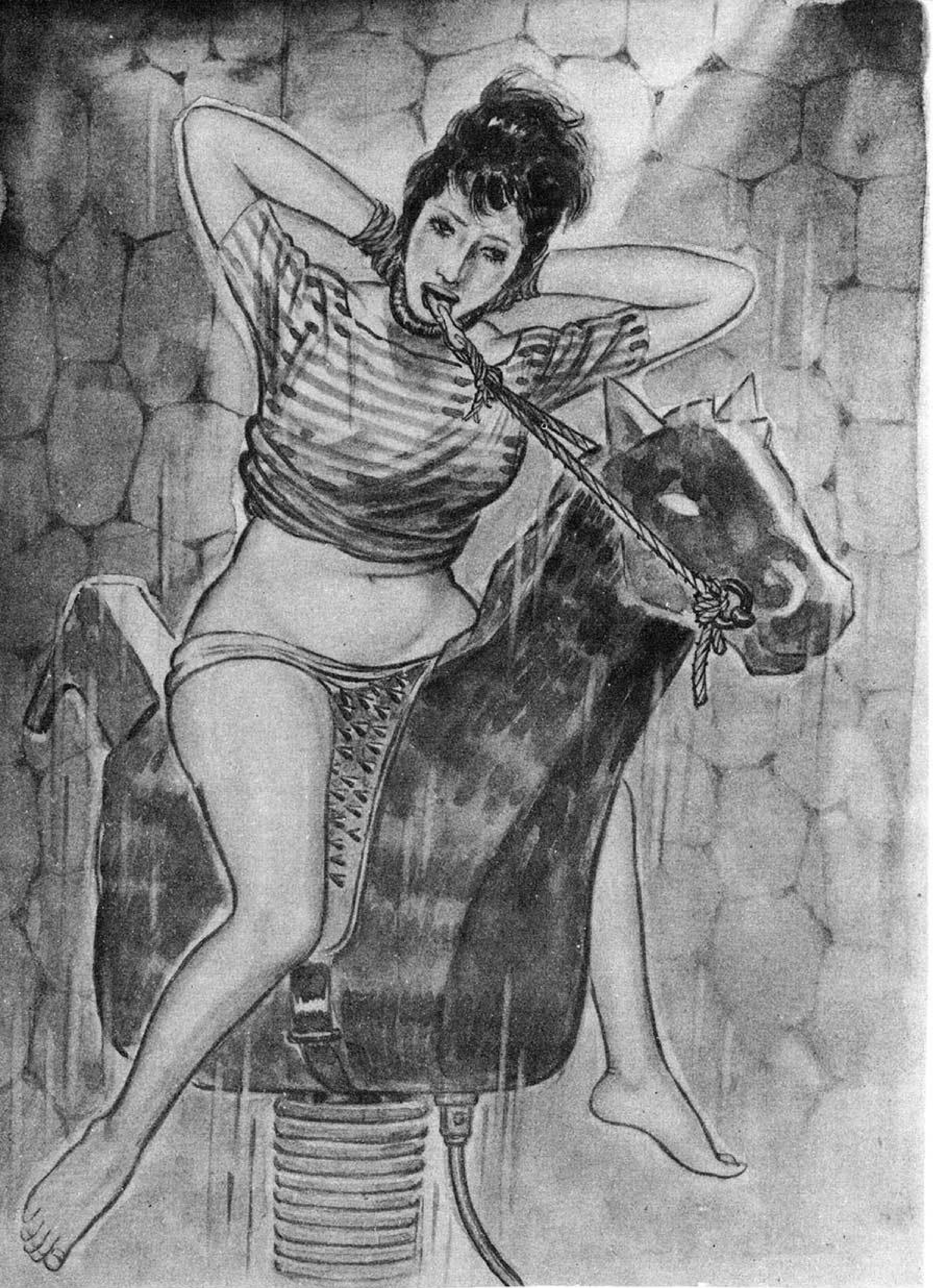
葉巻鼻責め

四馬孝画

脚線美の誇示

四馬孝画





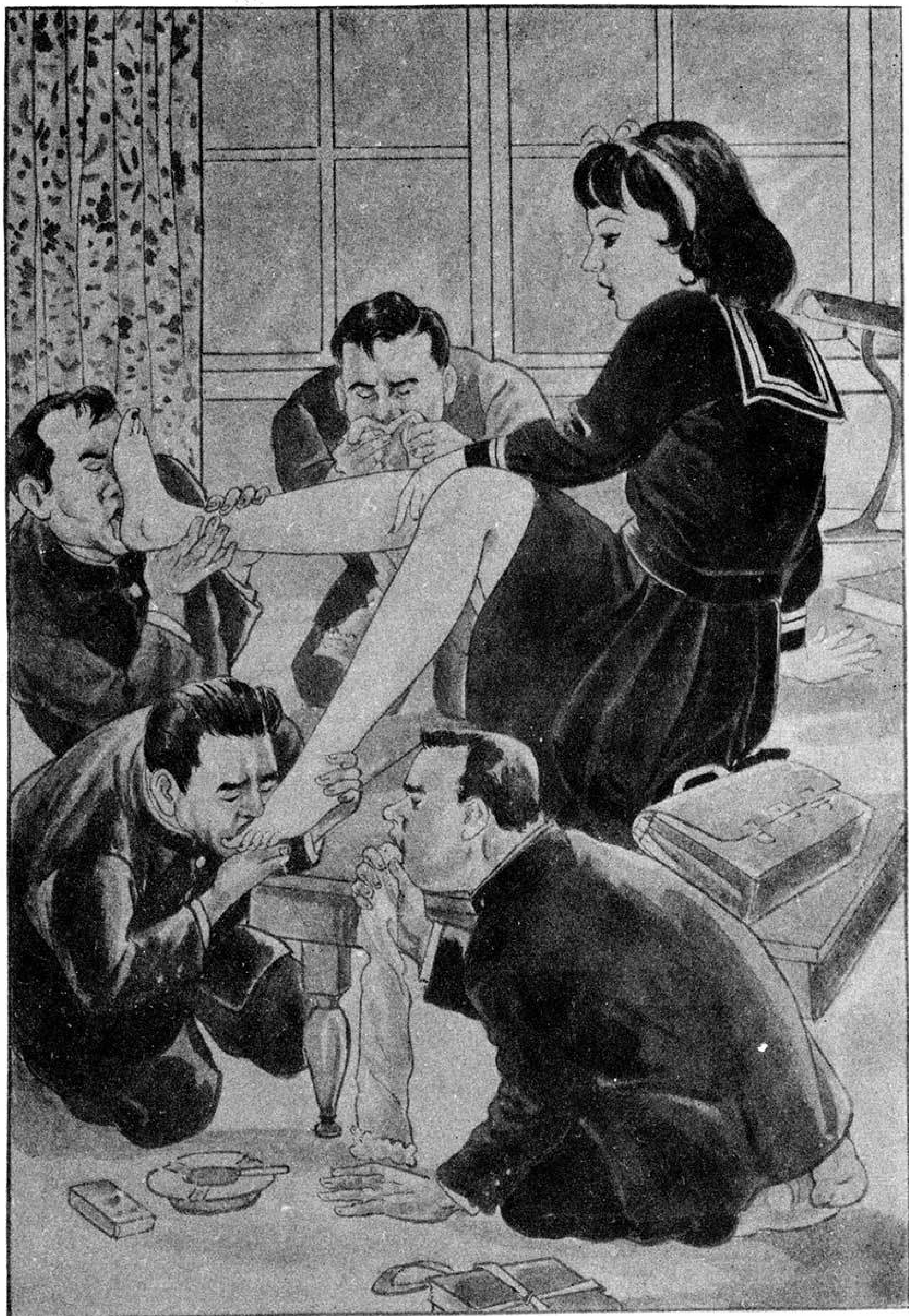
木馬館異聞

四馬考画



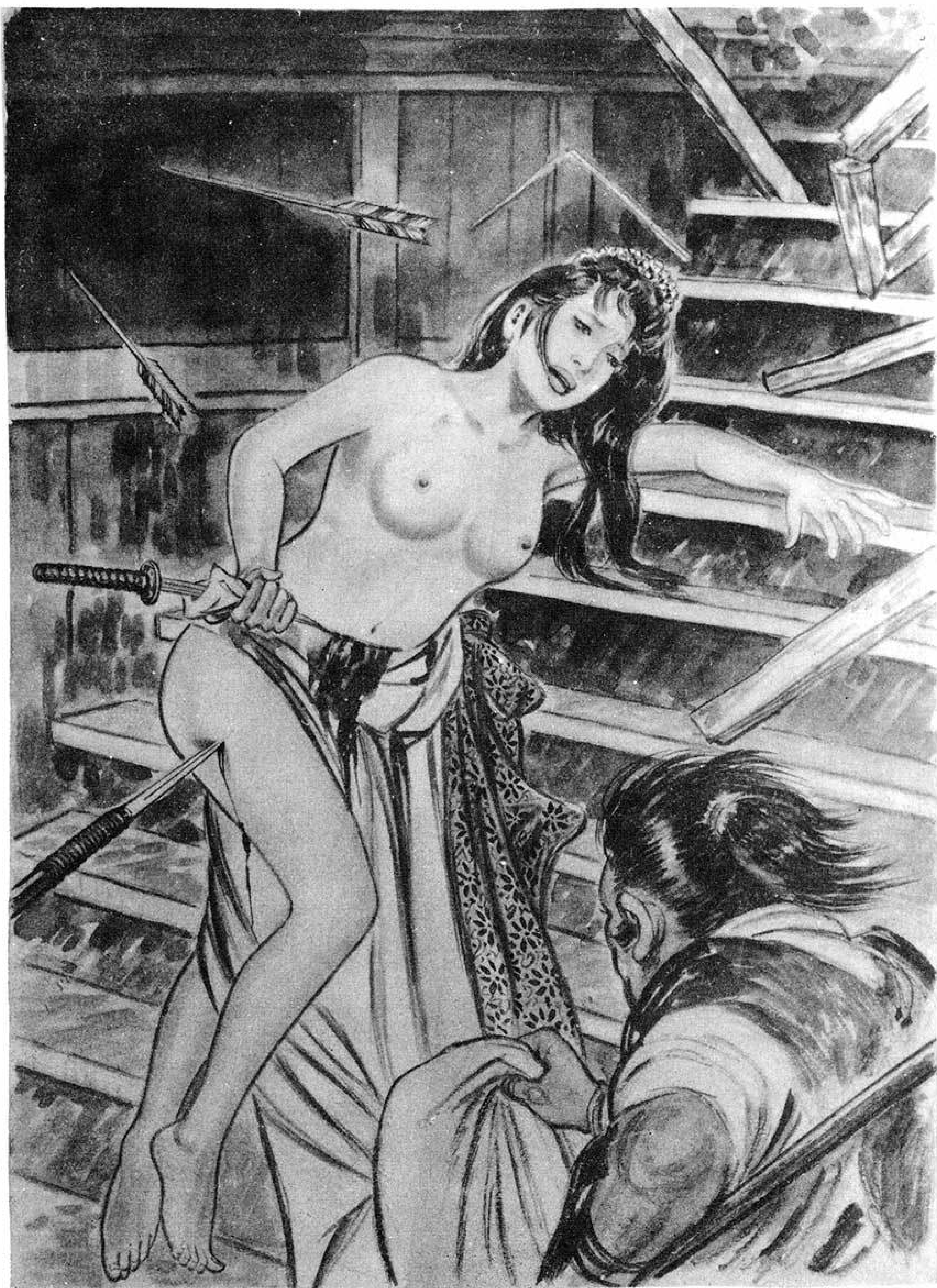
辰巳芸者の誇り

白川潤画



崇拝のきわみ

白川潤画



〔女体切腹〕

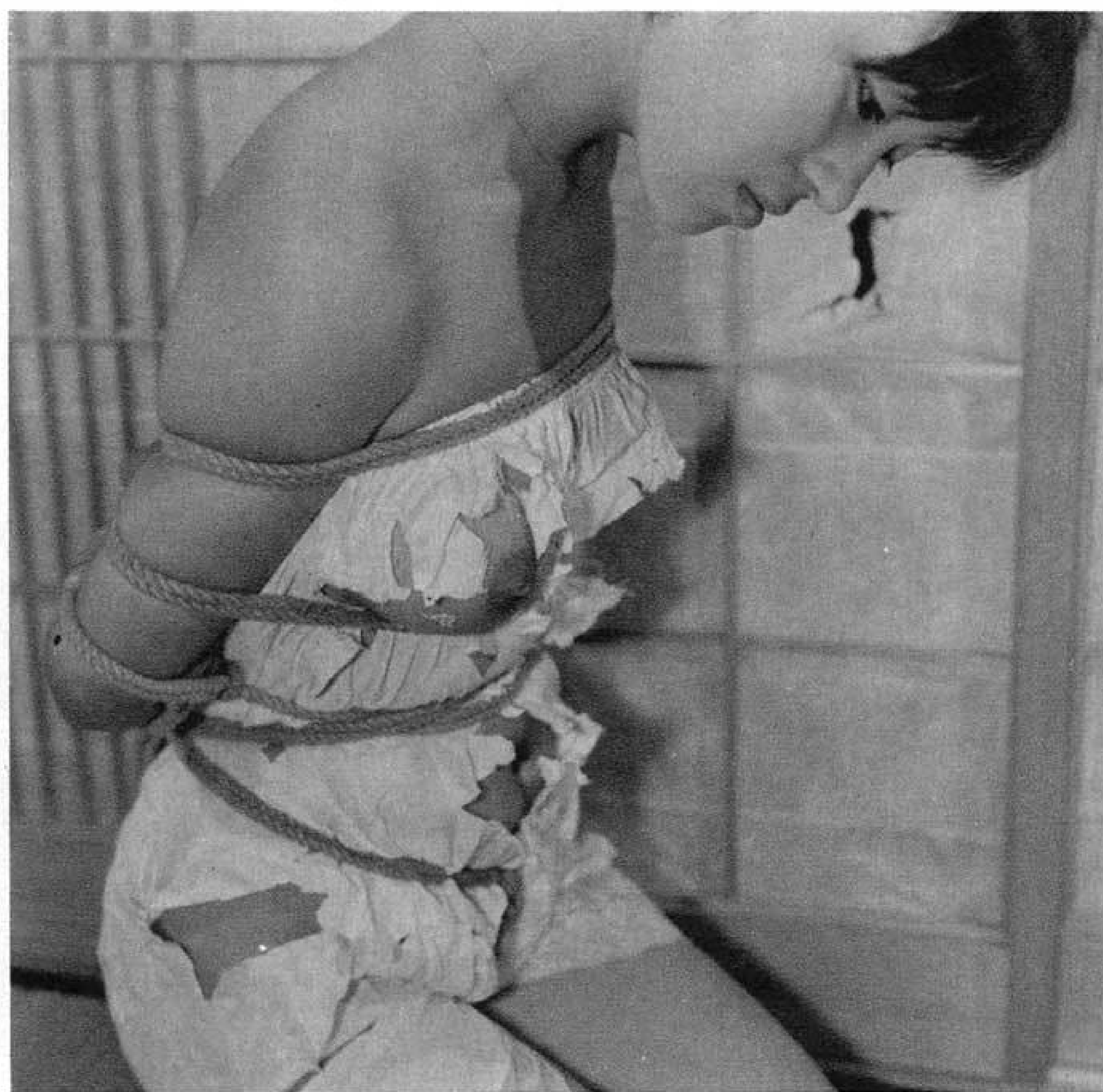
最後の一人

四馬孝画







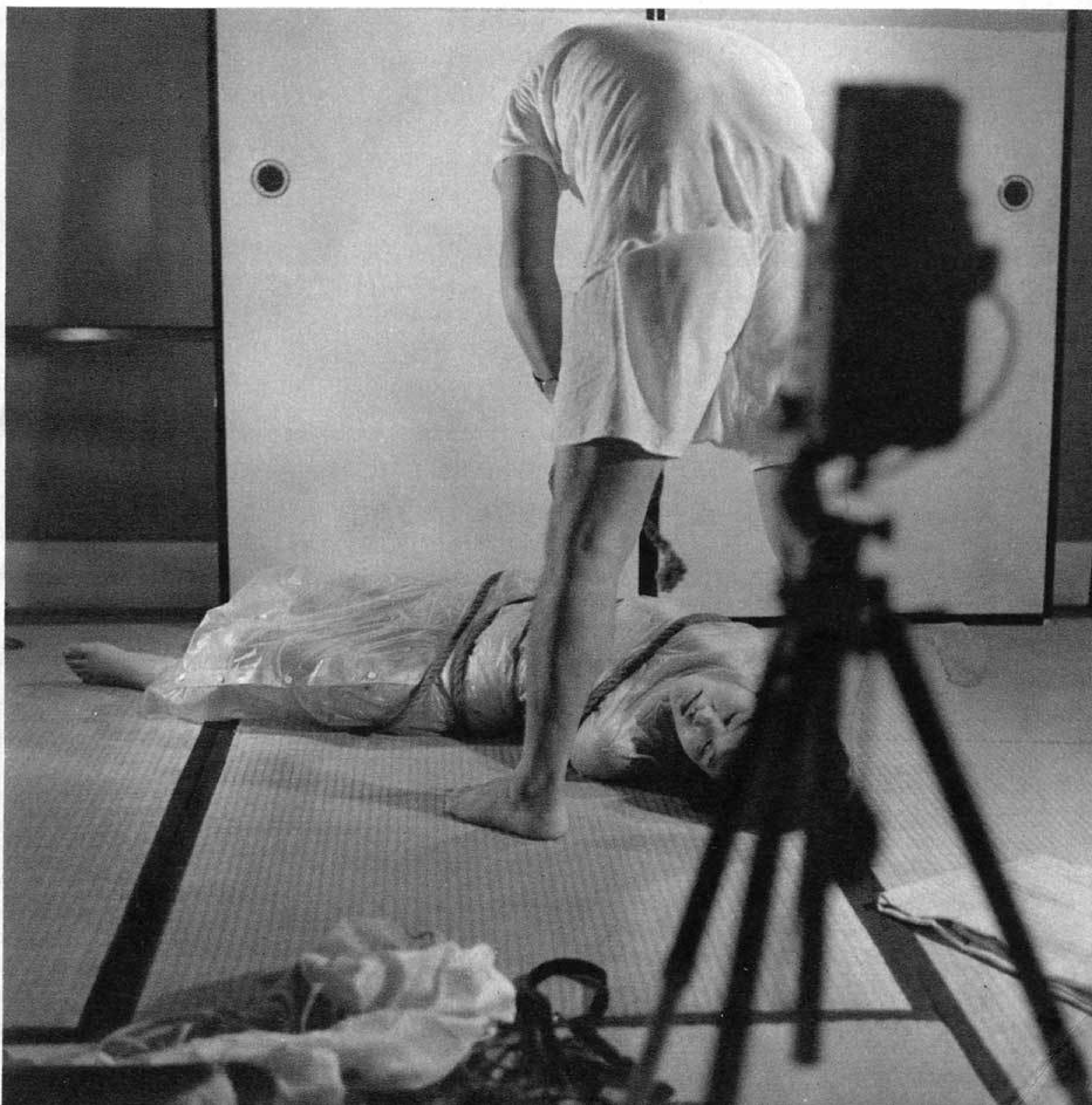




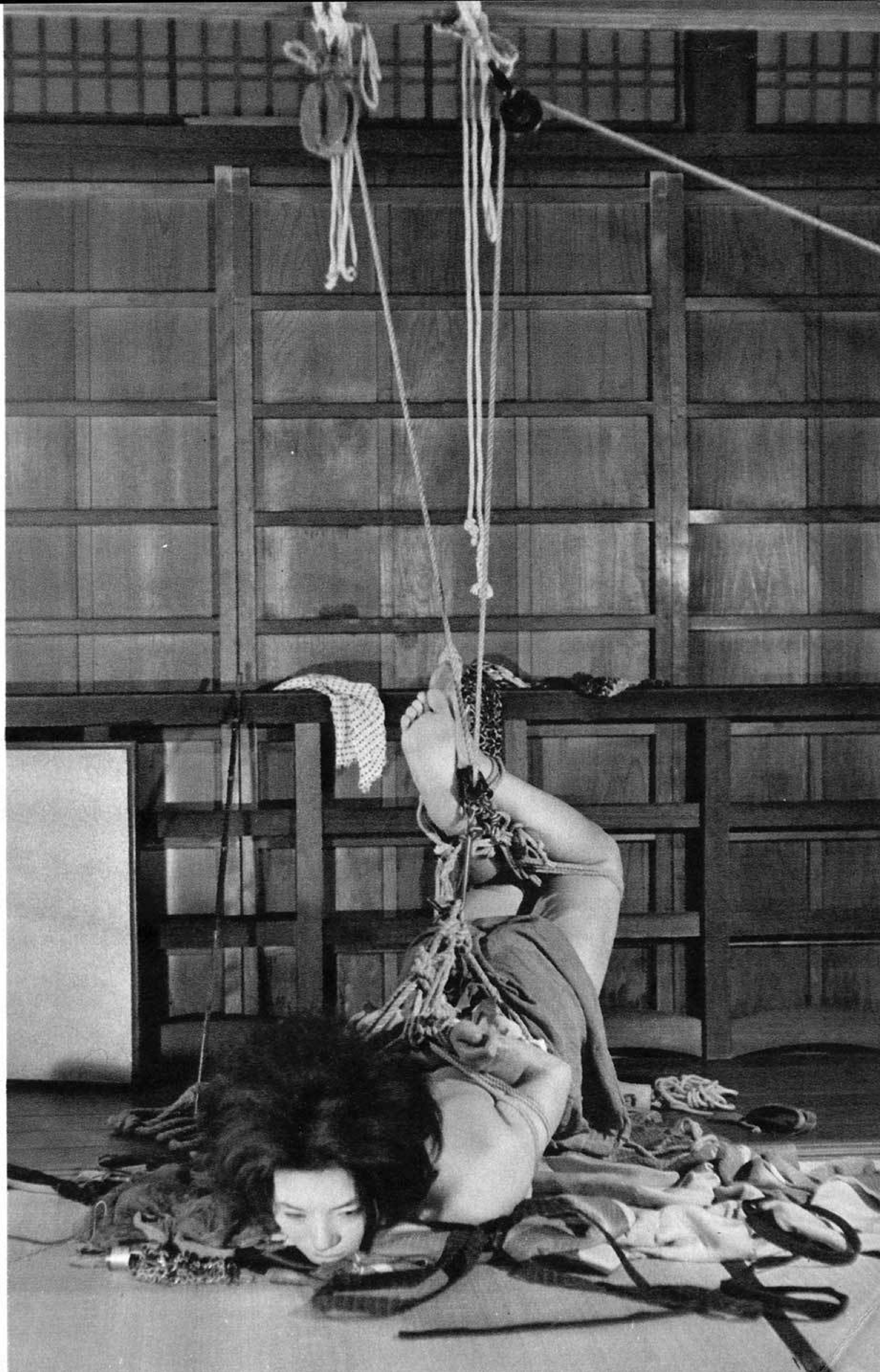
















米政府公衆衛生院の「健康にたいするタバコの関係」という報告書によると「紙巻きタバコの喫煙は健康に害があり、適当な予防措置を必要とする。紙タバコの喫煙は男性の肺ガンに関係があり、慢性の気管支炎と肺気腫の非常に重要な原因である」と述べている。

煙草の害というものは前から言われていたことであるが、煙草をやめると、多くの人が一、二貫肥ってくるということや、煙草の煎じたものは何千倍に薄めて殺虫剤に用いられたり、その原液を飲んで自殺したりしたことから考え合せて、成程とうなずける。

女性に対して男性の寿命が数年短いということも、喫煙の習慣が圧倒的に男性の側に多いということも一つの原因ではなかろうかと考えられるふしがある。

しかし、喫煙の習慣というものは一鳥一石に止められるものでなく、国家も専売法によって保護し時には若干のPRをしている状態だから、この「喫煙有害」の報告書は一つの脅威といえるだろう。

勿論、未成年者飲酒喫煙禁止法なるものがあるにはあるが、これが殆ど守られていないということは、街を見ればよくわかる。

嘗て、若秩父が未成年で入幕して大いに人気が出ていた頃、未成年を強調した同じ新聞の片側には若秩父が飲酒して騒いだという記事が載っていた。私は未成年者で飲酒するという無法性をその新聞の整理者が感じなかったのだろうかと不思議に思った記憶がある。

煙草と酒の害

編集子

酒の方の害は、肉体的に害を受ける以上に他人迷惑である。酒乱者の被害を最も多く受けるのは、その家族であろう。先年、天王寺の一心寺へ詣ったとき、家族の者（多くは夫や父）の飲酒癖を止めさせてほしいという祈願が如何に多いかということを知って一驚したことがある。家庭を破壊することにおいては、競輪やパチンコなんかより、一層甚しきものがあるのではないか。

アメリカのテレビ映画「アンタッチャブル」に見られるように禁酒法というものが出来たとしたら大変なことになりかねない。日本国中、犯罪者（禁酒法を犯したという）の巣になってしまうだろう。しかし、安心していいことには、法律は神様が作るのではなくて、人間さまがお作りになるのだから、まずまず酒がこの世からボイコットされるようなことは、ないだろう。

ヒロポン中毒の夫から受けた迫害のために、次第次第にマゾ化し合意の離婚を果した頃には、その若妻は完全なM女性として誕生していたという告白が本人から寄せられ、本誌の二十五万円懸賞入選作品の第一席に入選したことがあった。その細川美也子（筆名）という女性の告白を読むと、ヒロポンの害毒が如何に悲惨なものであるかということが如実に示され、まことに肌に粟を生ずる思いがしたものだった。

幸い今ではヒロポンは街から完全に姿を消し、その害毒の被害を受けることもなくなったが、酒と煙草の方は、まだまだ野放しの状態である。大人に害があることは確実としても、少くとも未成年者に対して、飲酒喫煙の習慣をつけさせないという努力をするのが本当ではないだろうか。

酒と煙草は、日本国中津々浦々どんな辺鄙なところでも求めることが出来る。身分証明書もいらなければ戸籍抄本や住民票もいらない。父ののむ煙草を子供が買っても何ら不思議はない。それでいて日本には、厳として未成年者の喫煙禁止法が存在している。子供が喫煙していて煙草商や親権者、又専売局が罰せられたということは知らない。



＜僕のイメージ＞

遠藤百合子さんを夢に描く

大野　潔（神戸）

春も過ぎ涼やかな風が汗ばんだ肌に気持よく吹く初夏、

神戸、尼崎、大阪、近県の美しい風景が一目で見渡せる六甲の頂上附近を大阪から来たらしい二十二、三才ぐらいの花やかな女性が数人、賑やかに話しながら登ってくる。

白のブラウスに花模様の派手なスカート、ハイヒール姿の百合子は、慣れぬ登山に足を痛め、一行より少しずつ遅れ頂上に着いた時には友達の姿は見えず、土地不案内な百合子は次第に心細くなってきた。

百合子の後から三十才前後のサラリーマン風の男が、「どうされたのですか」と声をかけてきた。

見知らぬ男に声をかけられた百合子は、「友達と大阪から遊びに来たのですが、足を痛め友達とはぐれ、どっちへ行って良いのか判らず、困っていますの」

「それはお困りでしょう。私でよかったら、芦屋まで御案内しましょう」

危険だとは思いながらも、友達の姿は附近に見当らず、その男と同行した。男は女性を緊縛するチャンスを求めて登山していた大野潔であった。

百合子が土地に不慣れなのを幸いに人通りの少い小道へと連れていった。女性特有のカンで危険を感じた百合子は、

「済ませんが、友達を探しに後もどりしてみます」

と、引き返えそうとすると、男はまわりに人影のないのを見すまして、やにわに百合子へ飛びつき右手をうしろへ捻じ上げた。百合子は逃げようと悶えながら、右手首の痛さに「ううう」と顔をしかめて、その場へうずくまってしまった。

男は片手でリュックの中からロープをとり出し、百合子の両手をす早く後手にしばり上げ、腰にさげていた汗くさいタオルで猿ぐつわをかませた上、肩に担ぐと小道をそれて林の中へ入っていった。

落葉が五十糎も重ってふんわりとした窪地、大きな松の木が茂っていて、どこからも見通すことができない恰好の場所を見つけた男は、どさりと百合子を下した。

ブラウスの胸へ男の手が伸びてくる。百合子はハッとして逃げようとするが、両手をしばられているため立ちあがれない。ただ、ごろごろところがるばかりである。

男は百合子の身もだえる姿を横目で眺めながら、松葉を一にぎり束にして持った。ハイヒールを手荒にもぎとり、ナイロンのストッキングをはぎとった。

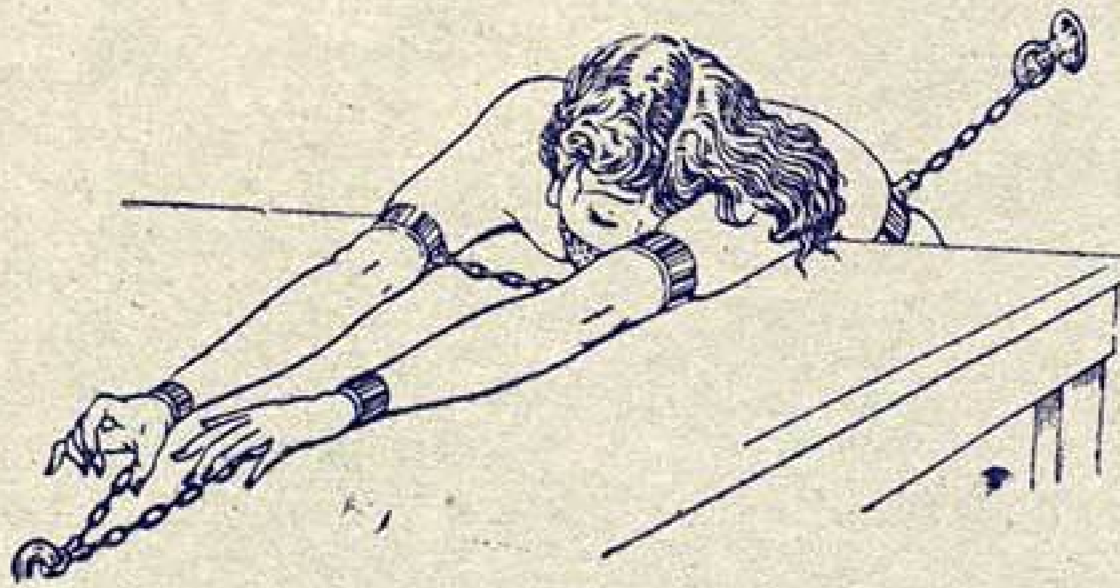
固ぶとりでスラッと伸びた、豊

満な太腿、男は百合子の真ッ白い足の甲をわしづかみにすると、松葉の先で、チクリチクリと足の裏を刺した。くすぐってはチクリと刺す。百合子は足を指をくねくねと曲げ伸して、擽ったさと痛さをこらえる。

このような百合子のありさまを冷やかにカメラにおさめる男。

遠藤百合子さん、貴女はマゾ女性を自称されております。私はこのような男になりたいのです。

どうか、一度このような趣向で六甲山でプレイしてみませんか。



連載異色責小説

遊蕩児の面目

土岐　進

朝風呂でのうのうと身体を伸していると、平常狭っ苦しい暗室の中でDPの手間賃仕事に精力を費していたのが遠い国の夢のように思えた。ガラス窓からさし込む陽の光に照らされながら、風呂の中へ浸ったということも、ついぞないことだった。

風呂といえば、芋の子を洗うような街の銭湯で、夕食後のひととき、只、汗を流すことだけを考えていたのに、このように、二日酔いをさます朝風呂なんて、勿体ない勿体ない、と思わず貧乏人根性が出て、長湯をしてしまった。

部屋へ戻ると、すでに朝食の膳が出ていて、熱カンの銚子が並んでいた。昨夜同衾した若い妓がお化粧を直して給仕をしてくれるのには、彼女よりもこちらの方が面はゆいくらいだった。

真田が再びこの料亭を訪れたのは、陽の落ちるのが早い京の街々に、淡ズミ色のモヤが立ち込める頃だった。早速酒宴になって三人の芸妓が入ってきた。

例の通り飲んで騒いで、三人の妓の踊りの披露がすむと、真田の指示で奥まった離室へ移った。

待つ間もなく女将と一緒に、二十三、四になる少し年増の妓が入ってきて、二、三の世間話の上、女将は下っていったので、その部屋は真田と小生と妓の三人きりになった。やがて、障子の外で「おいでやす」という女中の声がすると酒と肴を二人分持ってきた。

妓の酌で飲む間、真田の紹介で彼女のことが凡そわかった。とにかく、若々しい彼女のグラマーぶりを今のうちに写真におさめておきたいというのだった。

貧乏人の小生はこれといってカメラを持っていなかったので出入りの材料店から、キャノンのセコを借りてきていた。それにストロボをつけると酔眼にファインダーをのぞきながら、真田のいう通りシャッターを切っていった。

真赤な長襦袢一枚にされた芸妓は腰紐や扱帯で後手にぎゅうぎゅうと縛られ、畳の上にころがされていた。小生は若い女の縛られている姿なんか、じかに見るというようなことは始めてのことなので胸がドキドキしてカメラを持つ手もふるえる仕末だった。

そのときの小生は、正直なところ、その妓の真白な脛や太股が腰巻からこぼれるようにチラチラと見えている刺激に目もくらむほどだった。数枚とり終えたところで真田はその女の紐を解くと、長袢襦をぬがして腰布一枚にしてしまった。

金を持っている奴は、こんな遊びもやるのだナと感心していると真田は、腰紐をとりあげて、肉づきのよい妓の腕を後手にしばり出した。程よく肉がつき、まるでつきたての餅のように真白でふっくらとした肌は、電灯の光に照らし出されて、まさに此の世のものとも思えぬ美しさだった。

カラーでとったなら、さぞきれいだろうなあと思った。女の美しく整った足の指が紐をしめつけられるたびに、複雑な表情をみせて変化していった。真田に足を掛けてしめつけられたり、畳の上をころがされたりしながら、その妓は無表情に近い従順さであった。

（つづく）

再び「女の斬られる時」

中屋敷　真

新国劇の得意のレパートリに、「殺陣田村」というのがある。謡曲田村の朗々たるうた声にのせて見事なタテ（殺陣）を見せてくれるが、私は常々、どうして女優陣を用いてやらないかと不思議に思っている。

二年程前、OSKの春の踊りで珍しく殺陣のシーンがあったが、前半は男役の新国劇の二番煎じの如きものだが、後半は女役たちが小太刀と薙刀で渡り合う。

主役は小太刀、からみの五、六人の女達は薙刀で、早いテンポで胴を切り払い、最後の一人の肩袈裟がけにして終る。

華麗な衣裳、美しい照明で中々見ごたえがあった。私の隣の中年紳士が「この方が面白いな」と独言をつぶやいたのを覚えている。

これに似たのは、やはりSKDの「西遊記」の中にあったが、女人国の妖怪達（支那女官風衣裳）と孫悟空がはでな立廻りをやる。

これは相当練習したとみえて、女剣劇どころでなく、リアルなものだった。小さい青竜刀を振り回していたが、サジスチックな面を良く出していたように思った。

映画演劇の中の女が斬られる場面では、大抵後袈裟斬りの型が多い。この方が胴を斬るより派手だし、女がのけぞる型が良く表現されるようである。斬られる女の方も、娘役よりは妖艶なヴァンプ女優の方が感じが出るし、衣裳も姐御風なものより御殿風の愛妾型の方が良いと思う。

最近は邦画界も、ヴァンプ女優が少なくなって、浦里はるみも消えてしまい、正月作品の東映「忍び大名」では、加賀騒動の御部屋様に、青山京子を起用しているが困ったものである。丹下左膳の宝みつ子など、育て方で貴重な存在と思う。又、最近の時代劇では、男優中心で女優の方は添え物の感じで、昔の鈴木澄子、伏見直江、或は山田五十鈴の様に、この人達一人で客が呼べる様な時代劇女優は皆無とはさびしい限りである。

そして、東映あたりの映画では姦婦達も見事に天誅を受けて斬り倒されるのではなく、ラストで改心して消えるというのが多くて、小生としては残念である。



一寸余談になるが、どこかの芸能ニュースで殺陣師が殺陣をつけているところが紹介してあった。

確か大映作品で大美輝子の愛妾がのめって逃れて行く後より斬られるカットだったが、最初に男同志で殺陣師がゆっくり彼女の前で見本を見せる。

今度は彼女はゆっくりと（斬る方も阿井美千子）立廻りの末、カメラの方へ向き逃げ様とする。じっと背を向けて前のめりで待って

いる背中を殺陣師が又ゆっくりと斬り下げる。これでぐっとのけぞって倒れる。今度が女同志で同じカットを入念にやる。これから本番と四通りに分けて紹介してあったので、小生がびっくりして息もつけなかった位だった。
こんなのは珍しい。

終戦後、奈良市で巡業中の旧新興女優雲井八重子に強引に面会したことがある。そこで殺陣のことを少し聞いてみると、大抵のアクションでは、実際に竹光の刀をあてるそうで、ときには斬る方が声だけをかけて、その合図でのけぞったりするが、動作がずれるとうまくゆかぬ。竹光でも実際に斬られると割合に痛いが、この方が感じが出るという話だった。

もっと、いろいろ聞いてみたかったが、時間もなかった。その後彼女はどうしているものか。（且ってはＯＳＫのスターだった人だが）

斬られる前に、女が抵抗し、恐怖し、斬られてからの絶叫、断末魔の苦悶、痙攣、死、という一連の動作が、何かに共通している事が皆様は良く御分りの事と思うがこの動作を芸術的に高める表現の工夫が私達女斗ファンのねがいである。



「夫婦のＳＭプレイ」

水野弘

妻をモデルにした生首フォトです。出来はよろしくございませんが、御高評を賜れば幸甚です。



「女の斬られる時」

中屋敷氏提供

アンスコ・カラーにて撮影した「女が斬られる時」と題したモデル写真です。

凡そ私の好みに寄りましたが、果して感じが出ていますかどうか……。



浣腸のうめき

四馬孝画
「女体浣腸羞恥場面図絵」
について

並原新一

四馬孝画の「女体浣腸羞恥場面図絵」第一集四枚一組（かん1）第二集四枚一組（かん2）の八葉の絵は、浣腸マニヤである私を非常に楽しませてくれました。あのリアリスチックな絵をじっとみていますと、次のような会話とうめきが聞えてくるようです。

〔第一集〕

一、保健室の女学生（体操の時間に急に腹痛を訴えた美しい女学生が保健医の手によって三十CCのグリセリン浣腸を施されようとしている……)

「……さあ、スカートをまくってお尻を出しなさい！」
「嫌だわ、先生」
「ぐずぐずしていると、こちらではがすぞ」
「イヤーン」
「スカートを上げたらズロースを下げて！いちいち手のかかるお嬢さんだな、さあ、下げて下げて」
「立ったままでなさるの？　これでいいのかしら」
「よしよし、もっとお尻をつき出して、お腹の力をぬいて！　これでよしと、そのまま十分間、そこに立っておきなさい。そんなに足をばたばたすると、かえって苦しくなるぞ、ジーッとがまんして」

二、オシメカバーと浣腸（保健婦のおばさんが手にした浣腸器から情容赦もなく液を注入されてしまったお嬢さん……)

「さあ、これですっかり終りましたよ。あと十分もすると、すっかり悪いものが下ってしまいますからね、十分間の辛抱ですよ」
「ああッ、おばさま、がまんできそうにありません！もう……」
「まだ、一分もたってないんですよ、お粗相しちゃいけないから、それなら赤ちゃんみたいにオシメカバー当ててあげようね、さあ、足をひろげてごらん」
「いやッ、恥しいわ、そんな…」
「ダダこねても駄目ですよ、そのままがまんおできになって！」
「ああ、もう、もれそう！」
「でしょう、さあ、あなたによく似合うようなピンクのオシメカバーをしてあげましょうね。お腹に力を入れないで、そうっと腰をもちあげて。そう、はじめにオシメを三枚あてましょうね。これならトイレまで間に合わなくても絶対に大丈夫ですよ。さあ今度はカバーね。ごらんなさい、白いレースもついていて、ちょうどパンティみたいな可愛いオシメカバーでしょう。裏にはちゃんとゴムがついてるから、大丈夫ですよ」
「ああッ、早く、早く、もう、がまんできない！」
「まだまだ、今、ホックを止めているところ、腿のところをよく締めておかないとね」
「嫌！　ああっ、恥しい、もう…少し洩しちゃったの」
「やれやれ、手のかかる赤ちゃんですこと、やっと終りましたよ、いつでも思いきりお出しなさい」
「イャーン、恥しいから、おふとんかぶせて……ああ、うーン」

〔第二集〕

四、若妻エネマの浣腸（発熱で寝ていた新妻が恥かしそうに、腹痛を訴えているので、早速愛用のエネマシリンジが持ち出されて…）

「あなた！　まだ……」
「じっとがまんするんだ。あと一〇〇CCやっておこう」
「あーっ、あーっ、お腹がはって苦しい！」
「もう少しだ、さあ、おわり。苦しかったかい？」
「ズロース上げてもいい？」

「だめだよ、そのままの姿勢で待つんだ」
「だって、このままだと……」
「今にも、とび出しそうだというんかい？　まだじっとこらえるんだ。そのうち、便器を当ててあげるからね」
「恥しいわ、トイレへ行かせて下さらないの？」
「この四階のトイレは、今故障だって知っているだろう。そのまま三階のトイレまで間に合うかな？きっと階段あたりで大洪水になることまちがいなし。それより、ここで取ってあげるから、遠慮せずにおやりよ」
「嫌だわ……ああ、苦しい。」
「それとも、赤ん坊みたいに、おしめでもしてあげようか？」
「まあ、そんなこと、死んでも嫌よ」
「じゃ、おとなしく便器を待つんだな、いい？」
「うん……早く、早く」
「よしよし、おや、お尻がふるえてるね」
「あなた、たまらないのよ、早く当てて、出そうなの！」
「だめじゃないか、あれあれ、白いズロースを、とうとう汚しちゃって！」
（おしまい）

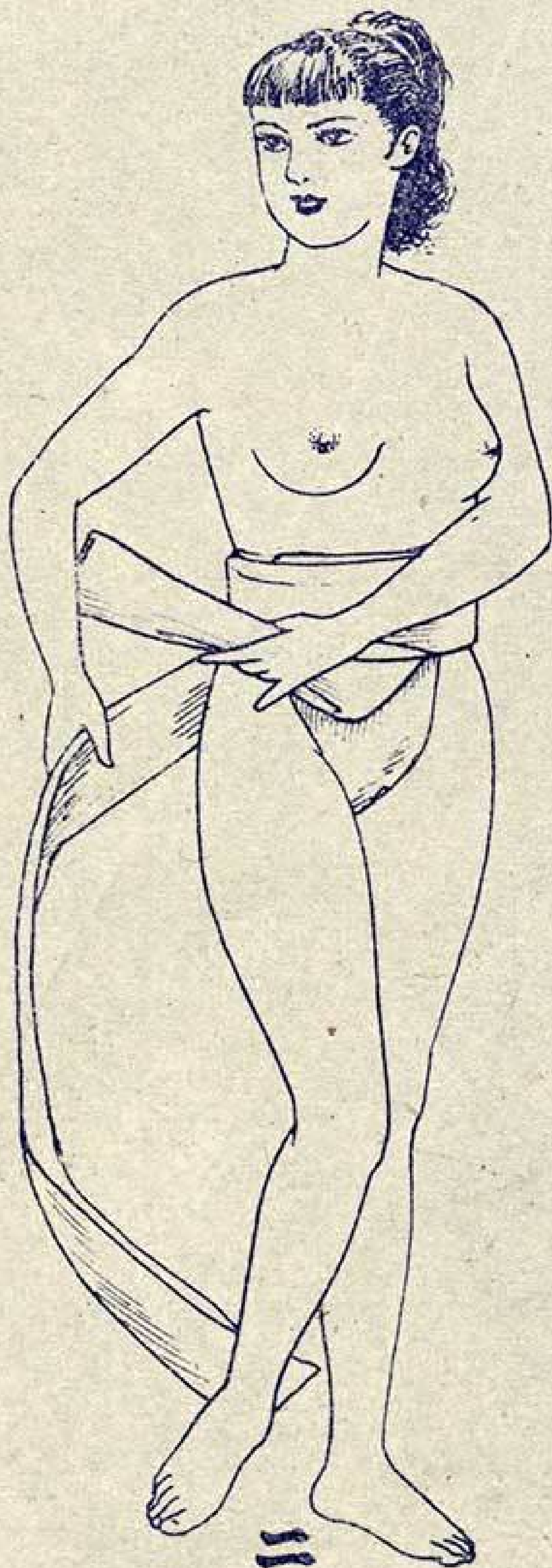
【娘　相　撲】

畔亭数久画



一

「娘相撲」と題して曽て、十年程以前に本誌口絵に発表したものの中、娘が相撲褌を締めるところの図です。ここに掲げたのは正面の図一と二で、背面の図三と組み合っている図が同時に掲載されていたのですが、漸次この欄に再録して皆様のごらんに供したいと思います。


二

〔映画通信〕

最近の映画・テレビ美女緊縛シーン

東山映史

最近は映画・テレビが競演で美女緊縛シーンを見せてくれる。

テレビのヒット作、丹波哲郎らの「三匹の侍」が迫力のある美女緊縛シーンを見せてくれるが、これが大いに刺激になっているものと思う。

では、最近の映画・テレビから傑作シーンを拾ってみよう。

大映の「桃太郎侍」は山手樹一郎の原作もの、これまでも長谷川一夫主演で映画化され、轟夕起子や木暮実千代の緊縛シーンは、当時評判になったものだ。

今回は本郷功二郎の桃太郎侍に女スリの坂東小鈴は新東宝から東映にきたグラマぶりを見せている久保菜穂子、ファスト・シーンから久保は密書を奪い、あやうく帯をとかれ、ストリップ・シーンを見せようとする。

長襦袢一枚の所で桃太郎に救われ玉の肌を拝ませてくれない。しかし、ラスト近くで城健三朗扮する悪の親玉伊賀半九郎を裏切り、桃太郎についたため、桃太郎とともにピストルで撃たれて捕えられる。胸の乳房の上を荒縄で二巻ききっちりと緊縛され、うつむけにころがされ失神している。

横には、これも足まで縛られた本郷の桃太郎侍がころがされている。「小鈴」という声にふと目をさます小鈴。ヒタイの所に血ノリがついているのもセイサン。

「私は生命にかえても桃さんをお助けします」と、ローソクを倒しその炎で自分の後手の縄を焼ききろうとする。

きっちりと両手を背後で縛り上げられているのを、炎で焼き切ろうというのである。このシーンが一番の見せ場。久保菜穂子のヒタイからタラタラと熱汗が流れている。

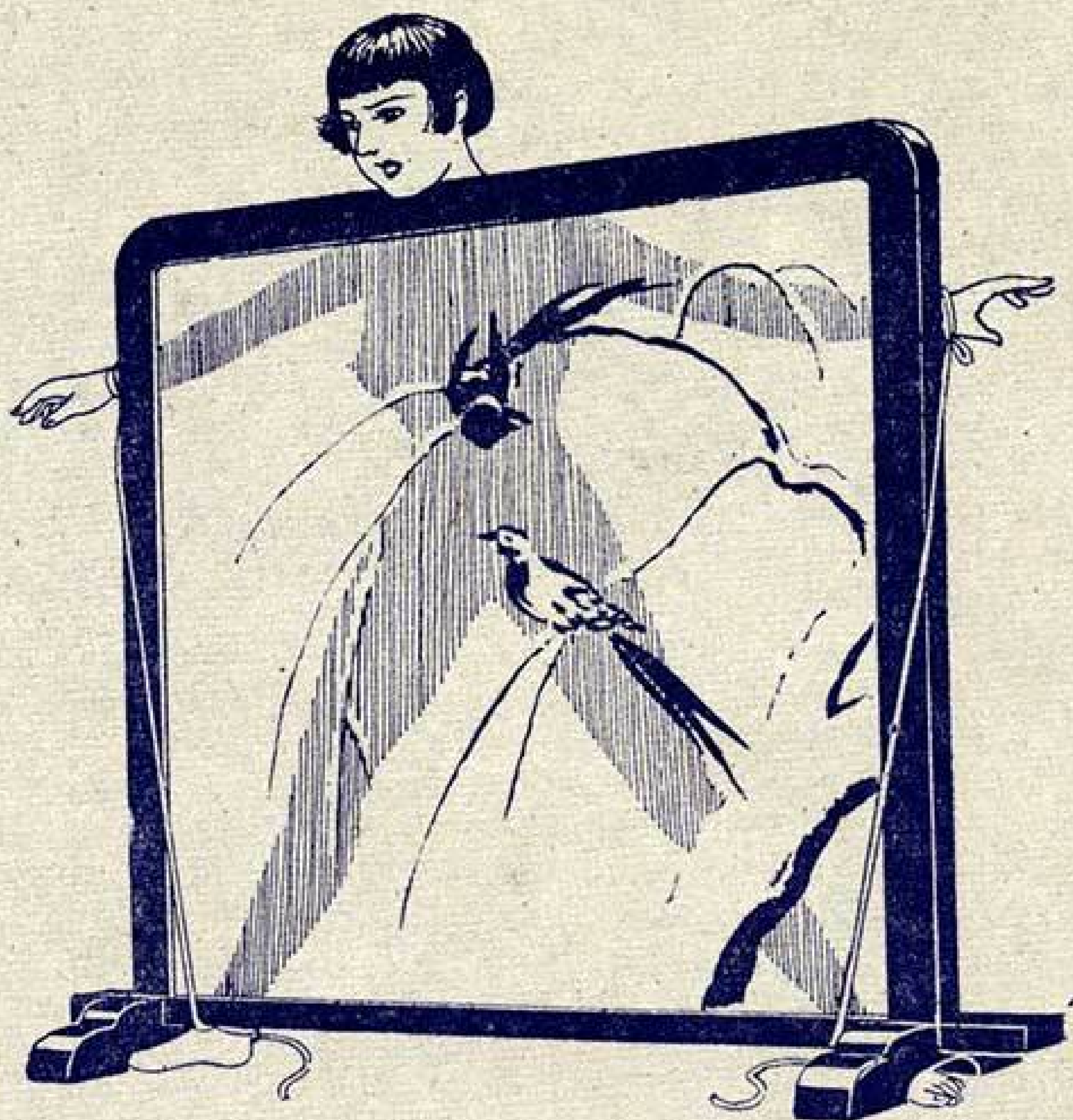
そして、手を焼きながら縄を焼き切り、本郷の縄をほどくが、ついに火事のために死んでゆく。

木暮のもお色気の中にせいさんさがあったが、久保も熱演し、いいところを見せてくれた。

高田浩吉の腰元百合も敵方に捕えられ「ハダカにしても白状させようか」というところへ、桃太郎が現われ残念。

東映では、大友柳太朗主演の「血と砂の血斗」で、丘さとみ扮する戦国時代の遊女奈々が、大木に縛りつけられ殺されようとする。





ツイタテに縛られた少女

畔亭数久・画

縛られ女優ナンバーワンの丘さとみだけにうまいものだ。

大映の勝新太郎のヒット・シリーズ「座頭市喧嘩旅」で藤村志保の江戸の豪商の娘が仕えている殿の意にそむいたために、侍たちに追われる。それを勝の座頭市に救われるが、やくざの喧嘩にひきこまれ、勝をひっぱりこむための人質にとられる。東映の三船敏郎の「用心棒」と同じシチュエーション。「用心棒」では司葉子が山田五十鈴に捕えられ、緊縛で引きづり回される。同じ手法を逃れるためか、藤村は縛られずに、島田竜三に両手をつかまれ引きづりまわされる。縛られてないのは、やはり物足らない。

新東宝映画のエログロ映画を引きついだのが国映映画。「情慾の谷間」「情慾の洞窟」など。「情慾の谷間」は峯和子扮する女ターザンが町の悪二人に捕えられ山中でヒスイのあり場所を〝白状せよ〟と吊り責めにあうが、これが本当に吊り下げで、一寸見ごたえがあった。

捕えられた熊を助けにきた峯は両手をねじ上げられ、後手に縛りあげられ大木に縛りつけられる。毛皮を纏とった胸の上をつる縄でぎゅうぎゅう縛りあげられる。そしてついに、身につけていたヒスイを発見され、そのありかを白状せよと天井のハリにつり下げられる。両手をおがむように立て、縄はぎっちり胸をしめつけている。

そして、「これでもか、これでもか」となぐられる。新人女優受難の一コマでいたいたしく、「情慾の洞窟」も全裸の女ターザンが胸を二巻きつる草でしばられ責められる。

テレビの圧巻は、何んといっても「花の生涯」で楽しませてくれた。俳優座の山岡久乃の勤王の美女黒沢トキ子が捕えられ、トウマルカゴで江戸へ送られる。後手に緊縛されたままで、トウマルカゴの中へ入れられる。それを護送する。淡島千景の村山たか女、松竹映画では、黒沢タカ子は宮城千賀子だが、最後には井伊大老が殺され、村山たかは黒沢トキ子に捕えられる。そして、「長野主膳の行方を白状せよ」とゴウ問される。

そのシーンはないが、天誅組の座敷牢のなかで、ゴウ問の後の息もたえだえの姿を横たえている。「息もたえそうなゴウ問で……で足首がいたんで……」という。

さすが、ベテラン淡島だけに、お色気の中に痛々しさを見せ、うまいものだ。佐田啓二の長野主膳も捕えられ殺される。そして、ついに村山たかも三条河原で死ぬ以上の残酷の刑罰といわれる三日間の生き晒の刑にあう。

三日間立木に縛りつけられたまま衆人の目に晒される。松竹映画のときや淡島のたか女で何かきれをかぶせられて縛りつけられていた。今度は井伊大老の回想シーンにあり、長い緊縛シーンをタップリ楽しませてくれた。

とくに三日目は雨中の晒し、片方の白い長襦袢がぬげかかり、髪も乱れたまま胸を縛られている。奇跡的に助かり香川京子の志津に救われる。

中々見ごたえのある美女緊縛シーンだった。

（完）

〈告白〉

女剣劇と夫婦のプレイ

川田和茂

私は元来、女剣劇に熱中し裸女のみには興味がありません。

最初の病み付きが大江美智子若かりし時に、神戸松竹劇場にて、「奴の小万」を演じ男を次から次へと斬り倒した姿が夜寝ても瞼から離れず夢見る事再三再四にわたりました。

それ以後、女剣劇団がくれば遠近を問わず近回りして見物に行きました。当時、高山広子主演の、「花嫁剣法」「元禄女大名」等女剣劇映画も親の目を盗んでは見に行ったものですので、一つも見逃しはありませんが、二タ昔前のことなので、役者名、映画題名を忘れたのを残念に思っております。

四、五年前、春日裕子ショーを神戸生田映劇、水島早苗ショーを京都大宮劇場へはるばる四国から夜船に乗り、翌日目的のショーを二回宛見学し、夜汽車にて四国へ帰ったものです。特に水島早苗ショーには参りました。相手の女性と二人、赤い腰巻一枚で双方脇差にて渡り合っている場面なんか、写真機があれば写したかったくらいです。

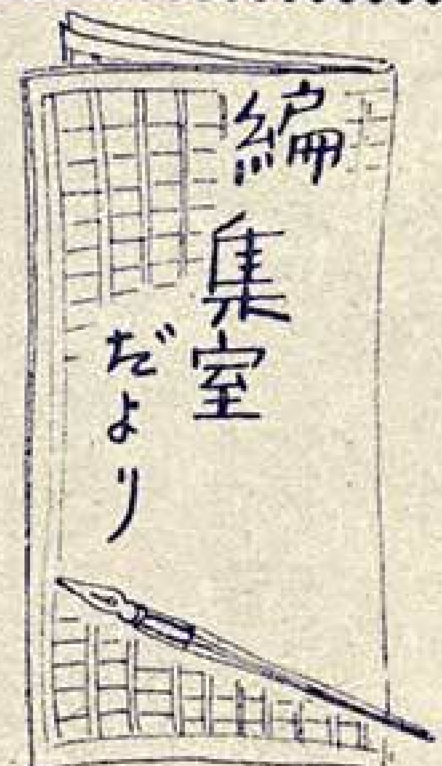
それ以後、余り女剣物に巡りあえず残念に思っております。そこで小生が考えたのが、妻に女剣物の夢を再現さそうと思い、妻に告げたところ、始めはクスグッタイ感じがして中々うんと言わなかったが、だんだんとくどき落し、ついに承知させた時の嬉しかったこと、小生一代忘れることができません。

最初のうちは着物姿でおもちゃの刀を大小二た振り帯に差し込ませ、刀を振りまわすだけで満足していたが、見物しているのみでは物足らなくなり、刀を買ってきて小生と妻と二人で渡り合いを始めました。

斬ったり斬られたりして、日が経つにつれて半裸姿になり、いろんな型をするうちに、妻も馴れてきて腰巻一枚の姿を好むようになる始末です。私もゆかた一枚のみの姿で腰巻一枚の妻に立ち向うようになりました。

そのうち、妻は二刀流をうまく使うようになり、太刀打ちばかりでなく組み打ちもやるようになり私が討ち取られ役を買って出ることもありました。しかし、そのうち、それのみでは物足りなくなり赤チンと赤インキを買ってきて、水にてうすめ、妻の胸や背中、腹など、刀で斬った所にぬって血のりの替りにすることを試みてから一段と興味が増してきました。

その頃、半月ばかり、主に夏のひる休みを利用してプレイを楽んでおりましたが、この刀で斬った



○座談会の企画や会館の建設と建案はいろいろとあったのですが、臨時増刊号「文献」の発売頃から市況の空気がおかしくなり、諸事手控えとなったことはまことに残念です。

○二月号を書店で見て一月号の発売を知ったり、中には十二月号から廃刊になったと思ったという読者の通信もあり、未だに相当数の人が諦めているのではないでしょうか。照会のあった方には一々返信しているのですが――。

○横書きの原稿がまだ後を断たないのは、どうしたことでしょう。特に読者通信はすべて書き直すことなく、そのまま印刷にまわしていますから、横書きのものは全部没にするより仕方ありません。

○読者通信といえば、最近はいささか常連の方のが多いようで

ところに血のりをつけることは、真迫性があって面白かったです。
　この頃は寒いので中止しておりますが、今年の夏は再現しようと思っています。幸い妻は長髪なので時代剣劇にはもってこいのスタイルです。妻は身長五尺三寸、体重十五貫、乳房は子供二人あるのに丸形なので崩れておりません。
　私はこの点、恵まれていることを内心自負しております。冬の夜のつれづれに、拙い文をお目にかけましたが、同好の方々のお便りに接すれば幸甚です。



立木を背にして雄々しくもサーベルによって立ったまま腹切りをしている乙女。腸が露出するほど深々と切りさばいた十字腹の凄惨さは、若々しい乙女の均整のとれた姿によって一幅の美しい幻想的な香気を放っている。バックの鉄条網、サーベル等からして、単なる切腹画としてばかりでなく一つのストーリーさえ浮んでくるような気がする。

畔亭数久・画

＜切腹断想＞

すね。新人の方もどしどし御寄せ下さい。投稿しても読者通信には中々載らないというお小言も受けますが、今後はできるだけ沢山掲載しますから奮ってお投じ願います。

○十年ぐらい以前発行した本誌をなんとか一冊都合してほしいという方の便りが時々迷い込みますが、手垢だらけの古本が定価の数倍以上もしていて、それが簡単に手に入らないという状態です。只今、在庫している既刊号も日に日に残り少なになっています。いずれ全部売切れになる日も近いでしょう。

○本誌創刊号から現在に至るまでの既刊号の中より、Sに関するもの、Mに関するもの、女体切腹に関するもの、浣腸に関するもの、Fに関するもの、メトミ女相撲に関するもの、ソドミア関係等々を、せめて題名作者名でも書き出したいと思っていたが、そのうち編集部備付けの雑誌さえ漸次なくなってしまって、必要なときは古本屋へ買いに行ったりしている有様なので今では、すべて手遅れになってしまったような恰好です。



女の脚、足、アシ

ピンクの脛にひかれて

伊東潤一郎

○

私が時々行くN証券の支店では二十才前後の女の子が交替で値動表の値札の入れ替えをやっているのだが、教壇のように一段高くなっているので、向うむきになって盛んに値札の入れ替えをやっている彼女たちの脛が、カウンターに坐っている私たちの目の高さになる。最近はノーストッキングが流行しているので、彼女たちのピチピチとした脛を十分に眺めることができるので楽しみだ。

もっとも証券会社に勤めるような女の子には、素晴しい脚線美の持主は少いようだが、時にはハイヒールをはいて歩くたびにむきだしの脛の筋肉がくりくりと動くのを眺めることができて思わぬ目の保養をすることができる。

○

女の足、脚に興味を持つからといって、私は女の足に踏まれたいとか、足の裏を舐めたいとかは夢にも思ったことはない。どんな美しい女性が相手だってそんなことは考えてみたこともない。

それよりも美しい女性が縛られたりしてもがき苦しむときの足の動きの方に興味を持っている。といって、私はまだ女の子を実際に縛ったりした経験はないのだが、例えば、押し倒されて仰向けにころがったとき、ぐっと伸ばされた女の足の指先なんかに、たまらない美しさを発見する。

○

先日のこと、省線のガード下を車で通っていると、ピンク色の脛をスカートの下に見せた美しい娘さんが来るのに逢った。思わず車を停めて鑑賞したが、薄紅色のすべすべとした肌は、折柄の薄ぐもりの乱反射の光線の中で宝石のように輝いていて、しらずしらずのうちに溜息が出てきた。

車の横を通ったとき顔を見たら余り美人という程のこともなかったが、とにかく脛だけは惚々とするほどの美しさだった。あんなすべすべとした脛を愛玩することができたら、どんなだろうかと思うが、案外、夜目遠目傘の内で、手にとって見たら、そうでもないかもしれないが、ストッキングなしで寒い中を辛抱しているところをみると、彼女たちも自分の脚の美しさを自覚しているのだろう。

○

自分の脚や脛の美しさを誇らしげに思っている若い女性の脚を、思いきりいじめてみたいものだ。脚をいじめるといったって、脚だけを縛るのではなく、むしろ足の方は自由にしておいて、両手を後手に、胸から二の腕も縛り、身動き出来ないようにしておいて、ころがしたり、仰向けに倒したりしてみる。そのたびに彼女の足や指先に、どのような変化が起るか。

やはり自分の足の美しさに関心を持っている女性でないとつまらない気がする。自分の足の美しさに誇りと羞らいを持つ若い女性はいないものだろうか。（了）

ＫＫ編集漫談

× 覆面子
○ 編集子

× やあ今日は、毎月雑誌の贈呈を受けて有難う。本年もどうぞよろしく。

○ わざわざお呼びたてをして恐縮です。あんたの声を聞くのも何年ぶりですかね。

× さあ、もう何年前になりますかな。あの頃は私も雑誌を拝見していて大変愉快だったが—。

○ そうですね、私もあんたが本誌に登場してくれたのは何時ごろだったか、はっきりとは忘れてしまいましたよ。ハハハ、凡そ昭和二十九年頃でしたかね。

× 月日の経つのは早いものですナ、あれから私もひと昔の年をとってしまったんですから感慨無量というところです。

○ 全く同感です。ところで今日は、例のあんたの毒舌を拝聴したと思いまして——。

× フフン、このオイボレの登場を求められるとは、やはり太平ムードというところですかな、私は余りいい福の神というスタイルでもないのだが、折角お呼びに預ったのだか、一つその毒舌とやらを喋らしてもらいますかな。

○ いや、実のところ、本誌にとっては太平ムードどころじゃないので、あんたのお知恵を拝借したいと思いましてね。

× お知恵拝借ときましたかね。私もそのことでは陰ながら心配しとったんだが、何にしろ昭和二十七年ごろから、ずっと雑誌の贈呈を受けているものだから有為転変が手にとるようにわかっていたよ。

○ 一昨年の夏ごろから、読者のアンケートをとったりして、幾分内容をセーブしたりしてきましたが、その反応として発行部数の漸減ということもあらわれてきました。当然のことですが非常に強気の人、逆に極端に弱気の人、それに中庸の人、とそれぞれ同じ位に、便りや激励の文を頂いているのです。ずばり言って、あんたの御意見は如何ですか？

× そう、私としては、やはり中庸派をとるね。この際、雑誌の永続を計るためには、内容に十分検討を加え、低調ムードでゆくことだな。そのための減頁或は値上げといったことも仕方がないよ。

○ では、御忠告通り、そういった方針でゆきましょう。話は変りますが、最近の内容について特にお気づきの点は？

× やはり時代の流れというものでしょうかね。ひと頃から見ると、それはそれなりに大いに進歩しとると思っとるよ。例えば妊婦物というのかね、あれなんか、新機軸じゃやったろう。

○ そうですね、妊婦モデルの獲得ということは中々むつかしいんで弱ってますが、今年はなんとか、いいモデルを発見して素晴しい写真をとりたいと思っています。

× なかなか御苦労も多いことだと思うが、読者の要望にこたえてせいぜい頑張って下さい。



〃今日は、赤ちゃん〃

可愛いい初夢

白川睦夫

一、正月の贈り物

今日は昭和三十九年元旦。

私はいつもより早く、五時に起きた。私はゆっくりと今日の元旦を過すべく、今日一日の予定を考えて、ぼんやりしていると、勝手口の方でドシンという音がした。

私はネズミかなと思って、勝手口へ行き電気をつけてみると一尺四方位の小箱が置いてある。誰がこんなものを届けたのかな、と私は宛名を見てみると、はっきり白川睦夫様へ書いてある。

そして横の方にこんなことが書いてあった。私は今日、白川様へ白川様の夢のプレゼントを致します。中味はあけて見て自分でたしかめて下さい。唯このプレゼントは必ず白川様の心を掌握するに値する物と思います。これで正月をゆっくり楽んで下さい。

二、箱の中味

私は、こんな文面を書いて、自分に贈り物をして呉れる者は誰だろうかと、考えました。しかし、いくら考えても心当りはありません。とにかく自分に来たものだと思って箱を開けてみました。

開けてびっくり、なんとなんと箱の一番上には輪ぬいしたオシメ二十枚、二番目に可愛いい赤ちゃん柄のオシメカバーが三枚、つづいてピンクに可愛いい柄入りのベビー服、その他ガーゼ地の肌着、よだれかけ、クツ下等赤ちゃん用品が一ぱい。しかも、すべてが私の気に入ったものばかり、ベビー服もピッタリする位大きなもの。

私は夢ではないかと、疑ったものです。その箱の一番下に紙片があり何にげなく読んでみました。

三、文面

大きな赤ちゃん、おめでとう。私の送ったオシメやオシメカバーベビー服などは如何です。

お正月にゆっくり身につけて楽んで下さい。そして可愛いい大きな赤ちゃんになって下さい。

貴方は小さい時からオシメが大好きだったのだから、今日この衣類で十分感触を味い、たのしいお正月を過して下さいね。

又、オシメは七組あり七種類ですので毎日別々のオシメでね。

オシメカバーは赤ちゃん用の柄ネルですので貴方なら、十分楽しめると思います。では、可愛いい赤ちゃん、御ゆっくりね。

四、身につける

私はあまりの事に、我を忘れて



もうズボンもパンツも取り去っていました。そしてまだぬく味のある床の上に、ベビー服、ガーゼ下着、オシメカバー、オシメと赤ちゃんがするのと同じ方法で、私はその上へ大の字にねました。

ああ、私が今まで夢に見た事を現実にできるのだと思うと、手がガタガタふるえはじめました。

大好きな雪花模様のオシメを股に当てた時……ああ、私は大人であって今は赤ちゃんなのだ。オシメカバーは実に可愛いいもの。私の心はオシメとオシメカバーにとりつかれているのです。

やっとガーゼ、ベビー服をつけ終った頃は、朝も七時頃です。私は赤ちゃん用品を一切身につけて泣きました。オギャオギャ…と。

五、鏡

私は一切赤ちゃん用品を身につけベビー服の裾をはだけした。はだけた所から見える、オシメカバー。美しく可愛いらしいオシメカバー。そしてオシメカバーの裾からはみ出しているオシメ。

可愛いいピンクのベビー服、鏡の中の赤ちゃん今日は赤ちゃん。ハイハイしたり、アンヨしたり笑ったり、ああ、私のこのあどけない姿。私はいつまでも、いつまでもこのようにしていた。私は自分の腰部をくるんだオシメをながめつつ、こう思いました……。

六、めざめ

長い間の夢が実現した喜びで、いつしか私は、赤ちゃん姿のままオシメ、オシメカバーの事を考えながら眠ってしまいました。

私はどのくらい眠っただろうか「睦夫、睦夫」と呼ぶ声に、はっととび起きました。

たしか、私の姿は赤ちゃん。でもでも、どうしたことでしょう。今自分の目で見る姿は、オシメもオシメカバーもなく、唯パンツ一枚の姿なのです。ああ、私は夢を見ていたのでした。でも、こんな可愛いい夢。私は静かにさめた夢を反芻しながら可愛いい夢の記憶をいつまでも、いつまでも残しておきたいと思いました。



産婦人科の思い出

中津綾子

三月ほど前、中絶のため産婦人科へ通ったことがありますので、その時の思い出を書いてみたいと思います。はじめての妊娠でもあり、待ち望んでいたことでもあり、中絶なんする筈ではなかったのですが、その頃夫との間にちょっとトラブルがあり、そんなことがきっかけのようになって産婦人科の門を潜るというようなことになったのです。

そのトラブルというのは、夫に隠し女のあることが、わかったので、私がそのことを詰問したことから端を発したものでした。私はもう驚きの余り御飯ものどを通らない有様で毎日泣き暮しておりましたが、私のそんな様子は、夫にとっても相当ショックのようでした。そんなことから、産婦人科へ行ったのですが、そこのお医者さんが、ちょっとハンサムな方だったので、私はふと妙な気持にとらわれたのです。

夫が隠し女をつくっているのなら、私だって浮気の一つぐらいしたってかまわないだろうという気持になったのです。そして、その浮気の相手というのは産婦人科のお医者さんを選んだのです。私は毎日その医院へ通うたびに、そのお医者さんとデイトをする有様を夢に描くのです。でも、実際には何んにも、そういうことは起らずその頃から次第に夫との間が冷たくなり、半年ほどでとうとう離婚してしまいましたが、私は今でもその医院の前を通るたびに、あのハンサムのお医者さんのことを思い出すのです。

（おわり）



アクロバットと妊婦アクロ

山川　登

はじめてお便り差し上げます。小生奇クのかくれた愛読者にて、奇クの発展にかげながら声援をおくっているものです。なにしろ中央から遠く離れた北海の地に住しておりますため、愛読者の多くの方々と接することも出来ず、只一人奇クを愛読するかたわら、小生なりに研究、勉強しております。

小生、女体の緊縛、殊にアクロバットに興味を持っております。貴誌に嘗て発表されました阿倍能丸氏のアクロバットの数葉のフォトは、殊に感心させられました。同封しましたフォトは、最近ちょっと撮影したものですが、アクロバットのポーズ二態は、これはしばりのないもので、自由にポーズをとらしたものです。

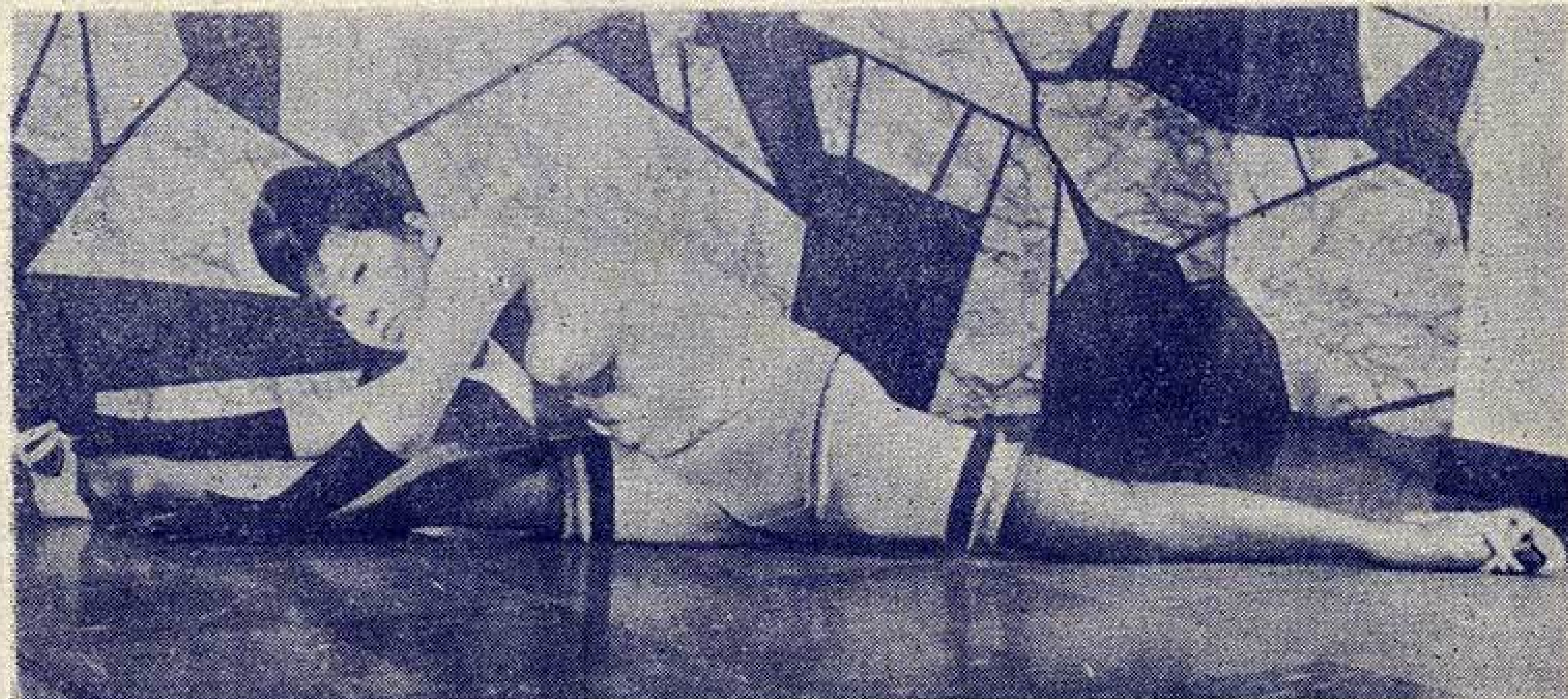
他のものは「鎖」によるしばりで、太いくさりで股間しばりにしたものの中の一枚です。

もう一つは、小生チェーン・ブラジャーと名づけたもので、股間しばりと共にくさりによって乳房を強調したものです。この女性は特に乳房が立派であるというわけではありませんが、くさりによって乳房の周辺をしめあげることによってぐっとしごくように突き出した乳房が一つのアクセントになっていて面白いと思います。

さらに両股をひろげたアクロバットの女性は妊娠（五カ月）中のところをポーズしてもらいました。

腹を上にして二つ折れのポーズをとった女性も同じなのですが、この方は妊娠中ということは余りわからないと思いますが、開股ポーズの方は、ぽってりと膨らみかけた腹部を見ていただけると思います。御意見御批判をいただければ幸いです。

＜編集部＞誌面の都合で鎖の縛りフォトと妊婦アクロの写真の掲載ができませんでしたことをお断りしておきます。





○

魅惑的なムード溢れる皮革。その魔力にとりつかれている独身男性です。随分長い事ですが、黒光りのする革製の拘束衣で責められる挿絵の素晴しさに陶酔し何時かは吾が手で女性に対してあの様な革の拘束衣を着せて責めてみたいものだと希望して参りましたが、昨秋から革の長靴が流行し始め、日皮協会辺りでも大々的に皮革製品を日常生活の中に侵透させるべくPRしている様子、大いに今年に期待している次第です。外国の雑誌等では日本の半タコに似た革のパンティ風のものや、股まである編上靴などを用いている様ですが、早く御誌にも実物を登場させて欲しいものです。今年はオリンピックの年、十月号にはスポーツ用具を題材にした特集号など如何でしょうか？　N紡のD監督の独得の鍛錬法など実に或る面ではサデイステックです、そして選手の側から見ればMに徹しているようです。昨秋の世論を気にする訳ではありませんが余りに異端者扱いされるよりも斯様なプロ、アマのスポーツの世界におけるSMや外国を始め国内の映画やショウ演劇等におけるSMを主眼に展開して行けば、と思うのですが。今一つ希望いたしたいのは女装の男性と男装の女性に対する加虐演出を試みていただきたい、男性が女性とさとられぬギリギリの線まで肉体を露出して、縛りを行うのです。歌舞伎の女形に対する責め、タカラヅカの男装の麗人に対する拷問、斯様な面で新機軸を演出して頂きたいと希っています。裸身の美しいのはヴィナスの例を持出す必要もありませんが、故晴雨翁の言にもあるように着衣の儘の責めの方が裸の責め方よりも美的感覚に溢れている事だってあるのですから、寒さ厳しき折柄、野外縛りなどでモデルさん等に風邪を引かせぬよう、編集部諸賢兄に御願い致しておきます。私は極く軽少のS的性向です故、前述の如き女装の男責め、男装の女責めに関心を持たれる諸兄姉よりのお呼びかけを期待しています。（大阪市＜RR生＞）

○

二月号拝見しました。記事によればピンチにおちいっているとのことですが、現在私の居る町では三軒の書店すべてが御誌を並べており、しかも、よく売れております。最悪の事態はすぎたのではないでしょうか、あとすこしのしんぼうです。がんばって下さい。ところで佐渡様、「カポー篇」は如何でしたか、前作のアンの釜中での刑を水から始めたのは私の考案で自慢するところでしたが、ほかの美女たちは、あまり早く殺しすぎました。今回はかゆみ責め、冷凍責め、石膏製作、スチールベルト、そして一時助かるかと思わせるのがミソのむち打ちなど多少ひねったつもりです。ひとつ省いたのをここに加えてみますと、カポーの疑いをかけられた美女が死刑を宣告されギロチンに首をつっこんだ時、ようやく疑がはれて助命の合図が下される。彼女はニッコリとしたが、運の悪いことに執行にあたっていたのは彼女のライバルだった。このため気がつかなかったふりをしててこを引く、哀れ彼女はほほえみを浮べながら首と胴体が別々の悲運におちいり、ライバル娘も、この嫉妬の罪で斬首されるもの。また「御前試合」…（この通信とも採用になればの話ですが）女斗彦様及び他の皆様のお気にめしたでしょうか。美女のユニホームはそれぞれの好きにまかせ適当に想像することにいたしませんか。前にも書きましたように四月始めには仕事のため欧州に立ちますが、それまで心臓を強くしてどしどし投稿するつもりです。現在考案中のものは、女囚たちが収容所に船で運ばれる途中、船員になぶり殺しにされたり、或は無人島に漂着しての殺し合い、更に蛇や虎、蟻の餌食、そして土人の手で干首になるクロチルドを書いた「地獄船。」カポー篇の続篇とも云うべき大量殺人の「殺せや殺せ」そして東西各一〇〇人が互に殺し合いの末二〇〇個の生首が並ぶ「大決戦」それに趣向を変えたクロチルドとナタリーの「殺し屋ものがたり」があります。それこそ味も香りもなく、かんじんの責めもとぼしくただ殺すだけ、皆様もあきれるほどでしょう。私が

他人にまさると思うのは実地に鍛えたイタリー語だけ。日本語の方は高等科卒業、予科練落第と云えばガクのなさはおわかりでしょう。尚常に登場する十三人、特にクロチルドの正体は最後に白状します。自分のことばかり述べましたが、新宮様の生首写真、血のりもべっとりついており申し分ないものでした。槍の先につきさした生首、髪の毛でもってぶら下げた生首、そして首のない胴体（勿論血のりも忘れずに）といったものは出来ませんか、〝こけ〟早速註文したいところ。前川様の作品もすばらしいものでした。まだ倒れずに坐りこんだだけの首なし死体を面白く思いました。唐竹割、胴切りなどの場面もお願いしたいものです。絞首死体、ハリッケ、火あぶりなどの処刑図はお好みに合いませんか。これらのことは四馬画伯にも望みたいのですが。水野様も是非奥様をくどきおとして出品されて下さい。最後に奇クを守る生首マニヤ、処刑マニヤその他同好者の方々の御健康をお祈りしてペンをおきます。（郡山にて〈佐出須登〉）

○

編集部のみなさん、御無沙汰して申しわけありません。正直いってあまりにも通信欄に載せてくれないものですから、半ばうんざりして十二月号の批評を書いたものを破ってしまいました。でもやっと私の通信文を載せて下さいました。ほんとうにありがとうございました。それでは二月号の感想から。梨花さんの「吊り」は顔の表情には申分ないのだが行儀が良すぎる。いくら自粛を要求されているからといってこれでは物足りない。肩を出すか足をだすかすればもっと梨花さんの顔が生きてきたと思うが。それに縄が全体に多すぎるようである。ある程度の縄は吊る時の苦痛を少しでもやわらげるため必要であるが。大塚さんの「椅子」は塚本先生もいっておられるようにこれからのグラビアの進め方に明るい指針を示したといえよう。つまりこれからはアイデアで勝負というとこかな。なる程大塚さんのおヘソもおシリもおチチも見えていない。この責めは大塚さんが髪を伸ばしていたころでしたら、髪を吊ってある紐はいらなかったでしょうね。それが現在髪を短かく切った大塚さんは、その短かい髪を吊られて力士みたいな頭になり面白い。髪が短かいものだから髪全部を紐で結べなくて長い時より痛いであろう。しかし大塚さんはこれくらいでまいるような女性ではない。私はこの椅子に座って大塚さんをもっともっと責めてみたくなった。椅子に座ると当然髪を吊っている紐が私の尻の下になりぐっとしまってくる。大塚さんは髪の抜けるような痛さと逆エビにそり返る痛さに「ヒー」と声をあげる。そこで大塚さんのパンティをハギとり口に押しこめ、残りの縄で口を一まきしばる。私の両足の間で大塚さんは苦痛にあえぐ。私はそれでもようしゃしないで耳をひっぱり、鼻をつまみ、足の裏にいたずらをする。大塚さんは汗でべとべとになり、息づかいがあらしくなる。私は最後の仕上とばかり立ったり座ったりを何度もくり返すと大塚さんは頭をピョコンピョコンとさせる。これだけやればいくら大塚さんがタフでもまいってしまうであろう。つぎの「猿ぐつわ」は一月号のマスクより迫力があるが仕上がきたない。「磔」は大きな目かくしと故意にあらわにされた乳房がいっそう女をあわれにする。バックが悪い「妖しい」の加茂さんをジッと見ていると、こちらの方が圧迫されてしまう。先生早くこの女性を責めて下さい。二度とこんな目をしないように。とへたな文を書きましたが、毎月このような調子で批評していきたいと思いますからよろしくおねがいします。（八尾市〈沼章〉）

○

貴社益々御清栄、御慶び申上げます。本年最後の貴誌「壱月号」拝見致しましての読後感を述べさせていただきます。先ず第一に感じます事はマゾフオトが最近号より掲載されない様になった事と滝れい子先生、春川ナミオ先生になるマゾ画も同じく姿を消した事ですが一体どういう事でしょうか。小生等強度のマゾファンとしてはこれ等マゾフオト、マゾ画がある故に毎月購読しているのです。何卒出来得る限りこれ等マゾフオト及画で以て誌上を賑わして我々の要望に応えて下さいます様切にお願致します。今一つは、最近「悪書追放」とかで書籍の限定をうけるとか、これは取りもなおさず未成年者、青少年層に対していえる事であって小生等の如き成人に対しては何等もこの様な限定を受けるべき筋合のものではないと思います。我々とて正常なる心理

状態を持って居るのです。この様なサド・マゾ・とか特殊な状態に"興味を持っている"に過ぎないのです。ですからこうした我々のファン層の為に今後も発刊を継続していただきます様切に希望致します。ただ以前に申し述べた様に普通店頭販売と通信販売と二通りの形式にて前者は、一般購読者が読まれてあまり刺激のない様な内容を主体とし、後者は我々強度なファンの期待に充分応じていただける様な内容を盛沢山掲載したものを通信により愛読者に希望部門（例えばマゾファンにはマゾ物サドファン・フエチファンには各々という様に）を販売する様にされましたら、こうした「悪書追放」などの問題は未然にないと思います。来年からは是非このシステムを御企画下さいまして貴誌に唯一のよりどころを持つ我々の希望を是非実現させて下さい。体験記、高木紀久枝様の「雪合戦」久方振りで高鳴る胸をおさえ乍ら読みました。ただ本当に残念な事には女性対女性という事です。おみかけ致しますと大変失礼ですが、貴女は男まさりの勝気な御性格の御様子ですが、一つ如何ですか女性的な性格のマゾ男性を嗜虐の対象にされる興味をお持ちになっては如何ですか。そしてより一層の凌辱の快感を味わってみられましては。同じ事を読者欄にお寄せになっておられます原田順子様にも申し上げたいと存じます。この広い世間には貴女様等サド女性の方々に思いのままにされたいと希うマゾ男が少ない様で案外数多く潜在している事を、思召し下さいまして、どうかこれ等の対象を見出されまして体験されました事を来年の発刊号に御発表下さいます様、期待しております。出来得れば読者欄にて御返事を賜わりますれば之に過ぐる光栄と存じております。最近号に掲載されました「映画温泉あんまのマゾ場面」につきまして我が山陰地方の小都市にも待望の温泉あんまが上映されました。小生初日に躍る胸をはずませ乍ら観に行きました。ありましたありました東南アジアから東京オリンピック視察員と称するペテン師（伊藤雄之助演）が一室にて女アンマ（三原葉子演）に馬乗になられる場面が。うつ伏せに寝ている伊藤雄之助の背にドッかとばかり馬乗りに跨った三原葉子がこれでもか、これでもかとマッサージをし、今度は向を変えて逆さ馬乗

りに跨りマッサージする毎にだんだんお尻を上の方にずらせて伊藤雄之助の首すじから頭の方に逆さ馬乗り跨っている場面へ大写しに思わず息が止まりそうでした。三原葉子の豊満なお尻の下に頭を敷かれてもがいている伊藤雄之助のやに下った顔。この場面をみる為に小生、半日映画館にねばり三回もみました。終ってからはあまり興奮してどうして家に帰ったか分らない位でした。我々が崇敬する女王三原葉子さんのお尻の下に組敷かれた伊藤雄之助をどんなに羨ましく思った事か、ただ非常に残念な事にはうつ伏せであった事です。仰向けになった伊藤雄之助の胸、首ったまの上に逆さ馬乗りに跨ってこれでもか、これでもかと押えつけている三原葉子さんをはかない夢ながら空想にふけったものでした。この外もうかれこれ半年位以前に当地方にて上映されましたが「青べか物語」にて小説家に扮する森繁久弥を田舎ののみ屋の女給に扮する左幸子が、これは仰向けにつき倒して胸のあたりにドッかと馬乗りに跨って押えつけている場面がありました。時間にすると二、三分位でしたか、又記憶をたどってみますと戦後の性物映画にて「続十代の性典」にて之はスチール写真でしたが、仰向に転がった男高校生の肩口のあたりにスカートをひるがえして女高校生が馬乗りに跨って腕組をしながら太腿の下から顔だけのぞかせている男生徒を見下している場面があり、是非とも入手しようと思ってましたが残念乍ら出来ませんでした。この外映画に雑誌にかかる場面が掲載、上映されましたものがありましたなら貴誌に御発表下さいます様お願い致します。貴誌に今迄に掲載されましたものでマゾフォトでは春日ルミ女史の尻敷のプレイ中の馬乗り跨り。絹川文代嬢の正面肩に馬乗り跨り（小沼正三氏が）マゾ画にては滝れい子先生の従姉と中学生の「馬乗り跨り」春川ナミオ先生の重量感等今後もどしどし載せていただきます様。貴誌の今後の新しい企画に副うべく新しいアイデアを小生なりに申し上げますと先ずマゾフオトにては春日ルミ女史、絹川文代嬢大塚啓子嬢、或は最近デビューされました宮井美佐子嬢、外に出来得る限りグラマー女性を配していただきブラジャー・パンテイ姿、又はその上にシユミーズガウン着用水着姿、或は上半身ブラジャー、黒タイツ。向寒の折柄、洋服（なるべくスカート）和服着用にて結構ですから仰向に転ばしたマゾ男（半裸又は着衣）の胸又は首っ玉あたりの上に馬乗りに跨っているフオート（逆さ馬乗りも可）マゾ画にては豊満な肢体のグラマー女性が、心身共に劣れるマゾ男を馬乗りに跨って組敷いているもの、アイデアとしてはヘビー級女子レスラー対フライ級男子レスラーの対戦にて両肩口の上は正馬乗り又は逆さ馬乗りに跨ってフオール。太腿の間に首をはさみ込んでのヘッドロック等。のみの夫婦げんか。ストリッパーと道具方。有閑マダムと下男。巴御前と雑兵。海女と都会から疎開して来た色白な青年グラマーウエイトレスと酔客。グラマー女アンマと鼻下長客。等々。何れも何等かのいきさつがあって体力の優れた女性が仰向けに押し倒した男の胸又は肩口首っ玉の上に馬乗り（又は逆さ馬乗り）に跨っていためつけているもの、まだ外に多々ありますが先ずこの程度から毎月号一つづつでも結構ですから採り上げていただきまして誌面をかざって下さいませ。年の瀬も次第におし迫って何かと御多用のこの頃ですが、本年号からは一つ大いに飛躍していただいて小生等の要望にお応え下さるべく画期的な内容を盛沢山に誌面を賑わしていただきます様、やがて間近な新年を迎えるにあたりまして本年最後の切なるお願を申し上げまして筆をおきます。（米子〈見上伏男〉）

○

奇ク愛読者の皆様今晩は。先日書店にて、ふと本誌が目に止り、立読みをしているうちに、何か興味がありそうなので買って熟読した新参者であります。本誌を読んでいるうちに、何か何分の性癖と全く合致するので、自分特別の性癖だと思っていたのが今はっきりと分りました。それはSMであったのです。しかし乍らか様な方がこんなに多く、また真剣な方が居られるとは、全く夢にも想像しなかったことでありますので、小生も勇気を出して一日も早く仲間入させて戴きたくお願いする者であります。以上の次第でありますので、SMいずれか先輩の女性の方何卒御指導御教授して下さいます様切実にお願い申上げます。一応左記要領にてお待ちしていますので何卒御連絡下さいます様お願い申上げます。（25才・会社員〈田

中正英〉)
大阪駅前O喫茶店(361)—3825
一月十一日午後七時より七時三十分まで。

○

浣腸という恥ずかしさから、同好の方を求める勇気もなく、一人プレイをしていましたが、物足りなくて、読通欄に投稿したところ一月号に掲載頂き、沢山の善意にあふれた御手紙を頂いて感激しております。残らず私の住所を明記して御返事しましたが、女性からのそれは、(当然かも知れませんが)全部宛先不明で戻りました。不特定多数の方を対象とした誌上なので局止めとしましたが、真面目な通信ですから、通信の届くところでお手紙を下さい。ご主人のアフター趣味からマニアとなり、留守のときは奇クと浣腸で楽しんでいるとおっしゃる横浜の木村昌子様、遠距離通勤の為、便秘になやまされ、部長に読まされた奇クから、マニアに導かれたBGの千葉の西山節子様、それから二回程お返事頂きました吉村英子様、いずれもくわしい御手紙有難うございました。特に吉村様には私的な文通では掲載頂けるかどうか不安なので、局止めでもいいから連絡先御知らせ願えませんか。貴女の生理は理想通りなので、一緒になれたら素敵だろうと考えたりしました。もしプレイして頂けるならいつでも豊橋迄参ります。決してご迷惑はおかけしません。先日昭和十四年版の「快食快便快眠」なる本を入手しました。「快便篇」は、殆んど全篇便秘の説明で、その浣腸という項をぬきがきしますと(前略)そこで最も無難で、有効で、而かも手軽るに出来るのは生理的食塩水注腸であります。○・九%の食塩水を休温に温め、これを五〇〇g程用意します。病人を横臥させて両脚をまげ肛門部よりゴム製のカテーテルを深く挿入し薬液を注入するのです。終ったら仰向けにし両足のばし半時間でも一時間でも出来るだけ我慢させます。その間に注入した食塩水は決して腸管を刺戟する事なく糞塊を軟かにし、且つ溜った毒素を稀釈します。その上もし身体に水分が不足している場合は大腸壁から吸収され組織に生気を添えますので、便通に先だって血色がよくなり、元気が出て来ることはてき面で、全く食塩注射と同じ作用をするのです。秘結が少し強い場合には一度では便通がないときもありますが、そんなときはしばらく隔てて二度三度と行うと目的を達します。而かも面白い事には、他の浣腸が癖となりがちなのに、この方法は決して癖にならず、結局は自然便が出る様になります。宿便の傾向のある人や、中毒を起し易い子供等に食塩浣腸を行うのは非常に合理的な方法です。(以下略。)」とありました。この他に貴女の参考となるものが数多くありますけれど貴重な誌面をさいては申し訳けないので筆を止めます。
(台東〈小林薫〉)

○

正月号、ありがとうございました。続刊の報に接して、貴社の御努力を深謝申上げます。昨年は毎号鼻責めムードを盛り上げて頂きほんとに有難うございました。今年も益々鼻責めを深く追求し、加えて褌、女斗美に独特の境地を拓いて下さい。一月号大塚嬢の耽美な「なぶられる鼻」「鼻孔清掃」はとても良く出来て御礼申上げます。顔のクローズアップでいたぶられるポーズを凝めていると身中が燃えて参ります。今度四馬孝先生名画「美の破壊」をクローズアップで是非写して下さい。色々の鼻孔型を取上げて下さい。各年令層で着眼点も異りますが、山本富士子型、嵯峨美智子型、木暮実千代型、吉永小百合型、タレントの九重型等夫々お取上げ願います。ソフイヤローレンやバルドー型も好いと思います。昨年五月号かの「私は死にたくない」の鼻孔ピヨウ写の一駒々々をテーマにしても沢山な名画が出来ると思います。ポイントの置き方を鼻翼、鼻頭、鼻筋鼻梁、或は中隔と唇の境目の所、中隔入口の内面、或は鼻孔形、鼻孔頂面に置くか——色々御研究下さい。続刊の御礼と今後の御健斗を祈ります。(東京〈湯谷照夫〉)

○

待望の二月号、お正月にこの上もないマニアへの贈りもので一杯でした。前川様の「首級をあげる褌裸女」の二枚は正に私にとって年来、待ちのぞんでいたものでした。しばらく時のたつのも忘れて愛玩しておりました。二枚共、裸女血斗の血みどろな有様は私の胸に何かしらぐっと迫るものを覚えました。二刀流で武蔵のように奮戦する裸女の図には一尖する度に血飛沫がとび散り、ころりころりとはねとばされる褌一本の裸女の生首、耳をつんざく断末魔の悲鳴

が聞え、血汐の香りが漂って来るようです。返り血を、ふんどし一つをしめただけの美しい体に一杯浴びて、生首の黒髪を口にくわえて阿修羅のように立ち廻る裸女の姿態は、足下にふみつけている首のない裸女の屍、それに今しも首をうち落されて崩れかけている屍等とあいまって楽しい無惨絵模様を描き出しています。もう一枚の打ち取った女の生首を高くかかげている裸女の図も待望の和風サロメの図柄の一つです。組打つこと数刻、遂に一人の女は先刻まで躍動していた肉体は、身首所を異にして血汐の中に斃れ伏し、勝ち誇った女はその苦悶にゆがんだ生首を高くかかげて勝名乗りをあげている図は正に一幅の無惨美の極致を示すものでしょう。二枚共、裸女の絶命のポーズがよかったですね。豊かな臀部の双丘をわってきりりとしめこまれたふんどしが無惨な中にもどこかなまめいた風情を漂わせ、絶命のけいれんにピクつかせた、なまめかしさの余韻をひびかせているようです。前川様、私如きマニアに近来にない興奮を与えて下さったことに感謝します。今後共、どしどしこの種の力作を御寄せ下さい。私も及ばず乍ら協力したいと思います。次にのぞみますのは、白刃一尖、裸女の生首が血の尾を中空にひいてはねとばされているところとか、血飛沫と共にのけぞるところ、それに前に申しましたような、ふんどし一つの裸女達の累々たる屍の山の中での裸女血斗の図も是非おねがいしたいものです。雪崎氏提供の二枚の女相撲の絵、四馬氏の姫君切腹の図も楽しいものでした。「奉納娘相撲」の方はお正月らしく日本髪であればもっとよいと思いましたが、図では判りませんでしたが投げられた娘の白い股にきりりとしめこまれた紅のふんどしの目を射るあざやかさ、なまめかしさが充分想像され、もう一枚のは肉弾相討つ美女の、ふんどし一つの裸体から発散するむんむんとするばかりの色気と美女の体臭（ではなく香）と汗の香が感ぜしめられる程の力作でした。四馬氏の「姫君切腹」も、落城の炎の中に崩折れんとする姫の最後のあがきもどこかなまめかしい中に悲壮な美を、醸し出している佳作でした。先月号先々月号とどこか迫力のなかった同氏の切腹画も、久しぶりのクリーンヒットをとばした感でした。佐出須登様の通信もうれしく拝見しました。次はいよいよ御前試合との由ですが、ビキニパンティでも結構です。日本のふんどし程、きりりとはしませんがビキニもふんどしの一種です。西洋女のふんどし姿と云ってもさし支えありません。裸の美女が数多、血汐の渦の中に果てて、屍の山を築いて行くところは洋の東西を問わず無惨美溢れるものと思います。私も一年半ばかりヨーロッパに居り、その間美術館を廻ってはこの種の絵画をあかずにみていたものでした。特にルーヴルのドラクロア作「サルダナパールの死」における美しい裸女の絶命寸前ののけぞるポーズ、ミュンヘンのアルテピナコテクのルーベンス画「アマゾンの戦」の左隅に描かれている豊艶な裸女のあられもない姿で横たわる屍等の図に興奮を覚えたものでした。「大奥裸女血斗」の作者の京洛生氏も大分以前の通信によって、やはりヨーロッパにおられたようですが、最近の消息が不明で残念です。室井様の通信も嬉しく拝見いたしております。私と同様にふんどし裸女の血斗の図にあこがれておられる由にて、同好の諸氏がこの他にも名のりをあげておられつつある現状は、まことに心強いものがあります。前川様、中屋敷様、その他方々の通信を待っています。とにかく二月号は全く楽しいお年玉でした。ピンチの中でもがんばりましょう。私も書店に圧力をかけて協力をします。皆さんもがんばって下さい。近く九州方面へ転じます。そうすればしばらくは独身ですので何か、前川様が以前よりお望みの作品らしきものがこの間にかけるかも知れません。（大阪＜女斗彦＞）

○

三原康子様、初めまして。小生山路茂と申します。小生がマゾになって六年になります。小生をドレイにして下さる女王様がいないかと毎夜夢に見ております。康子女王様、何とぞ小生を貴女のドレイに命じて下さいお願いします。貴女様の命令には一切服従いたします。康子様の便器に喜ろこんでなります。うそでは有りません。洗濯も喜んでいたします。ドレイになるのが小生の一生の願いです。それに小生は露出症なので貴女様の命令なら喜んでどんなかっこうでもいたします。何とぞ康子様一度小生をドレイとしてためして下さい。きっとお気にめすと

思います。ではその日迄。お体を大切に。（葛飾後金町〈山路茂〉）

○

二月号の〝飢えたる者〟さんお呼び掛け有難う。〝浣好生〟です。同じ悩める仲間として、是非お逢いして、何んとか慰めて差上げ度いです。私の所持する浣腸器を総動員しましょう。貴方にお逢いしたら、先ず肛門検査です。大分溜っていますネ。グリセリンで五〇㏄浣腸して出しましょう。しかし、これでは未だ充分ではありません。一〇〇㏄のイルリガトールですっかり洗腸しましょう。これで準備は一先ず終りました。これから貴方の望み通り嫌になる迄一晩中浣腸です。二〇㏄。三〇㏄。五〇㏄。のガラスシリンダー。エネマシリンジを二本一緒に挿入。そして私の作った一〇〇㏄のシリンダー。五〇〇㏄と一〇〇〇㏄のイルリガトールの同時浣腸。辛抱出来る迄我慢出来る様肛門には栓をしましょう。もう許してくれって？　まだまだこれからです。でも最初から余り強烈では何んです故、今回はこれで一応止めましょう。疲れたでしょう。では最後に暖かい牛乳浣腸をして上げますから、ゆっくりお休みなさい。そして次にお逢いする時迄の英気を養っておいて下さい。こんな事考え乍ら、三面鏡の前で自分に浣腸しています。是非是非お逢いしましょう。連絡して下さい。（〝浣好生〟）

○

メトミはなんと素晴しい適格な表現ではないか。過ぎし十年前、月刊誌「人間探究」から開眼し「風俗科学」「あまとりあ」等の文献から素晴しいメトミの境地に日夜心血をそそいで居るのだ。今日までメトミの流れを発表して居る物はKK誌に止ったが、我々メトミを愛する者には全く貴重な友となり心の糧と成って居るのではないか。本誌の執筆者の一人一人が立派にメトミの伝統を承継して居るものであるが、特に岡平吉夫氏の傾向は私の趣向と合致して尊敬して居るし雪崎京人氏の画筆の秀逸さ、なめらかな文章にも愛着がある。円山、津谷、両氏も違った持味があり是れ亦よしとする。此れに加えて東京新潟から通信欄に発表されて居る実際にメトミを実行中の女性陣からまとまった原稿を発表される事を要望したい。前記諸氏は客観的にメトミを観察して居るわけであるが、主観的に

心理的な側面からの発表もメトミフンファンが待望して居るのではないか。文章のよしあしを問わず原稿の価値判断は事実に基く心的動向の開明にポイントがあることを確信して居るしメトミの正道が一般文章と相違して居る事を指摘すべきだ。（東京〈松本佐彦〉）

○

初めて投稿します。小生奇クを愛読しはじめたのが十一月号からですが、一カ月の間に古い奇クを注文にて取り寄せ現在では約四十冊手元に集めることが出来、どうにか皆様のお仲間に近づいたと思って居ります。小生が奇クを知ったの動機は、十月下旬、例の悪書追放が口火を切った時に、もうこれからは、この種の本が珍重がられ、安々と手に入らぬと自分で極め込み、高松の本屋を片っ端しから探しまわり、本誌の十一月と文献特集号を発見し、一枚一枚頁をめくる中、四馬孝画の「侍女奮戦」に目を留め、小生が日頃欲しがっていたのは、これだと目の前が急に明るくなった次第です。それまでは女剣劇画を求めて、色々な本より何千種に及ぶ女剣劇画、女剣劇写真を集めておりました。奇クを発見して急に、切腹写真マニヤになって、次から次へと注文してまいりました。始めて投稿して皆様にお願いするのは汗顔の至りですが、どうしても欲しい画がありますので、切腹マニヤ以外の方で切腹画のみ切り抜いて売って戴けませんか。小生のどうしても欲しいものは左記の通りです。（時代物のみ）28年3月号（切腹史談）28年4月号（少年少女の切腹画）28年5月（同上）29年5月号（切腹幻想刺青姐御）29年8月号（切腹曼陀羅図絵）32年4月号、32年7月号（続切腹曼陀羅図絵）32年1月号（大奥裸女血斗図）33年2月号（女体自刃口絵）33年3月号（屠腹乙女桜）33年4月号、5月号（外人の見た女ハリキリ）33年6月号（文江の切腹）33年7月号（お町の最期）33年11月号（女剣劇断腸譜）34年8月号（落城後日譚）34年10月号（鮮血の対決）35年3月号（阿修羅嫌君）35年5月号（城下の礫美女）35年8月号（切腹画）37年12月号（女武者討死と生首）38年4月号（女城主の最期）38年5月号（差し違え）上物一枚三百円、中物一枚二百円、下物一枚百円にて買います。（香川県塩江局区内後川広畑内〈川田和茂〉）

○

奇クの愛読者の皆さん、お元気ですか。奇クの発展、毎号楽しみに待っております。読者通信も毎号、その内容に於て、数に於て、次第次第に充実してくる事は、お互いに嬉しい事です。私は12月号に中国地方のS女性の方達にお呼びかけさして頂いたものですが、まだSMプレイのS女性の方が一人も名乗り出て来られないのが残念です。何処までも自分を生かして真面目にプレイする事は、人生を生々とさす最も真面目な方法ではないでしょうか。そして時々そういうグループ数人が集まって愉快に話し合って、お互いに同じ趣味の座談会等をする事も又意義あることと思います。奇クがこれだけ発展した今日、必ず中国地方の女性の方にも数多く奇クの愛読者がおられるものと思います。どうか一度S女性の方々、御連絡をお願いします。そしてゆっくりお互いに胸襟をひらいて話し合ってみようではありませんか。小生の考えている真面目なSMプレイと意見が一致してからSMプレイの実行に移れば、お互い傷つける事もなく、他に解る事もありません。前号にも記しました通り、私は建設会社の一庶務課長です。是非ともS女性の方々からの御連絡を心からお待ちします。（岡山市〈早川敏夫〉）

○

二月号の読者サロンで久しぶりに畔亭数久氏の絵に接して喜びを禁じ得ませんでした。旧号に発表された同氏の数々の名作は未だにファンの記憶に又、スクラップブックに止まって、その麗筆に魅せられていることと思います。特に印象に残る作品としては「轢殺」「切腹幻想」「娘相撲」等です。その他、数々の小品も忘れ得ぬものばかりです。同氏独得の流麗なタッチは責絵に又「轢殺」「切腹幻想」のような流血の無惨絵模様にも妖艶な美を表現して妙です。特に「切腹幻想」の中の刺青姐御の立腹の図、「娘相撲」におけるピチピチとした娘達のふんどし一本の姿絵は今に至るも愛玩しています。畔亭氏の絵が再び誌上に見えたことはファンたる私の大きな喜びでした。今後の活躍を期待します。（女斗彦）

○

始めて仲間入りをさせていただきます。私はKKの永年の愛読者です。私は幼い頃からS的傾向にあったようです。現在はバーテンをしていますので、職業柄いろいろの型の多くの女性に接しますがその中には、本当にめちゃくちゃにいじめてやりたい、といったタイプの女性に出会うこともあります。しかし、実際はそんなわけにもゆきません。それどころか、口に出すことさえ、とても勇気が持ってません。それで専ら、雑誌や写真で慰めておる次第です。浣腸等に特に興味があるのですが、私のような内気な者には、やはりマニヤの女性の方がよいようです。全国の、出来れば近県のM的女性と交際したいと思います。年令は問いません。是非お便り下さい。早速お会いしたいと思います。住所は編集部へ問合せて下さい。

（静岡県＜滝沢次郎＞）

〔編集部より〕 ○最近、読者通信の文中、住所を編集部へ問合せてくれとか、手紙を転送してもらってくれ、とかいう文句が多いのですが、只今のところ、原則として編集部に於て、手紙の転送とか住所の照会に応ずるとかいうことは、一切取扱っておりません故御承知願います。読者間の文通交歓は、すべて、読者通信欄を通じてやって頂きたく思います。そのため、読者通信欄を拡充して出来るだけ、多数の通信を掲載するように致します。

○

貴誌の愛読者ですが、全部隅から隅まで読むといった性質の愛読者でもありません。ここ三、四年前に友人がたまたま貴誌を持っておりましたので、それを一寸借りて読みましたが、サド、マゾには大して興味もなくなんとなく頁をめくっていると、オムツ愛用者の告白記が載っており、やはり自分と同じ愛用者もいるものだなあと思い、それからはオムツの記事が出ていると、それを買い、その他の記事は必要ないものですからオムツ記事の所だけ切り取って集めていますが、ほんの二、三頁ぐらいしかなく、一冊の本としてオムツカバー愛用者の為の記事とか絵を待っていたのですが、なかなか出そうもなく、それで今迄の発刊当時から出ている記事の中からでもよいのですが、一冊に集めたものをほしいなあと思っています。そのような本はありませんでしょうか。もし、あればお知らせ下さい。又、オムツカバー愛用者も、愛読者の中には、かなりいるようですが、そのような人々のためにも、もっともっと頁を増して下さいますようお願いします。（神戸市生田区海岸通り＜井田政紀＞）

＜編集部より＞ オムツに関しての一冊の本がまとまっていれば、大変結構ですが、今のところ見当らないようです。本誌の旧号からの分を集めればよいのですが、本誌の古い号は殆ど売切れになっていますので、中々それも困難です。今後、分譲品などで出来るだ

〔今月の新版〕

全裸の切腹悦楽

モデル　大塚啓子

＜第一組＞略号（ぴた）
大手札印画紙焼付
四枚一組　四〇〇円

＜第二組＞略号（びと）
大手札印画紙焼付
四枚一組　四〇〇円

女体切腹プレイの醍醐味は、一糸まとわぬ全裸になって演ずるそれであるということは、切腹マニヤの若き女性、例えば信太蓉子さんの告白をはじめ多くの女性の方々の言によって裏づけられています。三宝を前にして、衣服をきちんとつけ、腹巻に身を固めて切腹プレイに興じていた彼女も、次第に衣服を脱し、それらの散乱した中に、一糸まとわぬ全裸の肉体をさらして、さまざまなポーズによって柔肌を白刃によって切りさばいてゆく。

け発表いたしますから、その都度お求めいただければ幸いです。

○

私は高校卒業後、或る会社に勤めだして二年になる者ですが、年頃の私達にも、ひかれるものが貴誌にあり、時々拝読しております。毎月欠かさず読むといった熱心な読者でもありません。それは読めば興味は持てるのですが、やはりきまったお小使いのこともあり、どうしても時々になるのです。特に私の興味の持ったものは女性の切腹というところです。まだ二十才になったばかりの女性である私が、こんな妙なものに興味を持つというのは、本当に変っているのですが、やはり私達女性は知識の吸収を書いたものに求めるからではないでしょうか。その他縛られた女性についても、非常な驚きと好奇心を持ってしまうのです。男の方達だったら、お友達とも話し合うことも多いでしょうし実際にそういうチャンスもあることと思いますが、私達には絶対にそういう機会はありませんもの、どうしても書いたものに興味を持ってしまうのだと思います。でも実際に、ということになると、見知らぬ他人を介してでは、考えただけでも卒倒しそうになります。自分一人の心の中でイメージだけをえがく、といったことが好きですが、又、心許した友と文通するということも楽しいことだと思います。自分で試みてみるといったことも、私自身内気なだけにとても考えられません。でも、ときどき私の心の中を大きく、「女性の切腹」といったことが占めてしまうことがあるのです。思春期からの思い出を混えて、一度文章にしたいと思うのですが、うまく書けますか、それも心もとなく思っております。とりとめもないことをお便りしてしまいました。切腹フォトの一部でも、直接拝見できれば、多少とも心慰められるのではないかと、ここに少々御注文させていただきます。（大阪市港区＜北川京子＞）

＜編集部より＞ 文章の方は是非御寄稿下さるようお待ちしております。

○

私はKKクラブの十年越しのファンです。今日は何とぞ、この一文を載せて下さい。実は空想だけでは、もう我慢できなくなってきました。それで、私の実行したいことを書きますから、相手をしてくれる女性がおられましたら、勇気を出して連絡して下さい。まずスラックスの上から強烈な股間縛りをします。手は無論高手小手、それに猿ぐつわです。その次には上半身裸になって頂き、下半身はやはりスラックスで股間縛りです。お尻が破れそうな程ピッチリしたスラックスを強制した上、強烈な股間縛りにするのですから、優しくムチ打つ事ぐらい覚悟しておいて下さい。第三には、パンティとナイロンのストッキングだけにして、シングルベッドの上で大の字の縛にします。そして、アゴや腋の下、足の裏等をくすぐります。第四は浣腸責めです。しかしいくら責めるといって、体を傷つけたり、貞操を犯すような事は絶対にしません。昭和三十九年二月三日の夜七時から七時十五分迄の間、東京（五四一）（七四×九九）一三三〇へ電話下さい。「山田さんですね」と一言いって下さい。四十才迄の女性なら顔の美醜は問いません。私は至って優しい美青年です。どうか勇気を出して電話して下さい。（東京＜山田＞）

○

お正月を迎えるに当っての二月号は私にとっては近来にない贈りものでした。「奉納娘相撲」「肉弾相うつ美女」の二枚の女相撲図絵といい、待望久しい前川様の「首級をあげる褌裸女」二題といい、女のふんどし姿、それにふんどし裸女の血斗図にあこがれている私を全く興奮のるつぼに叩き込んでくれました。特に前川様の「首級をあげるふんどし裸女」の図は小さくとも、ふんどし一本の姿で血に狂う裸女、血みどろになって果てている裸女の屍の姿等、幾度も幾度も眺め通しました。二本の刀を振って奮戦する生首と口にくわえた裸女、返り血を美しい裸体にとびちらせて、次々と相手

の裸女を血祭りにあげているのは余程武芸に通じた者でしよう。又一枚の組打ちの末に、打ち取った相手の生首を頭上高くさしあげて勝名乗りをあげる女の、リリしいふんどし一本の姿も美しいものです。首のない、血汐にまみれて相手の裸女の屍とふみつけているのも勝利の喜びにひたっているようです。空しく果てた裸女の屍にもふんどしがきりりとしめこまれた臀部の美しいもり上がりに、無惨な中にもなまめかしさと感ぜしめる近来にない佳作でした。中屋敷様、それに先々月の森田様の文にもありますように女が斬られるとき、特に私はふんどし一本の女のそれに強いあこがれを抱きつつあります。以前は主として絶命に女の累々なる屍のそれに対するあこがれが強かったのですが、斬られる瞬間、斬られた瞬間のそれの美しさを想像して楽しんでいます。鋭い悲鳴、苦悶にゆがむ、美しい若い奥女中の顔、のけぞる美しい裸身、腰から股間へときりりとしめこまれた赤ふんどしがぱっと目を射ると、刺された乳房の下から花火のように鮮血がどっと噴き出し、美しい裸身は硬直して崩折れるように地上に倒れます。そして二、三度体をうねらせ、赤ふんどしもあざやかに、しめこまれたお尻の双丘をみせてうつ伏せになって、お尻をピクつかせ、息が絶えるまでの美しさに私は異常な興奮を覚えるようになりました。又、血に狂ったふんどし裸女が、討ち果した相手の裸女を思うさまに惨虐の限りをつくす様も女であるだけに異常な無惨美を造り出すことでしよう。前にいったような経過で討ち果て女は、更に相手の勝ち誇った女の手によってみるも無惨な屍に変り果てて行きます。先ずふくよかな腹部はずたずたに、十文字に裂かれ、はらわたがどっと溢れ出し、ふんどしをも切り取られ、下腹まで抉ぐり廻され、最後には、首もかき落されてしまいます。返り血を真赤に浴びた女は更にきりさいた腹の中へ手を入れ、

生血をすくい出してとりそれをうまそうにのみほすという図はどうでしょうか？　しかし、このような無惨な中にも美があることと私は確信しています。全くこの二月号は久しぶりに満足感を覚えました。再び圧迫が強くなっているようですが、私は「奇ク」の不死身のバイタリティを確信しています。（室井英山）

○

今度誌上の広告で拝見して「文献」を申込みましたところ早速お送り下さって、有難うございました。手にとってペラペラと頁をめくるなり内容の素晴しさに思わずドキリとしてしまいました。一気に見てしまうのが惜しくて暫くは胸に抱きしめて、胸の高鳴りをしずめていました。どの頁をひらいても、目にとび込んでくるフオトの見事さ。承れば昨年十月頃に発売されたとのこと、なぜ、もっと早く求めなかったのかと残念に思ったくらいです。私の好みの写真ばかりを一冊にまとめて下さってこの値段とは全く安いものです。これだけの写真や画を一人で集めようと思えば、どれだけの費用と暇が必要でしょうか。私は写真の中では、長野良子さんのいたずらっ子のような可愛いく、それでいてボリウムのある肢体を美しいと思いました。欲をいえば、彼女を責められるという一つのムードの中で生活させたら、どんなによかっただろうかと考えました。何度見かえしても飽きない「文献」は私の宝物です。これからも時々臨時に出して下さい。私はその広告を見たさに毎月貴誌を買い求めたいと思います。（静岡県三島市∧山本一郎∨）

○

私は二十二才のオフィス・ガールです。この欄でも時々女性の方のお顔が見えるようですが、余り多くないようですね。通信には出さなくても、実際の読者は案外多いのじゃないのでしょうか。大阪の高田章子さん、私も同じ大阪に住んでいます。どうぞよろしく。奇クの愛読者という気持だけで、あっさり喫茶店なんかでお逢いできたら楽しいと思います。男性の方とは、何か恐いような気がします。この頃は時折御堂筋でもスモッグでお昼なのに、まるで夕方のように薄ぐらくなることがあります。高田さんは福島とか。やはり煙の都の中ですのね。私の勤めているのは、平野町の商社です。余り大きくない会社ですが気楽なので時間を持て余しています。帰りに映画を見たり、ダンスをしたりするときくらい晩くなります。一度モデルになってやろうかなって茶目気をおこしたりすることもあります。でも痩せていて色が黒いので駄目ですわね。高田さん、よろしかったら会社のテレホン、お知らせします。（大阪市東住吉区∧長井英子∨）

○

私は三十二才の建築技師で貴誌の数年来の愛読者です。仕事の都合で出張することが多く旅の先々で貴誌を求めたり、小屋掛けのヌードショーやドサ芝居を観たりするのを一つの慰安にしています。日進月歩の建築の方の勉強は中々大変なのですが、麻雀とかパチンコなんか一切やりませんので、そんな無駄なことに費す時間を自分の好きな趣味に使うことが出来ます。私の好みは一口にいえば異常美の探求ということでしょうか、自分の専門とはいささかも関係ないのですが、十七、八才の頃から集めだした資料文献も相当数に達しましたが、二階の物置きに保存したまま雨漏りで濡して大分痛めてしまい惜しく思っています。妊

娠で大きくふくらんだ女性の腹部なんかは異常美の一つとして大いに喧伝されても、いいのではないかと思います。私の研究も貴誌によって大へん進捗しました。いろいろなヒントも得ました。今丁度忙しいのですが、暇が出来たら、私の「異常美探求」の研究を整理してみたいです。今の段階では、まだ資料を集めたばかりですが、ストリップ小屋の楽屋で取材したヒモ付ストリッパーの生活なんか一寸面白いものでした。彼女が妊娠していましたので。読者の方々には多士済々でいろいろ材料をお持ちの方が多いようですが、お互い、寸暇をさいて誌上に発表し合おうではありませんか。北陸の旅先の旅館で書いていますので、まとまりのない文章になりましたがいずれ又、詳しいお便りいたします。羽村京子さん、どうぞ、よろしく。私は貴女のファンです。今後共御活躍を祈ります。（金沢市にて〈田島一三〉）

○

始めて御便りします。僕は二十五才の会社員でマゾ傾向を有するものです。本誌を読みだしてから五年ほどになりますが、その後旧版時代のものも探しだして少しは読んでいます。最初はサド・マゾをはじめあらゆる傾向のものにひかれましたが、次第にマゾ系統のものに固定してきました。ただし縛りや鞭打ちのような激しいものはあまり好きではなく、精神的、空想的な責めにも興味を感じません。僕の好むのは、馬乗り（プレイ）や、組敷き、押え込みといった、「直接的、肉体的な圧迫及征服」を、基調とした傾向のものです。美しい女性の馬にされ、きびしい調教を受け、さんざんに乗りまわされたあげくとうとう押し潰されてしまったり、体格のいいグラマー女性にあおむけに押し倒され、むんずと馬乗りに組敷かれた上、そのたくましい太腿と堂々たるお尻によって、完全にとどめをさされる、といった内容のものです。又マゾものではなくても「女性の女性に対する肉体的征服」を主題にした三隅千恵子さんや高木紀久枝さんなどの一連の手記、体験記にも大変興味を持っております。それは、第一にそれらの作品の持っている具体性、迫真性のためであり、第二に征服する女性、つまりサディスティンの心理が生々と描き出されているからなのです。又征服の方法が押え込み、組敷きという僕の最も好きな方法と一致するからでもあります。そして征服される側の女性を男性である自分に置きかえ、征服する側の女性（高木さんや三隅さん達）を僕がファンである映画女優（外国ではモーリン・オハラ、ジェノンラッセル、ソフィア・ローレン、アニタエグバーグ、日本では白川由美、山本富士子、久保菜穂子、松山容子など）に仮託して楽しい空想に耽ったりするのです。最後に編集部の方へお願いを少しばかり、①作品では、大柄なグラマー女性が体力的に劣った年下の男性を無理やりに馬にしたり、組敷いたりして征服するもの。②絵画では、乗馬服又は水着姿の女性がパンツ一枚にされてあおむけになった男性の胸の上に馬乗りに跨って組敷き、両膝で相手の肩口又はこの腕をしっかとふみしくとともに両手を腰にあて、誇らしげに見下すポーズ（馬乗りになる女性の顔を、前記の各女優のだれかに似せる）③写真では女性（できれば著名な女優）の乗馬スタイルのもの。このような作品・絵画・写真

などを是非とも掲載していただけるようお願いいたします。いろいろ勝手なことを申しましたが、本誌の今後尚一層の発表を愛読者の一人として切望するものです。（京都市〈荒井生〉）

○

新年お目出度う御座います。貴誌には益々御発展の由お慶び申上げます。小生去年の初め頃、古本屋の店頭で貴誌の存在を知り機会ある事に愛読致しております。最近になりますと、何故か喜びを持って愛読致す様になりました。然し過去の体験を顧りみますと、小生はもともとマゾ的な素質があり女性に責められ事に喜びを持っている事がはっきりと判りました。小生が二十才前の頃でしたが、ある年上の女性に女の着物を着せられて、組み伏せられ、手足を縛られ、腰ひもで打たれ、又馬になったり致しまして、その方の思うがまま、言うがままになった事があります。その折にはまだ世間の事が判らず、只甘える気持だけで責められていた事と思います。然し奇クを拝見致しまして暫らくたって来ますと、その頃の事が想い出され堪らなくなります。最近では一人で「オムツ」をして浣腸したりしまして悩みを発散しております。どなたか小生とプレイをして下さいませんか、どんな女性の方でもかまいません。奴隷にされ、おもいきりいじめられ、征服されたいと願って居ります。小生の肉体の続く限り命ある限り、女性の命令であれば如何様な責めでも喜んでお受け致します。小生二十九才、一六七センチ、五六キロ、面長、ヤセ形ではありますが、相当タフな積りです。全国のサド女性の方々ぜひお手紙下さい。素晴らしい女性が出現する事を期待して居ります。（大阪〈曽根純〉）

○

粟田宮登世子様、昨年八月号にて貴女の読者通信にてのお呼びかけ拝見致しました。小生この一年の交際は全くありません。私の長い年月の願いでありました女性との間にも数度となくK誌に投稿しましたが、まだ残念ながら皆様とのプレーを貴女に実現出来たら、もっと素晴しいことでしょう。異性の手により浣腸される羞恥と快感とにより極限まで排泄を我慢する苦しみにゆがんだ顔、もだえ苦しむ肢体、想像すればますます思いはつのるばかり。夏は人気のない山の中なども恰好のプレイの場所です。それに寒くないので簡単な越中褌一本で浣腸されるのも効果があって面白いです。私は大阪に住む二十二才の男性です。私は貴女達の求められるどんなポーズでもとりましょう。終りに私は女性の三角褌姿にも強い関心を持っております。最近は女性用の褌も市内にて売られております。では粟田宮登世子様の御返事を待っています。もしこの文を読者通信にて発見されましたら、四七一―四六六四番、高原までTEL願えれば幸いです。夜七時以後は居りますから。（大阪〈高原褌郎〉）

○

奇ク愛読者の皆さまお元気ですか。僕は以前にもアイデアのような形で出したことのある者です。今度僕も読者通信のお仲間入りをしたくてお便りを書きました。先輩の皆さま、僕のような弱輩です

○女体切腹資料の部○

女体切腹態　大手札二枚一組　三〇〇円　細川アヤ子　略号（ねは）
女体自刃態　大手札三枚一組　三〇〇円　細川アヤ子　略号（ねに）
血紅使用血塗れ下腹　大手札五枚一組　五〇〇円　大塚　啓子　略号（わい）
殿中の自決　大手札三枚一組　三〇〇円　大塚　啓子　略号（わこ）
切腹美態から絶命へ　大手札五枚一組　五〇〇円　大塚　啓子　略号（わは）
豊満に挑戦　大手札五枚一組　四〇〇円　東浦ひかる　略号（えん）
介添切腹　大手札四枚一組　四〇〇円　甘木　春子　略号（あか）
腹を切り裂く　大手札三枚一組　三〇〇円　大塚　啓子　略号（やい）
下腹に刺す刃　大手札三枚一組　三〇〇円　大塚　啓子　略号（やお）
柔肌を切り裂く　大手札三枚一組　三〇〇円　大塚　啓子　略号（やえ）

がどうぞよろしくお導き下さい。

山辺まゆみ様、僕は山辺様の「風の町から」を拝見しました。とてもすてきでした。貴女のような方のドレイになる方は、幸せものです。僕も一度でいいから貴女のような方のドレイになって、心ゆくまでいじめられたく思っております。貴女はドレイの僕を美しいおみ足にナイロンのクツ下をはいたまま、「お前、私の足をおなめ、ただし足首から下よ、片足十分間両方で二十分間よ」と無理矢理、足の裏なんかをなめさせます。でも、山辺さまは、僕なぞ足をなめさせるのもけがらわしいとおっしゃるかもしれませんね。大阪の村松芳子さま、僕のような者でもドレイとしておもちゃにして下さるなら、御連絡下さい。僕は本当は身体が細くて色の白い方を望んでおります。そんな方からでしたら鼻に穴を開けられて牛や馬のように、こき使われてもかまいません。（大阪〈馬田牛一〉）

〇

二月号、前川成雄様の女の生首絵、凄いの一言につきます。今後どしどし、この種の無惨絵を発表して下さい。只、より一層妖美感の出るテーマとして、高島田、矢絣り、立矢の字の帯と云ったいわゆる腰元とか、侍女スタイルの娘の試し斬りされて首の斬り離された瞬間とか、胸にぶらさがった所とか、血の海の中に転がった所など、それも一人だけでなく所謂集団打首図を是非お願いします。それから斬られ方も①正坐して首を差伸した普通の打首②生き釣り胴の三断図③例さ釣りでの打首など変化させて下さい。なるべく歴史上の場面がいいでしょう。例えば織田信長の安土城での侍女十数人の打首処刑、三条河原の畜生塚由来の秀次妻妾十数人の集団打首。通州事件の日本人芸者十人を支那兵が青竜刀で次々に斬首してゆく所など無惨絵の絶好の題材です。尚この際申上げますが、生首シリーズ愛好者としてこの間の写真による実際の女の人の晒首構図や処刑場面は反って美的イメージを破壊されて、汚さや醜悪感しかありませんので、せめて写真にするなら美人女優の高島田の首でアレンジして下さい。あくまでも絵画的にお願いします。私も飛込自殺した実際の娘の生首など見たことがありますが、決して生首マニヤを喜ばす様な美しさはありません。又、事故や犯罪の現場写真もずい分見ましたが矢張り嘔吐を催す様なもので、決して美しさは感じられません。況や平凡な生きた人間が首だけ板の上にのせた写真などぶざまで見られたものではありません。美人女優の昔風の髪の首や襟足の写真は生きた人間には違いありませんが美の象徴として受取っているわけですからお間違いない様に願います。そういうものを含めて芸術味豊かな耽美的な無惨絵こそ又大蘇芳年流の血みどろ絵こそマニヤの愛好品です。（尼崎〈邦真久美〉）

〇

毎月二十五日が近ずくと、何となく心がおちつかなくなってきます。云うまでもなく奇クを一刻でも早く手に入れたいためですが、最近はこれに〝或は〟という不安が加わっているのは悲しいことです。しかしいかなる苦境におちいっても発行を続けるとのこと。お互に力をあわせ、このピンチを切りぬけようではありませんか。さて一月号も生首マニヤ、処刑マニヤにとっては有難いもの。新宮氏の晒し首も唇から流れる血のりが効果的ですが、勝手なことを云えば切口をもう少し上に、板に流れる血汐ももっと大量にしたらと思います。次回は是非十二月号に述べられた血の滴る生首をぶら下げているシーンを願いたく、更に空しく横たわった首なし死体、それをふんまいている美女など、トリックを使って出来ないものでしょうか。前川氏にはこれと逆に獄門台の生首や絞首された女囚の絵、「十三人の女死刑囚」斬首篇八人の決闘場面は連続物で画いていただきたいものです。このほか代理部の分譲フオトには処刑マニヤを満足させるものがないのでものたりません。新宮氏の作品や木馬責を目下申し込み中ですが、絹川、梨花、大塚以下モデル娘たちのズラリ並んだ生首や絞首死体などは

次号（四月号）は二月二十五日発売いたします。

想像以外に見ることができぬものでしょうか。或は絹川嬢の細首にロープをかけ、これを引き上げようとしている梨花嬢。三枚目は大塚嬢がハリツケにかけられ新人遠藤嬢が槍をもってかまえている。四枚目はその遠藤娘が股裂きを宣告され正に合図をしょうとしている絹川嬢。という様に大サービスを願いたいものです。要するに、〃責め〃だけでなくどしどし〃死んで〃下さい。四馬画伯にも同様〃殺した〃絵をお願いします。世の中に楽しみ多し、しかれども、生首なしに何の楽しみぞ。（仙台市〈黒田寿〉）

○

新年明けまして御目出度う御座居ます。私は三十二才になる男性です。幼少の頃から女性の緊縛に興味を持ち自分の異常さにどれほど苦しんだ事でしょう。私は昨年迄、福岡に住んで居ましたが、九州に居るより阪神方面に出た方が奇クを通じプレイをするチャンスが多くなるのではと思い西宮へ出て参りました。遠藤百合子さんのファンです。昨年百合子さんの呼びかけに手紙を出そうと手紙を何度も書きましたが悪筆なので恥かしく、どうしても出す事が出来ませんでした。百合子さんを顔の形が変わるほど、うめき声一つ出ぬ様ぴっちりとさるぐつわをはめ、二本の立ち木を利用し大の字に緊縛しくすぐり責め、後手、高手小手、エビ責等私の思い通り責めて見たい欲望で気が狂い相です。私は二年前、背髄を痛め、後何年働けるかわかりません。せめて身体の自由のきく内、一生の想い出に遠藤百合子さんの様なマゾ女性とプレイをしたいのですが、私の夢をかなえて下さいませんか？ 出来ねばせめて文通だけでも、私の様な悪筆では文通して下さい、と言う方が無りでしょうね。自分で何を書いて居るのか判りません。百合子さんの御幸福を祈りつつ。（西宮市〈畑野清〉）

○

私は三年前から貴誌の愛読者でございます。今日は、二月号に載っておりました、限定版の〃美しき縛しめ第三集〃（略号「美3」）の予約を申し込みます。代金の方は完成した時に再び申し込む時に払いますので、今回は予約の申し込みだけにさせていただきます。一日も早くりっぱなアルバムが完成されることを楽しみに待っております。又無事に完成することを祈っております。今月号の読物の中ではなんといっても〃花と蛇〃がよかったです。私は大体がサドで特に女が女を責めるのが好きです。それも肉体的なものでなく、精神的（浣腸、排泄など）に責めるのがすきです。だから、静子夫人、京子の二人をてってい的に責めてくれるように作者の団鬼六様にお願い致します。次号を楽しみにしております。その他では〃十三人の女死刑囚〃〃教師の記録〃〃奇譚三十九夜物語〃などです。私はマゾは余り好みません。悪書追放運動でさわがれておりますがどうぞ今迄どおりのKクラブでありますように祈っております。それには編集者の皆様の御苦労はありありとうかがわれますが頑張って読者のためにつくして下さるようにお願いします。大変にえらそうなことを書きまして申し分けございません。それでは今後の貴誌の発展をお祈りしております。予約の件、よろしくお願いいたします。（尼崎市〈山本高男〉）

〔編集部より〕○縛られた女性ばかりのアルバム「美しき縛しめ」の予告を二月号でいたしましたところ、すでに多数のお申込みを頂きました。中にはお手紙やハガキにて御予約を下さる方もありましたが、目次裏に発表しましたとおり着々と進行中でありますので、是非代金同封の上、御予約下さいますようお願い致します。

○

今月初めて貴誌を読みました。正直なところ、今日この本を読んでびっくりしました。いや感激しました。私は美しい女の人を痛めつけるというようなことに興味を持っているのではありません。つまりムチで打ったり、しばったりすることはあまり好みませんが、浣腸のような思いきり恥しいことを強制させてやりたいと思う気持が心の中にあります。これは私の生れつきの性質で新聞の記事なんかでも、そういった想像を働かすことが出来る記事にいつも心が奪われます。こんな自分の心を軽べつしたい気持でしたが読者通信で同好の心の友を発見し、うれしさの余り遠くみちのくからお便りしました。（秋田市〈額田喜美夫〉）

伝奇ミステリー

血汐弁天

（ちしお・べんてん）

有珠新

一、

本州の北西端、脊梁山脈が津軽海峡に断ち切られて落ち込んだ所。「矢越岬」そこが私の住む所である。

人口二百。戸数四十。海岸から垂直に伸び上った岩壁百二十米の上に白堊の灯台と、海峡にまぎれ込む海の魔王「浮游機雷」の探知所、通称レーダーがある。

本村まで三里、津軽線の終着駅まで三里半。途中十三本のトンネルを潜り、夏場だけ定員十三人乗りのマイクロバスが日に三回本村との間を走っている。

思い切った僻地である。

住民は純朴だが、昔この辺に住んでいたと言うアイヌ族の血をひいているのか、ホリの深い顔立ちで色白な感じの人が多い。

部落の前面二百米のところには、義経渡海伝説にまつわる「無意島」が、標高三十五米のピラミッド型にそびえて、外海から押し寄せる荒波や狂風を防いでくれる。

言うまでもなく、青森県内でも五本の指に数えられる観光地で、十和田湖より風景が良いとも言われている。

無意島と部落の間は岩だたみになっていて干潮時には徒歩で渡れるが、その途中、荒波にけずり残された小岩礁の上に「弁天社」がたっている。

建立は古く銭屋五兵衛の起請によるものと伝えられ、霊験あらたかな船夫の守護神として、津軽海峡一帯は勿論、遠く北海道の小樽室蘭方面にまで信者をもっていると言う。

例祭は毎年旧暦八月七日である。

二、

部落の北西端、即ち、矢越岬をかわして裏海岸の方に廻ると、もう道はない。

日本海の怒濤と戦っている断崖の浸食海岸

があるだけで、熔岩と凝灰岩の交錯した奇勝が延々二十粁もつづいているだけである。

× × ×

その死体は、矢越岬をかわして二百米南下したところ、風穴の中にあった。

ダイナマイト爆発による心中死体である。

女は部落の素封家の娘であり、男は今春大学を卒業して赴任した矢越中学の青年教師であった。

夜明けの薄白い光に照らされて、ほの暗い風穴の砂利石の上に、その二人の屍体が横たわっていた。

女は、それでもつつしみ深く女学生として紺のセーラー服にスカートを着けていた。

男は、どうしたものか、晒布の六尺褌ひとつの素裸である。しかも、その褌は海水を吸ったか、しっとりと濡れているのである。

死体は無惨なものだったが、不思議に二人の表情は安らかだった。

昨夜、と言うより、今朝早く決行したものと見られよう。

三、

私が見下している板の間の上に横たわっている褌一本の死体は、一体誰だったろうか？

私はたしかに此の男を知っていた。

いや、それはまだ死体と呼ぶには早すぎるかも知れない。その血まれの右手は長剣を握ってまだピクピク動いているし、大きく創口を開けた下腹部からはまだ脈打つように血が流れ出し、溢れた腸管は、まだ、ゆっくり蠕動しているのだ。

此の男は一体誰だったろうか？

「切腹!!」実に痛ましい最期を選んだものである。

すぐ外では、ゴウゴウと打ち寄せる波の飛沫が板戸に当って雨のように聞こえる。

もう夜明けも近いのであろう。頭のシンが痛い。

四、

旧暦八月六日は弁天社の前夜祭である。

午前二時。月はおちて真暗闇の天地の中に岩と波の激する音だけが物凄く聞える。

二十八秒に二閃すると言う頭上の灯台の光だけが時折あたりをほの白く照らす。

今年丁年の若者は部落で五人しかいない。

祭礼のクライマックスは、神輿の渡御であるが、神輿は七人で担ぐのがならいになっているので、五人では足りない訳である。

そこで、あとの二人は、今年になってから部落へ転入して来た童貞、中学校の塙先生と灯台長の息子で中学三年の私が特別出演する事になったのである。

定刻三時。七人の若者は渡御場に出て支度をする。女色を近づけないで縫い上げた白衣を着て神主のおはらいを受ける。

三時十分。若者は夫々神主から授けられた切りたての六尺褌をしめこんで神輿をかつぎ上げる。

三時十五分。渡御。おりからの満潮で、十米も進まぬうちに波は股間を濡らす。

途中の深みで全員肩まで水につかり、同時に、声を揃えた弁天讃歌が波間にとどろく。

サイギ　サイギ

清浄弁天

清浄弁天

サイギ　サイギ……

その時、岸の渡御場と沖の弁天社とにパッとあかりがついた。

岸にむらがる人々の間からも、沖の社殿の神主の口からも、

サイギ　サイギ……

の声が唱和する。

三時二十分。神輿は無事に社殿の前に安置された。社殿の扉がサッと開いた。年一度の弁天開帳である。

七人の若者は、期せずして中をのぞきこみ「アッ」と驚愕の叫び声をあげた。

社前にあかあかと灯る松明の光にてらされた弁天尊像は、余りにも意外な姿をしていたのだ。

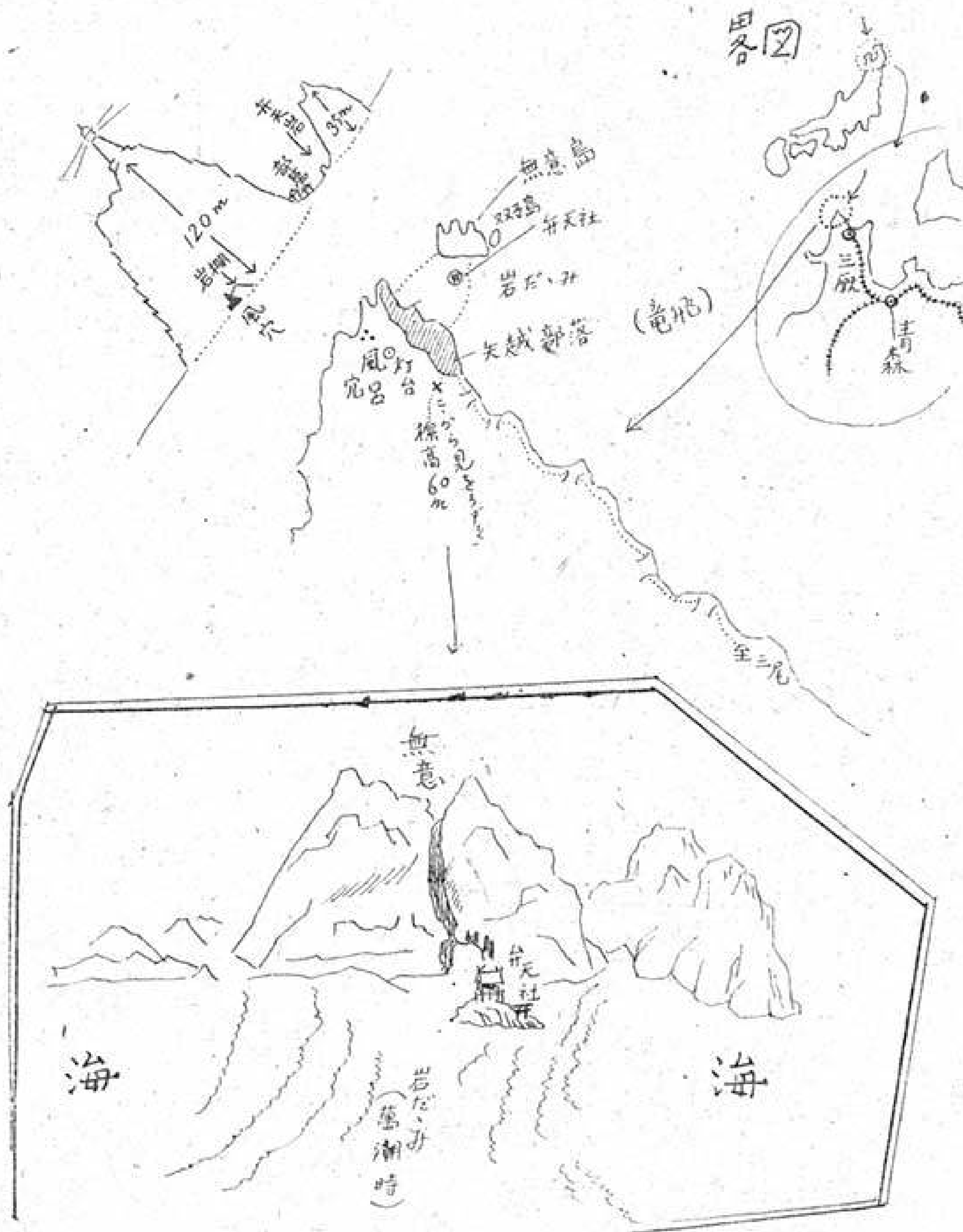
海魔と覚しき醜怪な動物を腰の下に敷き、片膝あぐらに弁財天は、その手に琵琶を持つ代りに両刃の長剣をもって自らのふくよかな下腹を真一文字に切り裂いているのである。（切口から滴る血汐は海魔の開いた口中へおちるようになっている）

木像に彩色したもので大きさは高さ十米ばかり永年の潮風に色彩はあせているが、之なん、銭屋五兵衛一代の秘像と伝えられる「血汐弁天」でなくて何であろう。

女人絶対禁制、男子といえども、一生に一度、部落にすむ丁年の若者だけに開帳すると言う伝統の弁財天はまさに之であった。

三時三十分。

弁天例祭の奇習はいよいよ之からはじまるのである。まず社前の篝火が吹き消したように消えた。あとは只闇、やみである。



頭の上を灯台の光がときどき通る。

そして、十分、十五分、二十分……。

他の六人の若者たちは済んで、いよいよ私の番が廻って来た。私は手さぐりで前へ進みかねて教えられた通りに褌をはずした。

……終って私は再び褌をしめこんだ。

四時。

再び塙火が点され、旧八月生れの塙先生は血汐弁天に生血を捧げるべく社殿の中に進んだ。

神主が弁財天の剣をとり上げ、白布で刀身を巻いて渡した。

塙先生は一揖してそれをおしいただくと、正座して切腹の姿勢をとった。

「うム」低い呻き声がして塙先生は前かがみの姿勢になり、じりじりと刃を右へ引き廻した。

「お見事!!」神主は言って素焼の皿を塙先生の下腹に当てがい、鮮血をしぼり取って弁天像の切腹創になす

りつけた。

ああ、あの像の下腹部の血の色は毎年こうして腹を切った若者の純血だったのだ。

塙先生の傷は浅くせいぜい三粍から五粍ぐらいのもので、血液もしぼればにじみ出る程度である。

開帳は終った。扉が閉まり小さな南京錠がかけられた。

五、

四時十五分。神輿の還御である。

その頃、風も波も少し鎮まり、その代りに無意島の陰から突然湧き上った海霧が濛々とあたりを包みはじめた。

たちまちのうちに、岸も、島、たった今あとにしたばかりの弁天社も、黒灰色の海霧の中に没してしまった。

頭上をかすめていた灯台の光が霧の中に吸いこまれてしまうと、それに代ってビョウビョウと轟いたのは二十馬力と称する霧笛であった。

まだ夜明けは遠い。

ジャブ、ジャブ、……

神輿を担ぐ七人の若者の立てる水音と霧笛だけがしばらくつづいた。

行手にボウとかすむ火の玉が浮き上り、まもなくそれは篝火となって私たちの前に燃え盛っていた。

「ひどい霧だのう。一間先も見えやしねえ、弁天様のお祭りどきには珍らしい事だ」

篝火のそばに立っていた一人の老人が誰にともなくつぶやいた。

岸の拝殿に神輿をおろすと、若者たちは体を拭く間もなく護符の餅つきであった。

末丁年の私と腹を切った塙先生ははずれ、あとの五人の若者で二俵の餅を紅白につき上げるのである。

四時二十分。お神酒をいただいて元気をつけた五人の若者たちは、褌姿のままで二組の臼と蒸籠係りに別れ、カマドと篝火の熱気で仁王の様に赤くなり乍ら餅をつき出した。

村人たちは杵の上下一回ごとに手を打ち声をあげて拍子をとり、酒をくみ、次第に熱狂して行くのであった。

外はいよいよ海霧が濃く、その中へそっと熔け込むように姿を消した二つの人影に気付いた者はいなかった。

六、

風穴の右肩に張り出した岩棚の上で彼は待っていた。

ものの一分とたたぬうちに目ざす相手はやって来た。人の気配をうかがうように風穴の入口で、ジッと穴の奥をのぞき込んだが、無論何も見えはしない。それは、あの祭礼からこっそり姿を消した塙先生であった。

「弓子。……弓子。……」

二度目に呼んだ声に応じて、穴の奥の方からかすかに人の気配がした。

それが四時三十六分であった。

四時三十八分。モウモウと渦巻く海霧の闇をさいて「アッ」と言う悲鳴がきこえ風穴の中に金色の光が走った。続いて、ズーンと腹の底にひびく爆発音が轟いた。霧笛がビョウビョウと鳴っているさ中であった。

彼は岩棚の上から這いおり、穴の中を懐中電灯で照らして見た。まだ硝煙と海霧が交錯する中に、無惨な地獄絵が展開していた。

頭が裂け、腹部内臓が花のように弾けているのは塙先生。

右腕の肘関節から先がなくなり、首がねじれて顎が肩胛骨につき、セーラー服がボロのように千切れて右横腹が乳房から鼠けい部まで星形に裂けて臓腑が溢れ出していたのは弓子である。

彼はそれを見て急に恐ろしさに堪えられぬ様子を示すと、懐中電灯を消し血腥い空気を

振り払うにしてよろよろと風穴の外へ出た。
夜明けはもう近いが、海霧はいよいよ濃く海陸を圧している。

七、

四時五十九分。彼は、部落の祭礼を避けて、濃霧を辛い、海を渡り弁天社の岩礁にたどりついた。
神主も、もう岸の方へ引き上げて社殿の中にはローソクだけが灯っている。
彼は社殿の中へつかつかと踏み入り、その奥のキャシャ作りなヒノキの扉を錠がついたまま引きむしるように開けると、血汐弁天の手から長剣を外し、目の前に下っている手拭程のマンマクをちぎりとって刀身に巻き、逆手に持って下腹へ当てがいグッと力をこめて突き刺した。「ウワッ」思わず上げる悲鳴。
だが、二度、三度と突き損じてためらい傷から流れる血汐がようやくその下腹を伝わると、血に狂ったように彼は両手で剣をかまえ柄を社殿の柱の根元に当て、立膝になってグッと体を前に倒した。
プツッと音がして、あとはズズーッと剣が腹の中へ吸いこまれるように入った。

八、

彼の意識は、血まみれの苦悶に堪えて一種の陶酔境をさまよっていた。
「……復讐は成功した。弓子のやつ、塙のやつ、色男ぶったってあのザマは何だ。許せない。俺は許せないんだ。俺が、弁天様に願かけて見つけた弓子を横取りしゃがって。……どんなもんだ、完全犯罪だろうが。堕胎薬の瓶にニトログセリンを入れかえておいたとは知るまい。お前たちの相談は筒抜けなのも気づかなかったろうよ。瓶の底に画鋲をセロテープで止めておいたのもナ。フン。塙先生よ。まさか自分が教えたニトログリセリンの作り方を実際にやって見た者があるとは思わなかったろうな……」
彼はいつの間にか下腹部を一文字に切り裂き、右手はあふれ出る小腸を摑んで抽き出していた。
その顔は苦悶に歪み、その両脚はえびのように伸びたり縮んだりしていた。と、ローソク台を踏み倒してその火は和紙の御幣に移り柾のようにうすい神殿の扉に燃え移った。
「ううむっ、べ、弁天さま。……」
彼は弁天像のそばへにじり寄り、その腹から抽き出した腸の塊りを弁天像の下腹部、あたかも相似した像の切腹創になすりつけるのであった。
ちょうどそれは、弁天の尊顔に弓子の面影を見出してなつかしさに耐え切れぬように。
火は社殿の内に廻り終り、彼の皮膚はたちまち真赤になってふくれ上がった。

九、

岸では、今やお祭り気分最高潮であった。霧はまだ深く、沖の弁天社の灯も見えず、灯台の霧笛がいつまでも鳴りつづけていたが、東の空がほんのりと白みはじめて来た頃にはもう二俵の餅もつき上がり、一番の御供え鏡餅を三宝にのせて二人の若者が沖の弁天社へ向けて霧の中に消えた。
だが、彼等は間もなく見た。沖天高く焔を吹き上げて燃えくずれる弁天の社殿を。

十

火が、まもなく彼の生命を奪い去る。ジリ、ジリ、ジリ、とその全身の皮膚を焼き爛れさす。傷口から流れ出た大腸、小腸の表面が乾いてシワが寄って来た。
一秒……二秒……三秒……、いよいよ最後だ。ガクリ、と彼の全身から力がぬけた。
五時二十九分。意識が遠くかすむ。ああ日の出だ。
グラリと傾いた顔。おお、知っている筈だ。それは私自身だった。

ある女の死

孤独の幸福

（こどくのさち）

近藤一

二月のある日、東京のある盛り場で、一人の自殺者があった。毎日二、三人の変死がある地域に自殺も珍しくないのだが……。

大通りをちょっと入ったアパートの二階の一室で、彼女は醒めることのない眠りに就いていた。自殺者は女性だった。T子と仮りに名づけようか。大正十二年五月生まれの満三十九歳、職業は無く、家族もない、全くの〃ひとりぼっち〃の女だった。

自炊もできるガス水道完備の部屋は六帖の広さで、南向きに陽当りのよい小綺麗な明るさがある。押入は上下二段で、下が襖、上が観音開きのしゃれた造り、その上は天袋で、室内はきちんと片づいていた。家財道具も使い良いものが一揃い、洋服タンス、整理タンス、冷蔵庫、テレビ、ステレオ、電気洗濯機等々。女一人住居にしては調度品も多すぎる感じだが、艶めかしいスタンドやら窓以外に感じ良いカーテンが幾種類も掛けられているあたり、女らしい細かな心遣いが窺われて優しいムードがある。

唯一つ異様なものと言えば、彼女の枕許の壁に、ハンガーに掛けられた男物の丹前があることだった。彼女は二号さんだった。

T子の旦那様は五十に過ぎる歳の、お医者様だった。内科というのだが、自らの心の中には小児科にうってつけのような、幼く美しい心情が潜んでいた。つまり、社会的な名声や実力を備えながら、私的生活の一面では、まるっきり「坊や」であった。かなり歳下のT子に「母親」を感じ甘えていたのだ。

医者としての技術の巧拙の程は分らない。

だが、彼女との二人きりの生活をより快適なものにするために、彼はおよそ有益と思われる調度品なら次々と買入れてささやかな「愛の巣」を充たして行った。

好事魔多し。彼は病に冒されていた。それとともに生来の心の病も昂進したという。T子は看護に献身した。彼のために健康の回復が考えられることは何でもやってみた。転地療法が良いと勧められると、どのような遠方にも彼に寄添うT子の姿が見られたし、こんな方法が効くと言われれば、彼女の力には荷の重いことでも甲斐々々しく献身した。

彼はT子にすべてを託した。愛すというような対等のものではない。一回りも年下のT子に頼り甘えていた。T子も彼のために己れを無にした。彼の喜ぶことなら何でもした。そしてそうすることが最上の歓びだった。

旦那様には嗜虐の性が在った。もとより彼はそれを自覚し、悩み抜き、そして彼の社会的地位に鑑み、そのことを秘匿していた。

妻には話せなかった。というのは、妻が単に全く健全な家庭に生まれ育った良家の子女というためでなく、妻には被虐加虐の世界を教え得ないという直感のためであり、彼のこの感覚は敏感に真実を把握していたのだ。

彼の妻は余りにも良妻賢母であり、心身共に健康であり過ぎた。学校の成績も優秀な子供ができ、母の訓育を守り、父を敬愛した。彼自身のS性向は完全に封じられ、その結果彼は社会から尊敬をかちえた訳だった。彼には錯乱に陥る余地が皆無だったのだ。

そのような彼の前にT子が現われた。彼とT子は一瞬にして惹かれ合った。まるで百年の知己のように相互に結びついたのだ。それは本能の命ずる所であったのだろうか。T子には悦虐の血が熱く渦巻いていたのである。

旦那様を仮にS氏としておこう。

S氏はT子を自らの手許に置いた。自分の開業する医局の仕事をT子に預けた。T子は看護婦の資格は無かったが、患者の扱いには誠心誠意事に当ったし、その手際は素人離れがしていて皆に喜ばれた。何よりも良い事はT子が調剤の心得を持つことで、T子はS氏の傍から離し得ない人となった。

街の開業医という不規則な生活で、仕事の面がS氏とT子を堅く結合する以上、S氏の身の廻りの世話は、妻でなくT子の仕事になった。

S氏の妻は夫を疑うような種類の女では無かった。夫を愛していたし、充分な配慮を見せてはいたが、万事に慎しくできていた。別に冷淡というのでなく、夫の社会的地位の故に世間態を気にする風だった。それゆえ、夫がSMの結びつきを明らさまにしない以上、T子との仲を疑うこともなく、むしろT子の献身的な補助を好ましく思い喜んでいたのである。うかつと言えばうかつな話だった。

T子は悧口だった。愛する者の敏感さで、S氏の妻の心情を察知し、S氏との仲を遂に覚られなかったらしい。「奥さま」を充分に尊重していたし、何事にも控え目にしていて「奥さま」の方から、T子を重用するように仕向けていたから、はたの見る目も美しかった。

S氏の病いは、心臓の疾患であり、血圧が高かった。これは種々の疲労に由るものらしかったが、とにかく肉体的な過労や極度の心労は禁物とされた。そのため静かな大自然の中でのんびりしたら、どうかと言うことになったときも、S氏の妻は、T子を信頼できる附添人としてS氏に同行させ、身の廻りの世話を託した。



T子は幸福だった。少くとも人からの憎悪や嫌忌は感じられず、愛情や好意にひたっていた。T子とて決して悪党ではない。ただ、自分の掌中にした幸福を逃すまいと努力する女にすぎないのだ。人並以上に誠実な生まれつきだったし、それは仕事ぶりにも表われ、それ故にS氏と深く結ばれたり「奥さま」の信頼を得たりしたのだから、善人といってもよい女だった。T子の唯一つの悩みは、何の疑いも持たない風の「奥さま」を欺いている後めたさだけだった。だがそれも、身勝手な欲望だと思いながら、自分に許された唯一の生甲斐だからと理由づけて自ら納得した。

SとMのプレイがS氏の病気には禁物なことはよく分っていた。T子との結びつきがS氏の持病を危険な状態にまで進めてしまったことも知っていた。

例えば、

あるときはT子の内腿を麻酔なしで裂いて消毒の激痛を味わせ哭かせたことがあった。だが外科的な労作はS氏の好まない所だったしT子も哀願して止めて貰った。

ある時は、T子の腕から大量の血液を抜取り、貧血の苦悶を愉しんだあと、その血液を注入して回復させたりした。

必須の知識として止血と人工呼吸を心得ているS氏の縛しめは厳しく緊かった。T子は診察室のベッドや床のリノリュームの上で、幾度となく失神しては、無理に甦生させられた。

生きている玩具として、T子の肉体はS氏の残酷な思いつきの実験に供された。その中でT子を相手にS氏は極度の興奮を見せた。

炎が異常に激しいだけに、終ったあとの疲労も酷かった。まるで生命の灯を燃え尽くすように、S氏の全身は虚脱感に捉われ、解放されるのに永い時間を要して行った。青い程に澄んでいた眼が黄色く混濁したし、膚からは精気が失せて行った。そして遂にS氏は療養生活に追いやられてしまったのである。

他人の生命を預かる有意義な職務からも逐

われたS氏をT子は悲しく見守っていた。疑いもなくS氏の肉体を蝕んだのはT子との激しい戯れである。T子がS氏を殺したのだ。T子さえ居なければ、S氏は破滅しなかったろうし、今からでも甦える可能性はあるだろう。だがT子はS氏から離れられなかった。それはS氏を害してしまった罪を意識する怖れよりも、小児のように頼り無く愛しいS氏を独りぼっちには出来ない心からだった。

〃私は貴方にも、貴方のお家の方々にも、ただ害を与えただけ。私は悪魔なのね。悲しいけど私は貴方と別れた方がいいのよ〃

T子は思い切るように言ってみた。その返答は激しい緊縛や鞭撻であり、そしてそのあとS氏は「捨てないでくれ」と哀願して、T子に取縋り、二人は涙を流すのだった。半狂乱のS氏の前に出るとT子は、自分が全く無力に陥って愛される幸福感にむせび、断じて離れないことを誓ってしまうのを、いやという程知らされてしまうのだった。

T子は苦しんだ。愛するS氏を蝕んで行くのは自分のS氏に対する愛情なのだと思うにつけ、そして自分が周囲の人々から愛され信頼されていると思うにつけ、心は痛んだ。S氏と別れられない愛着と離れねばならない自責が交々襲ってくる。

S氏も悩んだ。父母も妻子もあり、医術と言う天職を持った男が、今は何をして生きるのか。肉体を病み、それを治しえぬまでに心を病んでなお哀れな足掻きを見せるとは、その上に、自分を愛し命を賭けている女を、自分も可愛く思いながら、滅亡に導いていることが果して男のすることだろうか。社会的には地位も尊敬もかち得た理性に富むべき人間が何というだらしのない有様なのだろう。S氏は偏えに己れの弱さを責めた。年老いた両親に詫び、妻や子に詫び、そしてT子に詫びる気持で一杯になると、それを口に出せないS氏は秘かに書き残して、心情を綴ったノートを幾冊か溜めるようにもなっていた。

T子も愛するが故の心の矛盾する苦しみをノートに書きつけていた。そして、これらの手記はT子の住む部屋の整理タンスの中に、きちんと納められ、しかもお互いにそれを読み合うことなどしなかった。

T子が、どのような心境かをS氏は知らずに死んだ。S氏の心情はS氏の死後になって初めてT子に知れた。そして、これらのノートが、結局二人の遺書になってしまったのである。

再び医師として立ち得ないと断定されたS氏がT子を訪れ、自棄的な戯れに苦悩の一夜を過したとき、S氏はもう自分自身が男としての機能の最期にあることを知った。敗残の想いを噛みしめるように帰って行った彼は、再び生きてT子の前に現われなかった。

自宅へ帰りつくか着かないうちにS氏の意識は薄れていた。S氏は妻や子の驚く中で病床に倒れ込み、そのまま意識を回復しなかった。「奥さま」からの急報でT子が駈けつけたのは翌朝であり、S氏は既に脈膊を失っていた。T子は声もなく、病床の裾に涙を拭っていた。

一週間は瞬く間に過ぎた。S氏の野辺の送りも済み、T子にも漸く独りで泣ける静かな夜が来た。アパートの部屋には、まだS氏の面影も体臭までも鮮かに残されていて、T子は夢を見る思いだった。

T子にとってS氏の居なくなったS家には用はなかった。S氏の奥さまは、T子の今後について考えておきますから、必らず来て下さいねと言ったが、T子は黙って東京を去るつもりだった。

T子には、差迫ってすべきことも、したいことも無くなってしまった。ただぼんやりと坐り、何も考えずに虚ろになっていた。

無意識に整理ダンスをあけていた。その中には自分やS氏の書いたものが、きちんと区別されていた。S氏の生前には読んでみたいと思うことさえなかったS氏の手記が、自然に抜かれていた。

「……人間は本来孤独なのかも知れぬ。私自身そうであった。過去において……。だが今は違う。私ほどの幸福者はまたとあるまい。結婚によって、そして子を創ってもなお感得できなかった人間の歓びを、私は今しみじみと味えるからだ。」

「人間には、生きるための勇気が不可欠な筈だ。だが私にはそれが無い。私は生きることを許されていないのではないだろうか。嗚呼！」

「父上様、母上様、お赦し下さい。私は生きる途を誤っていたようです。」

「生きることは難しい事だ。自己の進むべき真の途を知らぬ一生もある。真の人生に気づかぬ者は哀れであろう。だが真の人生に気づきながら歩む勇気を持たぬほど苦しみはすまい。」

「過ちを改むるに憚らざる勇気は、その人間の社会生活環境に束縛されないと言うのだろうか。」

部厚く束ねられたS氏の手記は、S氏という人間の苦悩の寄せ書だったけれど、そこには、両親への謝罪が僅かにあるだけで、他はすべてT子を求め、T子との愛の苦悩を綴るものだった。

——先生は私を求めている。私だけを求めているのだわ——

T子は電撃のような衝撃を受けていた。

——貴方、有難う。私の生甲斐も貴方だけ私だって、貴方なしに生きられない女なの。ね、二人でいつまでも一緒にいましょ。——

T子は憑かれていた。

もう何も怖れなかった。空虚は消えていた。何も考えることなく、ペンが紙片に走った。T子はS氏と逢える希望でいそいそしていた。T子はS氏の両親とT子の妹とS氏とに宛てた三通の手紙を書いて行った。

〝御両親様

御信頼を裏切った私をお憎しみ下さいませ。申し訳ございません。

でも、Sは私のもの、私独りのものでございます。私はSと一緒に、いつまでも、何処までも参りとうございますが、我儘な恩知らずの私でございます。

どうぞお赦し下さいませ。唯一つのお願い、お墓がありましたら、どうかSと一緒のお墓へ埋めて下さいませんか。我儘者のお願いでお叱りになるでしょうか。

私のことはすべて妹にお任せ下さいませ。

Sは可哀想な人、あの人に罪はありません。みんな私が悪いのです。御免なさい。何もして上げられなかったのに少しも叱らない人、優しい人。

さようなら〟

〝妹へ

いつも迷惑ばかりかけて御免なさいね。悪い姉を許して。

Sの許へ行きます。Sは可哀想な人、私がいなければ何もできないの。私もSが居ないと駄目なの。もう決して離れません。一人ぼっちにしないわ。

さようなら〟

Sの両親宛てのものも妹あてのものも、その後半はSへの思慕をS宛に綴っているのだということを、T子は気づかなかった。そして最後にS氏へ宛てた手紙を書いた。

T子は睡眠薬を嚥んだ。失敗することのないように、致死量以上を服用していた。毛布を敷き、その下に腰の部分に当るようビニールのテーブルクロスを敷いていた。死への意識が背筋を凍らせたのか、或いは何かの配慮からか、T子の死の床には電気アンカが点けられていた。

習慣通りT子は寝巻に着換えて布団に入った。枕許には絹のピンクの覆いをつけたスタンドがともされ、T子は静かに眠っていた。そして遂に醒めることがなかった。

瞼の縁に黄白色の眼やにが流れていた。それにT子の予知した通り、T子は失禁していた。だがそれは電気アンカの熱で既に乾いていたから臭気は薄かった。

死後三、四日。

硬直は取れ、死臭が漂っていた。腰から腿にかけての皮膚は剝離していて、それらは電熱で赤紫色に焦げていた。

小柄で上品な、年令よりは若々しく見える女の、静かな死相であった。

発見者は、T子から「相談にのって欲しいことがある」という手紙を受取って、唯一人の肉親に不吉な影を感じ、仙台から急遽上京したT子の妹M子であった。

十三人の女死刑囚

その五〈御前試合篇〉

佐出須登

1

今を去る遠い昔、マーロ帝国は暴君オキロの支配下にあった。ネロの再来といわれる彼の趣味は、毎日の様に若く美しい女性を何人か宮殿前の広場で死刑にすることだった。その数は年には一〇〇〇人にも達し、侵略による捕虜や隣国からの貢物として送られる美女だけでは足りず、このため自国内でも死刑が激増しどんな小さな罪でも許されなかった。

死刑は始めのうちは絞首刑や斬首刑で満足していたが、次第に種々のなぶり殺しが行なわれるようになった。哀れな女たちはどうせ殺されるのなら、もっと前に死んだ方がよかったと泣き叫びつつ、次々とこの世を去っていった。

ある日、火あぶりの処刑が行なわれていた。この女は物価の値上りに対する不平をいっただけで捕えられこの運命となったのだ。普通死刑を宣告されれば、その瞬間から裸とされ、そのまま執行をうけるのだが、彼女の場合処女であったので必死の願いが許され、下腹部に一枚の半紙があてられていた。燃えさかる火の中につきとばされ、辛うじてはいだしてきても再び投げこまれる。五回か六回これをくりかえし動かなくなると今度は棒に縛りつけて火の上にかざす。バーベキューの元祖ともいうべき処刑をみながら王は新しい趣向を考えていた。

それは勝ちのこった一人を助命するという条件で女性同志の決斗を行なうことであった。さっそく死刑囚を引きだしたが、その数は不吉なナンバーといわれる十三人だった。

ちょうどこの時、隣国からの貢物がとどいた。いずれおとらぬ美女のなかに、ひときわめだつ漆黒の髪をもった女性、その名をお富士といった。

彼女は日本の武士の娘であったが、海上を帰国の途中遭難し外国船に救われはしたものの、流れ流れてこの国への貢物に加えられてしまったのである。このような運命にあっても幸代、小百合という二人の侍女はお富士につきそったまま離れなかった。珍らしいもの好きの王は、この三人も決斗に加わるように命じた。

決斗は大刀、短刀、槍、斧、弓、鎖り鎌、それにお富士が肌身はなさず持っていた薙刀と、この当時まだ珍らしい八連発のピストルが使用されることになった。

2

いよいよ試合開始となった。王の命令でお富士が真先に出されることになり、武器は薙刀が許された。相手はクローである。

このクローという女は殺人強盗を働いた本物の死刑囚だった。当然火あぶりかハリツケ又は股裂きの極刑に処せられるべきものなのに、王がその美ぼうに目をつけ、彼女を助命する目的でこの試合を考えたものだった。元来人殺しが得意の上に、必ず勝つようにとピストルが与えられた。日本女性がどのような業をもっているか知らぬが、まず勝負は問題ないと思われていた。

クローは自分の陣へ銀の盆をおいた。これに相手の首をのせて、王に献じょうというのだ。お富士が薙刀をかまえる。クローがそれに対しピストルの狙いをつける。

〃ダーン〃銃声と共にお富士は右の股をかすられて、よろよろとよろめいた。〃これが短筒という武器かしら〃内心こう思った時、二発目が発射された。不意をつかれてこらえきれずどっと尻もちをついてしまった。なぶり殺しにするつもりなのか、お富士はきっと唇をかみしめたが、残念にも薙刀をふるうには少し距離が遠すぎた。

〃さあ、お次ぎはどこが良い？　おなかでもどこでも好きなところを射ってあげるわ。だけどあと五発までは殺さないから、そのつもりでね、最後の弾で心臓を射って、それからきれいな首をいただくわ〃

クローは美しい顔に惨忍な微笑を浮べながら近ずいてきた。じっと距離を目ではかっていたお富士は、地上からはねおきるや、必死の力をこめて薙刀を下から上にはねあげた。これが薙刀の最も有効な使い方である。鮮かにきまった。油断していたクローはこの一撃を喰って、股の間から下腹部を臍のあたりまでザックリと断ち割られてしまった。おびただしい血しぶきと共に〃ウアア……〃断末魔の悲鳴がひびきわたる。どっと倒れるところを横なぐりの第二撃が走り、クローの首は高々と刎ねあがった。お富士がその首を奪いとる。驚きのため大きく目をみひらき、口もぽっとあいて自分のうかつさにあきれかえっているような表情だった。

こうして優勝確実とみられたクローは飛び入りの日本女性お富士のため、一回戦の第一試合で早くも敗れ去ってしまった。自分が用意した銀の盆に自分の生首がのせられるなど考えもしなかったろう、王はこばれてきた生首をみてきわめて不気嫌だった。

〃このバカものめ〃

はきすてるようにいうと、生首をけとばした。コロコロところがっていったのを愛妾がつかんで、ぽんとごみ箱に投げすてた。

3

第二試合はジャクリーヌとデボラとの試合だったが、二人とも相手を殺してまで助かろうとしなかった。お互に自分の首をとってくれといい合っている。立腹した王は二人に惨刑を宣告し、刑吏がばらばらと走りよる。デボラは早くもこれを察し〝若いジャクリーヌに苦しみを与えまいと、手にした短刀をそのかわいらしい頸根にズブリとつき立てた。一瞬〝あっ〟と叫びかけたジャクリーヌは感謝のまなざしをデボラになげかけ、手足をちょっとふるわせただけでこときれた。デボラがキリスト教徒でなかったら直ちに自殺したろうが、おきてに忠実な彼女は短刀を投げすて目をつぶった。刑吏がその手をねじあげて王の前にひきすえる。

デボラは勿論助かるとは思っていない、しかし逆さハリツケの判決を聞いた時はさすがに蒼ざめた。大の字を逆さにした形で十字架につけられる。ほかの女囚も皆が立合わせられ二度とこのようなことをしたら、もっとひどい目にあうとおどかされる。

最初の槍は右の脇腹から股のつけ根にかけて貫いた。かたく歯を喰いしばっても苦悶の声がもれてしまう、次いで左からもズブリと突き刺さる。普通のハリツケなら脇腹から肩まで胸を突き破るので二本目で殆とが死ぬ。かき槍も喉を裂くのであるがデボラの場合は止めははぶかれた。血潮は下腹から乳房の間をつたわって、喉から顔へ流れおち髪の毛から地上へとしたたりおちる。

デボラの首が王の前にはこばれてきたのはかなりのちであった。生きている限りは首はとらぬ規則だから、その時まで苦しんでいたわけである。しかしこの生首にはむしろ満足のほほえみが浮んでいた。ジャクリーヌの首と共に獄門台に並べて晒された。

4

さて試合再開である。ピアが槍を、エレオノラが斧をもっての対戦だったが、勝負は極めてあっけなかった。エレノラは相手と戦う気がなかったのだ。しかしそれでは惨殺されるし、ピアにも災を及ぼすので一応戦うまねをした。それにしても斧はかよわい女性には重すぎて、ふりあげるだけがせいいっぱい、やっと打ちおろす。ピアは勿論身体を軽くかわし槍をかまえる。エレオノラは首をあげた喉を突いてくれという意味だが若いピアには通じなかった。夢中で突っかける槍はエレオノラの美しい下腹につき刺さり、彼女はうめき声と共に前にくずれおちた。ピアはその身体を足でけとばしてあおむけにすると、ふたつの乳房の間をつき通す。唇がむずむずとうごいたのは、恐らく〝早く殺してね〟とでもいったのだろうか。ピアはまだ気がつかず三度目でやっと喉を刺しとめた。

エレオノラはもう動かない、ピアはその手から斧を奪いとると、におうが如き美しい首すじを狙って一撃、見事に首をたたきをおとすと王に見えるように高くかかげながら勝名のりをあげた。

5

第四試合、弓をもったステーニに対し短刀のミレーヌは、このままでは不利とみてすばやくとびこもうとした。これを許したら自分の敗になるのでステーニは、いそいで弓をひきしぼり〝ひょう〟と放つ。ろくろく狙いもしないのになんと腹のくぼみに命中した。〝うっ〟とうめいて前にのめり、左手で傷口をおさえたが、その指のすきまから鮮血が噴きでてくる。なんといっても飛道具には敵わないうらめしそうにみつめるだけ。

〝どお、うまいもんでしょう、わたしの勝のようね〟

ステーニは口でこういったが、クローの不覚の敗戦を見ているだけに慎重に第二の矢をつがい、左の乳房に狙いつけた。

だがその時ミレーヌは最後の気力をふりしぼり、短刀を握り直すとさっと投げつけた。自分が射つことだけに気をとられていたステーニは、これをかわす体勢にはなかった。〝しまった〟と思った時にはグサリと白く柔かい喉を深々と突き刺されていた。

ステーニは殆ど同時に放った自分の矢が、ミレーヌの心臓部に命中し彼女を完全に倒したのをみて、何かいいたげに唇をひくひくふるわせたが、もはやそれは声にも悲鳴にもならず、どっと地上にくずれおち激しく四肢をふるわせていたが、強く咳こんだと思うと〝ゴボッ〟と口から鮮血を吐いて目を閉じた。

審判は二人の傍によりいずれも絶命したのを確かめると、短刀でもって彼女たちの首をザクザクとかきおとし、両手に高々とぶら下げて引分けを宣した。

6

小百合は主人であるお富士が快勝したので大いに喜び、自分もなんとかして勝とうと決心した。しかも弓を与えられ〝これなら…〟とほほえんだ。彼女はまだ十七才だが弓なら少々たしなんだことがある。しかし相手のシルビアは問題のピストルだった。

小百合はこのままでは不利だと知って、距離は遠いと思いながらも運を天にまかせ第一矢を放った。神が味方したのかこの矢はシルビアの右の乳房にブッツリと突き刺さる。これをみるお富士と幸代の顔がほころびた。だがシルビアは事の意外に恐怖の目をひらきながらも、苦痛をこらえて引金をひく。これまたほっと一息ついていた小百合の右の乳房に真赤な花を咲かせた。

〝くやしい、せっかく機先を制したのに、負けてなるものか〟

小百合はこのすさまじい打撃に耐え、なかば意識を失いながらも第二の矢を放つ。あたりがぼんやりとかすんできた彼女の目に、これがシルビアの喉にきれいに立ったのが見えた。その身体がぐるりと一回転すると、しずかに地上にくずれおちてゆく。

シルビアはピストルを持ちながら敗れてしまった。彼女の意識は地上に横たわるまでに完全に消えてしまい、このためピストルが地上におちたとたん二発目が発射されたのを、永久に知ることができなかった。

小百合は両脚をふんばったまま、まだ立っていたが、今度は左の乳房にもはぜちる様な打撃をうけ、大地がぐらりとゆらいだと思うと横たわっている自分を発見した。不思議なことに苦痛も恐怖も全く感じなかった。やがて審判が血の滴る生首をひとつぶら下げたまま近ずいてきて、短刀を頸すじに押しあてているのもすべて夢のようであった。ぼんやりと〝首をとられるのかしら〟と考える。

小百合は自分の首すじ深くなにものかが入りこみ、反対に生温いものが去っていくのを感じた、それと同時にすべての力も意識も遠くかなたへと消えていった。

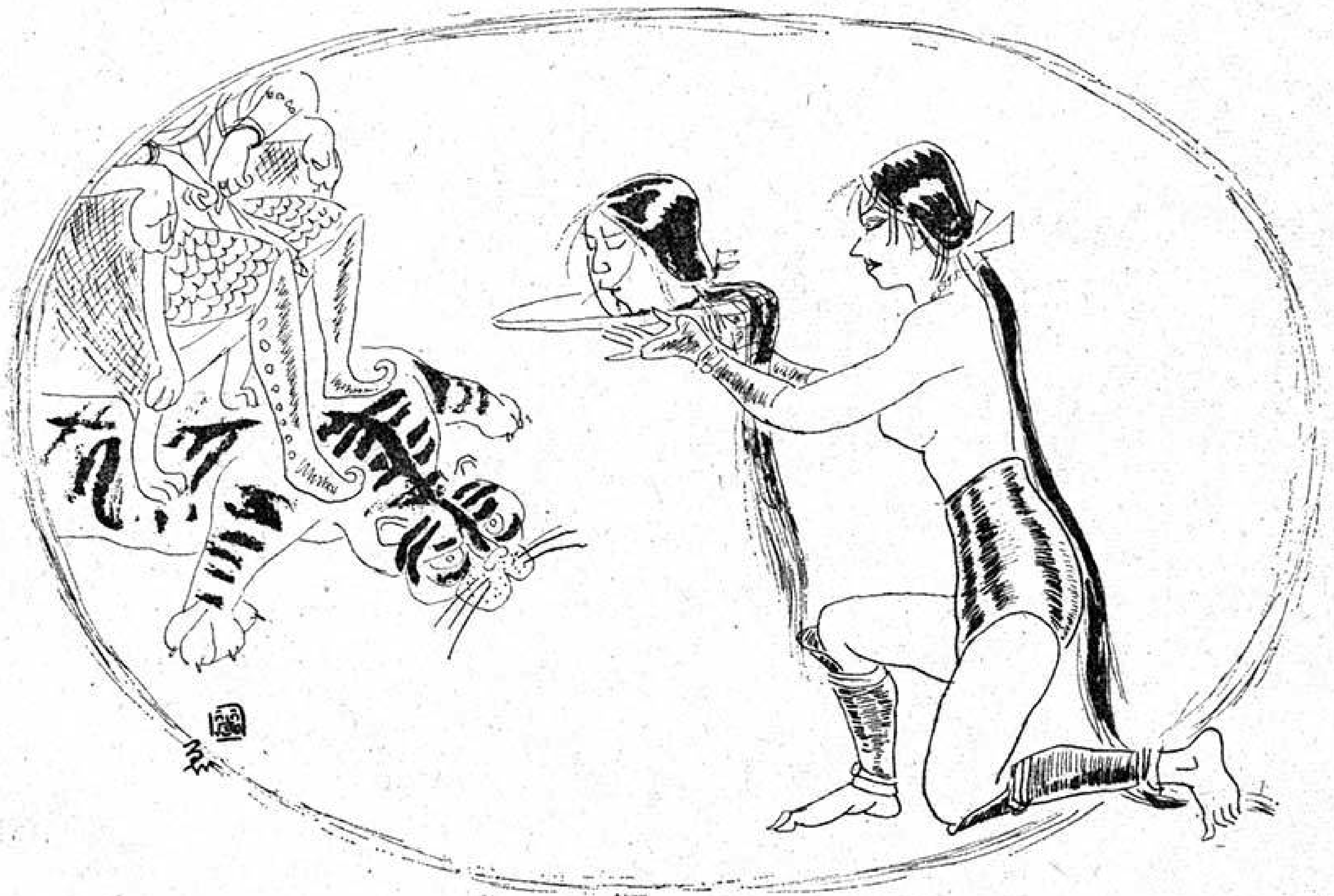
小百合の首がまだ生きているうちにとられたのは、審判のこの少女に対するせめてものはなむけだった。

7

フランソアーズは斧を手渡され早くもあきらめてしまった。鎖り鎌を手にしたキムが一歩一歩近ずいてくる。その鎌の刃はキラキラと輝きいかにもよく斬れそうだった。もしここでキムが鎌の方を使うのだったら、フランソァーズは、いさぎよく首をさしのべて〝刈り〟とらせてやったろう。

だがキムとしては油断できない、うっかり近ずいて一撃喰ったら大変だ。十分に距離をおいて右手の分銅をぐるぐるとまわし、フランソアーズの額めがけて投げつけた。女性でなくとも顔を砕かれるなど有難くない、フラソアーズは斧を両手で握ったまま思わず一歩下った。いかなる偶然か、分銅と鎖はその斧の柄、両手の握ったまん中にぐるぐるとまきついた。

フランソアーズは別にどういう気もなくちょっとひっぱった。ただこれだけだったが、上体が前に傾いていたキムはそのままばったりとたおれた。フランソアーズは殆ど無意識に斧をふりあげると、キムの真正面からふりおろした。力はあまり加っていなかったが斧の重さだけで十分だった。ブロンドの髪をもったキムの首は額から鼻柱のあたりまで、薪でも割るように裂かれてしまった。あっという間のことで悲鳴をあげる暇もない。フランソアーズの無心の勝利だった。



第七試合は短刀のアンと槍のデナールの対戦だった。現在までのところ武器の有利は必ずしも勝利に結びついていない。デナールはじっと槍をかまえアンの出方をうかがった。槍はすぐ手元にとびこまれたら、どうにもならない。アンは勿論その機会をねらっている。

デナールはかなりのおてんばで有名だった。にらみ合いなど好きな性分ではない、面倒になったのか槍をふりあげると、横ざまになぐりつけた。アンはまさかこんな無茶やるとは思っていなかったので、胴体をいやという程たたかれその場にころがった。

デナールにとっては絶好のチャンス、〝えいっ〟とばかりもちなおした槍をくりだす。アンは地上をころがってかわそうとしたが及ばず、肩先をグサリと刺し貫かれた。激痛が全身をつらぬき思わず悲鳴をあげるところ、今度はブスリと下腹を刺さ

れる。〃腹の傷は必ず死ぬ、もうだめだ〃あきらめかけたところへデナールが近ずく。〃さあ、往生ぎわは良くするものよ。あきらめなさい、そんなに苦しめないから〃

槍の穂先はアンの左の乳房につけられた。ここで一度手もとに引いて、そのまま突きだせば万事が終了する。

この時アンはミレーヌとステーニの試合を思いだした。〃そうだ、まだあきらめるのは早い〃手にした短刀をさっと放る。辛くもこれをかわしたデナールにアンは最後の気力をふるってとびかかった。ちょうど泉水の傍である、二人は組みあったままその中にザンブリとおちこんだ。アンの方が上になったが重傷をうけており長びいてはデナールの優勢は明らか、せめて相手を道ずれにしょうというアンの執念だった。尚も全力をあげデナールの首を水の中におさえつけている。

デナールも、必死の力ではねかえそうとするのだがだめ、それでも一瞬だけ顔が水面にでた。栗色の髪から水が滴っている。だが再びおさえこまれ、間もなくデナールの全身に激しいけいれんがおき、水中にあるその顔に死の徴があらわれる。だがアンの目にはそれがぼんやりとかすみ、間もなくすべてがまっくらになってしまった。

水中から引き上げられた二つの死体、アンは型の如く首を刎ねられた。デナールの方は外傷は全くなかったので、そっくりそのまま晒しにだされた。

9

一回戦最後の試合は、幸代対ナタリーヌである。幸代はことし二十才、四年前からお富士に仕えている。そのお富士は勝ったが同僚の小百合は惜しくも相討ちとなって、花のつぼみを散らせてしまった。王の前におかれている生首にチラリと悲しそうな目を走らせてからいざ短刀を逆手に試合にのぞんだ。

一方のナタリーヌはクロー同様本物の死刑囚で、十九才というのに五人も殺したその道のベテラン。やはり王に目をかけられクローが死んだ以上彼女を助けようと、まだ四発のこっているピストルが与えられた。

薙刀で勝ち、弓で引分というのがピストルに対する日本勢の成績である。それに対し短刀だけではあまりにも分が悪い。しかし幸代はすこしもわるびれず、いさぎよく死のうとしていた。

幸代はまっしぐらに突っかけた、これに対しナタリーヌは真正面から一発あびせた。だが幸代は倒れない。激しい勢で斬りつける。一歩の差でこれをかわしたナタリーヌは自分の射撃の命中に自信をもちながらも、恐怖におそれて逃げだした。幸代が後を追う、その右の乳房が紅に染まっているのに。王をはじめ見物人には信じられぬ光景だった。

とうとう幸代はナタリーヌに追いつき組打ちとなった。二十才と十九才の若い肉体がからみあう。ナタリーヌの身体も紅にいろどられてきた。ここではじめてナタリーヌは確実な命中を知ったのだが、いまさらおそかった。〃もう一発、なぜ射たなかったのだろう。完全に勝てたのに〃いまは手をおさえられていて射つこともできず、反対に幸代の刀が迫っている。夢中でもがいているうちに引金に指がふれた。〃しめた〃とばかり引金をひく。

〃ウウーム〃と、悲鳴をあげたのは幸代ではなかった。不覚にもナタリーヌは銃口が自分の方を向いていたのに気がつかなかったのだ、弾は肋骨の分かれ目から斜め下方に射ちこまれた。思わぬ幸運にこおどりした幸代は短刀逆手に喉や胸をグサリ、グサリと突き刺す。

〃うわあっ、たすけてー、うーむ……〃ナタリーヌの悲鳴は次第次第にかすかになっていった。幸代はその髪の毛をつかんでもちあげると右手の短刀を走らせる。どっと噴きだす血汐のなか、ナタリーヌの首は胴をはなれた。髪の毛をつかんだまま高々とかかげ、声高らかに勝名のりをあげる幸代の勇姿。

こうして一回戦は終了した。実際に戦ったのは七試合で相討ちが三組もあったので、生き残りは四人になり、たちまち準決勝となった。国王の前には敗れ去った女性たちの生首が銀盆にのせられ並んでいる。

10

準決勝第一試合はお富士とピアであった。お富士は前と同じく薙刀をもちピアは短刀で立ち向った。両脚共に傷ついて動くことの不自由なお富士のまわりを、ピアは短刀をかまえたままぐるぐるとまわった。何とかして背後にまわることができれば、すかさずとびかかってお富士の美しい首をかきおとすのは簡単だ。しかしお富士も苦痛をこらえながら薙刀のかまえをくずさず、これに対し位置をかえつづけどうしても後にまわらせなかった。いくらお富士でも首を斬られるのは有難い話ではない、このままではいつ果てるとも知らなかった。

突然、ピアは今まで右まわりにまわっていたのを、さっと左まわりに変えて走った。お富士の傷つける身体は、この急激な変化に応じきれない。すかさず背後よりとびかかるピア。あわれお富士の首がころがったかに見えたが……

〃ギャアッ〃ものすごい悲鳴と共におびただしい血汐がとび散る。その血煙りが消えたあとをよく見れば、お富士は両膝をつき血ぬられた薙刀をもったままである。一方のピアは鮮かに胴体から両断されている。お富士は勝負をこの一撃にかけて、後に身体を投げだすようにふりまわした薙刀が、きれいにピアの腹部に喰いこんだのだ。

ピア胸をひろげた形で横たわっていた。にっこりほほえんだお富士は薙刀をもちかえ、その首すじに第二撃を加える。一回戦のクロードとの試合を再現するように、ピアの首は弧を画いて十数メートルもすっとび、国王の座のすぐ近くまで血を噴きながらコロコロところがっていった。日本女性の鮮かなお手並というところだった。

11

第二試合は大刀をもつフランソアーズに対し、幸代は鎖り鎌を与えられた。話には聞いていたが始めて手にしたこの武器で、生命を賭けた戦をするのだ。しかも右胸に傷をうけている。弾丸は骨にも主要血管にも当らなかったが、動くたびに出血が苦痛と共に続いていた。しかもフランソアーズは一回戦で鎖り鎌を破っているのだ。

フランソアーズは真二つになれとばかり真向うから斬りこんできた。幸代はこれを肩先にうけ〃ぱっ〃と血しぶきを散らしたが、これに屈せず右手の分銅を投げつける。見事膝に命中しがくりよろめくところ第二投は顔をめざす。フランソアーズは大刀で払いのけようとしたが、分銅につづく細い鎖が刃にまきついてしまった。ちょうど一回戦と同じようになった。幸代は両足をふんばって前に引きたおされるのを防ぎ、二人でけんめいに引っぱりあう。幸代の力がまさったのかフランソアーズはじりじりとひっぱっていかれた。鋭い刃をもった鎌が強く目にとびこむ。〃このままではあれで首をとられる〃ふと恐怖がせまってきて思わず手を放す。はずみを喰って

幸代は大きくのぞけった。

間ここでフランソアーズにもひとつ、短刀でも武器があったら、ここにつけこんで幸代の首級をあげたろうが、大刀ははるかかなたにふっとんでしまい次の一撃を加えることがでぎない。しかも幸代は分銅は失ったが鎌がまだ残っている。〝しまった。やられる、だがどうすればよかったのだろう〟呆然と立ちすくむフランソアーズの後に幸代はすばやくまわりこみ、右手に持ちかえた鎌をその喉にあてがった。

〝あきらめなさい。わたしの勝よ〟

言葉と共にぐいと引く。〝どっ〟と血しぶきは二メートルも噴きだし、その霧のなかフランソアーズの首は簡単にころがりおちた。文字通り〝刈り〟とられたのだ。



12

こうして決勝には日本女性二人が残った。重傷の幸代はお富士に対し自分の首をとってくれと申しでたが、もとよりお富士が承知するわけはない。しかも王が自分達を決して許さないことを知っていた。

お富士の予想通り、クローとナタリーヌを討たれた王のうらみは強く、助命どころか王は近くにはべる愛妾たちに対し、二人を討って首級を持参したものには恩賞を与えると命じた。たちまち十数人がとんでに武器をとって二人をとりまいた。

〝いいわ、こうなったら、あの世にせめて一人でも多くつれて行きましょう〟

お富士は幸代をふりかえるとこういってにっこり笑ろ、さらにつけ加える。

〝幸代、長い間つくしてくれてあり

がとう、お礼をいうわ〃

〃お富士さま、おわかれいたします〃

幸代はこう答えると大刀をつかんで敢然と数人のなかに斬りこんでいった。

幸代の奮戦はめざましく、まず先頭の一人の肩から乳房あたりまで割りつけると、二人目にはまっしぐらにつっかけた。白刃は胸もとに柄までつき通り、声もたてずのぞけっていく。だがあまりにも深く入りすぎたのか再び引きぬくことはできなかった。

幸代はいきなり近くの短刀をもつ敵にとびかかり組みしいた。敵がこれだけだったら彼女は短刀を奪いとって相手の首をあげたろうが、槍をもった敵が、その背後から二人の身体をグサッと芋刺しにした。即ち幸代の背から腹へ、そして相手の女の腹から背へ、更に地面へと完全に刺しとめた。

〃うーん、ざんねんだわ〃

〃キャア、たすけて、ひどいわ〃

悲鳴と共に八本の手足がバタバタと激しくふるえた。ちょうどピン止めされた昆虫のように。

お富士は忠実だった侍女の最期をみとどけた。もはや自分に出来ることは苦しみを止めてやることだけだ。すばやく判断したお富士は敵をかきわけて近ずくと薙刀をさっとふる。血しぶきをあげて二人の首はいかにも仲が良いように、ぴったりとくっついたままころがっていった。

お富士はできたらその首を抱きしめてやりたかったが、早くも敵の手に奪われ、ボールの様に手から手へと投げ渡され、なぶりものになっているのを見なくてはならなかった。

13

お富士はただ一人となったが尚も戦い続けた。両脚を薙がれてどっと倒れるもの、首を刎ねられてあたりいちめんに紅血を散らし、胴体だけが朽木の如くころがるもの、とうてい手におえぬとみた愛妾たちは遠くはなれてピストルと矢を放った。それにも屈せずお富士は阿修羅の如くあばれまわり、更に三人まで斬り倒した。その中には幸代の死体を切り刻もうとしていたもの含まれていた。

絶世の美女は今、血の海の中を右に左にと飛びまわっている。その肉体には更に二発の弾丸が喰いこみ、背と腹に三本の矢がつき刺っている。大の男でもすでに地に倒れ伏してもがきすら止めていたろう。お富士の全身はことごとく紅に染まり、もう目も見えず耳も聞えなくなっていた。

愛妾の一人が、今こそとばかり近づいてきた。この女こそ王の随一の寵をうけており、今までも何度か死刑に立ち合って女囚の首を一刀刎ねたこともある。ここでお富士の首を一刀のもとに打ち落して恩賞にあずかろうというのである。

非情の刃がお富士の首すじへ……と見えた一瞬、死せるかに見えたお富士の薙刀が大きく弧を画いて、すさまじい勢でふりおろされた。〃ギャア！〃とこの世のものとは思えぬ悲鳴があがり、見るものすべてが呆然と立ちすくんだ。肩口から肋骨すべてを両断し、更に下腹部から股のづけねに至るまできれいに唐竹割になったのだ。おびただしい血汐をとび散らせて、この王一番の愛妾の身体は左半身、右半身がバラリとわかれた。

だがこれがお富士の身体にのこる力のすべてであった。そのまま再び薙刀をあげる力もなく静かに前にくずれおちた。生き残った愛妾たちがおそる近ずいていく。一人が鎖り鎌の分銅で背中を砕く。槍でもってあおむけにひっくりかえしたが、もうピクとも動かない。更に念をいれ、両の乳房に何本かの矢を射ちこんだ。もういいだろうと止めを刺しに

近よった一人は、お富士の身体がぶるんとふるえたのであわてて逃げ帰った。五本の矢が扇を開くようにまわりにひらく、だがこれは絶命後の筋肉の収縮によるものだった。
　遂に一人が後にまわり、斧をふりあげて白く柔かく、かつ美くしい頸根に打ちおろす、ピックリと九分通りまで断ち切られ、残る一枚の皮を短刀でひとえぐり、お富士の首はこうして胴をはなれた。
　愛妾たちは地上にころがったお富士の首を見てほっとため息をついた。重傷のことゆえ簡単に討ち取れると思ったのに、仲間は逆に九人も倒され残る六人も大なり小なり傷ついている。やっと気をとり直し、槍の先に首級を突き刺し、高々とかかげて勝名のりをあげる。だがこの時すでに王の姿はなかった。一番の愛妾に加え目をつけていたクロー、ナタリーヌまで失ったのだ。しかも残りの女たちも満足な身体のものはいない、極めて不気嫌なのも無理ないだろう。
　生き残り六人に対する恩賞は数十本の矢であった、哀れ不用品とみなされたのだ。算を乱して倒れる女体、首なし死体の山が更に高さを増した。
　彼女たちの生首は獄門に梟けられ晒しものとなった。死刑囚も愛妾もすべて同一の待遇だったが、その中でお富士のそれは左右に幸代と小百合の首を従え、一段高いところにかかげられていた。

私の告白の断章

＜当なき散策＞

天泥盛英



マゾヒズムの血は、毎日の様に、私に不満と焦燥とを累積してゆきました。そうしたわけで、当然、私のマゾヒズムは変化の願望をも併合症状として持つ様になってきたのでした。私は、毎日、暇を作っては本屋を漁ったのです。古雑誌の山を見付けると、私は血の沸る思いで、一頁一頁に、私の望む写真や挿絵が出てはいまいかと思って探すのでした。

案外、外国の諸雑誌には、そういった写真や挿絵が多く見つかりました。殊に、一九三四年頃の演劇雑誌の中には、男に跨った女性や、女調教師などの写真が多く見つけることができました。パリ・プレジイルとかラ・ヴィウ・パリジェンヌとかいう仏蘭西の艶笑雑誌の中には、例えば"CIRQVE D'AMOUR"という様な特集があって、男を馬にして馴らす強い女性についての、小説や短文がありました。

幸い私は数カ国語に多少でもなじんでいましたので、独、墺、伊、英、米、仏、等の全ゆる種類の雑誌古本はすべて、私の探索の対象でした。私は一頁でも、一片でも、女馬に関する挿絵の有る雑誌等は、悉く買集めたのです。そうして、それを順序よく、スクラップに貼付けました。私はそれに一連の番号を付して、その冊数は早くも数十冊に及びました。併し、蒐集は私の想像の世界を色づけ、複雑な構造に作り上げてゆくばかりでした。私の心の中では、ドミナの出現を願う気持が益々嵩まってゆきつつあったのです。

私は、数年前から、都内の幾つかの娼婦街を知っていました。その娼婦街の取締り達とも一寸した関係で、顔なじみになっていました。考え抜いた挙句、私は遂に、フラリと娼婦街へ足をふみ入れる様になりました。勿論私の目的はドミナの発見で、遊ぶのが目的で

はないのですが、当然、遊んでみなければ判らないわけですから、時に遊びもしました。併し、一般に娼婦程、正常な性行為をする女性は居ないといってよい位、彼女達は外観に相違して、単純な四十八手の連続を要求するのでした。

そうした娼婦街の探索行に於て、私は自分の求めるのとは全く逆の女性にばかり、喰付かれる騒ぎでした。しかし、私は断念しませんでした。靴の先で男を差図する女、そうして、言葉でなく、一本の鞭によって意志を表現する女、私は「ギルダ」の中でのリタ・ヘイワースの様な女を求めたのでした。そういう女が居ないわけはない。私は、勝手に信念を形作り、その考えを、必然的なものと考えて、古書漁りと、女性の探訪に憂身をやつしたのでした。

私がこれからお話しようと思う女性に逢ったのは、私がこういう生活を始めてから、約三カ月も経ってからの、或る雨の降る日でした。私は、一人のヴァンプタイプの若いスラリとした女性に、もしやと思って、声をかけて、二時間程遊び、例によって、失望の苦い味を嚙みしめて、タクシーを拾おうと、表通りに出かかったのでした。

「一寸ー、寄っていらっしゃいませんー」

おきまりの黄色い呼び声の中で、一つ、何となく私を振返らせる様な声の持主が居ました。私はハッとして、振返ってみました。皆さんは、キャスリン・ヘップバーンという女優を御承知だと思います。丁度、その女は、ヘップバーンと共通の、何か特有の体臭をあたりに漂している女でした。私は、何となく足を戻して、その女に誘れたまま登楼したのです。私の第六感は見事に当りました。例の通りの時間を過した後で、彼女はこういったのです。

〝あんたは、一体なに！、馬みたい。私が少し、責めてあげるから、もう一度寝なさい。本当に馬みたい。あんた、女に苛められるの嫌い？、あたしは男を虐めるのがとても好きなのよ。嫌ならいいわ。その代り、今度からは、よその店へ行ってね。だけど、もし、あんたが、私に苛められたいのなら、今日からでも苛めてあげよう。その代り、あたしの仕込み方は、一寸ばかり、厳しいから、その心算でね〟

彼女は、いいかげん、酔っていたのでしょう。一気にこういうとじっと私の顔をみつめるのです。私は背中に冷たいものが走るのを感じました。

〝僕は、君の馬になりたいんだ。馬にしてくれるかい。他のものじゃ嫌だ。縛る事なんかに、若し、君が興味を持っているのなら、僕は折角だけど、帰る〟

彼女は高らかに声を上げて笑いました。

〝そう、馬になりたいのね。よし、馬にしてあげよう。けれど、馬に乗るのにはズボンが要る。長靴も要る。鞍も、手綱も、轡も、それから靴のかかとにつけるギザギザも全部揃えなければ乗れないわよ。どうするの。じゃあ、明日、一時に新橋の駅へ来なさい。あたしと一緒に買いにゆこう〟

翌日、私達はいろんな店で競馬用の小さな鞍、彼女の穿く乗馬用のズボンと長靴、それと轡は馬のでは大きすぎるので、犬の首輪につける環と革紐を二つ買って、かみ合せて使う事にしました。それから、拍車、――つまり彼女のいうギザギザ、――と鞭、も買いました。彼女は買うとすぐそれを身につけるので最後には、ちゃんと、乗馬服を着て、手に鞭を持って、鞍を抱えて、私と一緒に歩いたわけです。

〝さあ、あたしのいつも行くホテルに行きましょう。あそこなら音も聞えないし、フフフ

きっと、暴れるよ。あたしの馬は。生半可な調教はしないから、覚悟しておいで〃
　私達は、とにかく、彼女の行きつけと称するホテルに行きましたが、余り、顔なじみの様でもありませんでした。乗馬服の女と男、一寸妙な取合せですから女中も変な顔をしていましたが、破れかぶれの私達は、平気で、一番奥の洋室へ通りました。女中が出て行くと、厳然と、彼女は言いました。
〃この部屋から出るまで、あんたは正直正銘の「馬」なんだ。忘れない様にね。さあお脱ぎ、馬は洋服なんて着ていないわよ。早くしなさい。この轡を嚙ませてあげる。コラッ。もう鞭が要るのかい?、口をあけて、そう、嚙んでごらん。次は鞍よ〃
　私の腹に太い腹帯がまわされて、小さな、上品な鞍が背にのせられました。彼女は苦しい位、強く腹帯をしめるのです。勿論、手綱は轡についていて、ベッドの脚にしっかりと結んであります。
〃これでよし。そうね。ギザギザをつけなくちゃ、一寸可哀想だな。けれど、馴らすのにはそれが一番いいのよ〃
　彼女は真新しい拍車を長靴につけるのでした。拍車をつけ、鞭を片手にして立ち上った彼女は、正に勇姿という言葉が、一番適当かと思われる程、キリッとしていました。真黒な首の高いセーター灰色の乗馬ズボンは腰の線はキリッとしまり、ももの処のふくらみは彼女好みの派手にひろがったものでしたし、一寸軟かい真黒な長靴はピッチリと美しい脚を武装していました。右手に持った鞭に素振りをくれ乍ら、
〃倆って、倆って、二本脚の馬なんてどこにいるの。これからは物も言っちゃいけない。判った?、お前はまだ調教してない馬なんだから、私を乗せるの、そこから始めて、後は私が鞭と拍車で教えて上げる〃
　ゆっくりと彼女は私の手綱をほどき、跨ろうとします。私は思いきり暴れました。しかし、すぐ、彼女はヒラリと飛乗っしまいました。揺れる背中の上で、彼女は最初の拍車をボカンと入れました。その痛さの激しい事と

責めのレイアウト

遠藤百合子

　責めにつかれたわたし、プレイがしたいの一念で昼はBG、夜はホステス。
　お酒飲みの男の相手をして、いろいろ嫌な想い出や気苦労、でも、とうとうアパートの一室を借りました。婦人専用アパートのささやかな一室を。
　阿倍野橋から西へ歩いて十分、旭町二丁目八番地、ごたごたとした屋並みの続いている一劃。わたしの処刑の部屋、囚女の牢屋。窓を開けると向いの家の窓と真正面になるので、いつも厚いカーテンで掩われている牢獄のような薄暗い部屋。
　わたしは外に出る毎に、色々な責具を求めて帰ります。しかし責具といっても、犬の首輪、くさり、皮バンド、といったものです。それは足枷、手枷となって、わたしの肌に喰い込みます。
　六帖の洋間につづいた浴室は、皮バンドで動けない位、足の先から太股まで縛ったわたしの下肢を濡らして、ぐっと締めつけるのに役立ちます。いつひねってもお湯が出るので、わたしのプレイに便利です。

部屋に不似合いな程の三面鏡も、わたし独りのプレイには大いに役立ちます。一人二役、いやときには一人三役。鏡の前に土下座して自縛する高手小手。でも、何にか物足りない気持。口をすっぽりと掩った猿ぐつわの自分の顔が、鏡にうつったとき、そこには、わたしから抜けだした自分がうっとりと、さびしげに見出せます。

わたしは鼻責めも大好き、奇クのモデルの方の鼻責めフオトの切抜きをアルバムに残しています。古田さんでしたか、鼻輪の簡単なつけ方、いっしようけんめい、輪をこしらえて先は尖らして。でも、試しに針で鼻の障子にそっと刺してみました。とても駄目でした。厚くて通りません。

結局、わたしの考案したのは、丸く合した太い洋服かけの掛金を外して、丸く曲げその合した所で線をまきつけて、とれないようにきつく糸でしばり、鼻の障子に力をいれて開いて挾みますと、カツチリ、そのわりに痛まず、鏡でみても針金で通されたようにうつります。

それを細い犬のくさりで吊り上げると、鼻はグツと伸びて中がのぞけます。上に引くと口を開けなければ駄目で、それを更に上に引くと、息も出来ないくらいで唾をのみ込むとゴクンと一苦労する位で、鏡にうつった顔は、目と鼻の穴がひきつって、まるで豚そっくりです。

わたしは、これを豚責めと名づけて楽しいプレイとして愛用しています。誰か、わたしの自由を奪って豚責めにせよと命令して、高手小手にして鼻輪をつけさせ、天井に滑車を通して引き上げられる。ああ、想像しただけでも、胸がわくわくします。

次の夜は、腹部を二巻き、ぎゆうぎゆうと締めつけますと、二筋の縄がお腹の中に埋ってしまうほど、きつくなります。わたしは、これをヒヨウタン責めと名づけています。

わたしはカメラも持っていないし写真なんて自分でとったことはないので、専ら愛用の三面鏡にうつして鑑賞しています。どなたか、S男性の方に、お腹が二つにくびれるほど締めつけられたら、どんなだろうかと想像します。

鏡の中の百合子は、たった一人の見物人のわたしに、いつも微笑んでいます。今、わたしは深夜以外にプレイの暇がないのですが、そのうち又、カメラのレンズの前で責められ、悶えのたうちたいと痺れるような期待に胸をはずませています。

では、さようなら。

いったら、私は本能的に彼女を振り落そうとしました。暴れる馬に跨った美女は、情容赦なく、拍車で、脇腹を蹴り上げ、抉るのです。私が少しでも静まると残酷にも鞭がビュウッと音をたてて尻に当てられます。精一杯暴れるのですが、口はしっかりと轡をしばられて、呼吸が苦しく、腹は立てつづけに拍車で苛められる。お尻は、絶えまなしに鞭が当てられる。私は鞍上の美女に従順にせざるを得ませんでした。

〝そら、どうしたの。この位の事で。いくじ無し奴。あたしの若い馬はもっと元気がある筈よ〝

〝ピシリッ〝

〝この鞭は丁度手頃だわ〝

〝ピシリッ〝

〝けれどお前みたいな、なまくらな馬に鞭はいらないね〝

彼女は鞭を床にすてました。

〝拍車で沢山よ。ホラ、これでも?、あたしは伊達に長靴はいて、ギザギザをつけてんじゃないよ〝

私は脇腹を血塗れにされながらも、今迄嘗て味ったことのない恍惚境に陥ってゆくのでした。

「奇譚三十九夜」物語

＜第三十三夜＞

辻村　隆

梅田界隈の、逝く年の雑踏さに較べて、このビルのクラブの一室には、流石に狂燥的なジングルベルの音も届かず、よく効いた暖房は春の夜の様に、退屈男達の心を仄々と温めてくれます。
六三年も残り僅かな、慌ただしい冬の一夜――、人々は櫂わい多かりし一年の煤を払い落そうと、定刻には三々伍々集まりました。
忘年の宴果てて、やおら、ライカ氏は数葉の写真を人々に提示したのです。
そして……、彼の話は始まりました。

第七十五話　旅役者緊縛記

会社の監査役、Y氏の急死で、その葬儀の為、Y氏の故郷に足を運んだのは、もう秋も深まった、朝夕めっきり肌寒い候でした。
近鉄沿線の榛原駅で降り、それよりバスに乗って、約十五分、大宇陀町という山間の群落へと出掛けたのです。Y氏の故郷は、それより更に奥へ数キロの小部落ですが。バスの便はここまでで、私は大宇陀町迄バスに乗り、それよりタクシーでHという、戸数六十戸余りの、彼の旧地へと辿りつきました。
Y氏の家は旧家で、恐らく村一番の大地主でしょうか、葬儀は田舎式に、村道に沿々と続き、柩をかく親戚の列はしめやかに、お練りの様にゆるやかに、村外れの寺へ伸びて行きました。近頃珍らし

い土葬をもって、埋葬されたのです。

葬儀のあと、私は直ちに帰阪するつもりでしたのに、義理がたい村の人々に、無理矢理引止められ、精進料理を山程も皿にもって、次々と膳に運ばれ、一人一人の盃を断わり切れず受けるうち、私は強たか酩酊してしまいました。

いつしか私は控えの居間の一室で横になっていたのです。ずきずきする頭を抬げて、腕時計を見ると、七時を少し廻っていました。母屋の辺りで、葬式にふさわしくない、酔った人々の胴間声、不祝儀のやとな（雇い仲居）の三味の音が、まるで、Y氏の死を喜ぶかのように騒々しく聞えてくるのでした。

冠婚葬祭、引っくるめて、たのしみの少ない僻村の人々の、これが唯一の、集会の飲める楽しみと分っていても、私には少々腹立たしい、いまいましさがくすぶり始めました。

柱を失った家族の人々の、悲しみも考えず、無遠慮に、場所柄をわきまえず、呑み騒ぐ、田舎人の卑しい根性が、たまらなかったのです。

私はそっと辞すべく、物憂げに身支度をゆるゆると整え始めた時静かに襖が開いてY氏の末弟が這入って来ました。

「どうも騒々しくて、申しわけございません。これが土地のやり方ですので、御辛抱下さい。少しは気分よくなりましたですか――」

インテリの末弟は、苦笑して私に申しました。

「いやいや、どうもすっかり寝込んじゃって……。怱々に失礼するとしましょう」

「いえ、とんでもない。今夜はゆっくり泊って下さい。それに、もうすぐ、公民館で芝居が始まるのです。葬式と芝居――、変なとり合せとお思いでしょうが、これは死者への供養で、昨夜来、お通夜からずっとつめかけてこられた、近郊遠在の方々に、慰さめの少ない土地柄の為、明朝のお帰りまで、徒然に見て戴く為のものです。幸か不幸か、大宇陀の町に田舎の旅廻りの劇団がかかっていて、その興業主が、故人と親しかったので、その方のたっての好意で、一夕だけ、無理に来てもらったのだそうです。本当は、そっと静かにして、故人の冥福を祈りたいのですが……」

「この悲しみの時に、芝居なんて、少し常識外れだと思うんだがネ……」

私はそういわざるを得なかった。

「勿論そうありたいのです。義姉の嘆きを考えれば、私だって到底そんな気にはなれないのですが……。まあ、葬儀も盛大に、万端とどこおりなく済んだのですから、これはこれとして、郷に入れば郷に従えで、少し覗いてやって下さい。お願いします」

末弟は私の困惑を考え、それからもくどくどと、田舎の不作法を詫びて、Y氏の名刺の裏に判コを押した、仮入場券を置いてゆきました。

私が逡巡する邃まもなく、どやどやと数名の酒臭い村の世話役が入りこんで来て、尻込みする私を、皆で押出す様にして、口々に、観劇を奨め、Y氏の関係した会社の重役を観待する。それが最上の方法だと、彼等は単純に考えていたに違いなかったようです。

旅芝居が公民館に来た事を、数少ない村の人々は隅々まで知っていたのか、狭い館内は、老人、子供、を始め、村の人々で既に一杯でした。村すべてが知合いである以上、最早、名刺の仮入場券は有

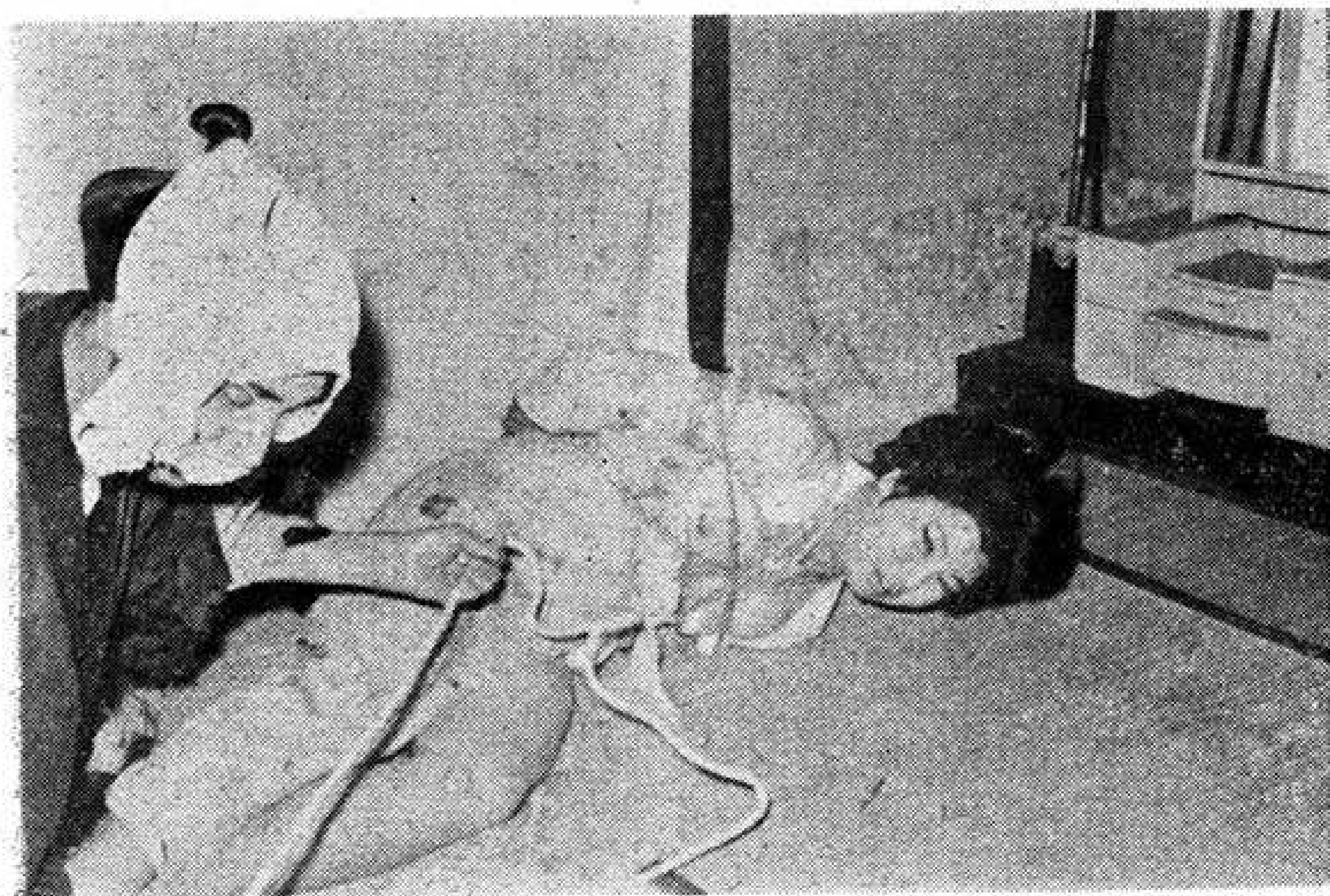
名無実で、入口では、村の世話役が、誰彼の区別なく、「さあ供養やで供養やで。ゆっくり見ていきや……」と入れ込んでいました。
世話役の口ききで、私はかりごしらえの舞台の真正面に席をとってもらい、世話焼きのおばさんが、わざわざ火鉢まで運んでくれる親切さです。
「あんさん、大阪のお人でんなあ。この尾上多三郎一座の人は、年に一ぺん、ここらへ来はりまっけど、そら泣かせはりまっせ」
聞きもしないのに、横のおばあさんは、いろいろとよく喋べってくれました。
午後八時半頃から幕が開きました。おきまりの勧善懲悪もので、仮ごしらえの舞台ながら、成程役者は一心に熱演しておりました。最初、莫迦莫迦しいと思い乍ら、見ておりました私も、それはそれなりに、いつしか、劇の佳境へ惹き込まれていったのです。
継母にいじめぬかれる孝女が、数々の虐待に堪え、遂には何とか観音の御利益によって継母は改心し、姦夫は斬られ、めでたしめでたしとなるストーリーです。
継母には一座の座主の女形、尾上多三郎が扮し、にくにくしき悪女振りを発揮して、孝女お妙を、薄い肌じゅばん一枚にして、荒縄で縛り上げるのですが、それが又大芝居にない迫真力があって、観客に見えるように、荒縄で後手に強く縛り上げるところなどは、到底大劇場では見難いものでした。
姦夫になる男と二人掛りで、お妙を柱に縛りつけ姦夫は刀の鞘で打倒し、継母は長ぎせるでお妙の胸をこじ上げ、頬を打つのですが思わず悲鳴にハッとする程の力がこもっていて、私は、いつしか、葬式の夜であることも忘れ、このうそ寒い公民館での旅の芝居に心を奪われておりました。
それと、柱に縛りつけたお妙の眼前で、姦夫と継母が演ずる濡れ場は、極度に度ぎついもので、女形が演じているだけに、女を出そうとして殊更に生々しく、それが反って男女の役者が演じるより以上に、逆効果となって、激しい色模様を展開していたのです。役者等にとっても、草深い田舎でもあるし、一夜限りという気もあって官憲の眼もないので羽目を多少外していたのかも知れません。
人々の舞台を見る眼がうるみ、その眼が時々、舞台の横手のある一点に集るのです、不審に思って私はおばあさんに聞きかけた時、
「どうや見てみ――、駐在さんも喜んで見てはるで。やっぱり人間やさかいになあ……」
人々の眼が時々当るのは、村にたった一つあるきりの駐在所のお巡りさん夫婦をみていたのです。
後者と共に、泣いたり、わわめいたり、見物は等しく、何とか霊現記というその芝居に、この私をも含めて解け込んでおりました。
お妙になる女優は、殆んど劇の大半を縛られて過していました。
奥の居間に継母としけ込んだ姦夫が、暗闇から現われ、ぐったりと柱に縛られている娘をも我がものにせんと、必死に拒む娘に猿轡をはめ、着物の裾に手が掛った時、おどろおどろしい太鼓の音と共に、観音の霊現があり、男はきりきり舞いして苦悶にのたうち、娘を縛った荒縄はパッと切れます。
霊現のお告げによって、亡父の仇が姦夫であることを知り、娘は男の刀で、姦夫を突きさして、仇を遂げ、継母も亦迷いの夢からさめ、お妙の思慕する彼氏が現われてめでたしめでたしとなるのですが、緊縛劇として見るとき、田舎臭い、妙に郷愁を覚えるこの劇は

私が大正末期頃に牛込の下宿の近くで見た、あの頃の芝居の懐かしさを思い出させてくれたのでした。武智鉄二演出の「皿屋敷」が東京で評判であっても、この昔乍らの、泥臭い、継子いじめの緊縛記も亦、近頃得難い収獲の一つのように思えました。

「ほんまに今日の葬式より、ようけ泣かしょったわ」

見物は満足そうに、山間の冷えた道を乾電池の灯をたよりに帰ってゆき、葬式に参列した遠在の人々は、再たびY氏の家に戻って、さめた酒の酔いに、もう一度ひたり直そうと、酒がくばられておりました。

公民館の灯も消えて、辺りは暗闇に蔽われ、Y氏の家のみが明るく、闇に浮かび上っていました。もう刻限は、十一時を過ぎていたでしょうか。玄関の方が騒々しく、私はしばし忘れられた存在



になりました。人々が私から離れて表にいったからです。

やがて、化粧のままの、継母の尾上多三郎を先頭に姦夫の役者と、お妙に扮した娘の三人が、恥じらい勝ちに現われました。

端役の三人許りは二三軒離れた分家の方に泊まり、主役の三人がY氏宅で、一泊することになったのでした。

可憐げに見えたお妙もすぐ眼前で見ると、丸々とした、如何にも素人臭い、素朴な感じの娘でした。

私は親しい仲間も居らぬ儘、寝所にしつらえられた、離れ家に、家人に挨拶して引退ろうとした時、末弟がかけよってきて、如何にも気の毒そうにこういったのです。

「離れでお一人で休んでいただく筈でしたが、何しろ来客で一杯して、しかも役者三人急に泊ることになりましたので、本当に恐縮ですが、役者の方を一緒に部屋で休ませて頂けませんでしょうか。何しろ、わざわざここまで芝居をしに来たあの人達を、親戚と雑魚寝もさせませんので、本当に不躾なお願いとは思いますが……構いませんでしょうか?」

「ああ、いいですとも……。私一人で話相手もなく淋しかったところです。喜んで……」

私の快諾に末弟はホッとして喜んで引き退って行きました。

この時、私に不意に不逞の想念が浮かび上ったのです。今日Y氏の葬儀を記念に撮っておこうとして、私ははしなくも、七二枚撮りのペンカメラを、合オーバーのポケットに忍ばせて来ておりました。田舎家の暗さを考慮に入れて、フラッシュも数個提げ鞄に入れておいた筈です。友人の葬儀の日、不見識にも私は、二度と巡り来ぬこのチャンスを利用して、あわよくば、旅役者を緊縛して、フラ

ッシュを焚く野望に駆られたのです。

「御免下さい。あの――とんだ厄介者ですが今夜一晩、部屋の片隅なりと拝借させて下さいませ――あのう、座長は唯今、本屋の方で皆様方にすすめられまして、お盃を頂戴しておりますので、後刻御挨拶に御伺い致しますが……」

「いやいや、堅苦しい御挨拶は抜きで結構です。わざわざY家の為に、こんな草深い田舎まで足を運んで戴き恐縮です」

私は挨拶をした姦夫役者にそういって、つつましくそのうしろに控える娘にも、

「さあさあ、どうぞ火の傍へ寄って下さい。山奥だから冷えましょう……」

そういってすすめると、娘は軽く会釈して、火鉢ににじり寄り、手をかざしました。

主家から敷石づたいに家人が来て障子を開けました。

「どうもお風呂が未だで済みません。唯今湧かしておりますから……。何しろ、一人残らずすっかり芝居を見に参りまして、風呂焚き役がいなくて……。もう少し御辛抱下さい。さあさ、お熱いのをどらぞ……」

家人は盆に銚子とつまみものをおいて立ち去りました。

「ずっと旅をなさっているんですか――」

「ええ、年がら年中旅廻りの、しがない役者稼業でして、ここを明後日打ち上げて、伊賀、神戸、松坂、鳥羽、志摩へと今年一杯廻る予定です。正月はさあ、多分岐阜かおなじみの中津川辺りでしょうか。まあ、結構面白おかしくやっておりますよ。私はこの一座に入りまして四年になりますが、これも何かの御縁でしょう。尾上多三太郎と申します。どうかよろしくお覚えおき下さいます様――」

近くで見ると白粉焼けはしているが、三十そこそこの気のよさそうな役者でした。

「私、尾上ゆかりと申します。どうぞよろしくお願いします――」

娘はかつらをつけた儘の、先刻のお妙の扮装で神妙に指をつかえました。

「失礼ですが、貴方達御夫婦じゃないんですか?」

二人は顔を見合せ、そして多三太郎が、やや自嘲気味でつぶやきました。

「籍のない夫婦見たいなもので――、何しろ、一座と旅から旅を続けまして、楽屋で雑魚寝では、夫婦らしい真似事も出来やしません。早く人並みに、二人っきりの夫婦のくらしをしたいと思いましても、私もこれも、腐れ縁と申しましょうか、座長に義理もありまして、駈落も出来ず、まあ、そんな始末でございます――」

私は写真をとる、何かのキッカケをつくろうと気許り焦りましたが、仲々にいい出しかねておりました。私をY氏の重役仲間と聞き知っての、彼等の遠慮勝の態度に、私はこの時程、紳士然としなければならない自分が恨めしかったことがありませんでした。ぐずぐずしていると座長が帰って来るかも知れないし、風呂がわくと、彼等は素顔に還ってしまうでしょう。

私は清水の舞台から飛降りる気持で申しました。

「こうして同宿したのも何かの縁です。私は今夜の貴方達の御芝居の懸命さに心をうたれました。この夜の記念に、写真をとっておきたいと思うのだが如何でしょう」

「有難う御座います。恰度これと一緒だから都合いいと思います。

ついぞ二人っ切りの写真なんてない私達ですから、願ってもないことです」

「お二人の記念写真は、私が大阪へ帰ってすぐ現像して送りましょう。だが事のついでに、今夜やられた様な、あの継子いじめのシーンというか、貴方が、お妙を襲うシーンというか、ああした、芝居のシーンを撮っておきたいのですが……」

「と申しますと、ゆかりをここで縛りますので……」



多三太郎は、フト変な顔をしました。私は慌てて、

「いや、ただでとはいわない。芝居を再現して戴くのだから、応分の御礼は出させてもらいます。実を申し上げると、残酷ムードとでもいいますか、今夜のあの迫真的な演技に、私は憑かれたのです。大劇場や、一流の芝居でも見る事の出来ない、あの責めの生々しさに、私は魂を奪われたのです。是非とらして下さい――」

「ああ、ようございますとも――。嵩の知れた、私等如き田舎芝居に社長さんがそこまでいって戴ければ、役者冥利に尽きるというものですよ。駄賃なんか要りません。それどころか、ここには社長さん一人が見物人だから、舞台でやれない様な、リアルな演技をお目にかけましょう。なあ、ゆかりいいだろう」

彼女は襟を染めて微かにうなづいたのです。

「じゃあ、いつ始めましょう。人が来ちゃまずい。寝静まってからやりましょうか――」

「だって座長がここへくるでしょう」

「私から何とかなります。酒さえあれば、徹夜でもする座長です。離れの社長さんのお名指しだとでもいっておけば、万事粋のきく座長ですから、旨くいっておきます――」

「風呂から上って、又化粧するなんて、本当に大変だネ」

「なあに、馴れたものですよ。じゃあ、お近づきに一杯やりましょう。私は、社長さんと同宿で、固苦しくていけねえと、内心どうも苦手に思っておりましたが、話が分りそうな方でくつろげました」

「ああ、いいよ。ざっくばらんにやり給え。街なら一杯のみに料亭へでも案内するんだが、ここではそうもいかないしねえ。まあ二人で好きなものでも買ってくれ給えよ――」

私は財布から五千円札を一枚ぬきとると、二人の前に差出しました。多三太郎は固く辞退しましたが、私のたっての押しつけに、拝むようにして戴いて、ゆかりの化粧バッグに入れさせました。

風呂の湧くまで、私達は愉快に盃を傾けて談笑しました。旅役者の悲哀、ペソース、失敗談等……。

「色事が素晴らしいと仰有いますので?……いえね、何を隠しましょう。座長は昔はね、今でいうゲイボーイでね。なまじっかの女共より艶っぽいってわけですよ。苦しい劇団のやりくりも物かわ、座長が芝居をつづけるのは、自分の趣味を満足させたい為ですよ。謂わば趣味と実益をかねての事でしてね」

「貴方の縛り方が、仲々リアルだし、激しいのは何かわけがあるの。芝居ごとというと、精々縛っても型通り、所作に過ぎないものだが……」

「地位もなし、門閥も名声もない、地廻りの芝居役者は、人並みのことでは客がついて来ないのです。リアルに徹するか、様式美に終始するか、そのどちらかでないと、中途半端な芝居をやってちゃ飽きられます。様式化する程の衣裳も装置もない我々にとっては、リアルに徹する方が、見る者の魂に喰い込む迫真力を憶えさせるものだと思うのです。責め方一つにしても、座長はもっと、ビシビシやって、痛そうな顔をするのではなく、真に痛めつけた方がいいというのですが、いくらなんでも、それをゆかりに望むのは彼女の体がいくつあっても足りないんじゃないかと思います。半年許り前だったか、似たような責めのお芝居があったのですが、春さきの未だ水の冷めたい頃というのに舞台に本水を使用しましてね。このゆかりを肌も露わに縛りまして、それで頭から何杯も水をぶっかけて、弓おれで、あざがつく程、ぶちまくったんですよ。いえ、座長がですよ。お蔭で、これは急性肺炎を起して寝込むし、とんだ旅役者残酷物語でしたよ。警察からは露出オーバーで残酷すぎるというので散々のお目玉だし、座員一同大恐慌で、ゆかりの代役になり手はなし――」



「ゆかりさんは、よく黙って忍んでいるね――」

「これは昔風の女で、実に忍従的で、滅多に逆らいません。吊し責めにあって、ヒーヒーいっていたって、止めてくれとはいわないんです。不思議な女ですね。ちっとは逆ろうとハリもあるが、こうもおとなしいと、反って又、余計に虐めたくなって、音を挙げさせたくなるんです。座長と来ちゃ、ネチネチ責めるのが好きだから、舞台では、いかにも所作事のように見せて、その実非道いんです。女をつねるなんて仕ぐさも、型だけでいいものを、本当にぎゅっと、紫のあざのつく程につねっているんです。きせるを頬に押しつけるのも、本当に火をつけて吸ったあとの、雁首の熱いのを、さめぬうちに押しつけるんですね。座長にいわせりゃ、大根役者に、芝居での責められる苦悶は到底出来っこないから、それなら一層、地でいった方が迫真力があっていいって、そんな論理なんです。やられる

方はたまったもんじゃありませんが、それが習い性になると、女の方もその方がやり易いそうです。生ま傷の絶え間なしってわけですがね――」

「それでよく女優達は逃げ出さないものだね」

「座長はね、自分は喰わなくっても、座員一同には身金を切ってでも不自由はさせない、そんな親分的なところがありましてね。何か座長についていると、大船にのった様な気になるんだから妙ですよ――」

その時――、主屋から入浴を知らせに来ました。私はいいからと辞退し、二人の役者を風呂へと立たせて、私は、甘美な空想に耽ったのです。彼等は私一人の為に、舞台ではやれない、リアルな演技をお目にかけようといってくれている――。それは何か……。



Y氏の葬儀が、この様な副産物を生もうとは、私の予想もしない事でした。同好者のY氏が地下で、苦笑しているかも知れない――が、好き者の彼のことであれば、この番外の一幕は、Y氏の供養には、もっともふさわしいものではなかろうか――。

私はそんな自分勝手な理屈をつけては、自からY氏への冒瀆ではないと慰さめておりました。提げ鞄を開くと一ダースの閃光電球のケース箱を突嗟に間に放り込んでありました。

Y氏の葬儀で十五六枚許りフィルムを費消し、少し撮ったのもありましたが、未だ未だ閃光電球分だけ使うには余り過ぎる程、フィルムはあります。

こんなことなら、キャノンズームとストロボでも持ってくればよかったのに……。

重いし、大層なのでおいてきた事が悔まれましたが、所詮は結果論です。葬儀の果ての、こんな一幕を、どうして予知出来ましょう。

尾上多三太郎が戻り、やがてゆかりも戻って来ました。借着の寝巻を身につけ、手に一杯の衣裳を抱えて――。

「座長は、話が向うで弾んで、飲み明すそうです。この部屋は私達三人だから、雨戸をくりましょう。もう午前零時です。恐らく誰も来ないでしょう……」

ゆかりは懐中鏡を出して立てると、固形白粉をとき、朱銅を皿にとき、化粧道具を並べて、顔塗りの下地にびんつけを塗ろうとしました。再び舞台化粧をするつもりでしょうか。素肌は旅廻りだけに黒く焼け、陽に当らぬせいか蒼ざめていましたが、僅かに湯上りの血色が頰にさし、一杯の盃が眼のふちを仄かに染めていたのです。

「もういいよ。そのままで……気の毒だからね、折角白粉を落したものを……」

「じゃあ、お言葉に甘えて素地で行くか。鼻でも一刷毛引いておくといいよ。私しや、頬かむりでもしますかね――」

多三太郎はかつらをつけ終ると、行李から細引をとり出しました。

ゆかりがかづらをつけ、寝巻をぬいで、素肌に長襦袢を纏うと、私をふりかえり、

「さあ、準備が出来ました。始めますよ――」

そういって、ゆかりの後ろに廻り、躊躇なく両手を捩じ上げたのです。

私は縛って行く過程の、ここぞという処でフラッシュを焚きました。閃光が部屋を、一瞬、まばゆく照らし、ジーンと眼光がくらんで、瞳孔の奥に、二人の姿は黒い映像を小さく残しました。

ゆかりが控え目に「あっ」と叫んだ時、彼女の下着が、多三太郎の手に握られておりました。素肌に犇々と喰い込む縄に、彼女は眼をつむり、むしろ、その被虐に、酔っているように見受けられました。

肌も露わな、裾を乱した、肢態が次々と眼に映じ、私は閃光電球の残り少なさを如何に慨嘆した事でしょう。限られた少数のフィルムが、私を否応なく撰択させました。

五千円の効めは絶大でした。乞う迄もなく、多三太郎は、己が愛人の被虐の姿を、私の眼前に晒したのです。彼は剝き出しになったゆかりの豊かな臀部に弓折れをふるい始めました。一振り一振りそれは強くするどく彼女の肌につきささり、ゆかりは眼を閉じ、苦悶の叫声を殺して、うっすらと涙しました。露わな腿に腰に小道具の弓折れは飛び、次第に多三太郎の息は弾んで来ました。眼は充血し、半ば私の存在を忘れて打擲し、そしてそれをガラリと投げ捨てると、ゆかりの縛った体を抱き起して、強く抱擁し、再びの上に突き放し転していました。最後の閃光球がそれに発射し、私は飽気なく十二枚のフィルムを費消し終ったのです。

「フィルムは終ったよ……」



私は彼等に声をかけましたが、多三太郎は姿勢を崩しませんでした。昂揚した顔をややあって挙げた彼は、不満をかくすすべもなく私に怒る様に叫んだのです。

「殺生ですよ――、これで終りじや。私がどの様にして、これを痛

めつけて行くか、これからが撮りどころなのに……」
瞼を閉じ、すべてを多三太郎に投げ出したゆかりの顔は、苦痛を快楽に替えた幸福の陶酔に浸っている、その何ものでもなかったのです。
「遠慮し給うな――、私は一度座長に逢ってくるよ。ひょっとすると、冬の夜長を語り明すかも知れない……、いやそうするよ――。ゆっくりこの部屋は二人で使い給え――」
私は、ツンツルテンの借着の寝巻の上からオーバーを引っ掛けると、静かに雨戸をくりました。深秋の月は皎々と冴え渡って、草むらですだくこほろぎの啼く声が、降るようでした。
「いいんですか……二人で使っても……、ああ、恩に着ます……。ゆかり礼をいえ」
「有難うございます――」
泣く様なかぼそいゆかりの声と共に、二人はぐったりとたたみに崩れおれました。
深々と肌に喰い込む縄目を横眼に見て、私は嗜虐の想念が、黒々と燃え上るのを敢えて抑圧して、さりげなく、冷えた草履に足を通しました。
恐らく彼女は、被虐の愛情に身を焦がし、多三太郎は、果し得ぬ彼女との愛情の交歓に、暁のきぬぎぬのひとときを惜しんで、激しく燃焼し尽すことでしょう。
ゆかりのあの支度の合間に、彼がふと古びた天井の梁を見上げ、――社長さん、逆吊りも面白いですよ……。時間があればお目にかけましょう。舞台じゃ出来っこない、素っ裸の逆吊りをね……――
そんな言葉がきれぎれに胸に蘇がえるのでした。
心虚ろな雑魚寝の寒さから眼ざめ、私は急に家の事が気掛りになりました。人々は酔いの生臭い息を吐き散らして、いぎたなく眠りこけておりました。古びた時計が六時をうちました。二、三時間仮睡しただけで、頭は鉛の様に重かったが、私は体に鞭打って、人々の間から起き上り、悪いなと思いつつも、服と鞄をとりに離れに引返さざるを得ませんでした。東の空が微かに白み、重畳たる山肌にゆるやかに赤い色が交って来ました。
私は庭で大きく三つくしゃみを続けさまに発し、苦い口中を煙草でまぎらわし、数奇な一夜の夢を払拭するように、背を伸ばしました。
私は足音を忍ばせて雨戸に近づき、音のせぬようにそっと雨戸を繰りました。
障子を静かにあけ、鈍い二十燭光の光に照らされた、多三太郎、ゆかりの前後不覚に眠りこけている姿に凝然と瞳を落しました。部屋一面に散らばった十数条の、雑多な縄。梁から空しくぶら下った太縄――。
布団からはみ出した縄のはし――、弓折れ、抜き身の芝居刀、色とりどりの男女の帯紐――、さながら、彼等は、縄や帯紐の中にうずまって寝込んでいるようです。
満ち足りて、疲労の色も濃い、二人の寝顔に、私は、果そうとして果し得なかった愛情の交歓をまざまざと見せつけられました。
私は二人のいばらの愛情の幸多かれを祈り乍ら、鞄と服を抱えて元通り障子を閉め、雨戸をくりました。
被虐に堪えるうち、何時しか被虐を歓ぶ様になった女と、心なら

ずも加虐に浮身をやつし乍ら、何時しか嗜虐に愛情を見出した男との、魂の触れ合いを眼の辺りに見て、私は羨望を禁じ得ませんでした。

雑草の様に生きる、旅役者の人生にも、この様な生甲斐のある事を見出したのです。

今頃は、鳥羽の辺りか、それとも志摩半島か——うらぶれの流れの旅路に、恐らく今日も、ゆかりは縛られて鞭打たれ、多三太郎は飽くなき悪役を専門に、嗜虐の歓こびに浸っていることでしょう……。

ライカ氏は手許に戻った写真を揃えて、深々とソファに凭れました。喋べり終った後の軽い疲労感が、その体を押し包んでいったのでしょうか——。

スバル氏がフォトを持参する予定でしたが、彼の手違いでフォトが間に合わず、さらばと、パイプ氏が二番旗手として一同を制しました。

第七十六話　アリバイなきアリバイ

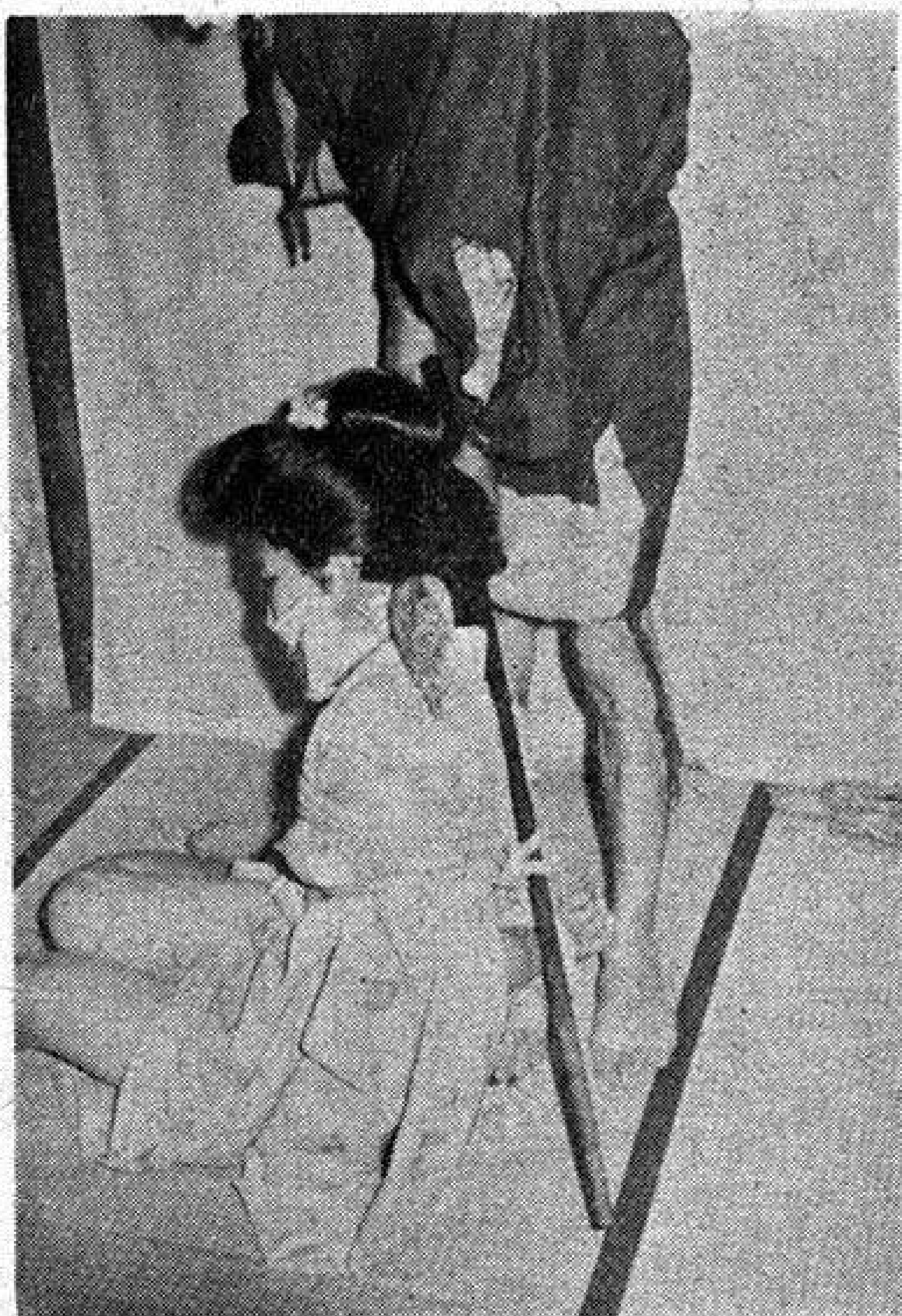
「推理小説や事件で、よくアリバイの有無が、直ちに対象となり勝ちですが、おそらく、その日その日のアリバイを考え乍ら、行動している人はいないと信じます。

アリバイは飽くまで、事件発生後に生ずる、結果的な過去の現象であって、世の中の人間の絶対数は、アリバイの必要性を意識せず喜怒哀楽のままに行動しているのが本当の事実なのです。だからして、何の前触れもなく、一人の人間が、突然に、過去の時間のアリバイを探求された時、そこにはいうにいえぬ秘密が内臓されているかもしれないし、且つ又、その当人が、何らかの事件と全然無関係であったとしても、触れられたくない事柄や、秘密にしておきたい出来事も、アリバイなるが故に、あからさまに個人の秘密に属する事柄まで、さらけ出さなくてはならないものでしょうか。

どうも舌足らずのいい方で恐縮ですが、次にお話する一つのエピソードの場合、貴方達が若し、当の主人公であったとすれば、どの様に処置されるでしょうか——。これはその一つのテストケースです」

こんな前置きをして、パイプ氏は徐むろに語り始めたのです。

秋晴れの或る朝——U物産の総務部長、但馬恭一は、何の前触れ



もなく、一人の刑事の訪問を受けた。
「突然御邪魔します。私はK署の丸田と申すものです。御多用中で誠に恐縮ですが、実は或る事件について、一寸御参考迄に御訊ね致したいのですが……」
「はあ――何でしょうか……」
但馬は全然身に覚えもなし、心当りもないので、平然として、寧ろ協力的な気持でにこやかに、丸田刑事に煙草をすすめた。
「実はこれなんですがね……」
刑事はポケットから、一個のガスライターをとり出して、じっと但馬恭一の顔色を窺がった。
「ライターが、どうかしましたか――」
「これに御社の会社名が刻印されておりまして、ナイフで彫り込んだK・Tというサインがあるのですが、貴方のものではないでしょうか――」
「あッ、確かに私のものです。二週間許り前、何処かで落したのですが、ロンソンの舶来で、惜しいことをしたと思っていたところです。今年の夏、お中元代りの品として、会社で五十個許り社名を刻印し、お得意先や、関係各社の社長、部課長クラスに贈ったのですが、余ったライターの一つを、私も使っていたのです。同製品許りなので、ナイフでイニシャルを入れておいたのですが……そのライターが何処にあったのでしょうか？……」
「記事を解禁しまして、今日の朝刊にも出ていた筈ですが、十一月七日、厳密に云いますと、今日から四日前、F市の住宅地で起った強盗傷害事件の現場に落ちていたのです。
賊は夜の九時半頃、勝手口をこじあけて侵入し、夫の出張中で、一人暮しの新婚の若い妻に拳銃をつきつけて脅迫し、両手、両足を縛り上げて、猿轡をはめた上室内を物色し、現金二万数千円と、ダイヤの指輪、時計、首飾り等、時価にして、約六万円のものを奪った挙句、勝手元の冷蔵庫を開いて、散々飲み喰いし、更に居間に戻って、新妻に乱暴しようとし、果し得ず午後十一時前逃亡したのですが、賊は黒い大きな眼鏡と黒マスクですっぽりと顔を終始掩っていたそうです。賊が、ガイシャに挑みかかった時、ガイシャが必死に縛られた儘抵抗しましたので、果さなかったのですが、その時、ライターがズボンのポケットから落ちたらしく、ガイシャの傍に転がっていたと云うのです――」
「………」
但馬の顔は稍々蒼ざめて、無言でその先を刑事に急いだ。微笑はいつしか影を消した。
「残念乍ら、手袋着用で指紋はありません。それにホシの遺留品はこのライター一個だけなのです。ええ勿論、貴方を疑っているのではありません。これは何処迄も参考までにお訊ねするだけですが、ライターを落された日、落した場所など御記憶ないでしょうか」
「私のライターが賊に使われていたなんて、全くイヤな話ですね。あれは二週間前の土曜日の夜、キタのバーを新軒、重役連中とハシゴをして飲み歩いたのですが、その時に落したのだと思います」
「バーの名前を覚えておられますか――」
「ええ、そうですね。たしか、リンデン＝サンチャゴ＝スコラ＝染八……確かそんなところです。染八の女を二人車にのせて、廻り道して送ってやって、帰宅しましたから、染八が最后です。御存知の通り、バーや料亭では、大抵ホステスや、仲居が、逸早く煙草の火

をつけてくれますので、私がタクシーの中で、煙草を吸おうとして、服のポケットを探ったら、その時はもうなかったのです。相当酔っ払っていたから、どこで落したか、薩張り記憶にないんですが……」

「いやよく分りました。どうも、お忙しい処御迷惑かけて恐縮でした。何か思い出されたら、御面倒でも一寸御知らせ下さい。ホンの少しの事でも手掛りになるものでしてね――」

刑事は陽灼けした顔に笑顔を浮べて一礼して立上り、応接室を出ようとして、さりげなく振り返った。

「ああ、そうそう。こんな事聞く必要もないのですが、但馬さん――、貴方、あの事件の夜の九時頃から十一時頃まで、何処におられました?」

「えっ! ああ、あの日ですか――。えーと、あの日はどうしていたかな……。四日前と云うと……一寸待って下さいよ、今憶い出しますから……」

但馬恭一は四日前を逸早く悩裡に遡及した。

≪四日前と云うと水曜日の夜だ――。定例の部長会議の日だな――呀っ! あの夜は……≫

但馬恭一は自から顔色の変るのを覚えた。

≪いけない。顔色が変ると、ヘンにカングられるぞ――。あれだけは口が腐っても云えまい――。何としたことだ。ライターを落したお蔭で、これはトンだことになったぞ、困ったな――。そうだ映画にしてやれ。いや映画だと遅すぎる。映画を見て、喫茶と軽く一杯――。これはアリバイだ。刑事の奴等は調べやがるだろう。しかし真実は云えない――≫

考える振りをしながら、彼の腋の下は、冷くにじんで来た。

「そ、そうですね。あの日は確か部長会議が午後六時に終って、私は帰りがけ、ふと今日のこみ入った議題のユーウツさから逃れる為ミナミへ出て、N会館へ映画を見に入りました。映画を見終って、喫茶店でコーヒを啜り、喫茶を出て、道頓堀のとあるスタンドーバーで一杯やって、家には十一時半頃帰宅しています。ええ、確かそうだったと覚えてます」

「貴方御一人で?……」

「幸か不幸か一人でしたよ」

「アリバイとしては薄弱ですなあ――」

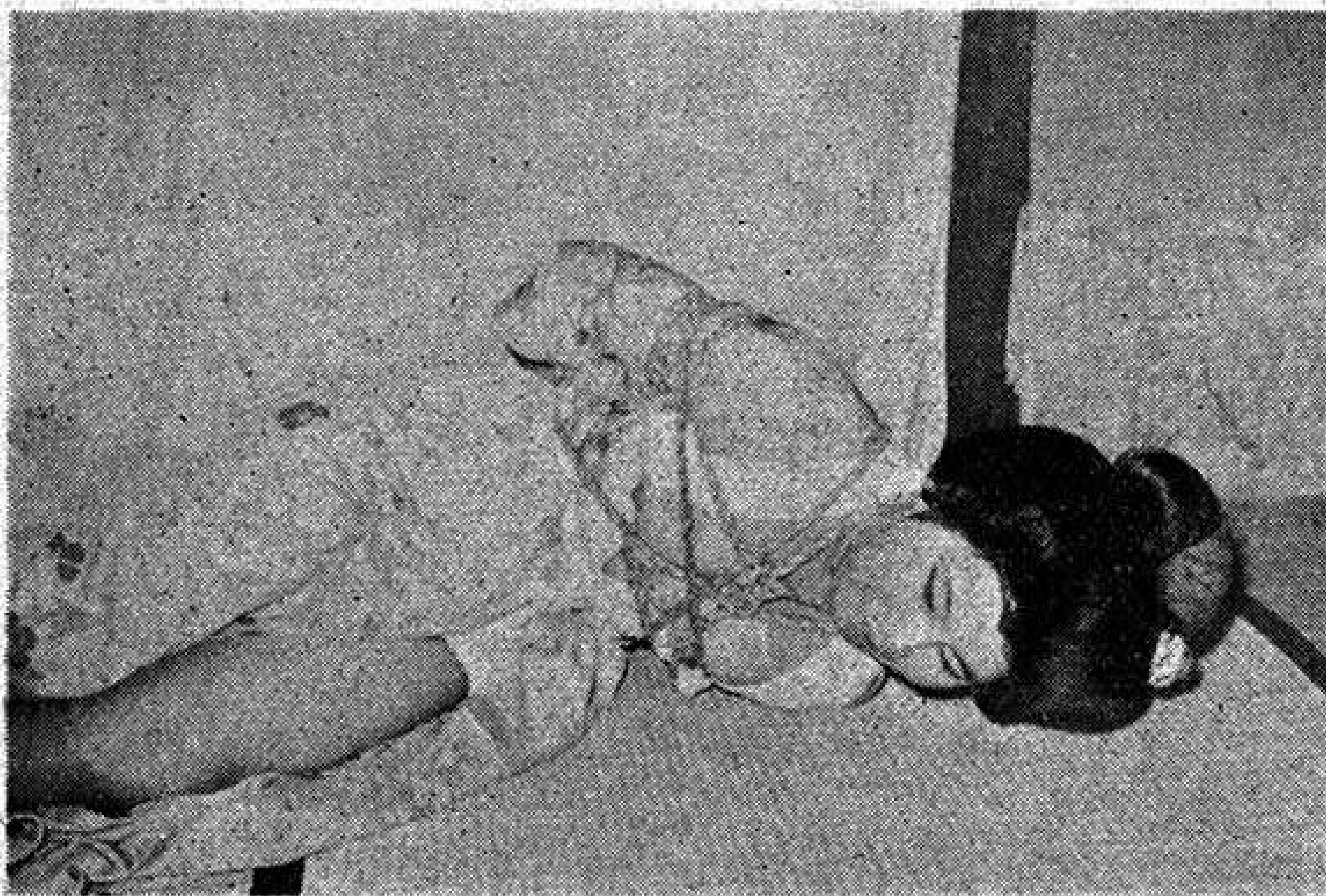
「いつも一人の時が多いですよ。事件が起るのを予知して行動はしませんからね。一人で映画に入って、お茶のんで、一杯引っ掛けるサラリーマンなんて、世の中には毎日毎日、掃くほどありますよ。一年三百六十五日のうちの一夜が、偶然そうであっても、別段おかしくないじゃありませんか――。貴方だって、公務のない日には、時には一人で心ブラもする。ふと引きずりに映画も見る――。一寸一杯のみたくなってふらふらと飲屋に入る――、偶にはぶらりとデパートをうろついているかも知れない――そうでしょう。この日が重要な意味をもつ、アリバイ立証の日と知れば、友を訪れるか、家庭に怱々に戻るか、適当に証人を見つけますがね。若し私がライターを落さなかったら、私の四日前の行動は、ホンの何でもない、市井人の一行動に過ぎないのですよ。ねえ、そうでしょう……」

「仰せの通りです。いやトンだ事をおききして失礼しました」

丸田刑事はさも恐縮の体で、深く頭を下げて、それ以上追及せず、あっさりと、応接室を出て行ったのである。

≪少し強調しすぎたな――。しかし私は神に誓って、あの夜はこの事件と何ら関係ないのだ。関係ない私が、どうして本当の事を喋べる必要があろう――。併し、アリバイを偽証したこの後味の悪さはどうだろう……≫

但馬恭一は、じっとり汗ばんだ額の汗を、アクセサリー用の柄のハンカチで拭いた。鏡を見ると蒼褪めている。



≪一旦、こう云った以上は、これを事実として押し通さなくてはならない。よしッ、辻褄の合うようにアリバイをつくり上げてやろう。やれやれ何てこった―≫

N会館の映画は「アラビヤのロレンス」――これは幸い違う日ではあったが見に入っている。ロードショう劇場は長期公演なので、こう云う時はよかった。

喫茶も、バーも行きつけは都合悪い――。フリの客としておくと覚えがあるような、ないようなことで済んでしまう。

喫茶は心斎橋のM――あれなら仄暗いし、大きな喫茶だから、カウンターだって一人一人覚えている筈がない。

彼はその日、早速Mへ行った。コーヒ八十円、サンドイッチ百五十円、計二百三十円の消費――。

道頓堀へ出て、行きづりの地下のスタンドバーへと立寄る。ハイボールとジンフイズ、それにオードブルとフルーツ、しめて九百五十円也――。千円置いて立上る。

念の為、N会館の時間表を覗くと、最終回は六時四十分、終演が九時三十分、彼はそれをメモする。

九時三十分から、心ブラして喫茶Mまで十五分。喫茶店で約三十分。道頓堀へ十分――。スタンドバーで四十分、これで午後十一時過ぎになる。ミナミでタクシーを拾って、住吉の自宅までは？……これは、タクシーを拾って見よう。

彼はその場でタクシーを拾った。九十円タクシーである。一方通行あり、右行禁止ありで、大国町から花園町へ出て、国道を走って自宅まで所要時間二十八分。夜遅くなら、もう少し早いだろう。メーターは三百七十円――。よしこれでいい。

但馬恭一は尚も綿密に計算して、時間の調節をきちんと頭に刻み込むと、ボツリボツリと、さも想い出して喋べるように復誦した。

何か、こうなると、刑事の再訪を待ち焦れる気持だった。あの時は漠然とそう答えたが、今なら、きちんきちんと云えそうだった。

二日、三日、四日と経ったが、但馬恭一の内心の意気込みにも拘わらず、鈍重そうな丸田刑事は現われなかった。

彼ははぐろかされたようで、独り角力をとっているような気になって、

≪結局、あれでよかったのだろうか――。真犯人が捕まったか、それとも、ホシの手掛りでもつかめたのか――、まったく世話を焼かせる。悪いことのしない私だ。何もビクビクしなくてもよかったんだ……そうそう、あのライター返してもらわなくちゃ……≫

重役連中では一番若い但馬恭一は、三十七才で総務部長のポストにあった。大学出のきれものでもあったが、立ち廻りがうまく、コネは百パーセント利用したせいもある。

妻の早智子はU物産の会長の姪であった。才智秀れ、美人の妻にだけは彼も真底惚れ込んでいたし、家庭ではよき夫だった。

併し結婚して六年、未だに子宝に恵まれず、三十に手が届き乍ら早智子は若く美しかった。美しく、淑やかで、才女なるが故に、何申し分ないように傍目には見え乍ら、但馬にもって、何か充たされぬ或るものがあった。これは彼の嗜好からくるものなのであるが……。

五日目……、ひょっこり午下りに、丸田刑事が訪れた。

≪来たぞ！　しっかりやれよ但馬恭一よ――≫

彼は内心斗志をわかせ、さりげなくにこやかな少壮紳士のタイプを崩さず、応接室で刑事と応接した。

「ホシは挙がりましたか――」

「それが、難航しましてね。――何か思い出されたことはありませんか――その后……」

「さあ、別段これと云って……」

「そうですか――。時に貴方の事件当夜の行動ですがね。もう一度精しく仰有って戴けませんか――」

≪そら来たぞ。落ちつけ落ちつけ――≫

「私もその点で、家に帰ってじっくり憶い出して見ましたが……あの夜は――」但馬恭一は、考えていた通りを、ゆっくりゆっくり抑揚をつけ、時には考え込み乍ら、予定通りを話し終った。

「よく思い出して戴けました。これで、途中誰かに逢っておられれば申し分ないんですが――。顔の広い貴方にも似合いませんね」

「大阪は広いですからなあ――」

丸田刑事は深追いを止めて、あっさりと立上り、

「いや、どうも御邪魔しました」

四十年配の、稍々疲れた影を落して、刑事は扉を自分で開いて出ていった。

≪ウラ付けをやるに違いない。又来るだろう≫

但馬恭一は、自分の作り上げたアリバイが何処まで通用するか、ゲームをやるような気持で。丸田刑事の後姿を見送っていた。

それから二日経って、果して丸田刑事から電話があった。

――一度本署まで、参考人として御出頭願いたいのですが……――

≪やれやれ、会社へ来られても叶わぬが、サツへ行くのもいやなこった。しかし仕方がない――≫

電話で応諾して、彼は翌日、指定の時間にK署に現われた。

取調室で、但馬恭一は、いつもと違う、丸田刑事の精悍な眼に違ってドキリとした。

≪何か間違っていたのだろうか――≫

刑事は困惑げな表情で、つぶやく様にいった。

「どうも但馬さん、ウラがなくてね。本当に喫茶M、スタンドバーRに行ったのでしょうね——」

「勿論ですとも——」

「そうですか——、じゃあ申し上げますが、事件当夜、貴方が行かれた筈の、スタンドバーRは、その日慰安旅行の為、臨時休業だったんですよ……。それでも行かれましたかネ。貴方のRでの話は、仲々お精しい。ハイボールもジンフイズも、オードブルもその通りでしたが、貴方の行かれたのは、事件当夜ではない、私が始めて御伺いした夜でしたよ。貴方の写真を見せたら、バーの女の子がすぐ知らせてくれましたよ。千円おいていった事もね——。どうして、そんな事なさるのですか——」

但馬恭一の体は震え出した。冷汗がタラタラと頰を伝っていた。

彼は無言で、頑くなに押し黙っていた。

「さあ、但馬さん。警察のカンを狂わさないで下さい。本当の事をいって貰いましょう」

≪いうべきか、いわざるべきか——。私の、U物産での総務部長のポストはどうなる——。妻の早智子は何と思うだろう——。新聞はデカデカと書き立てるに違いない。金輪際真実はいえない。新らしく、例え、嘘でも一時凌ぎに又、アリバイをつくるのだ。それしか道はない——。ああ真犯人よ。早く捕まってくれ≫

するどい訊問に、但馬恭一はしどろもどろになった。偽のアリバイは余りにも早く崩れた。

「それじゃ、もう少し先のバーだったかも知れません——」

「先——、嘘いいなさい。喫茶Mを出て、別段アルコールも廻っていない筈の貴方が、自分の行ったバーを見間違う筈がない——」

「何しろ軒なみにあるものだから——」

「よし給え！——君は今、非常に疑わしい立場にある。総務部長という地位で、何不自由ないと考えていた、僕の考えを訂正しなければならないかも知れない。第一、君のアリバイは作為だらけだ。僕が訪れた日、張込みをさせておいたのに気付かず、君は喫茶Mを訪れ、バーに入り、N会館前に行ったじゃないか。君はアリバイをつくる為に動いたのだ。余り警察を甘く見るもんじゃない。早く本当の事をいい給え。

第二に事件のあった布施は、大阪と街続きで、近鉄を利用しても五分とかからない。しかも、あの住宅地から千メートル許り離れた地点に君の会社の第二工場がある。土地カンだってないとはいわせない。

第三にホシの現場に残した煙草の吸殻から検出した血液型はO型だ。君の応接室で吸った煙草の吸殻からもO型が検出された。O型は最も多い型だが、同一型という点ではやはり一応疑って見る必要がある。しかも煙草はどちらもハイライト——。これも偶然の一致かも知れないが——。どうだね……」

≪O型は珍らしくない。煙草だってハイライトを近頃はフィルター付きで、皆が吸う——何もきめ手とはならない。第二工場とガイシヤの家が近くとは初耳だが、しかしこれとて何ということもない。すべては類型的な同一の偶然がすべて、私に不利にかかってくるのだ。けれど私は真実はいえない。あとは黙否権あるのみだ。いえば嫌疑が晴れるが、それによって私のハイドの裏側がすべて曝露されるのだ。私は地位はいいとしても、早智子をそのショックによって失いたくない——。いえない——どうしても真実はいえない≫

但馬恭一は、その夜留置された。

勾留期間が延期され、又延期され、彼の黙否権によって、アリバイの成立しない限り、勾留は続きそうだった。

早智子が特別は面会を許され、逢いに来た時、流石に但馬恭一はげっそりとやつれ、蒼白い顔には、ついぞ見せぬ無精髪が、醜く顎を蔽っていた。

「貴方――、私は無実を信じています。本当の事を仰有って一時も早く帰って下さい。貴方の様な善人にあんな事が出来る筈ないんですもの。どうしていえませんの――。ねえ、せめて、私だけにでも……」

但馬恭一は、苦しげに眼を伏せた。

「いつか分る時が来るんだ。君にはきっと真実をいうと誓うよ。併し今はいえない。許しておくれ――」

「父も会社の皆さんも心配なさってますわ。ねえ、私を助けると思って、いって下さい――」

但馬恭一は苦しかった。もう仕方がない――次の取調べに際しては真実を吐こう。しかし最愛の妻は、この私のハイドの裏を何と思うだろう――

彼はうなづいた。そして妻の繊細な指を固く握りしめた。

鉄扉が開いて、取調室へ入った時、彼の心は定まっていた。空しく抵抗した数日が、今となっては莫迦らしくさえなっていた。

丸田刑事は、いつになく浮かぬ顔をしていた。彼にもやつれが目立っていたのだった。

「但馬さん――」

丸田刑事はそこで言葉を切って、黙って彼にピースを差出した。

一服つけて但馬恭一はくらくらと眼昏らむ思いだった。

「貴方、遂に黙否権を行使し切りましたね。一時間前、ホシが挙がりましたよ。アリバイを追って私は随分汲々とした。貴方ではなさそうに思い乍ら、アリバイがない為、私は思わず、貴方に強く当った様です。今は被疑者ではなく、友達同志として、どうです。当夜の行動を話してくれる気にはなりませんか――」

「御手数かけて申訳ないと思います。深くはきかないで下さい。唯こういう事は申し上げうれます。サラリーマンが出世街道を歩いて、会社の偉方の血縁を妻にし、紳士で夜昼過すのは、如何に苦しいことか。その血縁の圧力に押されて、何不自由なく暮し乍ら、私のハイド氏の心が、フト、異常性に惹かれて、誰にも知られず、思うさまに羽根をのばすひととき、そのひとときが、アリバイの成立する時間であったとしたら――。私は、あの夜、誰もしらないスラム街の片隅で、地位も名誉も道徳観念も放擲して、心のおもむく儘に遊び呆けていたと、そう思って下されば、私のいえない理由も、略々推察がつくと思います――」

「自由な時間をね――。いや分りました。人皆それぞれに、人にいえない秘密のあるものです。済みませんでした……。でも作為のアリバイが如何に捜査を手間どらせますか、これだけは反省して下さい」

但馬恭一は重苦しい気持で、取調の机のほこりに眼を落していた。会社での言訳、説明。妻への言葉――。知られざる、恥垢にまみれた半面が、今、さらけ出さざるを得ない立場にある。

「ああ、そうそうライターをお返ししておきましょう。これが悶着

のタネでしたネ。貴方が『スコラ』というバーで呑んでおられた時、ポケットからソファに滑り落ちたのを、ホステスの女がそっと拾って、紐の情夫にやったそうです。ホシはその情夫でしたよ。奴さんタタキのマエが三つありましてね、ダイヤの指輪をバイしたのから足がついて捕まりましたよ。さあ、今度は大切に落さないで下さいよ――。では……」

但馬恭一は自から進んで広島の方へ転任させてもらった。恥多い大阪の地から姿を消したかったのだろうか――。

広島の幟町に新居を構えた彼は、やっと心の平穏をとり戻した。寝について或夜――恭一は始めて早智子に打明けたのである。

「驚かないで聞いてくれ給え――。私は一日も早く、君にだけはいいたかったが、君がそれによって離れてゆくのではないかと、只管にその事を恐れたのだ。私の無言の数日を君はよく耐えてくれた。そして私について、広島へも来てくれた。君は自分が到らなかったのではないかと、日夜心をくだいて私に尽してくれるのが涙が出る程嬉しく思っていたよ。今更いうも可笑しいが、私は真底、君を愛している。尊敬し、私には過ぎた妻だと思っている。しかしそれがいけなかったのかも知れない。

君がU物産の前社長の姪であるが故に、私は二人の生活に、つい秘密をもってしまったのだ。私の変った性状を君に打明けた時、或いは君が父に知らせるかも知れないと、そんな憶測をしてね――。いや、分っているんだ。もう少し私にいわせてくれ給え――。

君はスチーヴンソンの「ヂェキル博士とハイド氏」の物語を知っているだろう。私と君との生活は、オール、ヂェキル博士の生活なのだ。私のハイド氏はサジストなのだ。

私は君にサジストである、隠された半面を見せる事を極度に恐れた。余りにも美しく、淑やかで申し分ない君だったから――。

私はその家では充たされない半面を、陋巷に求めていたのだ。あの事件のあった当夜、私は釜ガ崎の片隅に足を踏み入れていたのだよ。

私はフト街頭で知り合った男娼を手なづけ、その家で、家を出る時着ていた洋服から、下着までをすっかり脱ぎ、彼女？　の家においてある、古びた六尺褌とよごれたシャツに着かえ、腹巻に菜ッ葉ズボン、よれよれのジャンバーに黒眼鏡、無精髭をして、頭に砂をまぶして日本手拭でねじ鉢巻きをし、すっかり、ドヤ街の風体に変って、男娼の宿を出て行くのだ。

人生の吹き溜りのこの界隈には、ありと凡ゆる悪徳が渦を巻いている。

私は十円のシチューを啜り、四十円のチュウをなめて、焼酎臭いいきを吐き吐き、この界隈をうろつき廻るのだ。

そこで私はあぶれた夜の女を拾う――。女はヒロポン中毒者だ。ポンを買う為なら、いかなる行為も辞さない哀れな女達だ。

私は札びらをちらつかせ、ヤクの切れかかった女を金でつって、高等下宿か、軒なみに庇をつらねた安宿の、しらみだらけの部屋に転げ込む。

女は私の渡した若干の金でヤクを買いに走る。待てしばしなく、彼女は煙草のさきにヤクをつけ、その煙を深々と吸い込む。女の眼は輝やきを増し、たるんだ皮膚は蘇がえってくる。

私は褌一本になり、用意した極細の細引を数本とり出し、その細

引で、女を犇々と縛り上げる。縄は太いものより、細い方がよく締まるものなんだよ。それに第一嵩張らない。

私は女の下着を口に押し込み、ドロドロの日本手拭でしっかり猿轡をかませ、ズボンのバンイを引き抜いて、力任せに女の体に当てる。女は転げ廻り、赤ちゃけた畳に、やがて点々と血痕がしぶく――。私は狂った様に女の太腿に嚙みつき、深い歯型を残し、木綿針で全身を突き始める。それを女は狂痴にのたうって、快びの呻きを挙げている。

私の狂おしい血が徐々に納まる。私は女の縄をとき、ぐったりと崩折れている体のそばへ数枚の千円札をおいて、自己嫌悪に襲われてそこを飛出す――。

血で染まった両手をいまいましくこすりこすり、私は男娼の宿に帰る――。男娼は私に媚を送る――。責めてくれと眼が合図する。

私の血は再びたぎって、又しても狂態を繰り返す――。へとへとになって私は元通りの姿に還えり、逃げる様にそこを出る――。

呼吸をととのえ、私は車を拾って住吉へ帰りつく。もう善き旦那様である。そして私はたぎりたつ狂血を奈落の底辺で放出して、やさしく君に接する――。

女にメンスがある様に、私にも月に一度ぐらいそんな時期が巡ってくる。オンスとでもいうのか――。

許してくれ給え――早智子……。君はこんな私を許しくれるだろうか――」

恭一は告白し終って、熱っぽい瞼で早智子を見た――。

「私は貴方の妻ですわ――。貴方がなさりたいと仰有ればいっでも…それでいいのなら……いえ、私でいいのなら、今すぐにでも…」

早智子は喘ぐ様にいって、恭一を見上げた。

ハイド氏が、チャンスだ、やれやれと恭一の心にけしかける。徐々に彼の血は騒ぎ出した。彼の指先に力が籠って、早智子の肩に爪を立てていた。

「君に、君に求められなかったからこそ、私はしらみと斗い、醜い女にその吐けにを求めていたのだ――。ああ早智子……」

恭一は縄を求めて、フラフラと立上った。

外では木枯が、激しく雨戸をゆすって吹き荒れていたが、恭一の心は、ギラツク真夏の陽光の如く、明るく輝やいていた――。

或いはそれは、淑女の面をかなぐり捨てようとする早智子も、同じ思いであったかも知れない。

観念した様に閉じた眼の奥に、幸福そうな微笑を浮べて、早智子は寝巻の帯を、静かに手探ぐりで解き出していた。

愛の鞭――、それは二人をより強く結びつける絆となるに違いない――。

パイプ氏の話は終りました。

冬の夜は更けて、窓は水滴に煙り、濛々と立ちこめる紫煙の中で一人一人が、今宵の話を嚙みしめる様に、暫らくの空白の秒が刻まれて行きました。

「さあ、次にお目にかかるのは六四年だね。新年宴会を兼ねて集るとしましょうか――」

ドクター氏が腕時計を見て立上り、誰にともなくそういって、扉に向いました。

（了）

冬の夜の女相撲

（洋子の行司の思い出）

芦浦素舞夫

〇　〇　〇

それは今から二年前の、すでに木枯しの吹きはじめた初冬の夜の事でした。一人お留守番をしていた私の家に節子さんと俊子さんが訪ねて来ました。二人は銭湯の帰りらしく顔がほてっていました。二人共近所に住んでおり、よく遊びに来る仲だったのです。節子さんは私より二つ年上で廿八才、特に美人という程じゃなかったんですけれど、お色気のある大柄な人でした。俊子さんは私と同じ廿六才、ぽってりと太っており私の親友でした。

私達三人はコタツを囲んで俊子さんのお土産の焼芋を喰べながら、他愛のないおしゃべりに興じていました。何しろ小さなコタツですのでお互いの足がぶつかり合うのです。

『これ節子さんの足じゃないの？　貴女お行儀が悪いわね、引っこめなさいよ』

『あら！　違うわ、俊子さんの足なのよ』

お互い足を押し合ってふざけていました。

『節子さんの足は何文なの？　十文三分くらいあるんじゃない？』

『あら失礼ね、十文くらいしかなくってよ』

『ねえ、お互い足の大きさを比べてみましょうよ』

私はそう言いながら、自分の足を出しました。私は小柄なので足も小さく九文くらいしかありません。

『女性の足のサイズの話はタブーよ』

俊子さんは笑いながら足袋を脱いで足を出してみせました。肥った俊子さんの足はむっちりとした巾の広い足で、足指も短く丸っこい感じでした。

『節子さん、貴女もお見せなさいよ』

『いやだわ、足を比べるなんて』

節子さんが仲々応じそうにないので、私は彼女の足首を掴んで強引に足袋を脱がせてし

まいました。大柄な節子さんの足はやはり大きく十文以上はありそうです。踵はアキレス腱がくっきり浮き出ており、足の裏も土踏まずが彫りが深く、足指も長くて恰好の良い足でした。しかし足の裏は汗ばんだ様で赤味を帯びていました。
『やはり節子さんの足は、十文三分はあるわよ』
　私は自分の足と比べましたが
『そうね、私が九文半だから、節子さんはそれくらいあると思うわ』
　俊子さんもそう言いながら自分の足を出して節子さんの足に並べて比べています。
　文数は大柄な節子さんの足が遙に長いのですが、巾は肥った俊子さんの方が大分広く、足指も節子さんの半分くらいの長さしかありません。私は二人の足を見比べながら
『貴女達の足は対照的ね、背の高い節子さんは細長い足で、肥った俊子さんは巾広い足ね、貴女達の体格そっくりよ、ついでに足相撲でもしてみない？』
　私は九文の小さい足を節子さんの十文三分の足の裏に、ぴったり合わせて押そうとしました。しかし節子さんの足の裏は汗ばんでおり、べっとりとした感覚が私の足の裏に伝りました。
『わあ！　気持が悪いわ、節子さんは脂足じゃないの？蒸れた様な変な匂いがするわよ』
　私は無遠慮に彼女に言いましたが
『そうね、節子さんの足はなんだか臭そうだわ』
　俊子さんも、にやにや笑いながら言いました。
『失礼な事言わないでよ、さっきお風呂に行ったばっかしなのよ、コタツに入ってたから汗ばんだんだわ』
　節子さんは顔を顰めてムツとした様子で、足を引込めさっさと足袋を履いてしまいました。私は悪い事言ったかしらと思いましたがその時、ふと焼芋を包んであった古新聞の大相撲の記事に気付きました。
『節子さん、貴女はお相撲好き？』
　彼女に尋ねました。
『お相撲には全然興味ないわ』
　節子さんは素気なく答えましたが
『私は大好きよ』
　俊子さんが横から口を出しましたので、嬉しくなった私は思い切って切り出しました。
『ねえ！　私達、これからお相撲してみないい？　コタツになんか入ってるより温まっていいわよ』
　俊子さんはにやにや笑っていましたが、節子さんは驚いて私を見詰めました。
『えっ！　お相撲ですって、女性同士でそんな事するなんて、みっともないわ』
『いいじゃないの、今夜は私達だけだし、誰にも知れはしないわよ、念のため玄関を締めとくわね』
　私は呆気にとられている節子さんを尻目にさっさと玄関の鍵をおろしてしまいました。
俊子さんもさすがに驚いた様に
『洋子さん、ほんとにやるの？　でもこんな恰好ではやれないでしょう』
　私はセーターを着ていましたが、俊子さんは和服だったのです。
『どうせ不断着でしょう。構わないじゃないの、かえって、帯をしてるから都合がいいわよ』
　私はしきりにすすめました。
『そうね！　面白そうね、誰も見ていないし一回やってみましょうか』
　俊子さんは、節子さんの顔を覗き込みました。
『貴女達は仕様のないお転婆さんね、私はお相撲なんていやよ、貴女達、そんなにしたか

ったら、二人でおやんなさいよ」
節子さんは、あきれた様に答えました。
「駄目よ、節子さん、貴女大きな体して……さあ始めましょうよ」
私は二人を促して立上りました。そして部屋の中を片附けにかかりました。何しろ狭い部屋に編物機械など、お仕事の道具が一杯で危くって仕様がないのです。
「さあ、これでいいわ、じゃ試しに私と俊子さんがやってみましょうか」
まず最初に私と俊子さんが取組む事になりました。俊子さんは身長一五〇糎くらいで低い方でしたが、ぽってり太っており仲々強そうに見えました。
「俊子さん、体重はどのくらいあるの?」
私は彼女に尋ねてみましたが
「フフフ…五四キロよ」
俊子さんは笑って答えました
「まあ! 私より二キロ重いじゃないの?」
節子さんが驚いて言いました。節子さんもそんなに痩せてる方じゃなく、むしろ肉付きのいい人ですが、身長が一六〇糎くらいありますので、すらりと見えるのです。私達三人はよく一緒に銭湯に行くのですが、お風呂場で二人を見比べると確かに俊子さんが肥えて見えるのです。この二人に比べ私は遙かに小柄でした。そんな私がお相撲をとるなんて言い出したのです。さて私は俊子さんを懸命に押したて様としましたが、彼女はびくとも動かず、それ所か俊子さんが押返した拍子に私はよろけて畳に尻餅をついてしまいました。
「洋ちゃん、お止なさいよ。言わない事じゃないわ、俊子さんには、とても勝てっこないわよ」
節子さんが笑いました。ムっとした私は長身の節子さんにいきなり組み付き伸び上る様にして彼女の首に手をかけ投げつけ様としました。不意を衝かれた節子さんは思わずよろけて悲鳴を上げました。
「あっ危い! 洋ちゃん、止して」
しかし私達の身長は余りにも違い過ぎ逆に私は大柄な節子さんに押し潰されてしまったのです。
「ほら御覧なさい。怪我でもしたら、どうするのよ」
節子さんは首に絡みついた私の腕をはずして私を助け起して呉れました。何しろ私は節子さんより十五糎も小さかったのですから、勝てるわけがなかったのです。大柄な節子さんに組み敷かれた私は一瞬息が詰りそうでしたが、私の顔に覆いかぶさった彼女の上気した顔や、熱っぽい息使いや節子さんの風呂上りの肌の匂いに何故か興奮を覚えました。
「洋ちゃん、みっともないわ、こんな事、止しましょうよ」
節子さんは羞しそうに乱れた着物の裾を直しながら、たしなめる様に言いました。
「私はやはり体が小さいから駄目ね、今度は俊子さんと節子さんが、お相撲なさいよ、私が行司をして上げるわ」
私は、とても彼女達には勝てそうにないので、二人を取組ませようと思いました。
「では、節子さん、貴女とやってみましょうか」
俊子さんは笑いながら、節子さんを見上げました。節子さんは困った様な顔をして苦笑しています。
「節子さん! どうしたのよ、貴女、大きな体して何よ、早くおやんなさいよ」
私は余り気乗りのしない様子の彼女を急きたてました。
「仕方がないわ、じゃほんの一回だけよ。洋ちゃんが変なことを言い出さなきゃ、よかったんだわ」
節子さんは怨めしそうに私をちらと睨みま

した。色っぽい眼だなと思いました。

私は節子さんとお相撲とるのを漸く承知しましたので嬉しくなり

『貴女達のお相撲面白そうね、どっちが強いかしら？　楽しみだわ今度は本当のお相撲みたいに最初から始めましょうよ。先ず呼出しが出て来るとこからよ』

私は部屋の中央に進み出ました

『〃東しい、とし子さーん、西しい、せつ子さーん〃』

私は呼出しの美声を真似て声をはり上げましたが、節子さんが慌てて止めました。

『洋ちゃん、お止しなさいったら！　そんな大きな声を出したら御近所に聞えるわよ』

『大丈夫よ、聞えはしないわ』

私の家は通りからだいぶ引っこんでいたのです。

『さあ！　貴女達、そこに向い合って蹲み拍手を打つのよ』

俊子さんは悪戯っぽく笑いながら蹲踞の姿勢に入り、着物の袖を



まくって、むっちりした腕を出しました。そしてぽんと大きな音をたてて拍手を打ち両手を大きく拡げてチリをきりました。節子さんも苦笑しながら俊子さんに従います。

『〃かたやー　とし子さんー
　こなたー　せつ子さんー〃』

私は行司らしい勿体ぶった古調で、二人の名前をふれました。

『次はもっと前に進んで向い合って立ち、四股を踏むのよ』

命令する様に言いましたが、これには彼女達も遂に吹きだしてしまいました。しかし俊子さんは意を決した様に

『いいわ、女性はいざとなったら大胆になるものよ、フフフ……』

そう言いながら着物の裾をまくり上げて太股をあらわに出して大きく四股を踏みはじめました。大根脚をどしんと畳につくと、太股がぶるんと震え、はち切れそうです。

『まあ！　俊子さんったら！』

節子さんはあきれ顔です。私は彼女に
『節子さん、貴女も俊子さんみたいに四股を踏むのよ』
命令する様に言いました。節子さんは泣き出したい様な顔をして
『洋ちやんたら、こんな事までさせるの。ひどいわ』
羞しそうに顔を赧めて着物の裾を開いて四股を踏みました。しかし俊子さんの様に威勢のいい四股ではなく、すらりとした長い脚をほんの一寸上げただけでした。
二人は蹲踞の姿勢に入り、向い合って構えました。彼女達は笑いを噛み殺して、お互いに見詰め合っています。
『見合って見合って』
私は愈々二人を合せにかかりました。彼女達は蹲踞の姿勢から再び立上り、足の位置を決め仕切りに入りました。俊子さんは両脚を大きく拡げぐっと腰を落し、むっちりした両腕を前に突きだして低く仕切りました。
『俊子さん、仲々、恰好いいわよ』
私は彼女を冷かしました。一方節子さんは脚の開きも狭く、長身を折り曲げ、長い両腕を殆んど垂直に畳について腹高に仕切りました。ちょうど、競走のスタートの様な姿勢です。
彼女達は可笑しさを耐えて睨み合いましたが、遂にたまらず笑い出してしまいました。
私は二人の仕切りを見比べました。畳に突きだした二人の腕の長さは違いそうです。それだけ、彼女達の足の文数には差があるわけです。何故なら腕（肘から手首まで）の長さと足の裏の長さは同じなのですから…。俊子さんはすでに足袋を脱いでいましたが、節子さんはまだ履いたままでした。
『節子さん、貴女も足袋を脱いで素足でお相撲した方がよくってよ』
私は彼女に足袋を脱ぐ様にすすめましたが節子さんは
『このままでいいわ』
そう言って脱ぎそうにありません。しかし俊子さんも節子さんの足元を見ながら
『節子さん、足袋は畳に滑ってお相撲とりにくいわよ、お脱ぎなさいよ』
とすすめましたので節子さんも仕方なく足袋を脱いで素足になりました。そして自分の足の裏をちらと見ました。彼女は先程の事をやはり気にしている様です。成程、節子さんの十文三分の足の裏は、先程私達が冷かした様にかなりの脂足らしく、赤味を帯びてべとついている様です。畳にべたべた音をたてているのです。私と俊子さんは顔を見合せました。
節子さんはムッとした様子です。
『貴女達、どうして私の足ばかり見るのよ』
『さあ、もう一回仕切り直しよ』
私は構わず二人を促しました。彼女達は再び仕切りに入ります。私は足袋を履いで素足になった節子さんの足と俊子さんの足を見比べました。俊子さんの九文半のむっちりした巾広い足は、太く短い親指が畳にめり込むくらい力が入っているのに対し、節子さんの十文三分の細長い足は、細長く恰好のいい親指が稍、上に反っています。先程からの二人の動作から判断して、お相撲は俊子さんが強いんじやないかと思いました。私は期待で胸がわくわくしてきました。
『さて、畳の土俵上、両女力士は入念な仕切りを重ねております。東方、俊子さんは当年とって廿六才、身長一五〇糎、体重五四キロ足の文数九文半のぼってりしたアンコ型。これに対し西方の節子さんは俊子さんより二つ年上の廿八才、身長一六〇糎、体重五二キロ足の文数十文三分。すらりとした長身でありますす。身長、足の文数に於て節子さんが遙か

に優りますが、体重、足の巾において逆に俊子さんが圧倒しています。果して、この取組何れに軍配上りますか？　大相撲が期待されます。間もなく制限時間一杯、待ったなし、最後の仕切りに入ります！』

私は興奮して、アナウンスロ調で叫びました。彼女達はくすくす笑いながら仕切りに入りぐっと睨み合いました。私は二人の中に割って入りました。

『はっけよいや！』

二人はぱっと立上りました。先ず俊子さんが出足よく押して出ました。節子さんは一二歩後退しましたが懸命に押し返し、二人は激しく押し合っています。しかし腹の高い節子さんは重心の低い俊子さんの鋭い押しにずるずると後退し土俵際（敷居）で懸命に踏み耐え様としましたが、俊子さんが止めを刺す様に最後右腕を伸ばして咽喉輪でぐいと押しましたので、遂にたまらず十文三分の足を部屋の外に踏み出してしまいました。

『押し出し、俊子さんの勝ち！』

私は軍配を東に上げました。

『俊子さんは荒っぽいわねえ』

節子さんは、痛そうに咽喉をさすっています。俊子さんは、悪戯っぽく首をすくめました。

『第一戦はアンコ型の俊子さんの押しの勝利ね、さあ、もう一度仕切って！』

私は再び彼女達を取組ませました。

今度も俊子さんが一歩早く出て又も節子さんを咽喉輪で激しく押したてました。長身の節子さんは苦しそうに顔を仰け反らせて後退しやっとのこと、俊子さんの手をはずして、頭を低くして押し返そうとしました。と俊子さんはいきなりさっと一二歩後退しながら節子さんの肩口を激しくはたいたのです。この奇襲に節子さんは思わず前に泳ぎ懸命に足を送って残そうとしましたが、俊子さんは節子さんの首筋を強く抑えつけ上から覆いかぶさる様にして引き落しました。

節子さんはたまらず畳に両手をついて、ばったり四つん這いになってしまいました。

私はそれを見て思わず吹きだしてしまいました。敗けた節子さんが俊子さんより遥かに背が高いうえに、畳にがっくり膝をついた時に見せた彼女の十文三分の足の裏がとてもおかしかったのです。

『アハハハ、俊子さん、今の決り手は何かしら？』

『ホホホ、肩透しか素首落しのどっちかよ』

俊子さんも口を抑えて笑いながら答えました。節子さんは四つ這いになった自分の姿がさすがに羞しかったらしく顔を赧めて立上りました。

『節子さん、今の恰好は傑作だったわね、貴女は俊子さんより大きいくせに弱いわね。しっかりなさいよ、みっともないわよ』

私は彼女を冷かしました。節子さんも私の言葉にはムッとしたらしく

『今のは畳に足が滑ったのよ、今度こそ負けないわ』

顔を真赤にして答えました。

『じゃあ、始めるわよ』

節子さんは今度は気負いこんで先に手を下しました。俊子さんは自信満々、ゆっくりと手を下し節子さんを睨み上げました。私はさっと軍配を返しました。節子さんは一瞬早く立ち、激しく突張って出ました、やや立ち遅れた俊子さんは思わずたじたじと後退し、懸命に突張り返しますが、突張り合いでは上背とリーチに優る節子さんが有利で俊子さんは次第に追い込まれ、遂に部屋の外へ突出されてしまったのです。

『突出し、節子さんの勝ち！　やっと勝ったわね』

私は節子さんに勝名乗りを上げました。
『節子さんは背が高いので腕も長いわね。突張り合いじゃ、かなわないわ』
俊子さんは痛そうに頰ぺたを撫ぜながら節子さんを一寸睨みました。二人の身長の差は十センチくらいありますので、節子さんの突張りがちょうど俊子さんの顔の辺りに当るのです。これで二人の対戦成績は俊子さんの二勝一敗となり愈々面白くなって来ました。
さて四度目の対戦は……。俊子さんが左四つから猛然と寄って出ました。左を差し右上手を引きつけての俊子さんの激しい寄り身に長身の節子さんは忽ち腹が浮き後退し、敷店際で懸命に打棄ろうとしましたが、俊子さんは左差し手を抜き節子さんの胸をどんと押し体重をつきつけて一気に寄り倒しました。
『寄り倒し！　俊子さんの勝ち』
俊子さんに重ね餅に寄倒された節子さんは腹を打ったらしく痛そうに顔をしかめて俊子さんに助け起されました。
『俊子さんは肥えてるから、寄り身は凄いわね。でも貴女達、もっと四つに組まなきゃ面白くないわよ』
私はいささか物足りなさを覚えました。だって彼女達の激しい投げのうち合いを期待していたのですから……。私は俊子さんに耳うちしました。
『俊子さん、節子さんの首を捲くのよ、首投げで勝負なさいよ』
俊子さんは笑って頷き悪戯っぽく節子さんの方を見ています。
『貴女達は変ね、洋ちゃんは行司でしょう？行司は公平の筈よ』
節子さんは面白くなさそうです。二人は五回目の対戦、仕切りに入ります。俊子さんがぱっと立上り節子さんに組つきました。そして右腕を伸して長身の彼女の首を捲き投げようとしましたが、かえって自分の腰が砕け節子さんに浴せ倒されてしまったのです。節子さんに組敷かれた俊子さんは、まだ彼女の首を捲いたまま残念そうに私を見上げて言いました。
『節子さんは背が高いから投げ難いわね』
『今のは外掛けで節子さんの勝ちね、俊子さん！もっと深く首を抱えこまなきゃ駄目よ』
私は俊子さんにアドバイスしました。私は知らず知らずの間に俊子さんに応援していたのです。私と俊子さんは小学校からの親友でしたから…。
『さあ、これで三対二よ、面白くなって来たわね。さあ見合って見合って』
私は二人を促しましたが節子さんは
『もうこの辺で止しましょうよ、疲れたわ』
もうお相撲は余りとりたくなさそうな様子です。
『駄目よ、これからが本当の勝負よ』
私達は節子さんを無理やり立たせました。
六度目の対戦。二人は四つに組みました。しかし俊子さんは素早く節子さんの首を捲き今度は充分腰を入れて思いきった首投げを打ちました。この強襲に腰の高い節子さんは残す暇もなく、もんどりうって倒れました。
『うわあ！　首投げ！　俊子さんの勝ちよ』
私は思わず叫びました。嬉しくて胸が高鳴るのを覚えました。遂に俊子さんが長身の節子さんを美事に首投げで倒したのです。
『やったわね！』
節子さんはくやしそうに起上りました。二人のお相撲も漸くエキサイトして来たようです。
七回目の対戦…。節子さんはさすが真剣な表情で仕切りました。二人は同時に立上りました。節子さんは懸命に突張って出ましたが出足がともなわず手先だけの突張りには威力がなく、俊子さんに組み止められてしまいま

した。俊子さんは又も節子さんの首を捲き首投げで攻めたてます。節子さんはよろめきながら必死の下手投げを打ち返し、二人は激しく縺れて畳の上に同体に倒れました。

『今のは、私の勝ちだわ』

『節子さんの方が早く手をついたわよ』

彼女達はまだ畳の上で組みあったまま私を見上げ、それぞれ、自分の勝ちを主張しました。私は節子さんの方が僅かに有利だった様に見えましたが取直しを宣言しました。

『洋ちゃんはさっきから俊子さんにばかり味方してるみたいよ』

節子さんは不満そうです。

さて取直しの一番は…。俊子さんが又もや節子さんの首を捲こうと攻勢に出ました。節子さんは組まれては不利と激しく突張って出ました。この必死の突張りに、さすがに俊子さんも飛びこめず逆に敷店際まで後退しあわや敷店を割るかと思われましたが、節子さんが勝ちを焦って足が流れるところ、俊子さんは突張って来る節子さんの手をはね上げ組つき首を捲こうとしました。節子さんはそうはさせじと左手で防ぎ二人は手四つの体勢で睨み合い激しく揉み合いました。節子さんの必死の突張りが一二発当ったのか俊子さんの頬が赤くなっています。

遮二無二首を捲こうとする俊子さんと必死に防ぐ節子さんは暫く揉み合いましたが、俊子さんの力が優っていたのか遂に節子さんは首を捲かれてしまったのです。節子さんは顎を引き首をすくめて抜こうとしましたが俊子さんは、そうはさせじと強引に首を抱え込んでしまいました。そしてすかさず首投げで攻めたてました。節子さんは大きく傾き危く倒れそうになりましたが、必死に下手投を打返し耐えました。俊子さんは右で首を捲き左手を節子さんの帯を上から摑み、上背に優る節子さんは太った俊子さんの胸に頭をつけ双差しで喰い下っています。俊子さんが気合いを掛けて首投げを打ちました。節子さんは辛うじて残しました。私の胸はどきどきと高鳴りはじめました。二人は激しい投げのうちあいを繰返しましたが、私はその時、節子さんが必死に摑んでいた俊子さんの帯が緩んで解けかかったのに気付いたのです。

『あっ！　ちょっと待って！』

私は慌てて二人の中に割って入りました。そして俊子さんの帯を締め直し再び元通りの体勢に組ませようとしたのですが

『今のは途中で中止したんだから、はじめからやり直すべきだと思うわ』

節子さんは取直しを主張しました

『それは違うわ、この場合は水が入ったのと同じだから、さっきの体勢から始めるのが正しいのよ』

私は節子さんに説明しました。俊子さんも

『節子さんずるいわよ。今のは不利な体勢だったからもう一度最初から取直した方がいいと思ったんでしょう。さあ元通り組むわよ』

俊子さんは右腕を伸ばして長身の節子さんの首を抱えこもうとしました。節子さんはムッとしたらしく

『じゃいいわよ』

節子さんは首をさしだし俊子さんの右腕に捲かれ長身を折り曲げて俊子さんの太い腹に抱きついて元通りの体勢に組みました。

私は二人の背中をぱんと叩いて戦斗再開を告げました。再開後、俊子さんは一気に勝負を決すべく強引な首投げで攻めたてました。節子さんは腹を落し右手で俊子さんの膝を払って必死に耐えました。俊子さんは攻撃の手を緩めず執拗に首投げを連発し、最後左で節子さんの右手を抱え込み右腕で強く彼女の首を締めながら大根脚を節子さんの長い脚に絡ませ自ら倒れ込む様な強引な首投げを打ちま

ずと節子さんも遂にたまらず畳の上にどっと倒れました。俊子さんも勢い余って節子さんの上にのしかかって倒れ組敷きました。
『首投げ、遂に決りました。俊子さんの勝』
節子さんは右手を俊子さんに抱えられていたため倒れる時、畳に手をつき体を支える事が出来ずどこか身体を強く打ったらしく苦しそうに呻き声をたてました。私は勝負があったので俊子さんは節子さんを助け起すかと思いましたが茶目っ気の多い俊子さんはそのまま節子さんを抑え込みにかかったのです。五四キロの体重をのしかけ右腕深く抱え込んだ節子さんの首をぐいぐい締めはじめました。ちょうど柔道の袈裟固めの様な恰好です。節子さんは顔を真赤にして必死に跳ね返そうと長い脚をばたつかせてもがいています。俊子さんは私を見上げて言いました。
『洋子さん、レスリングよ、節子さんの両肩が畳についたら私のフォール勝ちよ、よく見ててね』
そして今度は悪戯っぽく笑いながら右腕に抱え込んだ節子さんの顔を覗き込み勝ち誇った様に
『節子さん、これがヘッドロックよ、どお？参った？』
節子さんはくやしそうに下から俊子さんを見上げ、何とか跳ね返そうと必死です。僅かに身体を捩ってフォールを免れています。先程からずっと俊子さんに応援していた私でしたが、今度は節子さんが可哀想に思えてきました。首固めで抑え込まれている節子さんの方が俊子さんより遙かに大柄なだけにです。
『節子さん頑張って！負けちゃ駄目よ』
私は激しく組討ちしている二人の傍え坐り込んで声援しました。その時、必死にばたつかせていた節子さんの十文三分の大きな足が私の鼻先へにゅっとつき出されたのです。私は思わずその足を支えました。節子さんの十文三分の細長い足の裏は、先程からの激しいお相撲で滲み出た汗と脂に畳の汚れがつき、赤味を帯びてべとついていました。その脂足特有の蒸れた様な臭い匂いを嗅いだ途端、私は胸がむかついて来ました。私は思わず彼女の足を離しました。その時、節子さんがすーとすかし屁を出しました。恐らく夢中でだしたのでしょう。或は先程喰べた焼芋のせいだったかも知れません。見れば節子さんは俊子さんの太い腕の中で眼をつり上げてあえいでいます。苦悶の表情です。それもその筈です。節子さんは大柄でお色気のある人でしたが女性的な人でしたから…。
『俊子さん、それまで！ 首固めで貴女の勝よ』
私は漸く二人を引離しました。節子さんは力尽きて、しばらく起き上れませんでしたが漸く身を起し、くやしそうに言ました。
『俊子さんたら、ひどいわ。あんなに強く首を締めるんですもの、もう少しで締め殺されそうだったわ』
俊子さんは悪戯っぽい笑いを浮べながら
『ごめんなさいね、つい夢中になっちゃったのよ』
さすが気の毒そうに謝りました。私はほっとして力の抜けて行くのを感じました。

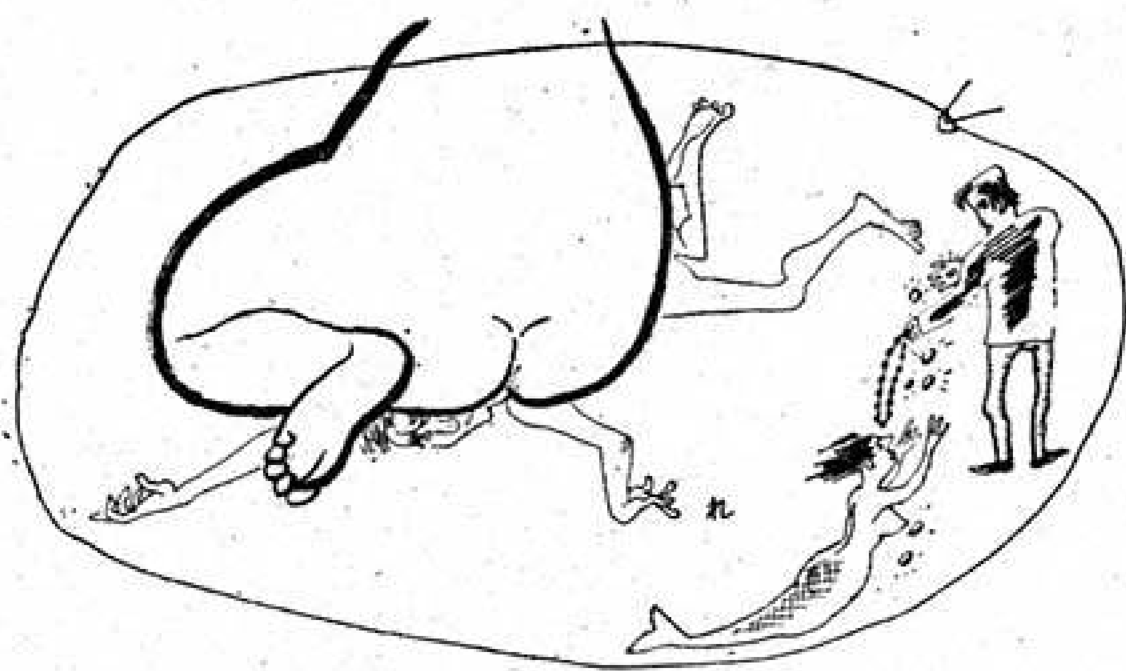
○　○　○

あれから二年、彼女達はそれぞれ結婚し今は会う機会とてございませんが、冬になるとあの夜のお相撲を思い出すことでしょう。
（おわり）

〔急告〕○限定版特別号第一弾から第四弾まで全部売切れました。○サデイズム特集号第一集から第四集まで全部売切れました。○悦虐特集号第一集から第四集まで若干在庫しています。第五集は売切れました。

「女社長様と私」

泉(いずみ) 恵(けい) 輔(すけ)



序

美は万人に尊ばれ崇められます。女性は美の性です。だから女性が男性に君臨するのは当然だと思います。男性は女性に征服され、奴隷として女主人にお仕えするのが正しいと思います。何故なら前に書きました様に女性は美の性だからです。(だから若し私が男性でなく女性としてこの世に生を享けていたとしたら、矢張男性に対する女性サドとして屹度男性を、この私の足下に慴伏させ、奴隷として私に仕えさせるに違いないと思います。こんなことを云うと誠に恐縮ですが、私の容貌は若し女として生れても決して恥しくない位、男性を征服するに足る美貌だと思っています)

特に才色兼備の貴婦人を御主人様として崇め、その奴隷飼犬とされてお仕えするのは、何と素晴らしいことではありませんか!

この点で私は非常に恵まれた幸福者です。このことはこの拙文を読んで頂ければよくおわかりになることと存じます。

序の二

私は特に御主人様の御許しを得て今これを書いています。御主人様は奇譚クラブを毎月とっておられます。そして何時も私を土下座させ、その上に馬乗りになって、私に男性マゾの文だけを読ませられます。私は大声で読みます。少しでも御主人様に聞えなかったりしたら、その美しいおみ足で蹴飛ばされるか

らです。お聞きになり乍ら御主人様は時々
「マアー　世の中にはお前と同じ様な男も随分居るのね、男って本当に情けないわね。美しい女の人には直ぐに征服されて奴隷にされてしまうのね、オホ……、愉快だわ。でも、私程徹底的にお前を服従させているのは少いわね。オホ……、ねェ、お前」
と、その御み足で私の頭を蹴り乍ら婉然と微笑まれます。そして私は机に向って書いているのでありません。床の上に土下座したままの姿勢で書いています。女主人の飼犬である私は、人間なみに椅子に腰をかけることは許されません。私そのものが御主人様の椅子なのです。そして豊満な美しい女主人は私の背に馬乗りになり、その美しいお口に煙草をくわえ乍ら、その白くむっちりとしてたくましいお尻で傲然と私を踏んづけていらっしゃるのです。そうされた服従の姿勢のまま、私はこれを書いています。
私はこの様に常に御主人様の足かお尻に踏んづけられています。御主人様は時々私の書いているこの原稿を馬乗りのままの姿勢でさしのぞかれて、
「マアー　お前ったら、そんなこと書いて！いやな奴ねェ、オホ……」
と美しいお声でお笑いになります。そして私が一枚書き終える毎に、私に読めとお命じになります。私の声が御主人様に聞きとれない時は、その美しい御み足で私の頭を蹴りつけられて、
「なによ、きこえる様に、もっと大きな声で読むのよ、お前、怠けると承知しないわよ」
と云ってお叱りになります。私は恐れ怖き大声はり上げてお読み致します。
又少しでも御主人様のお気に召さない個所があると、私の頭を蹴りとばし、書き直しを命じます。これはこの様にして御主人様に監督され乍ら書いたものです。では、拙文で恐縮ですが、何卒我慢して読んでみて下さい。

○

私の美しい御主人様は、私の妻です。（しかしそれは戸籍だけ）彼女は現在卅一才、私は三つ下の廿八才です。
スラリと長身の彼女は木暮実千代そっくりの美貌と豊満な姿態の持主で、その素晴らしいヴォリュームのあるからだには如何なる男でも完全に圧倒されてしまいます。
私達は彼女が二十七才、私が二十四才の時に結婚しました。
彼女は、彼女の継父（現在既に亡くなっている）が、私の父の経営する会社に勤めていた関係で、女学校を卒えると直ぐ私の家へ行儀見習の為女中に参りました。
私はその時、中学三年生で生意気盛りでした。よく彼女をいじめました。こんなことは始終ありました。
私が学校から帰って、
「美代、ケーキ持って来てくれ」
と彼女に云いつけて私の部屋に入ります。彼女はやがておずおずと入って来て、
「坊ちやま、只今ケーキを切らせていますので家に御座いませんのですが……本当に相済みません」
「バカッ、お前がボンヤリしているから、ケーキを切らせたりするんだ。僕は腹ぺこなんだぞ」
と云うや否や彼女の顔をなぐりつけ、
「そこへ土下座してあやまれ！」
と云ってそこへ土下座させ、その肩を蹴りました。彼女はおそるおそる床に額をすりつけて、
「坊ちゃま、どうぞ御赦し下さいませ」
と云って涙を流し乍ら謝りました。私が
「よし、許してやるから早く買って来い」
と云って、ひれ伏しているその頭を蹴り上

げますと、彼女は急いで
「ハッ、ハイ」
と怖き乍ら、ケーキを買いに走り去って行きました。やがて彼女は息を切らせ、汗を流し乍らケーキを皿に載せ、大急ぎで持って参りました。私はそれでも、
「バカ！　何をグズグズしていたんだい。早く持って来ないか」
と云って亦彼女を蹴りつけました。そうして、
「さ、早くコーヒーを持って来い」
と云って、その頬をまたもなぐりつけたりしたものです。
ああ、それが、今ではその立場はすっかり逆転してしまって、私が彼女にこき使われています。私が彼女に対してやったことより、もっともっとひどくあつかわれ、彼女に対して私は絶対服従させられているのです。
これも当初は、私が昔彼女を虐待したその罰だと思って諦めていましたが、御主人様の訓練で、今では本当の奴隷根性になってしまって、彼女よりの虐待を甘んじて受けています。それどころか、彼女に飼われている家畜として、その日その日を楽しく送っているのです。そりゃあそうです。女ながら頭脳、体格、腕力、度胸、容貌その他あらゆる点に於て男であるこの私よりも数等勝っているんですから、彼女が女王としてこの卑しい意気地なしの私の上に、君臨されるのは当然なのです。
さて、彼女は頭が良いので、私の両親に可愛がられ、タイプライティングや英語を勉強にやって貰い、二十一才の時に私の父の秘書として、父の会社に入りました。勿論、両親は今迄通りずっと私の家の女中部屋に置いて通勤させました。私は、現在その女中部屋を御主人様に頂いて下男部屋としてそこに寝起きしています。
私は二十三才で、ある私立大学を卒業すると父の会社に入りました。
その翌年父が自動車事故で急死、私はその跡を継いで二十四才の若さで社長に就任しました。勿論彼女は私の秘書となりました。そしてその年に二人は結婚しました。
しかし、何しろ綺験も浅い坊ちゃん育ちの私は、忽ち事業に失敗、邸も抵当に入ってしまいました。
そこで、母や美代子（彼女の名前です）とも相談の結果、十年近くも父の秘書として働き、経験豊富、しかもその上才気煥発にして男まさりの美代子が社長になりました。私は彼女の秘書としてその下で使われることになったのです。
彼女の手腕は忽ち会社を復興させ、もとの数倍の大をなすに至りました。勿論邸は彼女の力によって返って参りました。そして彼女は姑である母に対しよく仕えました。だから、彼女に対して母はいつもよろこびで感謝していました。その母も、一寸した怪我がもとで遂に不帰の客となってしまいました。それは、私の二十六才の時でした。報恩の念のあつい彼女は母の葬儀を盛大にやってくれました。そして父母の墓詣りを絶えず私を連れてなさいます。墓へは日曜日によく行きますので、第四章日曜日に書きます。
会社では、私はへまをして、社長である彼女によく叱られました。そのうち、彼女は私に、
「あなたは仕事は駄目ね、社長秘書を解任するから、家で留守を守っていなさい。」
となって私を解任、その後任に彼女の義理の兄を置きました。彼は彼女の亡父の先妻の子です。（彼女の母は、妹娘の美智子を親戚へ養女にやり、姉娘の彼女を連れて再婚したのです）彼も亦彼女の母即ち彼にとっては継

母の奴隷となっています。

　私は彼女に買って戴いたエプロンをして掃除、洗濯、炊事と女のする仕事を全部やらされました。丁度夫婦の位置が逆になったのです。そして、翌年私が二十七才になった時、

「あなたは、私の夫としての価値がないからこれからは毎日奴隷として使うわ。ねェ、奴隷よ、どう、それで御不満？」

　私は、その前の年から何でもハイハイと服従を美徳として強いられているので、

「ハイ、どうぞそう御願いします。」

　と云うと、

「では、これから私はあなたの主人で、あなたは私の家来になるのよ。だから、これからはあなたを私はお前と呼びすてにするわよ。お前は私のことを御主人様と呼ぶの、わかって？」

「ハイ」

「じゃ、そう申しますって、私の足もとにひれ伏して誓いなさい」

　私がぐずぐずしていると、

「さ、何をぼやぼやしてるの」

　と云って、私の襟首をつかんで引き倒し、私の頭を床の上にすりつけさせ、その上をその美しい足をつつんだハイヒールで押えつけました。私は、

「ハッハイ奥様、御主人様と申し上げます」

　すると御主人様は、やおら私の頭から足をあげ、

「それから、私に対する言葉遣いに充分気をつけるのよ、主人に対する言葉づかいをを忘れちゃ駄目よ、最上級の敬語を使うようにするの、わかって？　若し私に気に入らない様な言葉づかいをしたら、ひどい目にあわせるわよ」

　完全に威圧されて、

「ハイ、御主人様」

　とお答えした私は、我知らず御主人様の足もとに頭を床にすりつけ、低く低く平伏していました。その完全に慴伏せしめられた哀れな私の姿を悠然と見下した御主人様は、満足された様子で、

「よし」

　と云い乍ら、その床の上の私の頭をぎゅっとそのハイヒールで踏みつけました。

　これで彼女の戴冠式、私にとっては、これから死ぬ迄一生彼女の奴隷として服従させられる誓約式は了ったのです。

　ここに於て、私達の夫婦という関係は全くの有名無実となり、その関係は女主人とその女主人に酷使される奴隷という風に変ったわけです。

　そして最初は、彼女と私とは主人と奴隷との関係に変えたのだということを、私の頭にしっかりと植えつける為に御主人様はよく私に、

「私はお前の何なの？」

「ハイ、御主人様です」

「では、お前は私の何？」

「ハイ、御主人様に忠節を尽す奴隷でございます」

　と云わせました。

　そして最近では、それが次の様に変って来ました。

「私はお前の何なの？」

「ハイ、神々しい御主人様でございます」

「じゃ、お前は私の何？」

「ハイ、今では、御主人様に飼って戴いています卑しい家畜でございます」

「そうー、何時もそのことを忘れず、御主人の私に忠勤を励げむのよ。わかったわね」

　とおっしゃいます。そうです、私は今では彼女の家畜になり下っているのです。

　私が、この様に彼女の家畜になり下る迄には、あの彼女の戴冠式から一カ月もかかりま

せんでした。彼女の才智と腕力は、私を自分の忠実な家畜に仕込むのに僅か一カ月で充分だったのです。彼女は自分が私の上に君臨している写真を私が炊事をする台所や、食堂・応接間等に大きく引き伸し額に入れて掲げさせました。これは、私が常にその写真を見て知らず知らず心より彼女に服従する気持にさせる為のものです。そしてその写真は、私が御主人様にお仕えする日常生活そのままを撮ったものです。

私の一番目につき易い台所には、御主人様が私を連れてお庭を散歩していらっしゃる時の御写真が掲げてあります。そしてその御主人様の長く美しい足もとには鎖で繋がれた私が四つ這いになって這っています。そして豊満な御主人様は優しく微笑んでスラリと立っていらっしゃいます。

もう一枚は御主人様がベッドに腰かけたお写真で、その投げ出した御主人様の美しい素足の指の股には御主人様の美しい歯がたのついた美味しそうな喰べ残しのビスケットがはさまれています。私はその下で四つ這いになってそのビスケットを頂いているのです。

そして応接間には、主人が椅子にかけ、私がその前に土下座している写真で、御主人様の豪華なハイヒールは私の頭の上をおさえています。

もう一枚は御主人が、その長身をすっくと立たせていられます。そしてナイロンのストッキングがぴったりとくっついた美しい御み足には素晴らしいハイヒールをはいていらっしゃいます。そしてお腰に手を当てがい、煙草を喫み乍ら、矢張土下座している私の首筋を、その美しい御み足で踏んづけていらっしゃる御主人様の御好きなポーズ。そしてその勇ましい御主人様のお姿は後光がさしている様に美しく見えるのです。

又一枚は、私の口に手綱をくわえさせ、片手に鞭をお持ちになって馬上豊かに私の背に跨がっていらっしゃる御主人の英姿。その御主人の堂々たる馬上姿にひきくらべ、その偉大なるお尻に敷かれているその馬のなんとみすぼらしく小っぽけに見えることよ！　この写真は私の顔がよく見えていますので、久し振りに訪ねて来られた主人の女友達等は、その写真を見て主人によく、

「マア！　素晴らしい、貴女、立派ね、女王様の様だわ」

と云い乍ら、その写真の下に行って写真の私の顔をよく見て、びっくりした様に、

「アラ、この馬になってらしっしゃる方、貴女の御主人じゃないの、マア、あきれた、これどういう意味？」

「その写真の通りの意味よ、つまり私が主人で、これが私の乗馬という意味よ」

と云い乍ら、御主人様は私の方をあごでしゃくります。

「よくのみこめないわ」

「そりゃ、そうよ、実はね、私、こいつが男のくせに余り意気地なしだから、私の奴隷にしてやったの、こいつたら、そりゃ喜んで奴隷になったわ。だから毎日私、こいつを奴隷としてこき使ってやってるのよ、そりゃ忠実に働くわよ、私の命令には絶対服従なの、だから私とこいつが夫婦なんて戸籍上だけのことよ。」

「マア、そうォ、随分変っちゃったのね」

と感嘆の声を上げています。

「そして、私の厳しい躾けで、それ、この写真の様にこいつは私の奴隷で、乗馬で、飼犬になり下ってしまったのよ、まだ台所には私がこいつを犬にして、くさりをつけお庭を散歩している写真や、私が食べ残しを足の指の股にはさんで、こいつに食べさせている写真だってあるのよ、こいつたらね、そのビスケ

ットをとてもおいしそうに喰べるのよ、どう？愉快でしょう？」

という様な会話が交されることがあります。又、主人の母が自分の奴隷（義理の息子）を連れて来られ、はじめてこれを御覧になった時は、

「マア、いいわね、私もこいつに毎日見せつけて置く様にこんな風に写真を撮って貼って置くわ、オホ……」

と煙草をのみ乍らお二人で声を合せてお笑いになります。その時は男二人は勿論ふかぶかとアーム・チエアに腰を下したそれぞれの女主人の足台として、土下座しその頭の上にはそれぞれハイヒール、草履がのっかっているのです。

それから食堂には、私が床の上に腹這いの恰好で平たく伸びている私の背に御主人様が跨り、両足の甲を踏みつけて動けぬ様にし、その御手に革のスリッパを持って私の頭を打ってお仕置している写真

他の一枚は、鏡の前に土下座している私の首ねっこに打ち跨り、床の上に万才した恰好の私の両手の甲をその美しい両足でしっかりと踏んまえてお化粧なさっている御姿、

これらは皆私の女主人に対する絶対服従の意味の写真です。いやでも毎日それらを見せつけられている私は忽ちにして絶対服従を徳として私の心底深くたたみ込まれてしまったわけです。それに加えて、私よりもすぐれた腕力を持つ彼女は、私の一寸した口返答や不満顔も許さず、その腕力をもって瞬時にこの私を慴服させしまうのです。

この様に私は一月足らずの短時日のうちに心の底からこの美貌の女主人の忠実な飼犬になり下ってしまいました。

私の額は常に床か地面の上についており、頭は常に女主人の御み足の下に踏みつけられて居ります。ですから私の額は固くなり、後頭部の御み足ののせられる個所は、毛が少し薄くなって来ています。私の頭が御主人様の足の下にない時は、それは必ず女主人の股の間に挟まれている時です。これが私の死ぬ迄続けられる私の楽しい日常の生活です。

だから最近では、私の御主人様からその御み足で頭を踏んづけられたり、その他色んな屈辱的なことを強いられたりすることを一寸も不思議とは思わなくなりました。御主人様に飼って戴いている犬だから、そうされるのは当然だと思っています。

私はこの美しい女主人のスラリとのびた美しい足で頭を踏まれ、それこそきゆうっと胸をしめつけられる様な感激で、その足下にじつとうずくまったまま美の権化の様に美しくそして驕慢無比の素敵な女主人に毎日甘えているのです。故に私のこの隷属の日常生活は幸福そのものなのです。

扨、この章をおわるに当って私は読者諸姉にお願いがございます。

私を貴女の飼犬として飼って見度いとお思いの方は何卒御便り下さい。私の御主人様が御出張で私の体が空く時でしたら、御主人は必ず私が貴女のお傍に参ることをお許し下さいます。何故なら御主人様の御出張の時は私の代りに秘書を連れて行かれますし、それに度量の大きい御主人様は常に、

「私だけでなく出来るだけ多くの女性サドの方に色んな方法でお前を訓練して頂き度いものね」

と仰有っています。ただ御主人様は私の体が傷つくことを大変嫌われますので、そのことがない限りどなた（女性）にも必ず貸与なさいます。現に御主人様の御出張の時には、私は何時も御主人様の友人（未亡人）のもとへ連れて行かれ、御主人様が出張先より御帰りになる迄そこで飼われます。

幻想的小品

オードビー・デビル（悪魔の酒）

芳野眉美

ぼくは一息に飲んだ。苦蓬のあとにグレナデンシロップがねっとりと甘かった。バーの照明はまだつけられなかった。なんとなくぼんやりと薄明かるかった。

「チェサー（添水）」

とマダム麻阿に手渡されたタンブラーは妙になま暖たかかった。

「これはー」

「ファンタジック・ゴールド・リキューア、又はオードビーデビル・ホワイト」

「――」

「メルシイ・マーム」

マダム麻阿の、ぼくへの誕生日のお祝なのだ。

そこだけが明かるく、風は無いと見えたがアブサンの青白い炎は大きく左右に別れた。マダム麻阿の吐く息の道かと思われた。たちまち強烈な苦蓬の芳香がせまい密閉されればーにたちこめた。マダム麻阿の強烈な体臭であった。

やがて火が消えた。

「お飲みなさい」

プースカフェグラスに、グレナデン・シロップ、グリーンメント、ホワイト・キュラソーと混ざらぬように静かに注いで、バー・グリンデビルのマダム麻阿はふと笑った。赤、緑、白と見事に分離されて虹の様に色彩が美しい。チェリイブランデーを注ぎ、最後にブランデーではなく、マダム麻阿はアブサンをフロートさせて火をつけた。と、バーの照明が消えて、アブサンの青白い炎にマダム麻阿の恐ろしく透明な顔が浮かび上った。

「マユ、お誕生日おめでとう」

「妾がこしらえたコクテル、チェサーのかわりにお飲みなさいな」

とマダム麻阿は静かにいった。

その時バーのドアが開いて、室内の照明がつけられた。いつもの五十年配の客であった。お互に軽い会釈をかわした。続いてまた一人、二人、三人と、このまねき猫はたちまち客を呼んだ。ふと気がつくと、眼の前のカウンターには、グレナデン・シロップがわずかに底に残ったプースカフェグラスと、薄いコップに冷たい添水が置かれてあった。ファンタジック・ゴールド・リキユーアはどこにも無い。



「ねえ、マーム」

とぼくはおもわず叫んだ。

「マームがつくったカクテル」

「なんのこと」

と新しい客たちを応待していたマダム麻阿がびっくりして振り返った。

「妾が何をつくったって?」

「カクテルさ」

「カクテル?」

「そうさ、暖かいお酒」

「暖かい――?」

「マダム、ドブロクでカクテルをつくったのかい」

と客の一人がいった。

「俺にも飲ませてくれよ」

「いやですわ」

と、その客にしなをつくって、ぼくをにらんだ。

「マユ、夢でも見たの」

「夢――?」

「おかしな子」

ぼくはブランデーグラスを手で暖めながらコップの添水をしばらく見つめていた。

「夢、へんだな」

「へんじゃないさ」

とぼくの側で誰かがいった。いつのまにか一人の男がぼくの横に坐っていた。その顔に見憶えがあった。

「誰だったかしら?」

「誰でもいいさ」

「そう、誰でもいい」

ぼくは頷いた。

その男は、グリーンの三角帽をかぶっていた。子供と間違えられそうな小男であった。顔はくしゃくしゃであり、小さな顔の割に眼も鼻も唇も部厚く大きかった。男はつと透明なガラスの大皿に盛られたグリーンのキャビアのカナソペをつまんだ。その手の指はやけ

に細く長く、爪がまた恐ろしく鋭くとがっていた。どうみてもこのバーの客というタイプではなかった。
「おかしいな」
とぼくはつぶやいた。
「四組の客のあとドアは開かなかったぜ」
「開かなかった」
と、その男は頷いた。
「お宅のことだぜ」
「そう、俺のことだ」
「いやになるな、どこから入ったの」
「壁」
その男はグリーン一色の、絵も写真もメニューも何も無い、バー・グリーンデビルの壁を指さした。ぼくは肩をすくめた。俺はまだ酔ってはいないぞ。
「グリーンメントフラッペ」
とその男はバーテンに注文し、それを一息に飲むと、
「グリーンミヤトリユーズフラッペ」
と同じ口調でいった。
「グリーン、グーリーン、グリンか」
とぼくはつぶやいた。男はまたグリーンの三キャビアのカナッペをつまみ、グリーンの三角帽をたたき、服をつまんだ。背広とは思えない裾のせまい不思議な服も、その奇妙な先のとがった短靴もグリーン一色であった。その服や靴にも見憶えがあった。
「グリーン、グリーン、グリーン」
と調子をつけて、その男は笑った。それから、まだバーにたちこめているアブサンの香をかぎながら、
「マダム麻阿の体臭だ」
とうっとりとつぶやいた。ぼくは頷いた。なま暖かいチェサーがよみがえった。
「しかし、へんだな」
「へんじゃないさ」
と、その男はさっきと同じことをいった。
「ファンタジック・ゴールド・リキューア、又はオードビー・デビルホワイト」
「それだ、お宅は知っているの」
とぼくは叫んだ。男は静かにいった。
「オードビー・デビルには、ホワイト、レッド、イエローの三種がある。酒精度はレッド、イエローのほうが強烈だが、ホワイトはその香味に於て絶無だ」
「ぼくはそのホワイトを――」
「飲んだか」
「一口」
「どうだ」
「わからない。気がついた時には飲んでいた」
「そういうものだ」
「もう一度静かに味合ってみたい。ああ、急に飲みたくなった」
男は何度も大きく頷いた。
「ファンタジック・ゴールドリキユーアは、適度のアルコール分を始め、タンサンガス、糖分、蛋白質、アミノ酸、ビタミンB_2、ニコチン酸など、大切な栄養分が多量に含まれており……」
「どこかで聞いたことがあるぞ」
「そう、ビールのコマーシャルだ」
「勝手にしろ」
ぼくはヘネシイのVOを一息で飲んだ、男はみにくい顔をゆがめて笑った。
「アルテル、スリースターでいいよ」
とぼくは乱暴にバーテンに注文し、LMを口にくわえた。
「アブサン・フラッペ」
とその男はにやにやしながらゆっくりバーテンにいった。
「そう怒りなさんな、ビールも関係の無いことはないんだから」
とぼくの肩をなれなれしくたたいた。

「そのゴールド・リキユーアの原料は」
とぼくは気を静めて聞いた。
「君は知っているよ」
「えっ」
「誰でも知っている」
「いや、俺は知らない」
「気がつかないだけだ」
「どこが産地だ」
ぼくはまた次第に腹が立って来た。いいようにに酒の肴にされているじゃないか。
「君は知っているよ」
と、その男はまた同じ事を繰り返した。
「近くか」
「近いよ」
「どこだ」
「どこにでも」
「どこにでも——」
「ゴールドリキユーアは休むひまなく大量に生産されている。全世界で生産され、世界最大の産額なのだ。しかし——」
「しかし——」
「そう簡単には飲めない」
「飲めないだと」
「限られた人間だけだ」
男はにやっとした。
「わずかに」
汚れた黒い歯であった。歯並も目茶目茶であった。奥の一本がやけに長く鋭くとがっていた。真赤な舌が話す度に蛇のようにちょろちょろと走った。無気味なその光であった。
「発芽缶、仕込釜、沪過槽、煮詰釜、醗酵槽を通って貯酒タンクに貯蔵され、やがて—」
「またビールの宣伝か」
「例え話さ」
「はっきりいえ」
とぼくは叫んだ。
「どこでつくられる」
「女体」
「えっ?」
「女体」
「——」
「ファンタジック・ゴールド・リキユーア、又はオードビーデビル、俺がつくった酒の中では最高のものだ。なかでもホワイトは、神がにくんだ芸術品だ。神がつくったネクタールも影が薄い」
「なに、お宅がつくったと」
「俺はそれを麻阿の体内でつくった」
一瞬バーの照明が消えてアブサンの青白い炎ががガラスの洋酒棚から、グリーン一色の壁から、黒いカウンターからいっせいに燃えあがった。その青白い炎の中に、真白なマダム麻阿の裸身が浮かびあがった。黒い長い髪がわずかに前をかくしていた。男はいきなりアブサンをマダム麻阿の肌にかけた。
「貴様は誰だ」
「グリーンデビル、このバーの主さ」
「アブサンをつくった悪魔だな」
「そうだ。アブサンの伝説を君が知っているとは感心した。天国を追われ下界に落ちた俺はあるフランスの修道院の僧たちにアブサンの製法を教えたのだ。くだらない読経なんかやめてしまえ、それよりもっとボロイ商売を始めたらどうだと。さあ、苦蓬を浸した酒を造れ、この酒を飲むと酔心地は歓楽の極地に達するのだ。アブサンは全世界を征服した」
「うそつけ。多量に常用すると、恐ろしいアブサンティズムという酒精中毒になり、フランスはもとより、イタリースイスで禁止されていらい、グリーンデビルは世界的に放逐されたぞ。今では世界的に有名なアブサンメーカーペルー社でも、アニゼットの同原料をつかっている。そのラベルにも、リキュールドアニスと明記してある」
「そのとうりだ」

と悪魔は笑った。
「アブサンはカモフラジーにすぎないのだ。アブサンは問題ではない」
「なんとでもいえ」
「俺のための芸術品をつくるための刺戟にすぎない」
客たちの笑い声がして、マダムと客たちの間のダイスのかけが終ったようだった。勿論マダムが勝ったのだ。いつもの静かな微笑をたたえた麻阿がそこに居た。
サムテーラーのハレムノクターンのゆるやかな旋律が続いていた。
マダム麻阿がつとカウンターから出て化粧室のドアを開けた。と、マダムより早く、グリーンデビルは化粧室に入ると、その白い便器の中に姿を消した。化粧室のドアが静かに閉じられた。
みるまにバーグリーンデビルはフランスの古いシャトーとなり、ルイ王朝時代の服もあらわな豪華な夜裳をまとったマダム麻阿が、手枷足枷をはめられ、鉄鎖で縦つなぎにされた囚人たちに黒い皮の鞭をふるって責めたてていた。その囚人の一人に見憶えがあった。
「あれが君だ」
と悪魔がいった。
その囚人、いやぼくは、しきりに水を求めていた。革鞭の下で、水、水、とひくく長くうめいていた。
「マア白爵夫人だ」
と悪魔がまたいった。
「ファンタジック・ゴールド・リキューア、又はオードビーデビル・ホワイトを美しい白爵夫人は君に飲ませてくれるだろう」
「水が飲みたいと」
と白爵夫人は興味あり気に笑った。
「囚人のくせに水が飲みたいと」
「水を」
とぼくはあえいだ。
「ここへ連れておいで」
とマア白爵夫人は黒い奴隷に命じた。その黒人にも見憶えがあった。バーの洋酒場に坐っているクロンボの人形であった。クロンボはぼくの鎖をはずすと、乱暴に白爵夫人の前にぼくを突きころばした。
ぼくの顔がマア白爵夫人の裾に触れた。
「けがらわしい」
夫人の足がぼくの顔をけった。ゆっくりとぼくの顔を踏みにじった。
黒い奴隷が白爵夫人の華麗な裾を静かにひろげた。夫人のまっ白な足が、左右に開かれた。その足の間にぼくの顔があった。この光景にも記憶があった。フランスのある好色本の挿絵であった。その好色本によると、貴婦人の用を足すのは全て奴隷の仕事であった。奴隷の口とその舌であった。ぼくはマダム麻阿の一個の便器にすぎなかった。
悪魔の笑い声がして、シャトーがふと消えた。
どこまでも白い壁であった。その白い壁に黒いぼくの影が月光に映えて動いていた。ぼくは悪魔と並んで歩いていた。しかし、影はひとつであった。悪魔に影は無かった。ぼくはふと立ち止った。
「思い出したぞ」
と、ぼくは叫んだ。
「お宅をフランス映画と童話の本で見たんだよ」
裸にされた少年が真黒いなめし皮のコルセットを着せられ、まるで荷物でも縛るように転がされて二人の女に背中の紐をしめられているのだ。少年の苦しそうなうめき声が聞こえた。
「あれも君だよ」
と悪魔がいった。
「俺だと」

「そう、君さ」
「俺はあんな少年じゃない」
「少年だよ」
と悪魔はすまして答えた。
二人の女の顔を見てぼくははっとした。マダム麻阿とウエイトレスの麻美であった。バーグリーンデビルの、和服のいつもの麻阿であり、スポーティなハイティーン・スタイルがよく似合ういつもの麻美であった。
「ベッドがあるぞ」
とぼくは叫んだ。
「麻阿の寝室さ」
と悪魔はまたすましていった。
夫人のベッドに仰向けにころがらされた少年、いやぼくは、手足をベッドの足に縛りつけられた。
「クラレット（赤葡萄酒）になりそうなのよマユ」
と麻阿夫人がいった。
「マユ、クラレットは体温で呑むものよ」
和服の裾がぼくの顔にひるがえった。と、黒い眼かくしがふわっとぼくの眼を鼻をおおった。その眼かくしはやわらかく、暖かくほのかなしめりが感じられた。麻阿夫人の黒い下穿きかと思われた。

「妾の葡萄をしぼってあげる」
やがて、一粒々々の葡萄から真赤な汁が一滴々々とぼくの口にしたたった。
「最後に、オードビーデビル、イエローだ」
悪魔の笑い声が次第に大きくなり、ふっと消えた。
「マユ、風邪をひくわよ」
はっとしてぼくは眼をさました。
「いつのまにか寝ちゃったのね」
客は誰も居なかった。いつもの静かなバーグリーンデビルであった。
「夢か？」
「あら、夢を見ていたの」
「うん」
ふっとマダム麻阿が微笑した。
「夢でね」
とぼくはいった。
「ファンタジック・ゴールド・リキューア、又はオードビーデビル・ホワイトとレッドを飲んだんだ」
「なあに、それ」
「なんでもない」
「おかしなる」
ぼくはマダム麻阿のグリーン一色の和服を見つめた。吉祥天女の様な豊満な肢体であった。現実にマダム麻阿のお酒を飲んでもいいなと思った。誰も知らない、ぼくだけのお酒であった。グリーンデビルに許された酒であった。
（奴、そう簡単には飲めない、と、いいやがった）
事実であった。近くにありながら、誰もが無用の捨てるものでありながら、飲みたくても飲めないものであった。
誰が理解しょう。
（奴め、俺を苦しめる気だな。俺は逃げないぞ。アブサンティズムになってやる、毎日味わってやる）
「何をぼんやり考えているの？」
と、マダム麻阿がいった。
「麻美は？」
「お食事」
「もうそんな時間？」
「そう、マユはよく寝たわね。起すのがかわいそうだから、そのままにしておいたの」
「ねえ、マーム」
と、ぼくはいった。
「なあに」
「お願いがあるんだけどな」
「お願って」

マダム麻阿がまたふっと微笑した。
「オードビーデビル・ホワイトを飲ませてくれないかな」
「なあにそれ」
「マームがつくったお酒」
「――」
「レッドでもいい」
「わからないわ」
「なんでもない」
「おかしな子」
「オードビーって、ブランデー又はアルコールのフランス語でしょう」
と、バーテンがいった。
「悪魔の酒って意味ですか」
「悪魔の酒、ああ、ここがグリーンデビルだから」
「なんでもないんだよ」
と、ぼくはいった。
「飲ませてあげようか」
ふっとマダム麻阿が微笑んだ。と、夜がドアを開けて狭いバアーに浸入した。白い洋酒棚もグリーンの壁も黒いカウンターも夜にとけた。夜、夜であった。
犬の首輪をはめられたぼくは、かかとの高い草履をはいた麻阿夫人にひかれて夜の街を歩いていた。犬は、いやぼくは、たまに草履を舐め一声ほえた。
高級住宅街であった。石の塀の間の石畳を歩いていた。どこをどう歩いたか、他に足音は無かった。街灯も暗く空に星は無かった。夜、夜だけであった。
高級車が並んでいる一角の家に麻阿夫人は消えた。サロン内の広間であった。大勢の貴婦人たちが笑いさざめいていた。その顔に見憶えがあった。映画で見た顔であった。雑誌のグラビアで見た顔であった。貴婦人たちの足元に一匹づつ犬がうずくまっていた。その犬の顔はどれも同じであった。どの犬もぼくの顔であった。
サロンの壁はグリーンであった。ダリとかミロとかシュールレアリズムの絵に混ってギリシャの戦士の彫刻が置かれてあった。
貴婦人たちはカクテルを、ビールを、ジュースをのみ、それが体内で温められ貯蔵されると、足元にうずくまっている犬たちにあたえられていた。犬たちが首をもたげて飲んでいる間、貴婦たちはいつもと変らぬ表情で話を続け、たまに犬の首を撫でたり、激しくぶったりした。
麻阿夫人は足袋を脱ぐと、左足の指をぼくの口に押し込んだ。足袋を脱いだばかりの足は、むれた異臭が苦蓬の芳香を思わせた。麻阿夫人の体臭であった。足の先にまで浸込んだ馥郁たる匂いであった。
麻阿夫人の右足はぼくの頭を踏んでいた。
ぼくは麻阿夫人の足の指を一本一本口に含んで舌の上に転がした。足の爪は赤く美しくマニキュアされていた。軽くころがし、やわらく咬んだ。麻阿夫人はいつまでもぼくの口から指を抜こうとしなかった。濡れて舌の動きがにぶくなると、麻阿夫人は足の拇指を無理に押し込み、頭を床に乱暴に踏みつけ押しつけた。口全体がだるくのどがかわき、あごが痛んだ。つばはやたらによだれとなって流れた。麻阿夫人はぼくの口を足の指でこねりまわし、いきなり鼻をつまんで口を開けさせると、ぼくの口に軽くつばを吐いた。
ボーイが、三オンスのワイングラスに、砕氷をつめ、ホワイトメンドとブランデーを注いだカクテルを運び、麻阿夫人のテーブルに置いた。
「ダイアナです」
麻阿夫人はゆっくり頷いた。
麻阿夫人はワイングラスを手にとると、足をわずかに開いてぼくを促した。

「マユもお呑み」

――

「マユったら」

ぼくははっとした。

「また寝てしまったの」

「そんなに眠たいの、あきれた」

「いや」

と、ぼくは首を振った。

「へんだな」

「どうしたの、マユのほうが、よっぽどへんよ」

バーテンも麻美を笑っていた。スローテンポのボレロが高く低くうねっていた。

「今日はひまね」

と、マダム麻阿がいった。

「ブリッジでもしましょうか」

ぼくはカウターに乗り出してマダムの足をのぞいた。

「どうかしたの？」

「いや」

「おかしな子」

何回目かのマダム麻阿の言葉であった。ふとマダム麻阿の手の中のジョーカーを見てぼくはあっと声をたてた。グリーンデビルであった。悪魔であった。あの男であった。

その男はぼくを見てにやっと笑った。

（おわり）



「長篇SM小説」

宇宙のどこかで

＜或る混血老婦人の話＞

佐治麻造

或る混血婦人の話　（七）

占領軍司令部に着いたエヴァは、駐車を誤ってMPに咎められたが、彼女が嫣然と微笑して見せるとMPは頬をゆるめて黙認して呉れた。ハーマン大佐は何故か会おうともせず、小部屋で暫く待たされたエヴァは心中おだやかでなかった。帰ろうと立ち上った途端二名の婦人憲兵が入って来た。

「エヴァ・島津。元合州国市民エヴァ・ローレンスね？　連邦検察局から逮捕状が出てます。理由は叛逆罪容疑。逮捕します」

「ああ、そ、そんな!!　ここは合州国の領土じゃないでしょ。それに私の国籍はもう……」

背後から両肘を握られて両手に手錠を嵌められ乍らエヴァは必死に抗弁した。高いハイヒールの片足が脱げてよろめき乍ら、エヴァの全身の血が冷たくなった。

「馬鹿をおいいでないよ。この建物の中は合州国の領土なのよ。フ、フ、さ、おいで」

ナイロン・ストッキングの片足で脱げたハイヒールの片方を探って漸く穿いたエヴァは背中を押され腕を抱えられて廊下に出た。連れて行かれたのは地下の留置場であった。頭の先から足の爪先迄、婦人憲兵のきびしい検査を受けてエヴァは、パンティー一枚だけを着けて独房に突き入れられた。床に崩折れた彼女の頭上で鉄格子の扉がガチャーンと閉められカチンと錠が下りた。永いことそのままうずくまって居たエヴァは、やがて鉄格子にしがみついて狂った様に叫んだ。

「出して……出してよ。お願い!!良人と坊やに会わせて下さい」

しかし頑丈な鉄格子は微動だにせず、彼女の声は細長い独房のコンクリートの天井や壁にこだまし、ひっそりとした独房区画の通路にうつろに響くのみであった。与えられた夕食も全然のどを通らず一睡も出来なかったエヴァの両頬は一夜にしてげっそりと細った様だった。翌朝九時頃、独房を曳き出されたエヴァは再び衣服を着けて身繕いすることを許された。

赦されるのかと思って、いそいそと抱えようとしたハンドバッグを、婦人憲兵が押し黙ったまま取り上げ、そしてもう一人の婦人憲兵が手錠を振り上げてエヴァの右手を握った。絶望に打ちひしがれたエヴァが、行き交う将兵達にジロジロ眺められ乍ら連れ込まれた一室では私服を着た二人のきびしい顔立ちの婦人が待って居た。

「エヴァ・ローレンスです。引き渡します」

豊かな金髪をピッタリと締めて結い上げた婦人が頷いて立ち上がり、婦人憲兵はエヴァの手錠を外して背中を押した。

「両手を挙げて」

きびしくいわれたエヴァはのろのろと両手を差し上げ、金髪の婦人はドレスの上からエヴァの全身を押えて調べた。

「大丈夫ですわよ。ピン一本持ってやしませんわ。これにサイン願います」

もう一人の小柄な赤毛の婦人がエヴァを見やり乍ら、サインして婦人憲兵に返した。

「よし。両手をおろして……背に回して……」

エヴァの背後に立って金髪の婦人が、そう命じてカチカチと何かを取り出した。

「又、手錠だわ。後ろで嵌めるなんて……」

溢れる涙を押えようとするより早く、エヴァの両腕は背後にしごかれて冷たい手錠が両手首にガッチリと嵌められてしまった。

「さあ、行くのよ」

金髪婦人に右腕を抱えられて、エヴァは中庭で自動車に乗せられた。踏み出す両足が宙を踏む様であった。エヴァを真中に挟んで二人の婦人連邦検察官を乗せた車は、二名のMPが運転席に坐って空港へ急行した。

「どこへ連れて行かれるんですの?」

後手錠の切なさに上体や両腕をもだえ乍らエヴァは訊ねた。

「決ってるじゃないの。裁判を受けに合州国へ帰るのよ。お前、じっと出来ないの!!」

エヴァは絶望の眼を挙げて走り去る窓外を見やった。

「あの、良人に知らせたいんですけど……」

「心配しなくてもね、飛行機が離陸したら、ハーマン大佐が通知して下さるわ。けど、お前のハズは もう感付いてるかも知れないわね」

婦人検察官は後方を見やってニコリとした。
「未だどの新聞社も感付いてない様だわ」
空港には離陸直前の軍用輸送機がエヴァ達を待って居た。其の輸送機には、帰国する占領軍将兵の家族らしい婦人や子供が十名程既に乗って居て、最後部の座席へ曳かれて行くエヴァを驚いた表情で眺めて居た。
「ママ。あの小母さんどうしたの？　縛られてる!!」
「これ、ビリー。黙って!!　あの小母さんはね、何か悪い事したのよ。さ、御本を続んで上げましょうね」
直ちに機は舞い上り泰平洋に向った。窓側の席でエヴァは眼下に去り行く此の思い出多い国を涙に曇る眼で見やった。頰は涙でしとど濡れたが、それを拭う事も、もはや出来ない身が切なく悲しかった。
「お願い!!　手錠を前で嵌めて下さらない？」
「駄目!!」
エヴァの哀願も言下に却けられ、緑の山なみも既に水平線の彼方に沈んでしまった。
婦人検察官は座席の背を後ろに倒して寛ろぎ煙草をくわえたが、エヴァは起したままの背に頭を押しつけて固く眼をつぶった。拭うことも出来ない涙が頰を伝った。ウエストを細く締めたスチュワーデスが冷い飲物を配って回った。モード雑誌を読んで居た婦人検察官は、身を屈めたスチュワーデスの差出す盆に気付いて
「あら、ありがとう。けど、空軍の輸送機はサービスがいいわね」
「ホホホ、もうすぐ定期便が開かれるそうですわ。私達、ノースウエスト社の者ですの」
スチュワーデスは笑顔で答えて、機の動揺に合わせて巧みに体のバランスを取り乍ら
「そちらの方も如何？」
とエヴァにいった。気付いたエヴァが眼を開けるより早く、婦人検査官がジロリと横眼をエヴァに流して
「これは囚人ですのよ、やらなくていいわ」
「あ、そうでしたわね」
スチュワーデスはひそめた眉に嘲けりの色を浮べて立ち去って行った。

或る混血婦人の話　（八）

ハアイでの数時間の間も機外に出る事は許されず、用便と食事の時以外は後手錠を嵌められたまま、エヴァはロス市郊外の空港で一昼夜振りで土を踏んだ。そして自動車でロ市の州裁判所に連れて来られ、裁判所に隣接して居る拘置所の独房に繋がれた。右肘に細い鎖で番号札をつけられたのが身に泌みて悲しかった。裸で全身を写真に撮られたのは一層みじめな思いだった。
「服が汚れるのが嫌なら裸で居てもいいのよ。法廷には其の服を着て出なくちゃならないんだからね」
婦人看守がそういって閉めた独房の鉄扉の音を胸かきむしられる思いで聞いたエヴァは、細長い吊りベッドに倒れ込んで身を震わせて泣きに泣いた。数日の後、知らせを受けたエヴァの両親が差し向けて呉れた法廷代弁人と面会した時には全く仏に会った様な気持だった。
「あなたがミセス・エヴァ・シマズね。私はあなたの御両親から依

頼された法廷代弁人よ。グロリア・ガースンていうの。あなたは私を信任して下さるかしら?」
　四十才には未だなって居ないと思われる其のブルネットの婦人代弁人は其の理知的な顔に微笑を浮べて二重の金網越しにエヴァのやつれた顔を見守った。深いまなざしだった。
「勿論ですわ。助けて下さい」
　婦人看守が隅のデスクから立ち上って来てエヴァの後手錠の右手だけを外してやり、婦人代弁人は書類挾みから取り出した委任状を金網の上方の細長い孔から看守に手渡した。紙片を押えるために左手を台の上に出すと、手首にぶら下った右手用の環がガタリと音を立て、エヴァは恥かくして頬を染めた。署名が終るや否や婦人看守はエヴァの両腕を背後に回させて右手に再び手錠を掛け、エヴァは円い木の小椅子に腰掛けたままうなだれて涙ぐんだ。
「元気を出すのよ。くよくよしたって同じ事よ。じゃ次からいろいろ打合せしましょうね。あ、それからね、御両親からの差入れがいろいろあったんだけど……今の所、ドレス一着と下着一揃いだけが許されたわ。法廷に出る時にはキチンとしてなきゃ不利なのよ。だから今着てるのは脱いでしまっときなさい、分るでしよ」
「ええ、ありがとう。両親に面会出来ないかしら?」
「それも今の所駄目な様ね。けどいろいろ手は打つから待ってなさいよ。じゃ……」
　ファイルを抱えたグロリアの黒っぽいスカートが、外界に通じるドアに消えるのを見詰めて居たエヴァの右腕を婦人看守が摑んで立たせた。
「来るのよ」
　エヴァが連れ出されたドアの外の陰うつな廊下の向うには鉄格子が重々して冷く光って居た。
　連邦検察局は唯一回の簡単な取調べの後、自信たっぷりに起訴した。グロリアに面会してから一週間の後、エヴァは起訴状を独房で受取った。それから二日目の期、エヴァは再びグロリアと金網越しに会った。
「起訴状読んだ? 先ず第一に、あなたの名をエヴァ・ローレンスとしてあるわね」
　そういわれてエヴァは初めて気付いた。
「検察側では、あなたの結婚は合法的でないという見解らしいわ。勿論その点で最初に喰い下がるつもりよ。それからねえ、あなたが連合軍向けの放送をさせられた時の事情を詳しく聞かせて頂戴な。勿論強制されたんでしよ?」
　グロリアはメモを取り乍ら熱心に聞き入った。
「就業承諾書に署名したのは、ちょっと拙かったわね。えーと、では呼ぶ証人はと……」
　グロリアは広い額を鉛筆で叩き乍ら考え込んだ。
「ねえ、あの……」
「何? 私ミセスよ。フ、フ、フ、」
「ミセス・グロリア・ガースン、坊やは元気かしら? 御存知ない? こちらへ来てるんじゃないかしら?」
「グロリアとよんで頂戴な、坊やは元気よ。安心なさい。旦那様もお元気よ。二人ともこっちへ来てるのよ」
　エヴァは安堵すると共に、愛児の愛くるしい面影を瞼に描いて啜り上げた。

「それで……父や母はどうしてます？　世間の人達は私の事、どういってるかしら？」
「正直いって、半々ね。悪くいう人もあるし、同情して居る人も沢山あるわ。御両親は何とかあなたを助けたいと一生懸命よ。御近所の人達は殆んど同情的だし……」
グロリアはエヴァにはいわなかったが、極東に於ける小競合が共財圏との局地戦の様相を呈する様になるにつれ、国粋主義者達によるエヴァに対する非難が国民の間に共感を呼びす恐れがあったのだった。
「エヴァ、あなたも知ってるでしょ、ハロルド・リッジウェイという男。彼がジャーナリズムでの急先鋒になって、あなたの事、あれこれ書いてるのよ。ちょっとしつこいと思うけど、何か心当りない？」
エヴァの話しにグロリアはうなずいてメモにアンダーラインを引いた。
「じゃ、今日はこれで別れましょう。公判迄三週間程しかないのよ。それ迄にいろいろ準備しとかなくちゃ。又来るわね」
グロリアは公判迄に三回訪れて、いろいろと打合せをしたり裁判の心得等をいってきかせて呉れた。
「免も角、卑屈になっては駄目よ。頭を挙げてシャンとしてるの。それからね、ミスター・島津をどれ程愛して居たか、又今もどんなに愛して居るかを強調するのよ。私がうまく訊いて上げるから。相手が敵国の男だったのを恐がる必要はないのよ。深い愛の方が陪審員に強く訴えるんだから」
裁判の日は朝から小雨が絶え間なく降って居た。化粧する術はなかったが、納っておいたドレスを着、ハイヒールを穿いたエヴァが鏡のない不自由さに顔をしかめ乍ら髪の工合を直して居ると、靴音が響いて二名の婦人看守が鉄格子の外に立った。多勢の傍聴者を予期した彼女達は、入念に手入れした制服の上衣とスカートを大柄な体にキチンと着こなし、濃紺のネクタイを白いブラウスの襟元に固く結んで居る。傾けて髪に留めた制帽には、金色のマークが鈍く輝き、黒いローヒールの靴は何れ囚人に磨かせたのであろう、一点の汚れもなく艶々と光って居た。
「エヴァ・ローレンス。出廷よ」
大きな音を立てて錠が外れ鉄格子が開いた。壁の吊りベッドから立ち上ったエヴァの脚は緊張のためか少しよろめいた。鉄格子を開けた婦人看守が幅の広い黒革のバンドの様なものを手にブラ下げて立って居るのを横に見乍ら、エヴァは身を屈めて鉄格子の外に出た。真正面に立ってエヴァを見据えて居たもう一人の婦人看守が二、三歩近ずいて右手に持った手錠を肩の高さに振り上げる。キッと睨んで居る青い眼を思わず恨めしそうに見たエヴァは、手錠をおぞましげにチラと見やり背を向けて両手を後ろに回そうとした。
「今日は後ろ向かなくていいんだよ」
婦人看守はエヴァの肩を摑んで前を向かせ、右手に手錠をガッチリと嵌めた。鉄格子の傍に立って居た婦人看守がエヴァの背後に近寄って、持って居た黒革のバンドをドレスの上から腰に締めつける。腰の後ろでカチャカチャ音がしてギュッと締まりカチャンと錠が掛った。腰枷なのだ。前側には直経二吋程の鉄環が縦にがっしりと突き出して取り付けられてある。エヴァの右手首に嵌めた手錠を握って居る婦人看守が、手錠を引張って其の鉄環に近付け、空いて

居る方の手錠の環をギリギリ鳴らせて横一杯に開き腰の鉄環に潜らせた。金属の触れ合う音を立てて一杯の寸法で鉄環を潜り出た手錠の錠の部分を左手に握った婦人看守は、諦らめて自ら近寄せたエヴァの左手を右手で摑んで手首の上に鋼鉄の環の上半分を当てがい、環の下半分を手首の下側に回し、握り締める様にして錠をギリギリと鳴らした。

「い、痛いですわ」

黒い制帽の下で波打って居る金髪を見乍らエヴァは悲鳴を挙げたが

「少しの間よ。辛抱おし」

腰枷の後ろに革紐がつけられエヴァは背中を強く押された。

或る混血婦人の話（九）

腰枷で腹の所に押えられた手錠を見詰めて顔を伏せて曳かれて居たエヴァは、グロリアの言葉を思い出して頭を挙げて正面を見た。

「あら、急に元気になったのね」

腰についた革紐を握った婦人看守が低く笑った。階段を地下に降りて暗い通路を暫く行き再び地上への階段の手前の左手でもう一本の通路が薄暗い口を開いて居る。

「刑が決ったら其の通路に連れてって上げるわね。既決囚監房へ行く道よ。フ、フ、フ」

エヴァの右側を歩く婦人看守がそう云って被告エヴァの心を掻き乱した。階段を昇り切ると又しても鉄格子が前方を遮って居た。鉄格子の外側のデスクに坐って居る廷吏が太った体で悠々と歩いて来て大きな鍵で鉄格子扉を開いた。鉄格子に向き合って廊下を隔てて灰色の壁があり、其の壁は右手の方は直ぐ切れて広いコンコースになって居る。壁の右端をぐるりと左に回った所に法廷の出入口があるらしく既に傍聴者達のざわめきや、足音が聞えて居た。

「あ、出て来たよ」

エヴァを見付けた人々は コンコースから 廊下を覗いて 騒ぎ集まり、太った廷吏に押し止められて居た。壁の左の方、約三十米程の所に黒い鉄扉が見える。

「こっちだよ」

婦人看守に曳かれて鉄格子を出て廊下を左の方に歩むエヴァにフラッシュが二、三発浴びせられた。壁の鉄扉は被告用の出入口である。一歩法廷内に入ったエヴァは忽ち顔を伏せて立ちすくんだ。

「その椅子に坐るのよ。」

壁際に三方を 鉄柵で 仕切られた 被告席には 丸い木の小椅子が、二、三個と、看守用の背付きの革椅子が三、四個置いてあった。立って乳の下あたりの高さの鉄柵で囲まれた広さは横五米縦三米位、法廷の最も低い床にある。被告席の右手に並んでマホガニーの代辯人席が設けてあり、更に其の右手には法廷の幅一杯に傍聴者の席が低い木柵を隔てて後ろ程高くなる様に何列も何列も並んで居た。傍聴席は既に殆んど一杯に詰り、人々の視線を全身に浴びてエヴァは、どうしても顔を挙げることが出来なかった。周りを囲んだ鉄柵の間から全身が人々の眼に見えるのだ。背后に坐った婦人看守の手から延びる革紐が自分の腰に付いて居る事を思うとエヴァは恥かしくて逃げ出し度い程だった。手錠も嵌められたままだし、エヴァは情けなさの余り涙が眼に溢れて来た。両手を思い切って上に挙げ、上体をうんと前に屈めると漸く指先が眼頭に届いた。

「エヴア、元気を出して」

代辯人席に着いたグロリアが鉄柵の上から覗き込んで励まして呉れた。今日のグロリア・ガースンは、黒いガウンの法廷服を長く着て、助手の若い男を伴って居た。被告席、代辯人席に向き合って検事席のマホガニーの長いテーブル、そして更に検事席の上方壁際に陪審員席がある。傍聴席と向き合った正面、被告席の左手には一段高い判事席があって、大きな重々しいデスク越しに三個の椅子の高い背が見えた。判事席の背后の壁には大きな国旗が掲げられてあり、高い天井のシャンデリアには灯が点り、既に検察側も入廷して開廷を待つのだった。

エヴアが傍聴席から顔をそむけて、判事席に向き合った床の上、稍々検事席寄りに設けられた証人席の辺りを見詰めて居るとベルが鳴って、三名の判事が法服の裾を曳き乍ら、国旗の横手の扉から出て来て席に着いた。

一同起立して国旗に注目の裡、開廷が宣せられた。婦人看守達が漸くエヴアの手錠腰枷を外してやった。一同が着席するや否やグロリアがスラリと立ち上って

「唯今の開廷宣告に就いて緊急異議を申立てます。先ず第一に被告の名をエヴア・ローレンスとお呼びになったようですが、エヴア・ローレンスなる者は存在しません。被告席の婦人はエヴア・島津であります。彼女は数年前にジャプー国人と結婚し、合州国々籍を離脱しております。次に彼女はジャプー国々内に於いて合州国官憲の手で逮捕されたのであると云う点、更に又、政治犯、思想犯に於いては旧国籍の時の容疑は国籍を離脱すると共に不問に付されるのが諸国共通の慣例であるにも拘わらず……」

裁判長がグロリアを見据え片手を挙げた。

「被告代辯人の異議は、当法廷の存立そのものを疑問として居るものと解するが、当法廷は連邦検察局の起訴により合法的手続によって開廷されたものである以上、異議を一応却下する。追って検察側の冒頭陳述の後に於いて、其の意思があれば再び提議されたい。唯一つ、ここで明瞭にしておきたい事柄は……」

裁判長は一きわ其の太い声を励ました。

「ジャプー国は目下、我が合州国を盟主とする連合国によって完全に占領されて居ると云う事である」

傍聴席からグロリアに対する非難のざわめきが湧き、グロリアは肩をすくめて見せてから席につき、ニコリと笑った。

「刑事訴訟法第十二条及び第十五条(B)項の定めにより陪審員を選ぶ」

裁判長の言葉に続いて書記が陪審員候補達の出席をとった。十二名の候補より七名を選ぶのだ。

「全員在廷ですね。では……」

検察側も代辯人側もそれぞれ調査メモを机上にひろげ、婦人書記のよく透る声が一人一人の名を再び読み上げ初めた。

「ミス・リンダ・アムバー、四一才、高校教師」

間髪を入れずグロリアの声が飛んだ。

「忌避!!」

グロリアに向い合った検事がニヤリとした。

「ミスタ・ブローム・アリスン、三八才、演劇評論家」

「忌避!!」

今度は検事の太いバスが響いた。

「ミスタ・クラーク・バクスター、四五才、銀行員」
数秒間の沈黙の叩、更に名が読み上げられる。
「ミセス・アンナ・クリステイー、五二才、作家」
検事が忌避した。
「ミスタ・スミス・ダグラッド、八三才、農園主」
「忌避」
とグロリア。
「ミセス・バーバラ・フォーサイト、三二才、商店主夫人」
検事が嚙み捨てるような口調で忌避した。
「ミスタ・ジョージ・ヘンダースン、七九才、退役陸軍大佐」
「忌避!!」
グロリアが一きわ声高く叫んだ。
「ミスタ・デヴィッド・ケンウエイ、六八才、退役空軍准将」
「忌避」
検事が押しつぶしたような低い声で云う。
「ミス・マーサ・レドメイン、二八才、医師」
検事の顔が一瞬躊躇の表情を浮べ唇が動きかけて遂に沈黙した。
「ミセス・ドロシー・シムプソン、四三才、会社員夫人」
今度はグロリアが何か云い掛けて黙った。
「ミスタ・ウイリアム・トムソン、七二才、モテル経営」
「忌避!!」
「忌避!!」
双方の声が期せずして同時に響く。
「ミセス・ルース・ヤング、六六才、無職」
「忌避」
グロリアが叫んだ。
「検察側、被告側共、限度一杯に各五名宛を忌避した。では職権を以て本職が指名する」
裁判長の重々しい声が七名の陪審員を選び出した。
「ミス・リンダ・アムバー。ミスター・クラーク・バクスター。ミスター・スミス・ダグラッド。ミスター・ジョージ・ヘンダースン。ミスター・デヴィッド・ケンウエィ。ミス・マーサ・レドメイン。ミセス・ドロシー・シンプソン。以上七名の方にお願いする」
メモにマークをつけ乍ら、グロリアは唇を歪め、検事はニヤリと笑みを浮べた。
四人の男と三人の女から成る陪審員達が宣誓を済ませて陪審席に落着き、やがて起訴事実の開陳と検事の冒頭陳述が初まった。マーサとドロシーは、そわそわと絶えず身動きをし、リンダは真直ぐにエヴアを見下ろし、そして男の陪審員達は照れ臭そうにハンカチで顔を拭いたりし乍ら検事の声にしかつめらしく耳を傾けて居た。

或る混血婦人の話　（十）

「……以上述べた様に、被告エヴア・ローレンスは合州国々民としての忠誠義務に反し、自ら進んでジャプー国軍部の謀略作戦に協力し、連合国軍将士の士気を沮喪せしめようとしたのである。其の結果の如何を問わず被告の行動は真に許し難い。連邦検察局は、当法廷が被告に対して反逆罪の廉により有罪を宣せられる事を望むものである」
検察側の冒頭陳述が終るとグロリアが立ち上って、逮捕及び起訴そのもの自体の不合法な点を衝いて喰い下った。

「被告側代弁人の論点に就いては陪審員に於いて議決の際に充分考慮する事にし、裁判を進める。」
　裁判長が断を下してグロリアの口を封じた。
「なお付け加えておくが、被告が合州国々民であった時の行為に就いて我が国法によって訴追するのは何等違法ではない。では被告の認否を」
　婦人看守に促されてエヴァは被告席で立ち上った。
「被告は唯今の起訴事項について自らを有罪と認めるか？　或いは無罪を主張するか？」
　裁判長が重々して問う。
「ノット・ギルティ!!」
　傍聴席の一部がざわめき、低い叱責の声が湧いた。
「何と図々しい女だろうねえ」
　裁判長が更に問う。
「被告はジャプー国旧軍部情報局の一員として対連合軍向け放送に従事したことについては認めるか？」
「認めます」
　エヴァはきっぱりといった。
「私は二人の息子を戦争で亡くしたんだよ。それに何よ、あの女の厚かましいこと!!」
「裁判を受けるというのに、あの派手なドレスはどう!!」
　しかし男達の殆んどはエヴァの姿に見惚れた様だった。グロリアの対抗弁論が初まった。グロリアはエヴの行為が自発的なものでは決してなく、強制されたものであること主張し、そして開戦前に初まって終戦後漸く実を結んだ深い愛情を強調して若い女性達を感動させた。陪審員席のマーサとドロシィのまなざしは益々同情の色を強めたが、リンダの表情がいよいよ硬張って行ったのは止むを得なかった。
「……エヴァの如き立場におかれた女性が敵国の要求に従う以外に取るべき途があったでしょうか？　被告は同情を受けこそすれ、責められる所以は些かもないという事は、賢明なる裁判官及び陪審員の皆様に於てもよくお分りのことと信じて疑いません」
　グロリアの弁論について証拠品の提出が確認された。
　検察側証拠品No. 1被告の就業承諾書及び署名鑑定書。同No. 2被告の放送中の写真二葉。同No. 3被告の放送の録音テープ三巻。
「――被告側には提出する証拠品はありませんか？」
「ありません」
　グロリアは唇を噛んで低く答えた。ジャプー国軍部の対連合軍向け放送計画の立案から実施に至る記録書類は、グロリアの必死の探索にも拘わらず発見出来なかったのだ。恐らくは終戦時に焼却されたのであろう。
　続いて証人の申請が双方より行なわれた。
「では証拠の認否を行うから被告は証人席について」
　証人席の柵の中の固い椅子に身を硬張らせて坐ったエヴァに証拠品が次々に突きつけられた。
「此の書類に覚えがあるね？」
　エヴァは眼前の紙片から眼を挙げて検事の顔を見たが、鋭い眼光に射すくめられて直ぐに眼を伏せた。顎の角張った浅黒い顔の壮年の男だった。
「確かに……私が署名したものですわ。けど……さんざん痛められ

て愛する人の命迄危くすると嚇かされたものですから……」
「被告は問われた事だけに答えればよろしい」
　検事は鋭くぴしゃりときめつけて写真を取り上げて再びエヴァに近寄った。
「此の写真はあなただね?」
　二葉の写真は何れもエヴァのマイクに向った姿を撮ったものだった。一枚は髪を掻き上げて居る所、一枚はマイクを両手で抱える様にして居る所で、いずれのエヴァの顔も如何にも楽しげに喋って居る様に唇を綻ばせ白い歯を見せて明るく微笑んで居るのだ。
「よく見てごらん。壁にカレンダーが掛ってるね? 拡大して見ると日付けが分るよ。ほら」
　検事が見せた拡大写真に写ったカレンダーは、エヴァが放送に従事して居た年月日をはっきりと示して居た。
「けど、私こんな写真を写された覚えはありませんわ」
「ハ、ハ、ハ、兎も角、写真はここにちゃんとあるんだからね。まこれは見るだけでいいよ。次はと……」
　検事が合図するとテープレコーダーがテープを回し初めた。
「……故国を遠く離れて泰平洋の南に北に、御健闘の連合軍将兵の皆様、今晩は……」
　何年も前に自分が喋った声を再び耳にしてエヴァは耳を掩い度くなった。
「……長い間、夫から離れて居る妻が、どんなに淋しいものか、私は女性としてよく分ります。皆様も故国の奥様や恋人にお便りをお欠かせになりません様に。淋しさの余り、女性というものは何をするやら知れなくってよ。フ、フ、フ、フ……」
　傍聴席の太った婦人達は眉を吊り上げたが、男達は類い稀な甘い声に聞き惚れてしきりに頭を振って居た。
「これはあなたの声ですね。認めるね?」
「ハイ」
「どこで放送したものです?」
　グロリアがスッと立ち上った。
「只今の質問は誘導訊問です。証拠品認否の範囲を逸脱して居ます。」
　検事は肩をすくめて
「質問を撤回します。終ります」
　エヴァが被告席に帰ると裁判長が咳払いして宣した。
「では本日はこれで終る。次回は来週金曜日午時十時から」
　一同が起立して三人の裁判官の退席を見送り法廷内はざわざわし初めた。二人の婦人看守が靴を鳴らしてエヴァに近寄った。
「大丈夫よ。元気を出して」
　腰枷を掛けられ手錠を嵌められて居るエヴァの方に柵越しに励ましの声を掛けたグロリアは、机上を片付けると助手の男を従えて廷外に立ち去って行った。腰の革紐を婦人看守に取られたエヴァが通路に出ると、通路の外れに群がった人々がざわめいた。又してもフラッシュが今度は真正面から閃いた。
　監房に通ずる鉄格子扉が鍵で開かれ、婦人看守に促されるまでもなく飛び込んだエヴァは、薄暗い階段の上に立ち止ってホッと溜息をついたのだった。

或る混血婦人の話　（十一）

「エヴァ。正直な所、余り有利に運んでないのよ。こちらが欲しい証人は戦死したり、戦犯で処刑されてたり、又いくら探しても見付からないし……。御両親は金に糸目をつけず出して下さって本当に申訳なくて、あなたが収容されてた抑留長と、それから放送の時の放送員首席の女だけど、二人共見付かったのよ。所長の方は戦犯で菅茂に入れられてたし、放送員首席の方は詐欺罪で監獄に入ってたわ。所が二人共検察側で既に追加申請して召喚してるのよ。手間が省けていいけど余りいい気持しないわ。結局、こちらの証人は天にも地にもあなたのハズとハーマン大佐だけなの」

第二回公判を明日に控えた木曜日の午後、面会に来たグロリアがエヴァにいった。

「マーサ・レドメインとドロシー・シンプソン、そしてデヴィッド・ケンウエイの三人は先ずこちらのものよ。あと一人だけど私、クラーク・バクスターを狙ってるの。ほら平凡な顔した眼の大きな髪の少し薄いやせた男よ。あなたも其のつもりでね」

グロリアは片眼をつむって見せた。

「私、此の頃考えるんですけど、世間の皆様が、そうお考えなのなら、少しの間なら刑を受けてもいいと思う様になりましたわ。ただ一目でいいから坊やに会わせて呉れて抱かせて貰えたら……」

「まあ、そんな弱気な事いっちゃ駄目よ。おどかす訳じゃないけど、若し有罪になったら二年や三年や五年じゃ済まなくってよ」

エヴァは恐怖の眼を挙げてグロリアを見詰め後手錠の両腕を切なげに動かした。

「少く共二十年ね。二十年間も鎖をつけられて苦しまなけりゃならなくなるのよ。頑張らなくちゃ駄目じゃないの。世間の声だって全部が全部あなたの敵じゃなくってよ」

エヴァは強くうなずいた

翌日の公判は冒頭から証人の証言によって開始された。

「ミス・キャロル・リッジウエイ、宣誓して下さい」

キャロルは被告席のエヴァをじろりと横眼で睨んで証人席に着いた。

「ミス・キャロル・リッジウエイ。あなたは泰平洋戦争の間、ジャプー国の抑留所に抑留されて居たのですね」

検事が精一杯の微笑を浮べて歩み寄って口を開いた。

「そうです。夫も一緒でした。そして夫は抑留所で終戦直前に死にました。責め殺されたんですわ。」

キャロルの声がヒステリックに響き渡る。

「深く同情致します。それで、あなたは被告と同じ所に抑留されて居たのですね」

「そうです」

キャロルの視線が憎々しげにエヴァに注がれた。

「被告は暫くの間抑留所生活を送った後、対連合軍向けの謀略放送員になった訳なのですが、其の間の事情を御存知なら教えて下さいませんか」

「知ってますとも!! あの女は知り合いのジャプーの男が抑留所に来たのを幸いに其の男を惹きつけ、そして所長に哀訴嘆願して、とうとう放送員になりおうせたのよ。私が地獄の様な毎日を送ってるのを尻目に収容所を出て、ジャプーの男達をたぶらかして毎日毎日楽しく過して居たのよ。絞首刑にしてやっても飽き足りないわ」

「ま、そんなに興奮しないで下さい。被告のいう所によれば、被告

は放送を拒絶した結果、鞭打たれたり暗房に入れられたりして苦しめられたというのですがね」

「そんな事嘘ですわ。ちょっとノーブルな顔をしたジャプーの男が収容所に来た翌日からあの女の姿を見た事ありませんもの。二つ返事で引き受けたに相違ありませわわ」

グロリアの反対訊問が初まった。

「ミセスいや失礼。ミス・キャロル・リッジウエイ。あなたは被告が喜んで引受けたと断じて居られますが、あなたは其の交渉の有様を御覧になって居たのですか?」

キャロルは一瞬鼻白んだが

「それは収容所の婦人看守達の話を聞いたのですよ。男と一緒に嬉しそうに手を取り合って収容所の門を出て行ったって彼女達が話して居ましたわ。エヴァの事、憎んでたのは私だけじゃなくってよ、ヘレンもサリーも……ドリス・マクミランだって、とても腹立ててたわ」

「そうですか。あなたは収容所の看守達が、エヴァを鞭や暗房で拷問した事について何かいって居るのを聞きませんでしたか?」

「さあ、聞いた覚えはありませんね。何しろ言葉が分らないもんですから……」

「或る時には言葉がよくお分りになる様ですのにねえ。終ります」

次の証人が呼ばれた。

「テルヨ・スズキ。証人席へ」

入口に現われた小柄な女性が鎖を鳴らし乍ら傍聴席の中央通路を曳かれて来るのを見て法廷はざわめいた。其のジャプーの女は囚人なのだ。灰色とレンガ色のだんだら縞の囚衣を着て、膝から下は全くの素足、頭髪を短く切り取られた其の女囚は、嘗ての収容所の婦人所長であった。鉄の首環に後手錠、腰の巾広の革枷の両側からそれぞれ太い鎖が両脚の外側に垂れて足首の鉄枷に結ばれ、歩く毎に重々しくジャラジャラと揺れて鳴った。嘲けりと侮蔑の声を通路の両側から浴びせられ乍ら、背の高い婦人看守に背を押され小突かれて漸く通路から広間に出た女囚は更に素足で床を踏んで証人席の横に佇立した。

「テルヨ・スズキだね。今日は特に人格の剝奪を停止して証人として取扱われる事を当法廷の名に於て許可する。宣誓して」

裁判長の言葉を通訳の男が女囚に繰返し、そして宣誓文を読んで聞かせた。

「分ったね?」

「ハイ」

右手を挙げる事が出来ない女囚は膝を深く屈めてかすれた声で答えた。

「其の証人は着席してはいけない。起立したまま証言すること」

裁判長が冷くいい渡し、検事が席を立って女囚に歩み寄り乍ら口を聞いた。

「証人の現在の身分をいって下さい」

「ハイ、戦犯の廉で二五年の懲役に処せられて、菅茂監獄で刑に服して居ます。囚人番号は四十五号です」

鈴木照代の声が微かに震え、肩を切なげに動かして重い首環の工合を直そうとして頭を左右に振った。眼鏡がキラリと光った。

「あなたは証人としてここに連れて来られて居るのですから何も恐れることはないのだよ。だから鼻環も外されて居るだろう? 震え

て居ないで私の質問に答えて下さい。裁かれて居るのは、あなたではないんだから。あ、君、声を出し難い様だから首環を外してやって呉れないか?」

検事ににこやかに頼まれた婦人看守は、ポケットから鍵束を出して手際よく女囚の首環を外してやり、足許の床の上にガタリと置いた。

「証人は泰平洋戦争の間、何の職について居たのですか?」

「ハイ、第一抑留者収容所々長をずっとして居ました。そして婦人捕虜収容所長の時終戦になりました」

「抑留者や捕虜に対する取扱いに就いて戦犯に問われた訳ですね。所で証人は被告を知って居ますか?」

検事はエヴアを指さした。

「知って居ます。抑留者として私が監視して居ました」

「被告は暫く間抑留生活を送った後、ジャプー国軍部情報局の放送員として連合軍に対する謀略宣伝放送に従事した訳ですが、其の間の事情について知って居る事をいって下さい」

通訳を聞いた女囚はゴクリと唾を呑み込んだ。数年間の囚われの身にも拘わらず、鉄枷を除かれた其の首は、ムッチリと白く脂が乗り、首環の痕が赤黒く周りを繞って居た。

「ハイ。開戦後半年余り経ってから或る日情報局員の方が抑留所に見えて、あの女を放送に使い度いと申出られました。あの女も其の方と一緒について来て、一生懸命にやるから是非やらせて欲しいと頼みました……」

エヴアは通訳を待つ必要もなく其の言葉を聞いて歯ぎしりして女囚を睨みつけた。キャロルの証言の時から抑え続けた怒りを自制するのが漸くだった。

「すぐに収容所を出してやるという訳にも行きませんし、考えさせて呉れる様にいって其の方をお帰ししたのです」

「そうですか。しかし、被告の方では全く逆の事を主張して居ますよ。拒絶した被告をあなた方が無理矢理に承諾させたそうですが、鞭打ったり、腰部を鎖で締め上げたりして責めて強制したといってますよ。其の痕を整形手術した医師を被告側ではお探しの様なのだが……」

「其の様な事はあったかも知れませんわ。私の記憶では、あの女は余りおとなしい方ではありませんでしたし……。殊に放送員の話があってからは、やらせて呉れとしつこくせがむものですから、私が命令した覚えはありませんけど、部下の看守達が懲罰を加えたかも知れませんし」

「そうですか。所で此の書類ですが……」

検事は証拠品の就業承諾書を示した。

「此の署名は被告のものであることは立証されて居るのですが、何か此の書類に就いて御存知ありませんか?」

「知ってますとも。二、三日経ってその情報局の方が今度は局長の添書と作戦五課長の要請書を持って見えて、正規の手続きは後日するからという事なので、あの女を解放して引き渡しました。其の時私の眼の前であの女が喜び勇んで署名したのです」

堪りかねて前後も忘れたエヴアは矢庭に立ち上って叫んだ。

「嘘!!　嘘よ。スパイの罪であの人を銃殺するって嚇かしたじゃないの!!　よくも、よくも、そんな嘘ばかりついて……」

駆け寄った二人の婦人看守が左右からエヴアの両腕を抱えて席に

引き戻した。
「さんざん痛めつけられて、あの時の私は署名するのも漸くだったじゃないの!!　ほんとうの事をいって頂戴!!」
鉄柵を握り締めた両手をもぎ離されて固い小椅子に押し付けられ乍らエヴァは絶叫したが、ジャプー語で叫ばなかったので、証人席の女囚は初めはキョトンとして居たが、やがて意味を察したのか薄ら笑いを頬に浮べて横眼でエヴァを眺めて居た。
「おとなしくしなさい。さもないとひどいわよ」
婦人看守の一人が自分達の体で隠す様にして小さいが鋭い平手打ちをエヴァの頬にくれた。手を後ろに組んでエヴァの有様を見やって居た検事は再び女囚の方に向き直って其の長身をかがめた。
「で、其の情報局の男に関してですが、エヴァとは一体どの様な関係だったのか知りませんか?」
「さあ、ハッキリとは知りませんでしたが、戦前からの知合いだった事は事実の様でした。あの女が一生懸命にしなを作ったり色眼を使ったりして、本当にいやらしい程でしたわ」
エヴァの胸を熱い怒りの塊りが突き上げたが、今度は婦人看守が両側に立って肩をしっかりと押え付けて居るのだった。
「いや、御苦労さんでした。終ります」
代ってグロリアが立ち上った。
「証人はいつ当地に連れて来られたのですか」
「昨日の朝、飛行機で着きました」
鈴本照代はグロリアを見ようともせず敵意を露わに見せて唇を歪めて答える。
「着いてから、どこへ行きました?」
「決ってるじゃないの!!　拘置所の地下の、独房にほうり込まれたわ」
「先刻あなたに質問して居た男の人とは、今ここで会うのが初めてですか?　昨日会ってるでしょう?」
検事が色をなして立ち上った。
「代弁人は只今の質問を撤回して下さい」
しかしグロリアは構わず続ける。
「通訳して下さい。職務怠慢ですよ」
女囚はキッパリと否定した。
「今が初めてです。会った事なんかありません」
「そうですか。菅茂の監獄で、或いは又ここに連れて来られる間で証言の内容について何か示唆を受けませんでしたか?　受けたでしょう」
裁判長が何かいいかけるし、通訳は検事の顔色をうかがって口ごもって居るのでエヴァはやきもきした。
「私が通訳して上げるわ。照代さん、あなたね、こういう風にいえって誰かにいわれたんでしょ?　いわれた通りにすれば楽にしてやるとかって……。さもないとひどい目に会うって嚇かされたのよ。ちがいないわ。丁度私と同じだったのね、自由を奪われてるんだから無理ないけど、後生だから本当のことといって!!　お願い」
椅子に押え付けられたまま、矢庭にジャプー語で叫び出したエヴァの声に法廷は驚いた。
「お黙り!!」
腕をねじ上げられたエヴァは苦痛の呻きを洩らして身もだえし、グロリアは其の広い聡明な額をしかめてエヴァをたしなめる様に振

り返った。通訳からエヴァの叫びの内容を聞いた裁判長はキッとエヴァを睨んだ。

「被告は静かにしないと裁判所侮辱罪で告発しますぞ!!」

漸く両腕がゆるめられ、エヴァは顔を掩うて忍び泣いた。エヴァの叫び声の意味をあれこれ臆測してざわめいた傍聴席も裁判長の槌の音でやがて静まり、グロリアは再び証人の女囚の方に向いた。

「もう一度繰返します。証言の内容について誰かに示唆、いや相談したでしょう？ 本当の事をいわないと偽証罪で更に刑が重くなりますよ」

検事がハンカチをポケットに納い乍ら立ち上った。

「裁判長。被告側代弁人の只今の質問は検察側を侮辱して居るのみならず、証人を脅かつして居るものです。取消しを要求します」

其の時、今迄黙って突立ったままだった女囚が足鎖をジャラリと鳴らせてグロリアの方に向いて唇を震わせ乍らキッパリといった。

「誰にも何もいわれませんわ。本当の事をいっただけよ。私がこんな恰好してるからって、いいがかりをつけるのはよしてよ」

検事は満足そうに腰を下ろし、グロリアは唇を噛んで低くいった。

「終ります」

女囚の背後に立って居た婦人看守が、床から首環を持ち上げ、女囚の膝を後ろから蹴って跪まずかせて鉄枷を其の白い首にガタリと嵌めて錠の音を立てた。立ち上ってよろめいた女囚は再び背中を小突かれ乍ら傍聴席との境の低い柵を通り、中央の通路を廷外に曳かれて行った。一歩毎に、脚の外側に垂れた鉄鎖が前後に揺れて、腿や脛やふくらはぎを打ちまつわり、そしてジャラジャラと鳴る。

「私もあんな風になるのかしら？」

エヴァは見送り乍ら胸もふさがる思いだった。

「証人キョウコ・ナカイ」

次の証人もジャプーの女囚だった。首席放送員としてエヴァに命令し、時には苛めた中井京子の変り果てた姿だった。彼女は終戦後身を誤って詐欺を犯し、W監獄に服役中の身を遙々海を越えて護送されて来たのだった。故国の監獄では許される筈もない衣服、即ち合州国の女囚並みにダンダラ縞の囚衣でダブダブに身を包み、先刻の鈴木照代と同様の戒具姿で足鎖を鳴らしておずおずと証人席の横に立ちすくんだ。検事の質問に答えて彼女は、エヴァと島津次郎の二人が如何に享楽的な日々を送ったかを述べ立て、そして証拠写真の日時と場所とを確認するのだった。グロリアの反対訊問はなかった。

(未完)

僕は元来内気な性質で小さい時に母をなくしたせいもあって、淋しがり屋の孤独な青年として育ってゆきました。年頃となっても、異性と愉快に談笑している友人が羨ましく、時には嫉ましくさえ思うくらいでしたが、それでいて、自分から進んで若い女性に接近するような勇気は、とても持ち合せていませんでした。

そのようなわけで、僕の若い女性に対する神秘的な憧れは益々内攻してゆくばかりでした。正面向ったときは、女性の顔をまともに見ることも出来ない僕の気の弱さ。それでいて、一旦空想の世界に入ったならば、僕の暴虐の精神は、素晴しくもめざましい活躍を遂げるのです。現実では、手を触れることさえ出来ない僕も、夜たった独りで空想に耽るときは、あらゆる美女を緊縛し鞭の下に屈伏させるのです。



大塚啓子さんへ 柔肌に恋う

長門弘

こんなとき、大塚さん、僕は貴女を奇ク誌上に発見したのです。僕の永遠の恋人、そういった言葉がぴったりするほど、貴女は僕のイメージにぴったりの人だったのです。まだ僕が奇クを見ないとき、夢の中に描いて美女が啓子さん、貴女そっくりだったのです。

それ以来、大塚啓子さんは、僕の心の中の恋人となったのです。貴女の出ている代理部分譲品は出来る限り殆ど求めました。時にはグラビヤで小さく出ている写真なんか、わざわざ編集部にお願いして大きく伸してもらったことさえあります。

貴女の身体の特徴は、実際に貴女に逢っている人以上に、僕の方が詳しい位、僕は貴女に熱中してきました。貴女が何かの原因で痩せられたとき、又、回復されたとき次第に伸びてきた長髪、又それが断髪されたとき、僕は貴女の身体的変化についても、非常に気をつけてきました。というより、貴女を注目していて、その変化に気がついたという方が本当でしょうか。

僕は貴女のふっくらとした、あの柔肌が大好きで魅かれてゆきました。縄にくびられた乳房、腹部に没するばかりの縄目、それらを見ていると、僕は自分の手で貴女を実際にいじめているような気持になれるのです。本当に貴女にお逢いしたとしても、実際には僕は何一つ、ようしないでしょう。それなのに、写真の上でしたら、僕は紙背に徹するような熱っぽい視線で、貴女の足の指先から頭のてっぺんに至るまで舐めるように見ることが出来るのです。

やわらかく膨らんだお腹、さぞ皮下脂肪がたっぷりと貯って、真白い肌を想像させる腹部。深い陰翳を宿した可愛いい臍窩。縄にもだえて虚空を蹴った足の指先にも、僕は限りない大塚啓子さんの色気を感ずるのです。

まるで石鹸をまぶしたようなつるりつるりとした裸身が、厳しい縄目にもだえてるのを見るとき、僕のかくされた嗜虐心が最高度にもえたぎるのです。それでいて、不思議なことには、他の女性に対してはこのような嗜虐心の昂揚が見られないのです。これは一体どうしたことでしょうか。僕は自分でも、このことについては、何故だか原因がわからないのです。

大塚啓子さんの柔肌に恋う。本当に啓子さんは僕の女神です。奇ク誌上に啓子さんの麗姿がある以上、僕は永遠に奇クの愛読者でいるでしょう。そして、貴女の名前のある分譲品は総べて買い求めることでしょう。

啓子さん、このような僕を失望させないで下さい。お願いします。

サジスチック・ストリー・シリーズ

残酷グループ

大中忠

「ヨッコ、一寸待って」

住宅街のはずれ、一寸ぐれた感じの背の高い女学生はふと足を止めた。締った体、小麦色の肌、しかし、髪は波打ち、セーラー服もくずれた着方である。

「フーコね、何か用?」

物影から出て来た少女の方に向って女学生は緊張しながら答えた。体にぴったりしたセーターと細いスラックスの少女も、背が高く美しい体であるが、わざとくずれた感じを出している。

「良いものを見せたげよう。」

セーターの少女は掌を拡げた。春の陽ざしを浴びて、それは光った。女学生は視線を向けた途端顔色を変えた。

「サチのペンダント!」

セーターの少女は、激しい怒気を感じて、一瞬遠のいた。

「駄目よ。私を痛めたって、一時間以内に帰らないと泣くのはサチコさんだから。」

「サチは何処?」

「ついて来る?」

「勿論」

セーターの少女は先に立って山手に足を向けた。

「サチに、ひどいことしてるじゃないだろうね。」

「来れば判るよ。」

洋子は文子の後について細い路を歩いた。幸子は洋子が可愛がっている下級生だ。洋子は自分がぐれて、小さなグループの女親分気取になっていても、幸子には決して話もしなかった。もっとも人の話に幸子は知っているようだ。

洋子のグループと、激しく対立しているのが、この文子の属しているグループで、リー

ダーは元江という洋子の同級生だ。洋子と同じ体格をしていたが、一対一では洋子にかなわなかった。そこで今日は幸子をおとりにおびき出したのだろう。

細い道を爪先上りに行くと、古い小さな洋館が目の前に急に現われた。洋子はこの山の下の路を何度も通っているのだが、上にこんな家があるのは知らなかった。頑丈そうな、だが一面蔦に覆われたその姿は、住む人がありそうにもなかった。

「ここだよ。」

文子は先に立って古ぼけた玄関を入った。ほこりの積った床に大勢の足跡が残っているのが薄暗い室内でもはっきり見えた。

文子は一番奥まった戸の前に立った。分厚い扉らしい。

「この中かい?」

さすがに洋子は体が細かくふるえるのを、どうすることも出体なかった。それ程この家は不気味であったし、扉の中から緊張感が外に迄溢れ出ていた。

「恐くなったんじゃない?」

文子は洋子にそういいながら手荒に取手を握ると勢良く開いた。と、中からは音は洩れず、光と数人の激しい視線が、二人を迎えた。その数人の向うに長くぶら下げられた白い体を一目見た時、洋子は

「サチ!」

と叫ぶと鞄をほうり出して室内に飛び込んだ。たちまち、小さな部屋は騒音に満ち、文子はあわてて扉をぴったりと閉めた。洋子は全く逆上していた。可愛い幸子の哀れな姿を目にして洋子は手にさわるものを叩き、蹴り嚙みついた。いくら洋子の体力が秀れていても、数人の力にはかなわない。悲鳴と騒音の挙句、洋子は一人に髪をつかまれ、両腕を押さえられ、部屋の隅に押しつけられた。セーラー服は破れ、胸元もすっかり露わにされていた。乱れた髪、細い血の筋が見える肌、洋子は急をはずませながら目ばかり光らせていた。

「もっと幸子に鳴いてもらおうか。」

細いベルトを手にした元江が幸子の傍で冷い笑顔を見せていた。

いつの間に打たれたものか、パンティ一枚で両手を伸ばして吊られている幸子の白い背中に赤い筋が数本交叉していた。

「あっ、畜生!」

騒音の中で幸子の悲鳴には気がつかなかったのだ。

「まだ暴れるかい」

元江はいきなり手にしたベルトを幸子の体に叩きつけた。白く小さい体が悲鳴と共にそり反り、丸く豊かな胸が腋の下の影と共に洋子の目にうつった。それはよく知っている洋子でさえ息を飲む美しさだった。

「待って、サチには手をふれないで。」

「そうかい、それじゃおとなしくするね。」

洋子はがっくりと力を抜いた。

「では裸になってもらおうよ。」

抵抗をあきらめた洋子の体から破れたセーラー服がぬがされ、スカート、スリップと次々に手が出て、洋子の体があらわにされて行った。しかし無抵抗でいた洋子も最後の一枚がぬがされそうになった時には思わず手を出した。

「まだあきらめ切れないのかい。」

ベルトは幸子の胸のふくらみを打った。丸い肌が可愛く顔をのぞかせた。表情は見えない。ベルトの空を切る音に洋子は手で顔をおおった。敵方の数人の視線の下に捕われの身をさらした女親分。それは元江達にとっては楽しい獲物であった。

「縛っちまいな。」

洋子の手は後にねじ上げられ、両手首をしっかりと縛り合わされ、胸元にもぐいぐいと

縄目が喰い入った。小さな締った乳房の上下に喰い込んだ縄が洋子にあきらめの気持を新たにさせた。両手は全く動かない。
「こっちにつれといでよ。」
幸子の縄は解かれ、少女は床に崩折れた。
「おや、このお嬢さん、気を失ってるよ。そこに縛っときな。」
「サチにはさわらないで。」
洋子は後手の縄尻を今迄幸子が吊られていた縄につながれながら云った。洋子ならずとも背中に鞭跡を残し、丸い体を伏せている若々しい体は哀れに感じられた。しかし、二・三人の手が幸子を部屋の隅に連れて行き、座ったままの姿で柱に縛りつけた。
「お嬢さんには見ていてもらうだけさ。さあ引いて。」
元江の合図で洋子の頭の上で車のまわる音がして、洋子の体は吊り上げられ始めた。縛しめの縄は滑車を通っているのだ。徐々に縄が体に喰い込み始め、やがて洋子の体は全く宙に浮いた。爪先から床迄一米位も離れる程吊り上げられた。腕と胸に縄目が苦しく、縄目にはさまれた肌が焼けるように痛い。
「一寸、休もうよ。」
洋子の体は部屋の中央に浮いたままだ。
「憎いけど良い体してるね。」
哀れな姿にされてはいても、洋子の引き締った曲線は崩れない。よく張った腰、むっちりとした太もも、よく締ったふくらはぎ、肌の色が小麦色であるだけに、野性的な美しさがあった。
「だけど、オッパイが小さいね。」
「色も黒いし。」
「毛深いよ。」
女が悪意を持って女を観る時、その毒舌はすさまじい。特に女ばかりの時には公表出来ないようなことも平気で口にする。元江達は皆洋子の身体が見せる美しい曲線にいささか圧倒されたようだ。しかし洋子は後手のまま吊られているし、幸子という可愛い宝も押えてある。部屋の中にはサディスティックなムードが溢れて来た。
「どうしてやろう。」
「そうね。思い切り痛めてやろうよ。」
「あの娘はどうする。」
一人が手折れた花のように柱につながれた幸子に視線を向けた。
「あれは宝物だよ、手をつけちゃいけない。」
元江は、こういいながら妙な目くばせをした。どうやら幸子も無事には帰れそうにないようだ。
「鞭で打とうか。」
「浣腸って手もあるよ。」
「逆吊りは。」
「海老責め。」
「何？　海老責めって」
「あぐらかいて座らせて、頭が足につく迄曲げて縛りつけとくのさ。」
「そんなので苦しい？」
「ほっといたら死ぬって云うよ。」
「水責め。」
「火責め。」
「もっと苦しいのは。」
「くすぐり責め。」
吊られたままの洋子は縄目の苦痛に耐えながら、すさまじい責めの名が出てくるのに寒気をおぼえた。が、それと同時に、決して敵の前で弱音は吐かないでおこうと心に固く決めた。
「じゃ始めよう。フーコ、その娘の傍についといで、こいつが暴れたら、構わないから、その娘を思い切り痛めつけるんだよ。」
元江の言葉は半分は洋子に聞かせる為のものだった。滑車がまわり、後手の縄は解かれた。小麦色の肌に赤い縄目の跡がくっきりと

赤く縄に嚙まれた肌が痛々しく腫れている。元江は無抵抗の洋子に細心の注意を払いながら、洋子の手首を前で縛り、滑車の縄につないだ。

再び滑車の音。洋子は先程の幸子と同じ様に手首を吊られた。爪先がやっと床に届く位だ。脇腹が思い切り伸び、焼けるような感じだ。一本の棒のように吊るされた為、洋子の脚線美は一層強調された、太ももからふくらはぎに真直に延びた細い凹みは小麦色の脚をかもしかのように見せていた。

「観念しなよ。」

元江は洋子の体を嗜虐的に見た。その右手には細い皮鞭が握られていた。じっと洋子の体を見ていた元江はその美しさに反感を覚えいきなり、鞭をふり下ろした。空を切る鋭い音と共に、洋子は嚙み殺した悲鳴でのけぞった。体が手首を中心にぐるりと回る。盛り上った腕のつけ根に赤い筋がさっと走った。続いて締った腰に、巾広い背中に、休みなく鞭は洋子の肌を襲った。決して悲鳴は洩らすまいと誓った洋子だが、その努力が決して生易しいものではないことを、彼女は改めて悟った。ともすれば動物的な声が出そうになるのを、洋子は唇をしっかりと嚙みしめていた。



洋子の無防備な体は鞭の音につれて、くるくると回った。

遠い意識の彼方で幸子は押し殺された悲鳴を聞いたように思った。すると急に意識がはっきりし、目をぱっちりと開いた。

「あっ、お姉さん。」

目の前にぶら下げられた美しい体と、そのむき出しの肌を襲う鞭の嵐に幸子は悲鳴を挙げた。

この洋館につれ込まれ、裸にされて吊られた時から、幸子はもう半分意識を失っていた。いくら同性の前とは云え、今迄人前に肌をさらすのを極端に嫌がった幸子だけに、ほとんど裸に近いパンティ一枚の体を見せるのは死ぬ思いだった。しかも両腕を上に挙げて縛られてしまっては、全く無防備の頼りない姿である。特に腋を見せるのが恥しかった幸

子だ。真夏でも袖口のぴったりしたのを着て、綺麗に腋の下を始末していても決して見えないようにしていた。それが、全く露わにされてしまっては、もう半分意識がなくなるのも無理からぬことだった。

「サ、サチ、だ、大丈夫よ」

洋子の声は苦しかった。たくましい小麦色の肌はもう二、三カ所破れて血がにじんでいた。慕っている洋子の哀れな姿を目の前にして幸子は息をのんだ。洋子の姿は美しかった。鞭につれてまわる度に新たな曲線が幸子の目にふれた。自分が縛られていることも忘れて幸子は洋子の姿を見つめた。女があらわな姿で縛られるのが、こんなに美しいものだということを、幸子は始めて知った思いだった。

洋子はもう手首の縄にぐったりとぶら下っていた。背中が燃えているようだ。背中一面に赤い鞭跡がみみず腫れになっている。小麦色の体は汗でぐっしょりとぬれ、ぬれた洋子の肌は前にも増して美しかった。すんなりと伸びた脚、細く締った足首、日本人離れした脚線であった。洋子を吊った縄はゆるめられた。

洋子はぐったりと床にのびた。光る背中の鞭跡が痛々しい。

「お姉さん」

幸子は自分の肌に喰い込む縄目も忘れてもがいた。その声が聞えたのか洋子は急にはね起きた。鞭は痛めつけられ、もう顔を上げる元気もないのかと思われたが、洋子は体中の力をふりしぼって、幸子の傍に走り寄った。幸子の傍に居た文子があわてて幸子の前に立ったが、たちまち洋子に肩口を蹴られてのけぞった。洋子はそれに見向きもせず、かがみ込むと幸子の縄目に手をかけた。

「お姉さん。」

幸子の目の前には、小麦色に光る体があった。後手の縄目に手がかかる。その時、洋子は急に動物的な悲鳴を挙げると幸子から手を離してのけぞった。元江の手にした鞭は無防備な洋子の体を所構わず襲った。洋子は床をのたうちまわった。汗で床がべっとりとぬれる。乳房に脇腹に太ももに元江の鞭は容赦なく降った。もう抵抗どころではない。洋子は残った力も鞭で叩き出され、ただ鞭の嵐の下にうごめくだけだった。

洋子は文子達の手で大きなテーブルの上に押し上げられ両手を開いて縛りつけられた。若々しい体が、大きな息をついていた。

「よく暴れたわね。」

文子の手には鳥の羽が一本握られていた。もう洋子は自分のあさましい姿にも気付かないように、目を閉じて、ぐったりとしたままだった。しかし、文子の手にした羽が、深い影を作る洋子の腋の下に近付くと、洋子は手足の縄を力の限り引っぱってもがいた。

「クイーッ、ヒー」

洋子の唇からは歓びと悲しみと苦しみが入り交った様な声が洩れて来た。形の良い手首や足首に激しく縄目は喰い込み、締った腹部が上下に激しくゆれる。

羽は腋の下から脇腹、足の裏と、急所急所を責めたてた。洋子の悲鳴はもう人間のものではなかった。汗が、ふたたび全身に吹き出し、小麦色の体を彫刻のように光らせた。文子の手が止った時、洋子はテーブルの上に縛りつけられたまま、ぐったりとなった。気の強そうな顔は奇妙に歪んだままだ。

「参ったらしいわね。今度はあの娘よ。」

元江の声に洋子はきっと首をもたげた。

「止めて、サチには手を出さない約束じゃないか。」

「何さ、自分だっておとなしくしなかったくせに。だまっといでよ。」

「や……む……」

洋子の口に、ぬがされたシュミーズの端がねじ込まれた。はずそうと頭を左右に振ったが、口一杯にねじ込まれた上に別の布で首の後で結ばれてしまっては、声どころか、呼吸さえも苦しくなって来た。

その間に幸子は柱から離され、後手の縄はそのままに部屋の中央に引き出された。洋子とは違って、真白な肌、ふんわりと柔らかそうな体、丸い肩、腰、胸、可憐という言葉そのままの姿だった。それだけに後手に縛しめられた姿は痛々しかった。

「うっ伏せにして、それぬがせちゃうのよ。」

元江の手には注射器の大きなものを手に命令した。幸子は腰を上げた姿に押えられ、鞭の為破れたパンティがずり下ろされ、丸く柔らかな二つのふくらみがむき出された。鞭跡が一筋赤く残っている。

体内に冷い液が注ぎ込まれた感じに幸子は鳥肌立った。ふっくらとした頬が床に押しつけられ、豊かな胸に喰い込む縄目が苦しい。間もなく幸子は下腹を襲う異様な感じに身をよじった。下半身の筋肉が全部ゆるんでしまいそうになるのを幸子は必死にこらえた。

テーブルの上に仰向けに縛りつけられた洋子にはこの幸子の哀れな姿は目に入らない。しかし、異様な空気に大体は想像出来た。それだけに洋子は自分の不自由な姿にたまらない腹立たしさを憶えた。床の上では幸子が必死に体をよじって自分自身に抵抗していた。そしてその緊張感が頂点に達して、プツリと切れた時、台の上の洋子も自分のことのように身もだえた。あの可憐な幸子がどんな恥しい目にあっているか、考えただけで洋子は元江達に対する憎しみを強くするのだった。いつの時か、きっと元江と文子を同じ様な姿にしてみせる。そして自分達が合わされたのよりも、もっと激しい責めを加えてやるのだ。何ら抵抗を許されない今の洋子にとって、こんな考えで気を持たせるのが精一杯の反抗だった。だがふたたび後手に……だが今度は手首だけ縛られ、壁の前に座らされた時には、もう次に迫る苦しみのことしか考えられなかった。洋子の太ももとふくらはぎは一つにして縛られた。もう立ち上ることは出来ない。洋子と背中合わせに幸子も同じ姿にされていた。幸子のむっちりした太ももに縄は小気味良く喰い入った。

さらに二人の手首は後に吊り上げられ、一杯に、延びた所で、壁の釘を通してつながれた。一人が楽な姿勢をしようとすれば、もう一人の腕が引かれ苦痛が激しくなる。

洋子は間もなくこの仕組みに気がついた。少しでも幸子が楽になるように、自分の腕を一杯に延ばしてみたが、自分の苦痛が増すだけで、幸子の方は楽になりそうにもなかった。被虐の乙女の姿は、見る者にとって美しい対象であった。小麦色の引き締った体の洋子、白くふっくらとした幸子。胸のふくらみ、肌の白さ、肩や腰、ももの丸み、柔らかさ等は幸子の方が勝っていたが、体全体の均衡は洋子の方が美しかった。

文子が鞭を手に近付いた。幸子も洋子も、頭を上げることは出来ない。唯、文子の白くて太い脚を見ることが出来るだけである。その脚に力が入ったと見ると、もう聞き慣れた空を切る音がして、幸子の肩のふくらみが悲鳴を挙げた。

「ギェーッ」

幸子の悲鳴と共に洋子は後手を伸した。太ももとふくらはぎに縄が激しく喰い込んだ。なめらかな幸子の肩に赤い筋が鮮やかに浮かんだ。

「ねえ、面白いじゃない。一人を打ったら、もう一人も悲鳴を挙げるんだもの。」

「良いでしょう、その責め方」

元江は一寸得意そうに云った。
「だけどこの娘、色白いわね。」
「本当、マリとどっちが白いかしら。」
マリと呼ばれた色白の少女が恥しそうに前に出た。
「駄目よ、スカートまくらなくちゃ」
マリの肉付きの良い白い脚がむき出しにされて、幸子の体に近付けられた。成程、白く若々しい肌だ。だが幸子の体が持つ内部からの艶は見られなかった。
「憎らしいね。」
肌が白いだけに肩の赤い筋は鮮やかで痛々しかった。
「今度はこっちよ。」
文子の鞭は洋子の太ももに鳴った。
「ウーッ」
悲鳴を挙げたのは幸子だ。洋子の厳重な猿轡が辛うじて悲鳴を防いでいた。洋子のはち切れそうな太ももを横切って赤い筋が走ったが幸子のほど鮮やかには見えなかった。
囚われの二人の少女が鞭の下にあえぐ姿を見る元江の瞳には、ライバルに勝ったという喜びと共に、哀れな少女の苦しみを楽しむサディスティックな光が溢れていた。
元江が初めて他人を縛ったのは彼女が中学に入った時だった。相手は隣に住む同級の男の子。何がきっかけだったか彼女も思い出せないが、その少年をパンツ一枚の裸にして、後手に縛り上げたことだけは、はっきりと覚えていた。子供らしい痩身と、若々しい肉附きは、早熟な元江を夢中にさせるに十分だった。元江は少年の手を縛るだけではあき足らず、脚も縛ってころがしてみた。少年は悪びれずに元江の好きなようにさせていた。
この時の縄の手ざわり、肌に喰い込む縄等の記憶は元江の頭脳に深く刻み込まれてしまった。幾分男性的な元江は、この少年をそれから三度縛ったが、回を重ねる度に最初、あれ程感激したのが不思議に思われるようになって来た。肌の感じ、縄の喰い込み方、何か物足りなくなって来たのだ。そんな頃、元江が縛るチャンスをつかんだのが、マリだった。同性を縛るという何か後めたさを感じたが、半袖のセーラー服の上からマリを後手に縛って初めて自分の求めていたものがこれだと感じた。むき出しの二の腕に喰い込む縄目の手ごたえがまるで違うし、肌理の細かさも全く違う。
後に色々な本を読んで、女が女をいじめるのは変ったタイプだと知って少し悩みもしたが、最初に縛ったマリの手ごたえは忘れることが出来なかった。そして嫌がるマリを胸の可愛いふくらみを見ながら縛り上げた時、その可愛さに元江は思わずマリを抱きしめてしまった。
それから元江が縛った少女は十本の指に余る程であった。今の元江のグループのメムバーは全部元江に縛られた経験を持っていた。縛られていないのは文子だけだが、彼女も日ならずして皆と同じ目に合わされることは明らかであった。
元江自身もマリに縛られてみたことはあったが、肌を嚙み、乳房を押す縄目の苦しさにあえいだだけで、喜びは見出されなかった。
この古い洋館を見つけたのは元江自身だった。そして、長い間人が住んでいないこと、人目につかない所に立っていること。その一室が完全な防音になっていることを知った元江はただちにこの家を自分のグループの巣に決め、まずこの部屋に自分の日頃夢見ていた責道具を持ち込んだのだ。手に入る限り一番大きな浣腸器、彼女はこれを今迄実際に使ったことはなかった。排泄をこらえる苦しみを楽しむ為ではなく、注入する時の屈辱的な姿と、その時の気分だけが楽しみだったのだ。

それに鞭、これはしなやかな皮鞭が欲しかったのだが、手に入りにくく、皮紐を加工して自分で作り上げた。

一番大切なロープは色々集めた。太いの、細いの、固いの、柔いの……それから鳥の羽、ローソク、毛抜き、簡単な猿轡。……

もっともこれらの責道具の中で実際に使われたのは、ロープとローソクだけだった。だから浣腸と鞭は元江にしても初めての試みだったのだ。

幸子の白い背中とぴったり合わされた太もも、洋子の小麦色の体には、もう赤い筋が交叉し幸子の小さな唇からは獣的な悲鳴があるだけだった。

「もう良いだろう。」

文子は手を止めた。実際、二人の少女は後手の縄にぶら下ったような姿になっていた。二人共吹き出した汗が若々しい体を光らせていた。これ以上責めが続けば二人の少女は消えてしまうかもしれなかった。

一番痛々しいのは幸子の肩の所だった。後手に吊り上げられた姿の為柔かく盛り上った所に赤いみみず脹れが幾筋も交叉している。その交叉した点からは柔肌を破って血がにじみ出してさえいた。洋子の体は先程からの責めで幸子以上に痛めつけられているのだが、小麦色の肌と引き締った体の為に、一寸見た所は幸子よりも楽なようだった。だが、よく注意してみると、体一面が痛々しく脹れ上っている。洋子自身も、体中が燃えているようだった。後手に吊られた肩の痛みと相まってもう思考力もなくなっていた。先程迄一生懸命に考えていた元江と文子への復讐も今は、頭からすっかり消えてしまっていた。可愛い幸子を助けよう、少しでもサチを楽にしてやろうという強い気持も何処かへ薄れてしまった。今はただ現状にあまんじているしか方法がない。全身の力が抜けて、腕の縄にぶら下っているだけだ。

「参ったらしいね。」

元江の勝ちほこった声も、ずっと遠くで聞えるようだった。

「しばらく、このままにしとこうよ。」

「今、何時?」

「六時一寸過ぎたとこ。」

「しまった約束よ。」

「あっそうだ、急ご」

「どうするの。」

「ほっとこうよ。面白いさ。」

嵐はまたたく間に去った。暗くなった部屋に被縛の裸身が二つだけ残された。床から冷たさがはいよってくる。やがて、幸子が身動きをした、肩の付け根がちぎれる程痛い。

「お姉さま」

洋子もこの声に身動きをしたが、声は洩れない。幸子は太ももに喰い込む縄目をこらえながら洋子に体を近付けた。

(完)

＜切腹体験記＞

鏡美人の切腹

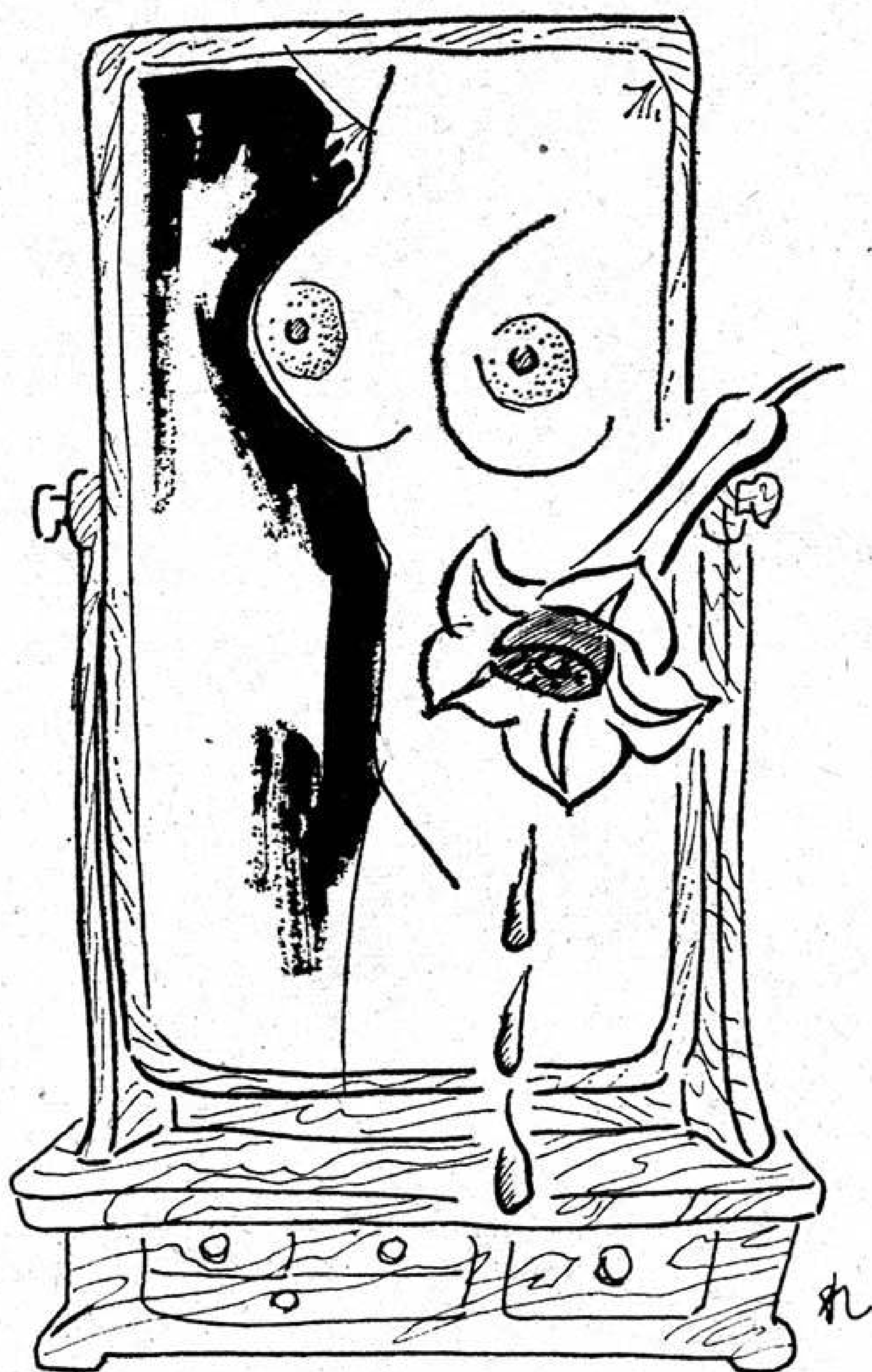
新山　武

十二月号美川多起夫氏の切腹体験記を拝読して、実はわたくしも美川氏にソックリな経験をもつ身として、同志を得たという喜びのあまり、筆をとった次第でございます。

美川氏は女装による切腹体験と申されましたが、わたくしもこれと同じ方法によったのです。この考えをもったのは、今から七、八年前のことですが、たまたま貴誌を入手してからのことで、彼の不破和子様、原桐咲代様などの記事を読む後にその考えが深まり、遂に次に記す切腹となったのでございます。

といってわたくしも妻子のある身故に、その数年はどうしても、その機会に接し得ずしてなやんでおりましたが、本年夏、妻が出産のため子供と共に帰郷し、わたくしは一人会社の社宅にくらす身となったのでございます。依って「この時だ、年来の宿望を達成するのは」と考えましたが、わが家ではなかなか実行する気になれなかったのであります。いろいろ思案したあげく、十日ばかり会社を休み、妻への見舞いということに表向きはして、少しはなれた山の温泉地に出かけました。

出かけるときの準備は、わたくしは女装も一つの夢でしたから、妻の結婚のとき着た花嫁衣裳ひと揃えと少々多い目に金を苦面して心をときめかして参りました。途中知人から芸をやるのだからと言ってかつらを借りました。これは上等の品でもあるためか安くありませんでした。しかし序でに高島田にゆってもらいつのかくしもつけてもらいましたが、さすがにわたくしが使うのだとは言えず、それ故に頭に合せることも恥かしいので、大体目算でもって参りました。その他化粧品、脱毛剤、薬品その他の救急品類及び白一色の下着と足袋等、一週間分くらいの食糧も共に入



手して汽車の人となりました。心はすでにときめく温泉地へ。温泉には夕刻つきましたので、その夜はそのまま宿についたわけであります。而して旅館の女中にその温泉より更に奥に温泉があることを聞かされ、そこへまた翌朝こんどは、ガタガタの田舎バスにゆられて参りました。少しでも人の少い、しずかなところをと思ったからです。しかし荷物も多かった為かひと苦労でした。

その温泉はまた山の中のまた中で、電灯こそあるが、小さなしかも平和でしずかなみどりに囲まれた里と言った方が適している地でした。こんなところにおいて切腹して死ねることも、あながちわたくしにはたのしいことのようにも思えたのでした。

案内所に聞くと農繁期のため客は少く、特に自炊部は一人もいないとか、それ故に少し料金をはずんだら、第一等（といってもそう立派ではないが）の部屋を得ることができました。この部屋はまた都合がよいことに浴室が近く、その浴室も小さいところで、かっては家族風呂とのことでもありました。そしておあつらえ向きに、少々さけんでも誰に気がねするところでもありませんでした。

わたくしの部屋はもちろん内かぎもついており、廊下側には小さなひと部屋があり、また窓側は一間廊下で、ここに自炊設備があり食糧さえもって来ていれば、何ん日も外へ出なくてもよいようになっていることはありがたいことでした。

わたくしはここに一週間泊ることにして、その宿料は前払いしたのでした。そして作家ということにして、誰も入らないように管理人に話して、その部屋の主となったわけであります。別に送った荷物も着きました。そして第一夜を結んだわけであります。

一応室内を整理して、その夜はそのまま休みましたが、ここに一番大切なものを忘れていることに気付きました。それは決行の時の即ち切腹刀なのです。三宝をもって来てましたが、まさか三宝の上に安全カミソリや庖丁では気分が出ません、翌日は何かよいものはないか？　と近所をさがして歩きました。そ

して手に入れたのは、短刀位の大きさのその形をした土産品の木刀でした。わたくしはこれを一ふり買って喜びいさんで帰りました。その他に白色のナイロンの一坪大のものを買いました。そして部屋に帰るやその木刀に工夫したのです。即ち刀の先に細工をして安全カミソリを仕込んだのでした。これで切腹刀はできたわけでした。

斯くして次の日程を計画しました。到着した翌日を第一日とすると、

第一日　準備の日
第二日　花嫁女装の日
第三日　女装切腹方法研究の日
第四日　決行の日
第五日　あとしまつ、検討の日
第六日　帰郷の日

であります。

第一日には管理人に鏡を借りにいくと、いいことに大きな三面鏡を貸してくれました。何んでも部屋備付けの普通の鏡台が修理中のためとかであります。また部屋には机が一つ電気スタンドが一つ、座イス、整理タンス各一つ備えてありました。わたくしは決行にはできるだけこの全部を利用しようと思いました。そしてその日の夕刻でしたが、大体必要品の準備ができ、わたくしは床屋に出かけ、帰ってから除毛を行いました。マユとか頭髪は関係ありません。できるだけ女性になり切ろうと思ったからです。

それから風呂に入り、その夜はそのまま休みましたが、なかなかこうふんして寝つかれず睡眠薬で眠った程でした。

第二日目、今日は花嫁女装の日です。昨夜眠れず、おそく睡眠薬で眠ったのですが、薬のためか午前八時までグッスリ眠りました。

起きて簡単に食事を済ますと、入浴しそして、めざすはじめての女装です。今まで心に思っただけで今日に至ったこの数年の望み、それが果たせるのです。わたくしはときめく心をおさえて、鏡に向いました。

それから全裸のままそれこそ全身を化粧しました。花嫁として、また死の道を考えてもそれは念入りにしました。特に顔は苦労しましたが、厚化粧はいろいろの欠点をかくしてくれました。化粧はもちろん手も足もです。そして白足袋をはき、大きめのブラジャーにパットを入れてしめましたが、腰巻とパンテイはわざとはじめから用意しません。これに白の長じゅばんを着て、それからかつらを頭にのせました。少しきゅうくつでしたがかえってキチンとなって良いように思いました。そしてまた良いことにつのかくしがついているため少しでも顔の男性的面がかくれることでした。かくして女装の第一歩を踏み出したのです。白無垢の長じゅばん姿、鏡にはこれまでに見たことのない女性が立っているではありませんか、心はときめく共に一大発見をした感がしました。次に振袖と帯にはひと苦労をしました。誰に手伝ってもらうわけでなし、只鏡の女性と共に研究しつつやっていく、山あいとは言え初夏の気候には汗がにじみ出て化粧くずれになやまされながら、やっと完了したのが午後の二時でした。婦人雑誌の附録を見乍らの着付け、何んかいもやりなおし乍ら一心不乱進めていく楽しさ、しかし困ったことは小用でした。そうして本当に衣裳の着付けがこれでよいと思ったのは、午後三時をまわっていたと思います。鏡の前でおそい昼食を済ませ、それから座イスにもたれて、ウットリとこの喜びを鏡にうつしていました。ああ数年の望み、そしてこの大労働、鏡の女性は時折ホホ笑みかけます。私のもう一つの身体とも申しましようか、三十五才のこの身この姿は捨てたものでないと、その楽しさと喜びにひたりました。

その日はそのまま一日を過しましたが、長い夏の日も、こうして時間のたつのも早く、知らぬ間にトップリと暮れており、時刻は九時をさしておりました。そうしてしばらく鏡の女性つまり花嫁にウットリとしていた私は前記の計画を一日くり上げて、この女性に切腹させようと考えました。本当はその晩にもしたかったのですが、はやる心を落ちつかせできるだけ女性化し、できるだけ死を想像して、そのムードをつくってからという考えに帰着しました。

時計は十時をうちました。明日は切腹するのだという覚悟をきめて、静かに衣裳をぬぎました。そして誰も来ない時刻をみて（内かぎがあるのですが）入浴しました。今日の化粧を皆落して……しかし寝化粧は忘れませんでした。時折起き上ってその姿を鏡に写してみる、かつらもとりました。只ブラジャーの他は全裸の姿、明日は計画を一日くり上げて本当にこの腹を切る、できるだけ長く横一文字に、できるだけ出血があるように、それを考えると、身ぶるいする感がしました。

今日は切腹決行、あれやこれや思いをめぐらして起きたのは八時少し前でした。入浴後食事をして買い物に出ました。線香を若干と草花をいろいろ、しかも沢山買いました。香炉は持参していましたが、花びんを忘れて来ていたので安いものでもと、大き目のものを二個買いました。温泉地の物価は高いのが常ですが、少し少しと思っても、大部出費します。幸い所持金は本日を目標に妻にかくして貯金したものがありましたから、事欠きませんでした。

宿へ帰ったのは十二時少し前でした。昼食は近くの食堂でとり、入浴後どういう方法で決行するか、いろいろと工夫しました。まず切腹の場です。三面鏡の鏡の面と同じ高さでないとどうもうまくない感がしました。依って敷フトンを二つ折りにして二枚重ね、その上に敷布を敷き、そして上に白のナイロンを敷きました。こうすると美川氏のマットレスのように、すわった場所が低くなり、血が噴き出さないかわり両膝の間にたまるしくみです。

後は壁によりかかれるようにし、前は鏡と一メートルくらいはなしました。そしてこの間にもナイロンを敷きました。これは借りものを四散する血で汚したくないためであります。そして鏡の中央前の棚に香炉を置き、両側に花びんを配して、鏡に邪魔しないよう花を活けましたが、すずらんの放香が女性の部屋の感をいだかせました。

腹切り刀は三宝が少し大形ですが、その上にチリ紙を若干二つ折りにして、その上に置き、鏡の前に据えました。これで切腹の座は整ったわけです。時刻は午後三時になっていました。顔そり程度ですけれ共床屋に行って来て入浴しましたが入浴のときは死の道に恥かしくないようにと、身体全体を清め、特に腹部は入念に洗いました。

部屋に帰ったのは五時でした。夏とは言え小用にいくのをできるだけ少くするため水物はとらないようにして夕食をすまし、薬品類を鏡の脇にかくし置き、決行中に立たないでもいいようにするため無理にも小用をして、午後六時女装にとりかかりました。

女装は前日と同じですが、裸になった時のことを考えて模造しん珠のネックレスをつけました。終ったのは十時少しまわっていたと思います。切腹時刻を十二時とし、それまでは夏の夜のすずしさを女装で楽しむことにしました。昨夜も女装して経験した身として楽しみは更に高まりましたが、やがて腹を切るのだ、という悲愴感に気のせいか、顔色は青白い感がし、思わずブルブルッとするのでし

た。しかし鏡の彼女と二人、この美人（?）を裸にさせて切腹させる喜び、この花嫁はどうするだろうと思うと、ワクワクするスリルは口に出せないものがありました。

やがて十一時です、わたくしは帯をほどきました、そして振袖のみはぬいで、衣物掛に掛けました。その後にはつのかくしをした白無垢姿の女性が鏡に写り、首にはネックレスがチラリとのぞいているのが見えました。

小用をたして来てから改めて最後の化粧をします。おそらくこれが最期であろうという考えを無理に思い込み、前夜にもまして入念に化粧しました。顔、首、胸、腹、腹部は特に清める心でした。足、手と背中をのぞき全身に落ち度のないようにくまなくやりました。まゆ墨、口紅、ほほ紅は申すに及ばず香水までもただよわせる私でした。

そして準備した切腹の座につきました。この座につくにまた一考を思いつきました。長じゆばんと腰の間に座イスを入れ、つまり座イスにすわった姿で長じゆばんを着るかっこうになります。そしてひざを立てた太ももとふくらはぎとの間に枕をはさみました。こうすると腹部がはっきりと鏡に写し出されるからです。そして座イスの背と腹部のヘソの附近を細ひもで二重にギッシリとしばりました。こうすれば下腹部を切ったときに、いやがおうでも出血し易いと思ったからです。それから両膝を枕と共に片側ずつこれもひもで座イスにしばりました。枕にはあらかじめ白ナイロンをかけておきました。そして長じゆばんの上を白帯でしめました。鏡の前には電気スタンドがちょう度腹部を照らすように置いてあります。

やがて十一時五十分となりました。私はこうして準備が終ると睡眠薬を少し多めに飲みました。数年来待ちに待った女装切腹です。今晩は切腹したら、このままで夜を通そうと思いました。やがて香炉もたかれました。香水の匂、花の香、そして香炉の香が部屋に充満しています。十一時五十五分電灯は全部消しました。そして暗い部屋で沈思黙考というわけです。ああもう直き年来の望みが達せられるかと思うとワクワクするのを禁じ得なかったのです。出血は少しでも多く、深さは五ミリ（少し浅かったと思います）ときめ、また長さは左足の付け根から右足の付け根までとしました。しばらく目をつむっていると、わたくしの携帯ラジオが十二時をうちました。昔でいうならうしみつ時です。電気スタンドをパッとつけてみました。すると花に埋って香煙の漂う中に、高島田の白無垢の女性が心なしか青白いきんちょうした顔でこちらを見てホホ笑んでいます。やがてこの女性が切腹するのだ、この女性と共に死ねるのだという陶酔感が身体全体を包むのでした。

間もなく睡眠薬も効いて来たようです。私は帯をときました。その絹ずれの音は何か言いようのない感じを与えてくれるのでした。鏡の女性といっしょに前を開いたら、ネックレスにブラジャーの胸が現われ、言いようのないお色気まで漂うのを覚えるのでした。

腹部はヘソの少し上で二つになってしばれています。その真白いおなか、今これに刀をあてるのかと思うとブルブルッと戦慄のようなものを覚えるのでした。

三宝の切腹刀をとり上げました。そしてチリ紙で巻き、右手でギッシリと握りました。そして左手ではわが腹をなで乍ら、「今お前を切り開くのだ」と言い聞かせていました。鏡の女性はこの晴れ姿に終始ホホ笑んでいます。大部睡くなって来ました。

思い切って左の腰骨のところに左手の助けを借りてその刀をあてがいました。少し強く圧ぱくするとジーンと痛みを感じます。その

時の気持をお察し下さい。つのかくしの高島田も心なしかふるえております。右へグッと移動させるとゾリッと音がしました。鏡の女性を見て左手で右脇腹を切っています。そして暫くすると血がにじみ出て来ました。こんどは十糎ばかり右に移動しました。もう夢中です。痛さよりもこのスリルと快感、少し休んでいると血が流れ出して来ました。こんどは歯を喰いしばったまま、ひと思いに右脇の腰骨のところまで引きまわしました。すると血管を切ったのか、ヘソ下と右脇の最後のとき出血が多くあり、ヘソ下ではまるで噴き出すように出血しました。こうして私は切腹したのですが、鏡の女性も同じで腹部を流れる血に白無垢や太ももを赤くそめていました。そしてチカチカ痛む感じ、しかし大部眠くなって参りました。それで刀をぬきとるとそれを三宝に返し、毛布を前にかけたまま座イスにもたれて深い深い眠りについたのでした。この切腹の安堵感が深く眠りをさそったと思います。

目がさめるともう十一時です。わたくしは座イスにしばられたまま左のフトン下にころげていました。腹部を見ると血はかたまっていましたが、白く脂ぼうが見られ、チカチカ痛むと同時に、新しい血がにじむのを見ました。ああ、私は遂に鏡の女性の切腹を見たのです。薬が効いてまだ頭が重いので、午前中はそのままフトンを敷いて休み、午後薬をつけて改めて縫合しましたが、その時の方が切るときより痛く、思わずウームとうめき声をあげました。

（おわり）

本誌既刊号在庫案内

○本誌既刊号の総目次を誌上に発表して以来、注文が殺到しております。在庫も次第に減少して売切れのものも大分出てきました。売切れになりますと補充しかねますので此の際、欠号はお揃え下さるようお願いします。

○左記に掲載しましたものは、只今でしたら在庫しております。送料は当方にて負担いたします。

○昭和35年5月号以前の号は全部売切れとなりました。

○限定版特別号の第一弾から第四弾まで、全部売切れました。

○サデイズム特集号、第一集から第四集まで全部売切れです。

○「悦虐特集号」第五集（悦五）は売切れました。従って只今在庫の「悦虐特集号」は（悦一）（悦二）（悦三）（悦四）です。

○各月号の総目次は漸次誌上に掲載いたしますが、既掲載の分は左記の通りであります。

◎昭和38年十一月号誌上に（38年6月号、7月号、8月号）

◎昭和39年一月号誌上に（38年9月号、10月号、11月号、12月号）

（35年9月号、35年6月号）

◎39年2月号誌上に（36年3月号、4月号、5月号、6月号）

○今月号に（36年7月号、8月号、9月号、10月号）

☆

昭和35年6月号	（定価三〇〇円）
昭和35年7月号	（定価三〇〇円）
昭和35年8月号	（売切）
昭和35年9月号	（定価三〇〇円）
昭和35年10月号	（定価一四〇円）
昭和35年11月号	（売切）
昭和35年12月号	（売切）

昭和36年1月号	（売切）
昭和36年2月号	（売切）
昭和39年3月号	（定価一五〇円）
昭和36年4月号	（定価一五〇円）
昭和36年5月号	（定価一五〇円）
昭和36年6月号	（定価一五〇円）
昭和36年7月号	（定価一五〇円）
昭和36年8月号	（定価一五〇円）
昭和36年9月号	（定価一五〇円）
昭和36年10月号	（定価二〇〇円）
昭和36年11月号	（定価二〇〇円）
昭和36年12月号	（定価二〇〇円）
昭和37年新年号	（定価二〇〇円）
昭和37年2月号	（定価二〇〇円）
昭和37年3月号	（定価二〇〇円）
昭和37年4月号	（定価二〇〇円）
昭和37年5月号	（定価二〇〇円）
昭和37年6月号	（定価二〇〇円）
昭和37年7月号	（定価二〇〇円）
昭和37年9月号	（定価二〇〇円）
昭和37年10月号	（定価二〇〇円）

☆

昭和37年11月号	（定価二〇〇円）
昭和37年12月号	（売切）
昭和38年新年号	（定価二〇〇円）
昭和38年2月号	（定価二〇〇円）
昭和38年3月号	（定価二〇〇円）
昭和38年4月号	（売切）
昭和38年5月号	（売切）
昭和38年6月号	（定価二〇〇円）
昭和38年7月号	（定価二〇〇円）
昭和38年8月号	（定価二〇〇円）
昭和38年9月号	（定価二〇〇円）
昭和38年10月号	（定価二〇〇円）
昭和38年11月号	（定価二五〇円）
昭和38年12月号	（定価二五〇円）
昭和39年1月号	（定価二五〇円）
昭和39年2月号	（定価二五〇円）
悦特第一集	（特価一五〇円）
悦特第二集	（特価一五〇円）
悦特第三集	（特価一五〇円）
悦特第四集	（特価一五〇円）



連載小説

花と蛇

（第九回）

団鬼六

森田と田代、それに川田の三人が地下室へ降りて来ると、葉桜団は女達だけで酒盛りをやっている最中であった。
「おや、社長、お待ちしていたところなんですよ」
朱美が酒くさい息を吐きながらいう。
地下室全体は煙と女達の賑やかな酒のやりとりで、むっとする熱気が充満している。
地下室の中央には上から垂れ下がっている一本の鎖にピンク色の褌一本の京子が縛りあげられた縄尻をつなぎとめられて、つま先立ちになり、ズベ公達の酒の肴になっているの

である。身も心も疲れ果てたような京子は、がっくりと首をおとし、小さくすすりあげていた。

田代達は朱美のいう特等席、つまり、あられもない姿をさらしている京子の正面に敷かれてある薬布団の上に各々坐るのだった。

「一体、これから何が始まるのかね」

田代は、ズベ公達に酌をされて茶わん酒を口に流しこみながら朱美に聞く。

「今から社長さんを始め、葉桜団全員に詫びをさせるんですよ」

朱美は、そういい、憎々しげに立縛りにされている京子に眼をやる。

「この姐ちゃん。男を知って、一段と美しい娘になったようじゃねえか」

森田が川田の方を見て笑った。

「へっへへ、だが、ずいぶんと苦労しましたぜ。往生ぎわの悪い阿女で、縛られたまんまのくせにすごく抵抗しやがるんでさあ」

川田は、とくとくとして昨夜、如何にして京子を陥落させたかを皆んなに語り出す。あぐら縛りの縄を解かれた京子は、両足が自由になるや襲いかかってくる川田をけりあげたりして最後の最後まで川田の毒牙から身を守ろうとしたという。そんな事で手間どっていると一旦川田の部屋を出て行ったズベ公達が物音を聞き再び入り来こんで来て、寄ってたかって、京子を押えつけ、青竹を持ちこんで来て足枷をはめこんでしまったのだ。

「へっへへ、いくらジャジャ馬でも、後手に縛られた上、足枷をはめられちゃ、どうしょうもねえ。俺は、ゆっくりとお褌を脱がせてやり——」

川田の話を男も女もゲラゲラ笑って聞いている。

立縛りにされている京子は悪魔の声が耳に入るのを防ぐよう顔を真赤にして激しく首を振るのだった。

「ところが社長、いよいよという時、この阿女、必死な声で、山崎さん、許して、と叫んで泣き出しやがった。山崎ってのは、この阿女が勤めている探偵社の社長なんですがね。つまり、そいつとこの阿女は恋人同志だったんですよ」

それを聞くと、朱美は眼をつりあげて、

「じや、この京子は、あのへっぽこ探偵のスケだったのかい」

「まあ、そういうわけだ。だが、この姐ちゃん、思った通り、生娘だったよ。可哀そうに山崎の野郎、自分の女を敵側の男の手で、女にさせたってわけさ」

川田が酒を飲みながら、そういうと、京子は、たまらなくなったように声をあげ、身を震わせて泣き出した。

「ふふふ、そうだったのかい。そりゃいい気味だよ」

と朱美は、頭のてっぺんから声を出すようにして笑う。

「お前も馬鹿な女だよ。もったいぶらず山崎に身を許していれば、まだ、あきらめがったろうにね。唐手なんぞ覚えてえらそうにしてるから、罰が当ったんだよ」

と銀子も立上って、京子の縄にくびられて大きくふくらんでいる両乳房をピチャピチャたたきながらいう。

「さてと、それはとにかく、もうお前さんは川田兄さんのおかげで立派な女になったんだし、これからは、森田組と葉桜団のために一生懸命働くんだよ。わかったね」

朱美は、京子の頭髪をわしづかみにして、ぐいと羞恥に染んだ顔を正面に向けさせてそういい、更に、

「さあ、皆んなの前で、宣誓するんだ。こういいな。——これからは、どのようなお仕置も喜んで受け、皆様に満足頂ける可愛いい女

になるまで努力致します、とね」
京子は、ただ鳴咽するだけで、閉じた眼を開こうともしなかった。
「強情をはると、ためにならないよ。ちよいとこれを見てごらん」
銀子は、京子の妹の美津子の赤い鞄を京子の足もとに置く。
「美津子もちゃんと捕まえてあるんだよ。あんまり私達を手こずらすと、お前の見ている前で、美津子を痛めつけるからね」
京子は、それを聞くと、ハッとして眼をあけ、足もとに置かれてある赤い鞄を見て、慄然とし、必死になって身をもみ始めた。
「美津子に、美津子に何の罪があるんです！悪魔、けだもの！」
京子は、狂ったようにわめき出した。たった一人の妹を、こんな野卑な畜生どもの嬲りものにされてたまるものかとばかり、京子は怒り狂い出したのだ。
銀子や川田達にしてみれば、正に思う壺というところだろう。
「そんなにもがいたって仕方がないよ。だから、いってるじゃないか。私達にさからわず素直にしてりゃ、何も美津子までしゃぶる気は私達にはないわよ」
いわれた通りに京子がするなら、美津子は嬲りものにしないという葉桜団の言葉に、京子は従うより他はなかった。
「さあ、皆んなの前で今いった通りのことをいうのだよ」
京子は、激しく肩を震わせながら、朱美のいった事を口に出していう。
「皆様に御満足のい、い、頂ける、可愛いい女に、なるまで努力、い、致します」
ズベ公達は、ヤンヤと拍手する。眼を固く閉じ、屈辱にむせんでいる京子に朱美は更に浴びせるのだった。
「川田の兄貴に、お礼をいうのだよ。女にしてもらったお礼をね」
川田が、ニヤニヤして、顔を京子に近ずけて行く。京子は、身を固くして、顔をねじるようにして伏せる。
「ちゃんと川田兄さんの顔を見て、心からお礼をいうのだよ。さもないと、美津子をここへ引張り出して嬲りものにするよ」
「お願いです。美津子だけは、助けてやって下さい。私は、私はどうなっても——」
京子は、涙にうるんだ美しい黒眼がちの瞳をあげ、銀子と朱美に哀願する。
もう嬲られ尽した自分だ、奇蹟的に救援者が現われることを念じつつ、時間をかせぐより方法のない京子であった。
「じゃ、早く、川田兄さんにいうのだよ」
朱美に尻をつねられて、京子は泣きはらした眼を近ずいて来た川田に向けるのだった。
「か、か、川田さん、有難うございました」
ズベ公達は、どっと笑う。
「そこで、熱いキッス！」
誰かが黄色い声で叫んだ。
酔っている川田は、京子の適度に脂肪ののった白い肩を両手で抱く。
激しく最初は首を振った京子であったが、どうにもならぬとあきらめたよう川田のいやらしく突き出して来る唇を我が唇で受けるのだった。
川田は、箍にかかったように京子を抱きすくめる。両手の自由のきかぬ京子は、為す術を忘れたように川田に唇を吸われるままになっていた。
昨日、川田を唐手で倒し、今、少しで静子夫人救出に成功するところであった京子も、今は、その川田のため、肉体を奪われ、その上、衆人環視の中で、破廉恥漢の川田の執拗な抱擁を受けるというみじめな嬲りものにされてしまったのである。

ズベ公達は顔を見合わせて、ニヤニヤし出した。
「こういう色事師に、かかっちゃ、唐手二段のお姐さんも、型なしだね」
朱美と銀子も含み笑いしながら話し合うのだった。
ようやく、川田が京子の体から身をひく。
京子は、真赤になった顔を激しく振って、屈辱にのたうっている。
「ふふふ、なかなか気分の乗ったキッスだったよ。さて、次に田所社長と森田親分に、詫びを入れてもらおうか」
朱美は、そういって、田所の方に眼くばせをした。ニヤニヤしながら、田所と森田は顔を見合せて立上る。
「さあ、このお二人にお詫びしな」
朱美に、尻をけられて、京子は、すすり上げながら、消え入るようにいう。
「ど、どうか、許して下さい」
口惜しさに歯ぎしりしていう京子を朱美は小気味良さそうに見ていたが、
「口先だけじゃ駄目だよ。これからは、社長と親分の望む事は、何でもしなくちゃならない。わかったね」
京子は、震えるようにうなずく。
朱美は、悦子とマリに眼くばせした。
あらかじめ打合わせてあったらしく、悦子とマリは、あいよ、と立上ると、隅から、一本のナイフと研石を持ち出した来た。
そのナイフは、昨夜、京子が静子夫人を救出しょうとして、夫人の縄を切り、悪魔に等しい田代をこらしめるべく彼のチョビヒゲを剃り落したナイフである。
そんなものをわざわざ持ち出して来る葉桜団は、その復讐に、一寸試し五分試し、京子の身を斬り刻もうというのだろうか。京子はもうどうともなれと観念の眼を閉じ、美しい顔を横に伏せている。
「おい、京子姐さん、このナイフに身覚えがあるだろう。あんたは、これで、静子夫人の縄を切っただけじゃなく、田代社長にとんでもない恥をかかせたんだ。一応、これから、その埋め合わせを社長と親分につけて頂こうという趣向さ」
朱美は、そういいながら、ナイフの先で、京子の豊かな乳房をチクチク突つく。
京子は、悲鳴をあげて、身悶えた。
川田が、茶わん酒をあふりながら、声をかける。
「朱美、ナイフで肌に傷なんかつけるのは良くねえな。その娘は――」
「大事な商売ものだというのだろ。わかってるよ。この娘に生傷をつけるんじゃないよ。田代社長の大切なヒゲを剃り落した罰に、この娘のヒゲを剃り落してやろうってわけさ」
朱美は、含み笑いしながらいう。京子も、朱美達が考えていることがわかったらしく顔面真赤にして、うなだれてしまうのであった。
ズベ公達は、わあーと気炎をあげて、再び賑やかに酒をくみ合い出す。
朱美は、耳たぶまで染めて、小さく震えている京子の尻を指で突く。
「いいね。これから、田所社長のヒゲを剃り落した罪のつぐないをするんだよ。田所社長と森田親分に仕上げて頂く事にするからね」
京子は、嫌嫌をするように首を左右へ振るのだった。
京子は、たまらなくなったように首をあげ周囲のズベ公達にいった。
「こ、殺して！　一思いに殺して頂戴！」
そんな目に合うぐらいなら、殺された方がどれぐらいいいか、実際に京子は思った事だろう。そういう姿にしたあとで、ズベ公達はどのように揶屈辱の極にあえぐ京子に対し、どのように揶

揄し、更に嬲る気なのか、京子は想像するだけで気が狂いそうになるのだった。

「そ、一思いに舌を噛んで、この屈辱から逃れようと京子が決心した時、その京子の心を見すかしたように川田の横で酒を飲んでいた銀子が声をかける。

「舌を噛んで死にたきゃ、死んでもいいのだよ。お前さんのかわりを美津子にさせるだけだから――」

京子は、出鼻をくじかれたようにハッとした。

「可愛いい妹にそんな思いをさせたくなかったら、おとなしく、お仕置を受けるんだよ。十年も若返らせてもらえるようなものじゃないか、ふふふ」

銀子は楽しくてたまらぬように笑うのだった。

美津子をこうしたズベ公達のなぶりものにさせないためには、自分が一旦、どうしても彼女達の酒の肴になるより仕方がないのだ。



しかし、何んと、葉桜団の復讐の残忍なことか。

京子は、肩を震わせて、激しく泣きじゃくる。

葉桜団の不良少女達は、更に、悪どい計画をたてていたのである。それは、京子から、剃り落したものを京子の愛人である山崎に送るという悪どい計画であった。

朱美が、その計画を声を大きくして仲間のズベ公達に話すと、

「そいつは傑作だ」

と、皆手をたたいて笑い合う。

京子は、狂気したように激しく首を振り、泣きわめいていた。婚約者の山崎に自分のそんなものが封筒につめられ送られる、あまりの辱しさに京子は、声も出ない。ズベ公達にぶつける呪いの言葉さえ、気持が顚倒してしまって口に出ないのだった。

ズベ公達が、朱美の立てた計画の奇抜さに笑い合っている間、朱美自身は、口もとを歪めながら、何かしきりと紙切れに書いていたが、ふと首をあげ、マリにテープレコーダーを持って来るようにいった。

マリの手で小型のテープレコーダーが運ばれて来る。朱美は、それを持って、京子の足

もとに置き、コードをたぐりながら、マイクを京子の口元へ近ずけた。
「さあ、恋しい山崎さんに声の便りをするんだよ。この紙切れに書いてある通りの事を吹き込むんだ」
無理やりに朱美は、自分が書いた紙切を京子に見せようとする。京子は、泣きはらした眼で、ちらとそれを見たが、ああ、と首をのけぞらせ、再び、すすり上げる。
その紙切には、朱美の乱暴な字で、次のように書かれてあったのだ。
（私のいとしい山崎さん。貴方の命令で葉桜団に潜入出来ましたが、あるハンサムな青年と親しくなり、昨夜、その方と私、親しくなってしまいましたの。そして、その方のすすめで、これから、ヌードスターとして働くことにしました。その方は、私のバストもヒップも素ばらしいとほめて下さりながら、私を一人前の女にして下さったのです。だから、もう貴方とは別れるわ。お別れのプレゼントとして、私が一番大切にしていたものを貴方にお送りしますわ。時々、こっそり眺めて私の事を思い出して頂戴ね。あんまり人に見せびらかさないでね。だって、私、羞しいのですもの——）
如何に朱美が、京子の体をぶったり、つねったりしても、京子は歯を喰いしばるようにして、そんな文句をマイクに入れようとはしなかった。そこで、業を煮やした朱美達が例によって、大声で、仲間に声をかける。
「仕方がない。美津子にヤキを入れよう。ここへ連れて来な」
京子は、それで屈伏してしまうのだった。
言葉が涙につまって、思うように出ず、何度も入れ直しを重ね、京子は、その都度、ズベ公達に青竹で尻をぶたれながら、遂に、その恐しくもまた魂も凍るばかりの言葉をテープに吹きこまされてしまったのだ。
「あ、あまり人に見せびらかさないでね、だって、だって私——羞しいのですもの——」
息が止まるような思いで、やっと、京子が口元に押しつけられたマイクに吹きこむと、
「最後のところなんか、なかなか感じが出ていたぜ」
と川田が大きく口を開けて笑う。
「さてと、このテープも、剃り落したものと一緒に、山崎のへっぽこ探偵に送ってやるからね。さぞ、びっくりして眼を白黒するだろうよ」
銀子も茶わんに酒を注ぎながら笑うのだった。
じゃ、そろそろかかるとするか、と悦子がナイフを研石で研ぎ始める。
朱美は、煙草を口にくわえて、火をつけると、ぷーと煙を京子の顔にふきかけた。
「そんなに悲しむ事はないよ。若いんだから一週間もすりゃすっかり元通りになるさ」
朱美は、羞恥の極に身を震わせている京子を見ていると、ぞくぞくする程、楽しくなるらしい。
悦子が研石から腰をあげて、ピカピカ光るナイフを朱美に見せた。
「こんなもんでいいですか」
朱美は、うなずいて、田代にそれを渡し、森田には石ケン水の入った容器を渡す。
そして、必死に首を垂れ、スラリとした両肢を固く閉じ合わしている京子に朱美は眼をやって、その両側に立っている悦子とマリにいった。
「じゃ、京子姐さんの可愛いいお褌お解きしない」
あいよ、と悦子とマリは、京子の背後へ廻って、固く結んであるピンクの褌の結び目に手をかけた。
面白半分に、ズベ公達の手で腰にしめられ

た一本の屈辱的な褌であるが、それを剝がれる事によって、地獄の羞恥に突き落される事になるのだ。京子は、自分の背後で、褌の結び目を解き始めている二人のズベ公に無駄とは知りつつも哀願する。
「お願いです。やめて、と、解かないで！」
　豊満な両乳房の上下を太い麻縄でしめあげられ肉ずきのいい両足をくねらせて立っている京子は、哀願するように美しい黒い瞳をナイフを手にしている田代に向けているのだ。
田代は、ニヤリと顔をくずしていう。
「そう色っぽく睨まれると、手がすくんじまうよ。そんなに、固くなっちゃ、しようがねえな」
　くの字になって、腰をひき、涙にうるんだ美しい瞳に必死なものを含ませている京子を田代と森田は見て、妙に哀れっぽく思ったのか相談を持ちかけるように朱美にいうのだった。
　川田がいった。
「暴れ出されて、傷でもつけちゃ大変だ。じたばた出来ねえよう足をひっくくりな」
　坐っていたズベ公達が一せいに立上った。
「やめて！　お願いです！」
　青竹と新しい麻縄を持って、京子の足を捌め取ろうと迫って来たズベ公達に京子は必死になって足をばたつかせ、はかない抵抗を始めるのだった。
「畜生、まだ素直にお仕置を受ける気になれないのかい」
　銀子が舌打ちしていった時、ちんぴらやくざの青木が、地下へ降りて来て、銀子の耳に何かささやき、手にかかえ持っていた衣類を手渡す。
　それは、物置に押しこめられている京子の妹の美津子の衣服であった。
　銀子は、ニヤリとしながら、それを狂乱の京子に見せる。紺のセーラ服にスカート、それから、純白のスリップ、ナイロンのブラジャーなどであった。
「最近の女学生はずいぶんと下着にもこるんだね。ふふふ、どう京子姐さん。このセーラ服や下着に見覚えがあるかい」
　京子は、銀子の手にあるものを見ると、更に逆上する。
「悪魔！　けだもの！　よくも妹を――」
　京子は、自分が今置かれている立場も忘れて、銀子をののしるのだった。
「ふん。妹がこんな目に合うのも、みんな、お前の故じゃないか。ふふふ。今、ここへ美津子を連れて来てやるからね。そうすりゃ、お前も、喜んで葉桜団のお仕置を受ける気になるだろうさ」
　銀子は、そういい捨てると、口笛を吹きながら、地下の階段を上って行った。
「待ってっ、待って！」
　京子は、銀子の後姿に向って絶叫する。
「ぶつぶついわずに、おとなしくしてな」
　朱美が足で京子の尻をけりあげた。
　京子はがっくり首を落して、口惜しげに身を震わせている。
　妹の美津子は、京子にとって生甲斐にもなっている。京子が山崎探偵事務所で、かなり危険な仕事をやり、女としてはいい収入をとっているのも、この妹の美津子を来年大学へ入れ、将来、スチューワデスにしてやりたい一心からなのである。その美津子が悪鬼に等しい葉桜団に捕われの身となり、これから、どのような淫虐な嬲りものになるのかわからないのだ。そう思うと、京子は、居ても立ってもいられぬ、せっぱつまった気持になり、
「お願い！　美津子、美津子だけは、かんにんして！」
　と身をくねらせ、声をはりあげて叫びつづけている。そんな京子の姿をズベ公達は、小

気味良さそうに見ていたが、地下の階段がきしみ、銀子がくわえ煙草して降りて来た。
「ふふふ、美津子嬢がおいでになったよ」
銀子は、そういって、すぐに上を見上げ、
「お姉さんがお待ちかねだよ。そう羞しがらずに早く降りておいで」
階段の上から、三人のチンピラやくざに囲まれるようにして、陶器のように白い肌をした美津子が高手小手に縛られた身を運んで来る。パンティ一枚を許されただけの美津子の透き通るように白い素肌には、非情な麻縄が二巻三巻きし、そのまだ完全に成熟しきっていない白桃のような形のいい乳房の上下を固くしめあげている。
花も羞らう十八の乙女が、そんな無残な姿にされるまでには死物ぐるいの抵抗をしたに違いない。それを物語るように彼女は肩を大きく波打たせるように息をし、引き立てて来た三人のチンピラ達も顔中美津子に引っかかれたらしい傷あとが生々しくついていた。
美津子は、耳たぶまで真赤に染まった顔を深く落しながら、階段を一歩一歩降りて来るのだが、今にも消えてしまうのではないかと思われるぐらい羞らいの姿態であった。
「全く、お人形のように可愛いい子じゃないの」
ズベ公達は、羞恥にむせぶような美津子を見て、待ってました、とばかり一せいに拍手をするのだった。
京子は、引き立てられて来た美津子の、その無残な姿を見ると、自由を奪われた身を激しく悶えさせ、
「な、なんてことを！　美津子に、美津子に何の罪があるというの！」
と泣きわめく。美津子はハッとしたように火のように熱くなっている顔をあげ、姉の哀れな姿を眼にする。
「お、お姉さん！」
「美っちゃん！」
美しい姉妹は、涙にうるんだ瞳を向け合い声をかけ合った。
「さて、お嬢さん、お姉さんの横に並ばせてあげようね」
銀子は、美津子の縄尻を男達から取って、美津子の背をつく。

新発足　懸賞＜告白、手記、体験＞原稿募集

☆賞金☆

優作　一篇につき　参万円
秀作　一篇につき　五千円
佳作　一篇につき　二千円

☆規　定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。
一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。
一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。
一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、真実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。
一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙を御使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。
一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

京子が立縛りにされているすぐ横にガラガラと一本の鎖が下りて来て、それに美津子の縄尻はつなぎ止められた。

遂に美津子も、姉の京子と共に葉桜団の中でさらし者にされる運命となったのである。

朱美は、銀子の酌で茶わん酒を一息に飲み干しがっくり首を落して、すすりあげている二人の美女を舌なめずりするように見つめている。

美津子は体中に悪寒のようなものが走って、かっと体を硬化させた。

「嫌、嫌よ、お願い！」

美津子は、眼の前に来た悦子とマリに哀切の眼を向ける。京子も全身をゆすりながら

「後生です、妹を、妹までをなぶり者にしないで！」

と絶叫する。

「うるさいね。みんな、お前の心がけが悪いからさ」

悦子は、大きな声をあげる京子の頬を二三発、平手打ちし、マリの方へ眼くばせして、美津子のゴム紐を二人で握った。

「ああ、お願い――」

美津子は、紅生姜のように真赤になった顔を激しく振って、泣き叫んだが、そんなことにこだわるような連中ではない。

悦子とマリは鼻唄まじりで、それを一気に美津子の足首のところまで引き下げ、抜きとってしまう。

美津子の体全体は、火柱のように赤く燃える。

隣に、姉の美津子が無残なさらし者になったと知ると、京子は、全く逆上してしまう。

必死に悶え、あがき、そしてわめく。だがそれが、何時かズベ公達に対する哀願になっていくのだった。

「美津子だけは、お願い――美津子だけは助けて――」

あえぐように京子はくりかえす。

「じゃ、二度とあたい達に楯をつかないと誓うんだね」

朱美に、いわれて、京子は、すすりあげながら、決心したようにうなずくのだった。

川田と森田は、顔を見合わせて笑い合う。

「へっへへ、二人とも、全く可愛いいお臍をしているぜ」

川田は、立縛りの二人の美女の前へふらふらする足どりで近ずいて行く。

京子も美津子もハッとし、申し合わせたように両足をぴったり閉じ合わすのだった。

京子は、川田に対して、憤怒の色を帯びた眼を向ける。自分の一生をめちゃめちゃにした呪い殺してやりたい程の男なのだ。だが京子は、そんな男に対しても、美津子の救いを求めねばならぬ現在であった。

「川田さん、お願いです。美津子の縄を解いてやって。服を返してやって、後生です」

「じゃ、おめえは、俺達には絶対服従するというのだな。はっきり返事しろい」

「――ふ、服従します」

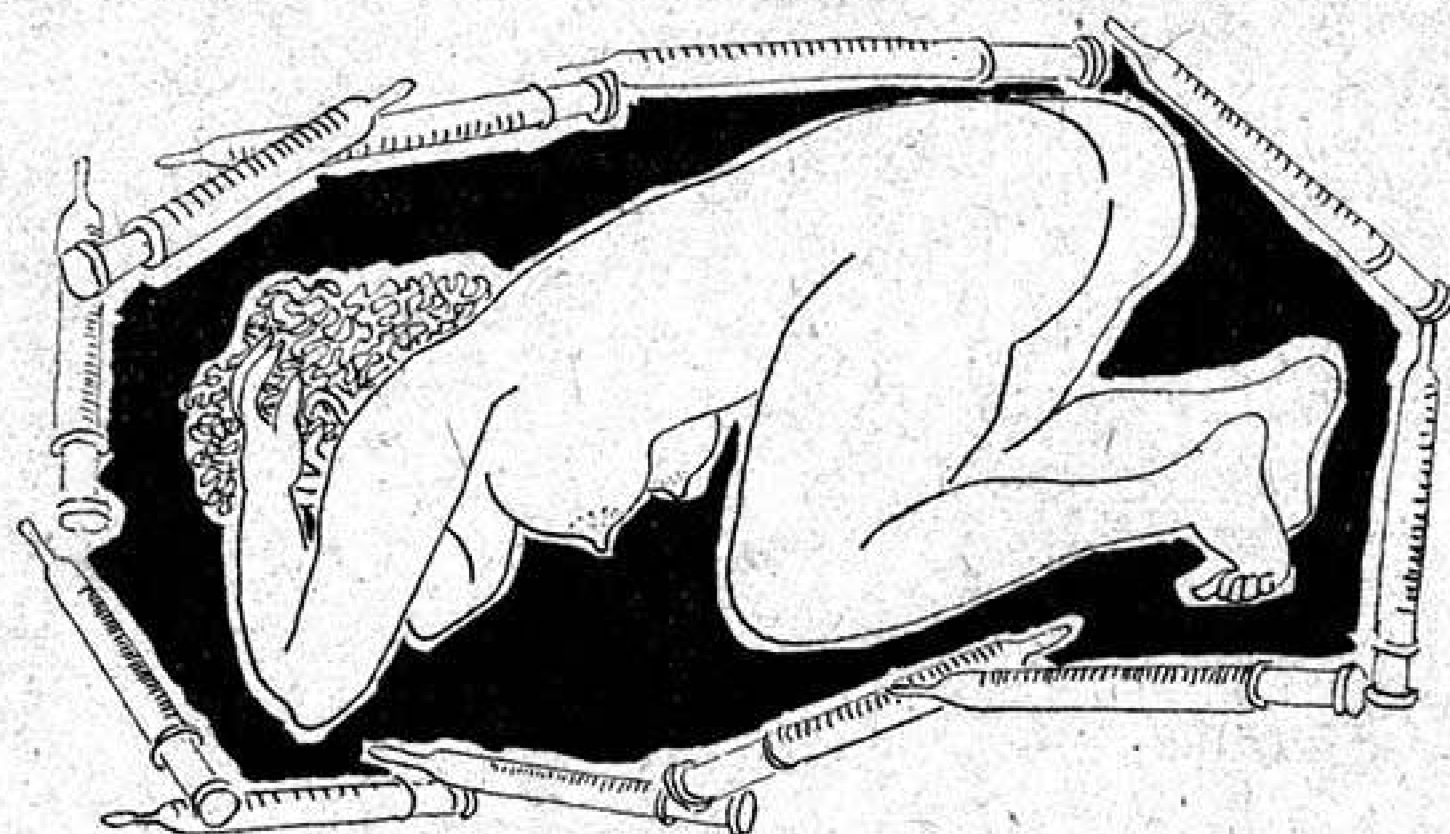
「社長と親分が、これから、きれいさっぱり剃りあげて下さるそうだが、文句はねえな」

京子の美しい顔が再び真赤になったが、もう一切をあきらめたような表情になった京子は固く眼を閉じて、うなずくのだった。

川田は、顔をくずして、舌なめずりをする。

そんな姿にされた京子を想像すると、川田はおかしくてしょうがないのだ。唐手二段の鉄火娘も、これで完全に屈伏さしたことになると、川田は、ぞくぞくした気分になり、そんな姿に京子をさせたのち、京子の妹の美津子を如何にいたぶるかを考え始めていた。

（続く）



〈体験〉

私はこんな変った体験をしました

「浣腸による第三の感覚」

志摩英樹

今から丁度三年前、私が大学二年の二月のことです。私は志賀高原の湯田中へスキーに行っていました。

時々吹雪く粉雪の合間から紺碧とでもいうのでしょうか、真青な空が覗くと、白銀の山々は、そのまぶしい輝きで私の心の底まで恍惚とさせてくれました。

しかし、雪景色の素晴しさに酔い、スキーの陶酔に無我の境地に浸っていた二十一才になったばかりの私には、その後にくる災厄を考える暇なんかありませんでした。

滑りはじめて一週間目「しまった」と思ったときはすでに遅く、転倒した私は左足腓骨の骨折という憂目を負っていました。腓骨骨折の外に足首の捻挫というわけで勿論歩行不能でしたので、家の方へは電話で連絡してもらい、現地でギブスも作って、療養することになりました。

幸い学期末休暇でしたので、家でもゆっくり養生するようにと、いうことで、女中のおきぬを家政婦がわりに私の泊っている旅館へよこしてくれました。三十になったばかりのおとなしい女中でしたが、私の健康については、特に家から云われてきたとみえて、こまごまと世話をやき、朝晩検温までする始末でした。

当然排便は差込便器を用い、おきぬがすべて後始末をしてくれましたが、今までそんな経験のない私には、最も恥しく辛い行事でした。そんな自制作用の気持が災いしたのか、一週間もたたないうちに通じがなくなり、腹痛と吐き気を覚えるようになりました。

おきぬは早速薬局へ行って薬を求めてきましたが、帰ってくるなり宿の女中に小声で何事かを頼みました。おきぬと同年位に見えましたが、或は、もっと若かったかもしれません。宿の中では一番おきぬと親しくしていて

私にも何かと良くしてくれました。
女中は細長い箱と薬缶を持ってくると、おきぬの薬を受取ってコップへ注ぎ湯でうすめました。
「坊ちゃん、お腹をなおしてあげますから、云う事を聞いて下さいね。お母さんから全部引き受けてきましたから……」
おきぬは真面目な面持で言いました。
「さあ、お尻を出して」
私は一瞬びっくりしました。飲み薬とぼかり思っていたのです。おきぬはガラスの浣腸器を箱から取り出すと、コップの薬液を吸い上げはじめました。
「そんな事だめだよ、薬を飲む方が簡単でいいよ」
私は恥しさで真赤になりながら拒否しました。今まで幼い頃に病院で浣腸された事はありましたが、嫌で嫌で、逃げまわった事を覚えていました。そのため、家ではよく「浣腸をするよ」と、言うことを聞かないと、おどかされたものです。
「だめねえ、一番簡単なのが浣腸なのよ、すぐ効いて、すぐ全部出ちゃうわ、痛くなんかないわよ」
宿の女中の方が乗気になって、足の方から蒲団をはねのけました。下着をつけていなかったので、着物の裾が一緒にめくれて下半身が出てしまいました。本能的に足を縮めて起きあがろうとしましたが、おきぬが痛い方の足へ手をかけると、私は痛みに思わず元へ戻してしまいました。
「嫌だよ」
私の我ままは家でも殆ど無視されはじめていたので、おきぬは私の言葉に躊躇することもなく、私のギブスの足を抱えて私を思う様に寝かせ、尻を上げさせてその下に新聞紙とビニールを敷きました。宿の女中が左足をとって海老折りに押さえつけると、最早私は何の動きもさえぎられていました。
「あとで承知しないから——」
私はむんむんする女中の胸の下で怒鳴りましたが、全く取り合わずゆっくり浣腸器を挿入しました。怖れていた浣腸器による痛みは全くありませんでしたが、なまぬるい液体が腸の中へ入ってくるのがわかると、とてもいやな気持でした。三回ぐらい挿入されたでしょうか。私は猛烈な便意にもがきました。
「坊ちゃん、浣腸したら出たくなるのは効き始めているのよ、だけど、もっと我慢すればもっと良く効くのよ。だから、五分間は辛抱しなくてはいけません」
おきぬは意外に強い口ぶりでした。汗をいっぱいかきながら、何時間も苦しみの中に浸っている気持でした。未だ嘗てこんな辛いことは始めてでした。まだ足の痛みの方がましな気がしました。最早やどうしょうもなくて声を出すと同時に、便器が当てられました。ダムのせきを切ったように、二人の女の前で勢よく排出しました。腹中のものが全部出たかと思う程に感じましたが、その後は意外にすっきりした気持でした。
「良く出たじゃないの、治ったでしょう」
おきぬは嬉しそうに浣腸器をかたづけながら言いました。
「あとでもう一度した方がいいわよ、おきぬさん」
女中が口をはさむと、
「そうね、そうかもしれないわ、じゃ後でもう一回だけするから、私の云う事を聞きなさいね」
そういうおきぬの言葉をよそに、私は安心感と疲労感の入り混った不思議な快さを味っていました。
その夜、十二時も過ぎていたでしょうか、

私がふとガラスの触れ合う音に目をさますと二人の女が電灯の下に動いています。宿の女中がおきぬに浣腸されているのがすぐわかりました。想像もしなかった光景に、思わず起き上ってしまいました。二人は狼狽した様でしたが、

「坊ちゃんの便秘がうつったみたいよ」

おきぬは四つん這いの女中に着物をかぶせると、浣腸器を持って私の所へやってきました。女中は何かてれくさそうでしたが、それをかくすように、「さあ、今度は坊ちゃんの番よ」とにじり寄ってきました。

　私はやはり恥しくて嫌でしたが、断るのも大人気ないと思って、なすがままにされていました。私は夕方総べてを排出したように思っていたのですが、又再び前と同じぐらいの排泄があり我ながら驚きました。

　それからというものは、おきぬはその女中を呼んできては浣腸するようになり、私もくせがついたのか、浣腸されないと排便出来ないようになっていました。そして何故かだんだんと浣腸される事が嫌でなくなり、むしろ不思議な名状し難い快さを覚える様になって自分は異常ではないかと思うようにさえなりました。

　そのうちギブスもとれるようになり、やがて私は帰京しましたが、それ以後、不思議と「浣腸」という言葉に又「浣腸器」に興味を持つようになってしまい、自分のこの気持を他人に話すことも出来ず、一人悩んでいました。しかし、先日書店でKK誌を見つけた時世の中には、それに興味のある人が大勢いる事を知りました。

　それは「私一人の異常さではない」という事によって、どんなに心を安らげたかわかりません。そして「物云わざるは腹ふくるる思い」とある如く、私は今までのうちで唯一つの又最も印象深いあの日の事を、この拙文に吐露しました。読者の御意見を誌上にてお待ちして居りますが、特に湯田中のあの宿の女中さん（今でもいるかどうか知りませんが）がこの文を読まれましたら、是非御一報誌上にて御願いしたく思います。（尚、本文のおきぬは仮名ですが、福島県に嫁し一女に恵まれています。）

マゾ芸術考

＜女性男装管見＞

田島直士

歴史をくわしく見返すまでもなく、勇婦烈女の類は民主主義的な国よりも専制的、独裁的な国に多く出現しているようだ。更に、これらの女性が男そこのけの活躍をするとなると、軍国主義的な隆盛を必要とする。その点で顕著なのはナチス・ドイツと帝政ロシア、更にソビエト・ロシアであろう。これらの国及び政体では女性が軍籍にあり、しかも男と同じ勇ましい服装をしていた。ナチスの娘子軍、帝政ロシアの女士官、ソビエトの女将校は皆、颯爽とした軍帽、軍服に長靴を着けていた。同じ軍国主義の国でも日本は、遂に婦人兵を生み出すに至らず、女将校の長靴姿などというのは夢想に終ってしまったのだ。しかし、いくらかの例外はあるようで、正式の日本軍人ではないけれど、川島芳子のような人も存在したのだし、彼女にあこがれ、男装して馬に乗り敵と斗いたいだけのために、満洲に渡った若い婦人も何人かいたことを知っている。



アングロサクソン系の国は、男でも余り軍服らしい軍服を着ることを照れているのか、そういう例はなく、たとえばジャンヌ・ダルクに対する態度なども、ショーの「聖(セント)ジョーン」を見ても分る通り冷笑的である。それでも立憲君主制の国、イギリスでは毎年、エリザベス女王の閲兵式があり、この日は、真紅の軍服を着た女王が馬上豊かに閲兵する風景が見られる。但し、女王は乗馬ズボンではなくスカートを着けている。日本でも美智子妃

が昔の近衛兵の盛装をして馬でパレードをされるような行事があったらと思う。

最近の日本では、革を着ることが新しいモードになって来たようで、冬になると白い鞣皮のジャンバー姿の女性が多く見られるようになった。一方、フランスではやり出した革のブーツは、日本ではまだはやっていないが冬には防寒用として女性がスラックスの上にはくようになるかも知れない。そうなる日を待望している。

×　×　×

さて今回は、こうした女性像の中から帝政ロシアはその爛熟期のエカテリナ女帝時代の女連隊長ソルチコフ女伯爵のことを語ろう。

主として参考にした文学作品はマゾヒズムの鼻祖、レオポルト・フオン・ザッヘル・マゾッホ作「エカテリナ二世情艶史」である。では、最初にエカテリナ二世の時代とは如何なる時代であったかということに就いて述べて見たい。

エカテリナ二世は英邁を以て聞こえたことは日本の幕府のことまで知っていたことでも判るが、同時に淫虐においても比類を絶していたという。そして、女帝であるだけに女性を男性と同様の権力の座につける大胆な試みも数多くしたため、無能な男性達にはかなりの脅威となったものらしい。そうした点で、マゾッホが好題材として飛びついたのは肯けるのである。

今回とり扱うソルチコフ女伯爵も、女帝から引き立てられて連隊の先頭に立った女性だが、彼女の他にも何人かの女連隊長、女士官はいた。こうした女士官たちはすべて美貌で智勇にすぐれていたので、軍服を着た美人たちは、帝都の社交界の花形だったという。こういう政策をとったエカテリナ女帝とは如何なる女性か。この書物からの引用で、しばらくかいま見てみよう。

「女王は、中肉中背の最も完全な均斉に恵まれた姿体の持ち主だった。……ことに下半身は希臘の女神の美を想わせるものだった。手足の先は華奢に出来ていたし、胸もとは、いかにも豊満だった。その顔には彼女自身を讃美する日輪のごとき歓喜が漲っていた。彼女の高くて品の良い額、大きく輝く碧眼、果断と放胆を表わす眉毛、形のいい鼻、よく締った唇はまず最初に目立つ特徴だった。……この女性は権力と快楽とを追求することに飽くを知らない貴婦人だった。しかも単に慾望ばかりでなく、彼女は又、支配し、指令し、およ び享楽する才能を所有していた。……彼女は最も危険な専制者と、最も淫蕩な漁色家とを兼ねていた。」（同書『ペチコートをつけたネロ』より、木村毅訳による）

この女帝は、美しい男性を見ると召して、寵愛した。そして、反対勢力に対しては、この寵をかけた男性を使って、暗殺させたり、残虐な手段で弾圧したのだった。あくまで自分の勢力の下にすべてのものを置かない限り満足しない女性なのだ。彼女が位についたのも夫を殺した上でのことだった。彼女は傲然といい放つ。

『わたしには思い切った政策を行うだけの勇気があるのよ。もう慈悲や情は殺して進むことに決めているの。ほかのことは兎に角、ロシアは大きく出来るだけ太らせたいからね。スエーデンも、ポーランドも、それから亜細亜も、あの通りやっつけたし、じきにトルコはヨーロッパから駆逐できるだろうし、今後は、わが国も野蛮な状態からめきめき浮び上らなくちゃ……でも、わたしはそうしたいからするの。……わたしは自分の夫を帝王の位からひきおろして、その命さえ奪った。――だってわたし、あの人を愛することが出来なかったし、それに自分でこの国を支配したか

ったんだもの。先王にはわが国の元首たるべき資格がなかったのよ。よしんばあの人が自ら進んで王座をわたしの為にあけたにしても生かしては置けなかったわ。支配するにはどうしても血を流さねばならなかった……。』

こうした彼女は今、反対党が擁立している王子イワンを亡きものにしたい計画である。それを実行するために一人の青年士官がえらばれた。ミロウィッチ陸軍中尉である。彼は美男で有能な青年なので、女帝も一目で気に入り、愛を施した。

彼女は、郊外のある女臣の邸宅で男と密会した。女王は馬に乗ってそこに行った。モロッコ革の膝まである長靴をはき黒い男外套を纏い、頭には軽やかな羽毛のついた小さな三角帽という男装で、士官と媾引をした。この男姿で、抱き合う二人の姿を想像することはむせかえるような倒錯の、甘美な香りがただよう感じがする。

男は完全に女王に捧げつくして、あらゆることをするつもりでいる。しかも、女王への愛は熾烈である。女王は少々ミロウィッチがうるさくなり、彼にイワンを暗殺させると共に、彼を殺人罪で死刑にする計画を立てる。そして、ミロウィッチには、最後の瞬間に恩赦にするといい含めて、実行にふみ切らす。ミロウィッチは、女王を信じ切って王子を剣で刺す。しかし、女王は「反逆者は死刑だ」と冷たく云い放ち、断頭台に上げる。という話である。

この話には、女王の生活と意見が十分に云い表わされている。女王が自分の輩下の有能でしかも美しい婦人たちに重要なポストを与えたのは、彼女の政策の一端であると共に彼女の美意識のなせるわざであるといえよう。

ところで、この女連隊長ソルチコフ女伯爵はこの本の『前哨に立つ女』のヒロインである。

ロシアの首都セント・ペテルスブルグではトルコとの間の国際緊張のため、異様にはりつめた雰囲気が張っていた。好戦派の中心人物ポテムキン将軍の本営では、平和を願うベスボロドコ公爵とポテムキン将軍とが激論を斗わせていた。そこへ、フランスに派遣された使者が途中、トルコ人によって虐殺されたという知らせが入った。いよいよ戦斗は開始されたのである。作戦の打ち合わせのため将軍はスワロフ大将を招いた。大将が将軍の宿舎に入っていくと、地図をひろげた卓の傍にある大きなトルコ寝台の上に眩しい程美しい女が二人寝そべっていた。将軍の寵姫だった。ところがその側に立っているのは緋色のビロードの乗馬服を着た若い婦人だった。彼女はすらりと丈が高く、なよやかな肉感的な体つきで、豊富な捲毛は明るい金髪で、云ってみれば猛獣をも馴らし、いかなる男子をも服従させずにはおかぬという種類の稀有な麗人だった。彼女は手に持った鞭で、寝台に長まっている二人の女を突っついたりくすぐったりしてなぶっていた。この女性こそ、女王から選ばれシンビルスク連隊を統卒しているソルチコフ女伯爵だった。

夫人は、二人の将軍の作戦会議に参加するのみか、実戦にも加わりたいと希望する。眉をひそめるスワロフ大将に、彼女は凛とした眼差を向けて、

「一人の女がロシアの国王の位にいらっしゃる限り、あなたは我慢なさらなくちゃなりませんわ、すべての権利のうちでも一番大きなつまり国家のために死ぬという権利をわたしたち女が要求しましてもね。スワロフ大将、一個の連隊をわたしにお委せになっているんです。その御信任にお答え出来るかどうか、わたしも弾丸の雨の中に立ってごらんに入れますわよ！』と云い放つ、その語気に負けて

スワロフ大将彼女はを参加させる、

翌朝、ロシア軍は朝霧の立ちこめた戦野をトルコ軍の堡塁を包囲するように陣地を築いた。麗人連隊長ソルチコフは、たくましい栗毛の馬に跨り、黒の深い乗馬長靴に白ズボン緑地に金刺繍の軍服、槲の葉に飾られた三角帽、青紐で束ねた明るい金髪という姿で颯爽と登場した。

スワロフ大将は女伯爵の連隊を総予備隊に残して、自分は先頭に立った。そして敵の堡塁目がけて進撃をした。しかし、敵から撃ち出される一斉射撃に味方の軍が殆ど潰走しかかって、危く大将の激励で踏み止まった。この時だった、女伯爵の率いるシンビルスク連隊が戦線に現れたのは。美しき連隊長は馬に拍車を強く入れ、まっしぐらに先頭に立って丘を駈けのぼった。そして、中腹で馬をすてると剣を揮って敵の堡塁めがけて突進した。彼女は、当るを幸い右に左に、たち向かってくるトルコ兵を薙ぎ倒し、美しい声を高らかにはり上げた。「突撃！　突っ込め！」そして女伯爵は遂に堡塁の上に立った。あわててむらがる敵の砲兵を片っぱしから斬り倒したので、砲撃は止み、やがてロシアの旗が高々と掲げられた。だがこの戦いでスワロフ大将は体内にいくつかの盲貫銃創を受けて、小天幕で休養していた。そこへ女伯爵が入って来た。夫人は敵の返り血で軍服と白ズボンは朱に染まり、長靴は血でぬるぬるしていたが、顔は上気して薔薇色に美しく輝いて、空のように澄んだ眼には微笑を含んでいた。手にはトルコ軍の赤と黄の軍旗を持っていた。

「これが戦利品ですの、将軍」と彼女は云った。

「女だって時と場合によれば料理スプーン以外のものをふり廻したっていいって証拠を見て頂きたいわ」

そして、大将を看護するといって、血にまみれた軍服をぬいで軽やかなドレッシング・ガウンに着替えて来た。

「女だてらに剣を振りまわし、殺生して血を散々に流したんですもの。罪滅しですわ」

×　×　×

この戦いのあと、しばらく小春日和のようなのどかさが陣営にただよっていた。女伯爵は、軍服はなるべく脱ぎ、くつろいだ絹のドレスの上から黒いてんの毛皮を羽織ったりして、兵士たちと音楽に興じていた。こうしたある宴のあと、少し酒をすごしたソルチコフが長椅子の上でまどろんでいる時、ふと気がつくと何やら生あたたかい空気が自分のまわりをつつんでいた。目をあけると、彼女の輩下のドルヴコフ大尉が鬚面を赤らませて、女伯爵の上にかがみこんで唇を奪おうとしてる所だった。はね起きた彼女はドルヴコフをふりほどいたが正気をなくして獣欲のとりこになっている大尉は、執拗に彼女にまつわりついていた。

「ドルヴコフ！　恥をお知り！」

彼女はやや疳高い声で叫んだ。この声で兵営の他の兵士たちが集って来て大尉を引きはなした。その夜はこともなくすんだ。しかし女伯爵は翌日、兵営中にこのことが知れわたっているのみならず、ドルヴコフ自身が自慢そうに吹聴して歩いたことを知ると、ある決意をした。直ちに、ドルヴコフは上官侮辱罪で逮捕された。彼女の前に引き出された大尉に、ソルチコフ女連隊長は云った。

「ドルヴコフ、お前、上官侮辱罪の罰は死刑だということを知っているわね。けど、あたしはお前に機会を与えてやるわ、あたしは決斗を申し込むのよ。男らしくお受け。武器は剣、卑怯な真似はさせないわ。でも遠慮せずにあたしに向かってくるのよ」

そして手袋で相手の頬を打った。

日は翌朝十時、場所は兵営の庭、兵士たちはこの稀有な決斗を見んものと集った。やがて、よれよれの軍服を着た大尉が引き出された。と一方、女伯爵は白い襟元にレースのついた上衣に、これも真白い乗馬ズボン、それにつややかな柔い胴の長靴をはいて来た。胸には赤い造花の薔薇がさしてあった。

二人は剣を執ると、介添の合図で向い合い正式の作法で勝負に入った。大尉は連隊一の剣の使い手だったが、この女伯爵のまばゆいばかりの英姿と気魄に気押されて、剣尖はにぶった。最初は、半ばたわむれのような気持で適当にもて遊んで、相手の利き腕に手傷を負わせてこっちの勝利を得よう位に考えていたドルヴコフは、今、相手の太刀風にすっかり追われつづけ、進退は窮まって来た。

勇敢とはいえ、剣にかけてはまさかそうたいしたものではあるまいと思っていたのに、どうしたことか……。大尉は逃げることばかり考えていた。そして、ほんの一瞬を見すまして土をつかむと、女伯爵にパッと投げかけた。相手が瞬間たじろぐのを見すまして、人垣の間から表に逃げ出した。だが、すぐに常態に戻った女士官は、怒りにもえた眼差しで大尉を追った。

「卑怯は許さないわよ、ドルヴコフ！」

そして、恐怖にゆがんだ顔で狂気のように立ち向かってくるドルヴコフの剣を二回かわすと女伯爵は剣を横なぐりに斬りつけた。胴をまともに斬られた大尉は笛のような悲鳴を上げ、血を滝のように迸らせて絶命した。勝負はきまった。立ちすくむ兵士を後に、彼女は死骸の仕末を副官にまかせて、天幕に帰った。そして、報告書にこうしたためた。

「陸軍大尉アルクセイッチ・ドルヴコフ、右の者上官侮辱罪により逮捕するも逃亡を企てたる廉により、陸軍大佐イリーナ・ソルチコフこれを処刑す」

×　×　×

要塞を防備するトルコ軍は、密偵やロシアの脱走兵によってロシア軍の情勢をつかんでいた。ある日、一人のロシアの脱走兵がアッチァコフ要塞にたどりついた。パシャの尋問に対して、この脱走兵は上官である美人の機嫌をそこねたため、鞭で打たれた。それに復讐したいので投降した。ついては自分が手引をするから女の天幕を急襲してはどうかと云った。丁度その夜、シンビリスク連隊は酒宴をしていることになっているはずだという。そこでパシャは自ら手兵をひきいて、あの美しい女伯爵を生捕りにせんものと、天幕に出かけた。そこでは酔いしれた兵士達とたおやかな女たちがいるはずだった。ところがあにはからんや、どの天幕も武装した兵士たちで一杯だった。彼らの手引きをした脱走兵は女伯爵のまわし者だった。あの華やかな軍服をつけた女伯爵が、手によくしなる鞭を鳴らしながら大股ですたすたと出てくると、呆然自失の敵兵を見て、白い喉頭をのけぞらせて、さも小気味よさそうに笑った。

「降参しな！　お前たちは明日容赦なく鎖につないで上げるから」

「私はあなたの奴隷です。どうぞご自由に」

パシャは彼女の前に身を投げ出し、黒く冷めたく磨き上げられた長靴に接吻した。しかし、麗人将校は眉一つ動かさずただ拍車をちょうちょうと二、三度鳴らしただけだった。

翌日、凍りつくような外気の中にパシャをはじめ捕虜たちは引き出され、杭につながれた。そしてソルチコフ女伯爵をはじめ女士官や女官たちが手に手に鞭を持って集った。

「お前たち、吠えるかい」

と伯爵夫人はパシャに静かに聞いた。パシャは執拗に首を振った。

「それでは、お前が主人か、わたしが主人か

思い知らせてやるわ」

そう云うと鞭を振るった。パシャは痛みに歯を食いしばりながら陶酔するような気持になっていた。やがて闇が来た。

×　×　×

一七八八年の十二月になってもアッチヤコフ要塞は落ちず、攻囲軍は背後の糧道を断たれてしまった。これ以上、時の過ぎるのを待ったら、いたずらに餓えに身を委ねることになるのみだった。この事態を切り抜けるにはアツチヤコフ要塞を一気に攻め落すことがあるのみだった。兵士たちはスワロフ大将に決断を迫った。スワロフは生れつきの勇気を躍動させてこの任務の準備にとりかかつた。

十二月十七日の夕方、各連隊から決死隊が募られた。決死隊の指揮官はスワロフ大将自身があたると聞いて忽ち数千の兵士が参加を希望した。そこで抽籤でえらぶことになった。女伯爵ソルチコフも亦応募した。そして籤に当るような特別な手段すら講じた。

夜になると決死隊は、銃は持たず、剣を帯びて陣地を出発した。スワロフは十字を切ると塹壕に躍り込んだ。夜襲は成功し、敵の前哨兵は突き殺され、一発の銃声もなく要塞の稜堡は奪われた。

女伯爵は、この第一段の決死隊にかわり、大活躍したのみか、他に先んじて敵の衛兵を斬り倒して、ロシアの軍旗を塁壁に押したてたが、そのまま息をつく間もなく敢然と要塞内の街路へと突進した。そして、忽ちのうちにトルコ兵に取り囲まれてしまった。

将軍は、夫人の姿を見失ったことに危惧を感じたが、隊の足並を乱せないので、無念さをこらえていた。やがて、急襲が成功して後続隊が押しよせて来た。将軍が重囲を脱して女伯爵をさがし求めているとやがて行手に、あり余る敵と乱斗たけなわの女連隊長の雄々しい姿が望まれた。

彼女は馬の背に身を伏せ、下から突き上げられる槍をぐいと握っては剣を振り下し、突き、叩き、斬り、死力をつくしてけなげに防戦していた。だがスワロフが一群の兵をひきいてかけつけ、敵兵を追い散らした。救われた女伯爵は犇と将軍の手をにぎりしめ、自分の豊かな波打つ胸に当てた。その時、女英雄が血にまみれていることに気づいた将軍はソルチコフ女伯爵の左の腕の傷口を見つけ、白くあたたかな腕に唇を押しあてて、血を吸った。遂に黎明が来た時、あらゆる塁にはロシアの軍旗が翻えっていた。

×　×　×

戦の終った天幕、今度はベッドに伏しているのは女伯爵だった。おとずれたスワロフは云った。

「お顔が青いですね」

「あなたの方こそよ、将軍！　知らない人が見たらあなたの方が怪我をされたと思うでしよう」

「いや女伯爵！　ある人間の血を飲むと、その人に身も魂も迷うという迷信がありますね。僕は迷信でなく本当にあなたに鎖でつながれてしまいました。あのパシャのように、あなたが私に吠えろと云うなら喜んで吠えます」

「いけませんわ、将軍！」女伯爵は云った。「あなたには別のことをお願いしてよ！」

彼女は艶然とながし目で将軍を見た。

「どうするんです」

「ここにいらっしやい、スワロフ、ここにお坐りなさい」

こうしてアッチヤコフ戯の勇将は女伯爵の前にひざまづいた。

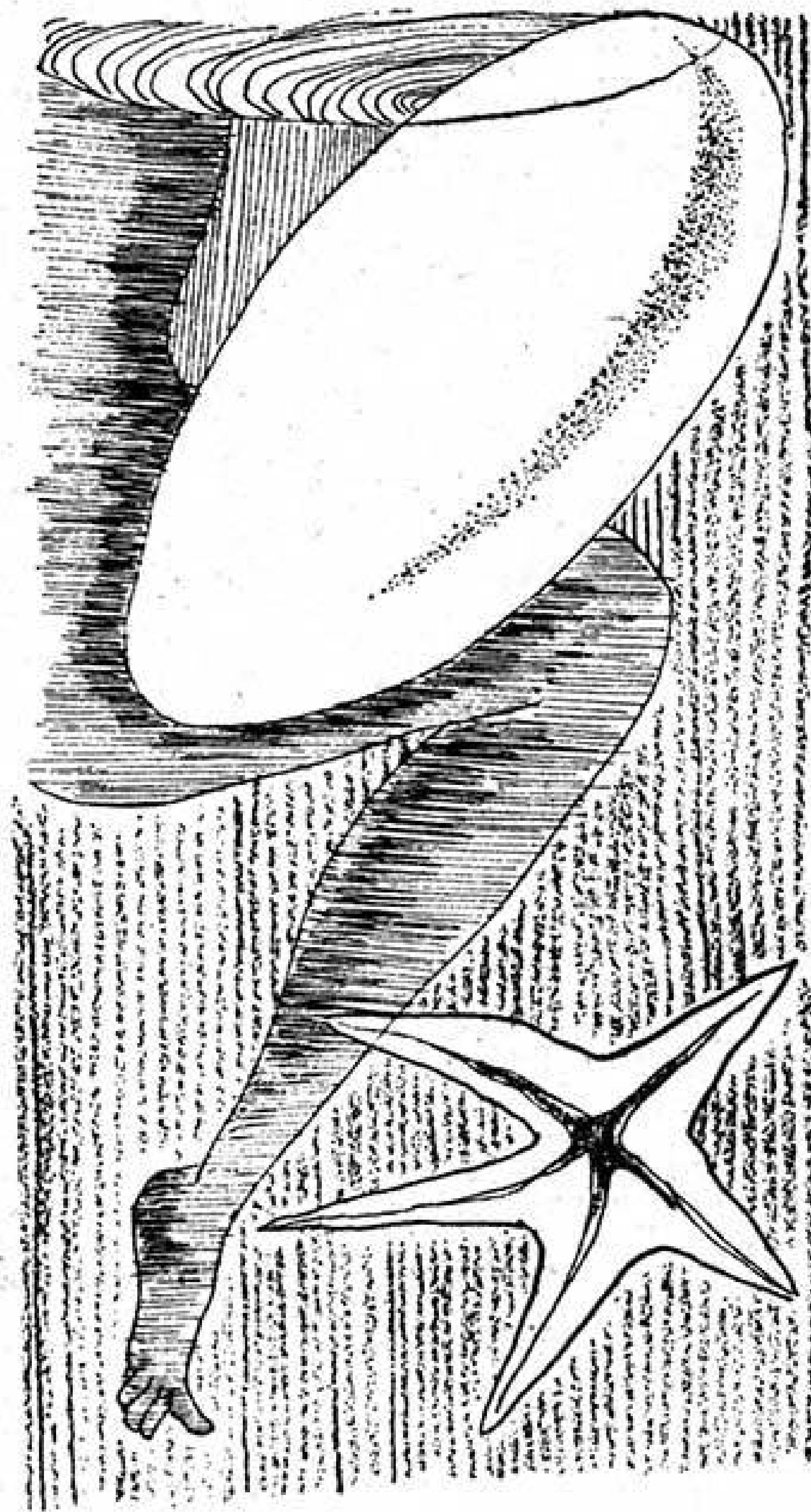
勇敢にして美しき女英雄は両手で彼を抱き上げ、熱い接吻をした。

（終）

【懸賞告白】入選作品

オーバーと下着と浣腸

山田那津子



年一年と新しい機械や、便利な器具が実用に供せられて行く此の頃です。

現に電車や、自動車等も暖房の利いていることが常識になって、殊にオーナードライバーとして自分の車に乗っていらっしゃる人々は、此の頃の様な厳寒の候でも、オーバーなしで、ビルディングに出入りすることが、一種のタイプとして普通に見受けられます。勿論、運転操作の上からオーバー姿では動作が不自由というせいもあるとは思いますが、普通のビルディングが殆んど暖房完備でありますし、一種の見栄と申しましょうか、流行のタイプが出来ているとも言えるのではないでしょうか。

私なども寒い日に、厚着をした上にオーバーを着て出て喫茶店などで、暖房の関係でどうしてもオーバーを取らなければ我慢出来ない事がよくありますし、デパート等ですといくら暑くてもコートを脱いで手に持って歩くのが煩わしくて、結局却って暑さに苦しめられる事がよくあります。

此の間の様な酷寒の候ですと、私の様な薄着の好きな女性でも、つい厚着になって苦しい目をする事がありますけれど、これからの気候ですと、寒暖の差になれることとさえ出来ましたら、それこそオーバーも要らない位で

す。然し、何と申しましても季節のものを身に付けないことは、淋しい限りですし、オーナードライドー族でも、女性の方は矢張り上に着ていらっしゃる様です。

私は元来薄着が好きなくせに、オーバーや合オーバーを着る季節には、下の服装を割合自由にアレンジ出来ますので、勿論オーナードライバー族ではありませんし、人より一番先に着込んで、人より一番あとで脱ぐことにしています。

始めはさすがに、通勤の時は普通に着ていましたけれど、一度お勤めから帰って、お使いに出る時など、アパート住いの気楽さも手伝って、これから先のポカポカした陽気のとき等、面倒なものですから下着の上から、パッとオーパーだけを着て出掛けることがよくあります。勿論こういう着方をするオーバーは長いユッタリとしたボックス型かなにかでなければいけませんし、レインコートでも良いのですが、オーバーの場合でもレインコートには必ず付いている膝の辺にある風除けのボタンの掛かるものでないと都合が悪いと思います。

今は下着にも純白以外の柔かいハーフトーンの色物もありますし、色々工夫すれば少し風が吹いた位いであわてなくても済みます。

だんだん横着になって、映画を見に行ったりするにもさすがにブラパン・スタイル（御存知でしょうかしら、ブラジャーとパンテイだけのことです）の上から羽織ってはとても勇気が出ませんが、セーターを省略したり、スカートを省略してスポーツ用のショートパンツだけにしたり致します。実はこの最初の時は花村恵美子さんの温湯五〇CCの浣腸をして映画を見に行くという体験に刺激されてどうしても自分でも一度、体験して見たくなりました。

勿論人混の中ですし、若しそうでもあっては大変だと思いましたので、それこそ幾晩も掛って、自分のアパートで予行といいますか、練習をして見たのです。随分変なことを告白しますけど、練習のときに自室で服のままでは浣腸の注入がやりにくいし、三〇CCのシリンダーを使っては何回も注入するために、多少の注入液の洩れることも考えなければならないし、注入が済んで一応辺りを取り片附け、どの位我慢が続くか時間を確かめ乍ら待っているときには、それこそ今迄の注入、排泄という医療的なおトイレの中で出来た体験と違った、新しい体験ですし、いつおトイレへ走らなければならないか判らない状態をつづけて出来るだけ我慢をしていなければなりませんので、丁度時期でもあったので下着の上からオーバーを羽織って待機していました。

前にも何かの時に、浣腸をして、普段着のままで家事をしている中に、仕事に熱中して終ってつい注入感も、圧迫感も忘れて、立居している中に、アッと思う間もなく急激な催し方で立っても坐ってもいられなくなって、つい少しでも洩らして下着を汚して了うという体験を発表したかと思いますけど、之はあくまでも自分のアパートの室での事ですし、下ばきや下着を汚した処で人目には全然付かずに処理出来る大きな安心感があります。

然し今度のは予行演習でも、とに角人混の映画館へ出て行くという積りでの練習ですので緊張の度合いは大変な違いがありました。少々室内が寒いせいもありましたけど、自室での映画館行の練習では、いつも矢張り三、四十分位いしか我慢が続かず、下着の上にオーバーを羽織っておトイレまで十米余り、小走りで駈込む様な次第でした。オーバーをおトイレの中の釘に掛けるが早いか、半分引下してある下ばきを引っぱり下してあたりに響

く排泄の音をはばかりながら、つき上げる様な便意に気もそぞろになって、急激な排泄を済ましたものでした。

いよいよ練習で多少の自信が出来たので、温湯五〇CCの浣腸をした上で映画を見ることを決行することに致しました。五〇CCというのは前に花村さんの告白を見せて戴きましたので、お姉様にあやかる気持もありました。自室でいつもの様に五〇CCの温湯を刺激のない様に注意して注入し、映画館へ行くのだからと思ってストッキングをガーターで着け、上にはいたパンティの内へ綿花を相当あてて短かいスリーマーの上から合オーバーを着込んで出かけました。

幸いあまり混んでいませんでしたので、初めから柔かいクッションに坐っていましたけれど、其の時はガーターベルトで靴下を吊っていたせいか、いつもは立ったり坐ったりしても下へ引っぱる感じだけのガーターが、下腹をだんだん締めつけて来て、とても苦しいのです。それでもと思って我慢を続ける中に大分楽になって来ました。この楽になった後が危ないのだわ、と要心している中に、注入から五十分位いでやはり急に催して来て、早速立っておトイレへ急ぎましたけれど、それこそ息の詰る様な思いで目がかすむ位でようやくおトイレへ駈け込み、下着を引き下すのとドアを締めると一緒で、ホッとすると同時に、多少お腹をゆるくしていたためでしょうか、自分でも驚く位大量な水様便をドドドドーツ、ドドーツと続け様に排泄し思わずハーッと溜息をつきました。余り疲れたので暗い座席でグッタリと体憩して映画もそこそこに帰宅した事を今でも忘れません。

必要（随分勝手気ままな又変った必要ですけども）から生れた性癖と申しましょうか、こんな事から生れた私の女性としては大変恥しい性癖を前にも申しましたが私のいわゆる薄着のくせを助長してだんだん横着にさせたことは事実です。

ですから他所のお家へ伺って、上のオーバーを取る事が判っている様なときや、普段の通勤の時には、今の様な極端な中の着物の省略や、下着殊にストッキングなどの省略は出来ませんけれども、お使いや、休日の出歩きや映画等、自分の室から出直して出掛ける時は寒い日でない限り、外から見えない中の方を何か省略して楽しむ様になって終いました。

出来れば素肌の上にザックリと暖かいオーバーを着ていたいのですけども、乗物が混んでいたりすると、躰が触れた様なときに相手に異常な感覚を興えて、あまりショックを起されてもいやですし、事実多少省略していただけでそんな場面もありましたし、乗物の中で女性の身として余りジロジロと改めて全身を見廻されるのがいやなので充分注意はしています。

前に一度、通勤に少し早い電車に乗ってオーバーの下はストッキング、ブラジャー、スリーマー、半袖セーターだけで出掛けた事があります。大分混んでいたので躰が触れ合う事を避けるのに苦労しましたが、会社のロッカーで人気のないのを幸い持っていったスラックスをオーバーを着たままスルッとはいて何喰わぬ顔をしていた事があり、下着とオーバーの触れ合う感じが何ともいえないので、時々何か手に持っていって此の式で楽しんでいます。変なことを楽しんでいる女だとおさげすみになるかも知れませんが、之が結構スリルだし楽しみなのです。

これからだんだん夏に向いますと又、夏は夏でずい分思いきった省略が出来ますが、之はどなたもなさっている事でもあり、感触は比較になりません。夏向にはレイコートを使っての此の種のプレイは可能ですけど、とて

も通勤や、混雑した商店街には実用出来ないと思います。お使い程度には試みた事もありますが、外見から躰の線が出過ぎますので普通のスタイルでは無理ではないかと、目下研究中です。

　今まで自分でそういう趣味や性癖を持たないときには気が付かず見落していましたけれど、私の様に中の着物を少くして又はなしでオーバーを着る性向のお方が存外多いのはないでしょうか。此の間から乗物に乗っても、その事ばかり注意しておりますと、随分そういう着付の方にお目に掛ります。

　先日も電車で腰掛けて見えた方ですが、オーバーの時候なのにオーバーの下には相当深くまで服の袖もジャケツやセーターの袖も見えませんし、襟からも何も見えません。ストッキングもなしで、カッターシューズで、オーバーの前の打合せの処には脚の太腿の線しか感じられないのです。上手にオーバーを合せていらっしゃったので膝のあたりが判きりしなかったのですが、恐らくスリーブレスか半袖のセーターにペダルプッシャーの短かいのかショートパンツでも着けていらっしゃるのかと失礼ながらチラチラと拝見しました。然しあまり線が柔かいのでひよっとしたら何にもと大変失礼な想像をしている中にもう少しで乗越す処でした。

　とに角、案外あるんだと気を強くしています。前書に大変駄文を並べましたけど、私此の間マン画を見ておりましたら近い将来の婦人の訪問着というのがありまして、車も家も暖房完備のために、女性の訪問姿はビキニ型水着や胸当とショートパンツだけで訪問先でオーバーを脱ぎますと下はその様だと画いてあるのですが、なる程と一人うなづいた次第なのでした。

　マン画は余り極端だとは思いますがスラックス、セータースタイルの流行から最近はバレータイツスタイル迄流行しょうという世の中になりました。当然そうなる様にも思いますが、そうなったら、私の性癖など当り前になってしまって、つまらない様な気も致します。

　オーバーの中の着物の話から大変脱線致しまして、お恥しい浣腸の性癖のことまで告白してしまいましたけど、其の中に又、女性の見た女性の下着論、下着の着け方の色々などお知らせ致したいと存じます。

（おわり）

濃艶妖奇譚

毒婦と隠坊

由木稔

謎の鉈

湯の町、といっても関東山地のはずれにある辺鄙な寒村。そこの安宿の厠の中で、鬚もの芝居の座長、高田浩二が縊死した夜は、例年の秋祭を的に小舎の幕を上げて二日目をすませたばかり。死因は全く不明であった。

その日のドヤチンに事欠くシケタ一座だったとはいえ、婀娜な襟首に七カラット程もある、ダイヤの頸飾をつけた瑠璃を、女房にもつ高田浩二である。金詰りのせいだけとはいえないのだ。とにかく翌日、西陽のさす頃、棺が町外れの小さな火葬場に運びこまれた。役場の男がひとり、それにほとけの女房、瑠璃と三四人の役者がつきそった。木枯にさらわれたわくらば（病葉）が、棺の上にはらはらと舞い落ちた。

火葬場に着くと侶九という四十がらみの隠坊がひとり、ぼそっと煙管をふかしていた。

「侶九さん、頼むで」

役場の男にいわれて、隠坊はどっこらしょとばかりに、棺を窯へ入れかけた。老婆に似たかぼそい陽ざしが、硝子窓から薄暗い火葬場の中をのぞいていた。

「いや！　未だいやよ」

俄かに女が侶九の腕にしがみついた。はらりとふるえる女のびんの哀れさに、ふっとそそるような妖しい女肌の匂いがよぎる。

「ど、どげする……」

侶九は吃った。咄嗟だったからではない。片田舎の火葬場の番人――この歳になるまで嗅いだこともないなまめかしい女に抱きつかれては、まごつかずにおれなかったのだ。

「そこに置いて、地べたでもいいから」

侶九は女のいうとおりにした。女はあられ



もなく棺の上に泣き崩れたのである。こきざみに顫くおくれ毛の下に、雪を欺く白い襟あしが、侶九にはまばゆかった。

「姐御……」

役者連の兄哥分の嗄れ声が、女のすすりなきに沈んだ辺りの沈黙を破った。

「みっともねえ、よしな。ほとけがてれてるぜ」

「お黙り!! あなた……」

向きなおった女の、泣き濡れたかおが怨めしくゆがむ。

「お前たちに、あたしの気持がわかるもんかい！ 構わないから先に帰っておくれよ」

女はわめいた。

「ここまで来てまだあきらめられねえたァ、あたり前の惚れようじゃねえ」

嗄れ声の役者は平然と唾を吐いた。

「……」

女は再び、腕の中に顔を埋めた。

「姐御、なんとしてくれろと脅すわけでもねえが、おれたちァ路銀にも事欠く始末だ。まさか、この片田舎じゃ、のたれ死もできめえ」

今、めそめそ泣いてる場合じゃねえだろうと、皮肉る男の流し目が、ふと女の露わな襟あしに止まった。ダイヤの頸飾がそこに悲しくのぞいていた。

「……」

女は黙ってすすり泣いた。

「じゃァおれたち、先に宿へ戻るぜ。姐御」

女主人の異常な執念に、しびれを切らした一座の者は、棺ととり乱した女を残して町へ下りて行った。それに次いで役場の男も、あとはおめに任せたと隠坊に目配せして、そそくさと焼場を出たのである。

四辺の山顛から、黄昏の凍えた霧が舞い下りて、小さな湯の町を包んでしまう。いつしか、その黒ずんだ灰色の中に、人屋の灯が黄くにじんでいた。

「おれたちをすっぽかすようなこたァ出来ねえ筈だ……とにかく行ってみる」

日暮れた宿に未だ戻らぬ女主人が、漸く訝しくなったのである。懐中電灯をもつと、兄哥分の役者はひとり、火葬場の薄ら暗い径をいそいだ。それから……全く、夜更けた。女主人も男も帰らなかった。

うたた寝の安宿に花札を叩きつけていた一座の連中は、こいつァ只事じゃねえと、東の山の端の淡く白んでくるのももどかしく、人家をずうっと離れた隠坊小舎へ駈けつけたのである。

アア、アオウ、ア、アオウ、アオウ、アオウ。

不吉なわめき声。

未だ明けそめぬ乳白色のおぼろな色の中に沈んで見える、隠坊小舎に、黒いものが――まるで蝿かなんぞのようにたかっているのだった。

山の栖烏だ！

連中の誰かが、石を投げつけた。烏の群が不気味な啀いをのこして飛び立った。

おどおどと火葬場の木戸をあけた拍子に、中からむっとする熱っぽい臭いが襲いかかった。男がひとり、俯向にのめっていたのである。地べたに血がべっとり……。

「あっ！　兄哥！」

一座の連中は蒼ざめた。意外にも、瑠璃を訝って宿を出た兄哥分の役者が殺害されていたのだ。その上、火の消えた隠亡の窯には、高田浩二の屍が灰にならぬまま残って、ジリジリと軀の汁を吐き出しているのだった。

侶九と瑠璃の姿は、どこにもなかった。

笑う蠟人形（ろうにんぎょう）

失踪した二人の行方不明のまま、二月余りがたった……ある吹雪の真夜中、暦によると一月十七日。横浜××番街の警察派出所に、素っ裸の上へ黒い外套をひっかけた中年男が突然現われたのである。唇、首っ玉、五本の指に生臭い血がべっとりとついて、まるで殺人鬼の形相であった。

「ど、どうしたんだ！」

深夜の奇怪な来訪者に、夜勤の老巡査はガツガツと顫えたのである。

「旦那、落目の底もようよう見切がつきやがったもんで、ひょっくりとこ……」

その男は血の色の唇を舐めずりながらいうのだった。

「ナ、何!!」

老巡査の脛の震いが止まらなかった。

「湯の町の火葬場にあった役者殺しの下手人は、このあっしなんで……」

男は平然というのである。

「そ、それで……血！　その血は？」

辻褄の合わない不吉なものが、老巡査を狼狽させた。

「ああ、これですかい、あっしのスケ（情婦）の血でさ」

思い出したように、異様な五本の指を見やる男の顔は、白痴の如く表情がなかった。

「殺したのか！」

薄呆けたような男の顔に、老巡査は苛立ったのだ。

「あっしが！　め、めっそうもねえ。あっしの知んねえうちに、奴は冷めとうなってやがったんでさ」

「お、おんなはなぜ死んだんだ！」

「そいつァ……奴のおっぱいにドスを突き刺したんで……」

「誰が！」

「その……あっしでやすよ」

おれが乳房にドスを刺したと白状しても、殺したといわないその男が、老巡査には薄気味悪くなった。

「お前が！　や、や（殺）った！」

「……」

××番街といえば、波止場（はま）の場末賭博、麻薬密売者、三国人、国籍不明の淫売婦などのたむろする国際的貧民街だ。殺人事件の現場は、その界隈のどまんなか、R荘という古いアパートの二〇七号室だった。外国製香水のしみた洋風の室内に、フロアスタンドの赤い灯がぼうとにじんでいた。壁際のダブルベッドにちらかった焔のような長襦袢、桃色の腰巻、白い肉襦袢――その上に、脱け出た女体の幻が浮いている。

「むウ！　こいつァひでえ」

室内に踏み入った刑事らは、ゴクリと生唾

をのんだ。褐色の絨毯の上に、素っ裸な女がのけぞりかえっていたのである。いや、肢体の影は冷めたく動かなかった。ふくらみあがった乳房の谷間からみぞおちにかけて、鮮血が白い女肌を汚している。ざくろの実の如く裂けているのだった。仰向いた右の乳房が、ざくろの実の如く裂けているのだった。

絨毯に点々と捺印した血の、あわただしいしみが、裸女を狙う毒蜘蛛の群を思わせる。死体の側に、生血を吸ったジャックナイフが不気味にころがっていた。

その時。

「不思議だ……」

刑事らの見た女の表情にげしかねるものがあった、象牙彫を欺く白い脹脛……そのあられもない恰好は、もがき死んだ形骸とは思えない程になまめかしい――毒婦のしどけない眠りを、むりやりに連想させるのだ。おまけに、乱れ髪に浮かぶ白蠟のおもざしが、麻薬にとろける中毒者の、あの妖しげな幽笑を匂わせている。齢、二十六、七。

「どんないきさつなのか……とにかく、あの隠坊奴、蜘蛛みてな面しやがって全く、勿体ねえことしたもんだ」

と、刑事らすら、嫉いた程の美貌の女であった。それだけに、この事件をめぐって生臭い猟奇の影がちらつくのだった。

唇（くちびる）を盗んだ女

予審判事の訊問に、蜘蛛みてえな……男は人事のようにこたえる。

「旦那、そのとおりで、あっしが火葬場の番人、鳥山侶九でごぜえますだ」

「葛城瑠璃――高田浩二とかいう座長の女房で。おんな（情婦）………へェ、あっしの。な、なんでがす！　あっしが奴を誘拐したってんで……と、とんでもねえ。おれをのっぴきならねえ地獄へ、曳きづりこみやがったんは、ほかでもねえです。瑠璃の奴でさ……」

侶九は予審判事から顔をそむけた。

「ふッ！　むりもねえ、旦那がそげな風にみなさるんも……」

侶九はゆるりというのだ。

「素姓こそわかんねえが、何しろ値が百万もする宝石を肌に飾っておった瑠璃。とろりとするええ女だっけ……あっしは、といやァ野暮くせえ片田舎のぶ男でさ。所で旦那、奴がおれにべた惚れしねえたァ決ったもんじゃねえですぜ。じっせえ、奴の方から不意にこうおれの首っ玉へ巻きつきやがったんで……」

妖しい幻が躍っているのか、虚空によろめく死魚の目玉のような鈍いまなこが、ニタリと笑う。と、何を思ったのか、侶九は予審判事に向き直った。

「旦那、あっしをどうでもげ（解）しかねるってんなら、仕方ござんせん。死んだおんな（情婦）の供養だと思って何もかもぶちまけまさ」

その眼にうつろな白痴の色が失せて、傷ましい光があった。

「こげなことになっちもうまでァ、いろいろ奇っ態なわけ（事情）がありますんで」

無智な男にありがちの、のろまな侶九の告白は、意外にも異常な幻影絵巻をくり展げて行ったのだ。それには、老練な予審判事も思わず身顫いした程である。

「あっしも、ずうっとあとで知ったんでやすが……あの瑠璃てえ女はろくでなしな変ったあま（女）でござんしてね」

ぼそっと、侶九は口を切った。

とりのこされた女を、隠亡焼の侶九、なんとか棺から曳き離そうとして、ついその妖しさに気がくじけ詮方なく、女の側で立ちんぼしてるうちに、舐めずるような暮色が火葬場の中へ匐い寄ってきた。幽かな死臭のせいか

女肌の婀娜っぽい匂いのためか、木戸口から舞いこんだ枯葉が、棺を抱く女の辺りに糸くずのように寄りたかっていた。チョッ！　全く隠坊をてこずらせるあま（女）だ。少し神経ののろすぎる侶九も、いささか苛立ったのである。

「奥さん、これっきり、おしめえのお別れだべ。ほとけに火を点けてやるだ。そげえ泣いたんじゃ、大事な身体に毒でさ」

なだめすかして漸く棺を窯に入れると、侶九は女に燃え立つ木片を渡した。女はそれを下窯にさし入れた。石油に点火した焰の舌が、女の白い顔に赤くぼっと揺れた。

「はよう帰えたほうがええで、奥さん。まごまごしとると梟奴が啼きだすて……」

日没の虹色も褪せてしまった辺りの山景が窓からひっそり閑と黝ずんで見える。侶九は、女ひとりの山径をきずかった。

「いやよ！　未だ帰らない。暗くなったってどうだっていいの」

ほとけが灰になるまで離れたくない、とでもいうのか。女は火の中の棺をそっと流し見るのである。その濡れた眼が、墓地に捨てられた病猫のまなこに似て切なかった。侶九はあきれると同時に、青白い憔悴の女にふっと薄気味の悪い不安さをおぼえる。だがもともと他人だ。おれになんのかかわりがあろう。隠亡焼は死骸を灰にすることが、それだけが役目というものである。ほとけの女房にまでかかずらうってのは、隠坊の幕じゃねえ。

「そんなら、あんたのええように……」

侶九は女から眼をそらした。女は、窯の小さな孔の側から離れない。焰に蝕ばまれる棺を見守ってるのか。漸時、妖気をはらんだ寂寥で歪む。その中に只、かばね（骸）を焼く火の音ばかりが聞えるのだった。

「旦那、それからでさ。瑠璃の奴が奇っ態なことをやらかしたんは」

しょぼっく眼玉を予審判事に向けた侶九の、唇がニイッと嗤っていた。

生臭いガスの吹きつける覗き孔に、じいっと寄せた白蠟の顔。ふり乱した黒髪に、焰の影がめらめらと匐い上がる……気の向くようにしゃがれ、と思っては見たものの、女の常ならぬ仕草に侶九は柄にもなく戦慄したのである。はだけた衿元に露わな雪肌が、焰に赤い……みるみる女のこめかみにあぶら汗がぎらついた。

「あ、あなた、あァ、あァ――」

女の怪しげなうわごと。

侶九はギョッ！　と目を瞠った。奇っ怪な！

女の身体が蛇のように動いているのだ。白い手が抱くものもなく、自分の乳房をむなしくおさえる。噛んだ口から噴き出す毒々しい喘ぎ――あたかも浮魔につかれた巫女の凄まじい発作だった。と、

「あァ――」

とろけるような官能の叫声を黄ろく曳いて女はよろりと地べたに崩れたのである。

「ど、どげした！　奥さん……」

侶九は無我夢中で女を抱き上げた。刹那だった。

「う、うウ！」

侶九の首っ玉に、白い腕がぬらりと巻きついて、女の炎のような唇が侶九の口をふさいでしまったのだ。

意外なことを女は、一介の隠坊にしでかしたのである。

「辻褄が合わねえってんですか、旦那。へへへ、全くでさ。どうころばしたってまともじゃねえ。おっと旦那、そこんとこがおちだべ。瑠璃の五体にあった奇っ怪な秘密をさらけ出しちまえァ、わけのねことで……。はじめ瑠璃の奴、仲々しぶりやした。『どうせおめ

え、落目の底の二人じゃねえか』としつこく口説いてやっと、口を割らしたようなもんでござんしてね」

しゃがれた笑いにゆがむ上唇を、舌の端でペロリとやると、侶九は口述をつないだ。

屍（かばね）に浮いた淫絵（みだらえ）

「あなた、どうして死んじゃったの。あたしをひとりぼっちにして……ねえ、あなた」

瑠璃は小さな孔から、燃えてゆく寝棺を見守った。轟々と音だてる隠亡の火が、ケッケッと嗤っている。ふっと、この世の見納めとなった先夜の、悩ましい高田浩二の情景が焔ともつれ合う。

あの安宿の、離れの寝室だった。青磁色の淡い灯が一つ、ぽそっと点っていた。

「瑠璃、今夜はほんとにおれを殺してくれないか」

この頃の、毎度の決り台調にしては、少し高田の表情が暗いと思ったが、まさかその夜に自殺するとは夢にも……。

「ふっふふ、そんなにいうんだったら、本気にしてよ』

冗談めかして瑠璃は思いきり鞭を振った。

「痛う！」

畳の上に一、二転した高田の青白い五体に血がひとすじたらりと流れた。

「も、もっと打ってくれ」

「いやなひと……。いいわ。そんなに言うんなら、ほんとに殺してやる」

閨の薄明りの中に、肉づきのよい乳白の四肢がしばらく、女豹の如くあばれた。

彼らには、人知れぬ異常な淫楽の秘密があったのだ。

隠亡の火に描かれたその悲しい淫絵の上をすぎた夜毎の情痴の幻影が、走馬灯のように浮んでは消えた。

「あァ、わたしは、ねえ、わたしはどうなるの……」

救いのない哀れな叫び声が今更のように咽喉を刺す。と、俄かに焔がぐらりと揺れた。逆立った死骸の脚が、棺から躍り出たのである。はっと瑠璃は息をのんだ。よろめきかけた焔が山猫のように露出した亭主の骸に襲いかかる。

「ルリ！　ルリ！」

異常な幻想に乱れた瑠璃の心は、高田浩二のたかぶった声をきいたのである。一瞬、隠亡の火が、赤い焔になって毒々しく匂う。それは、骸の焦げる悪臭なのだ。

「血が、あァ、血があんなに……」

それは、軀から垂れる汁にちがいない。錯乱したルリは、被虐に喘ぐ浩二を死骸の上に見たのだった。

「あっ、あなた」

ルリの悪魔のような欲情に火が点いた。あの血をみんな吸ってやるのだ。その幻をとらえようとした瞬間、ガクンと骸の逆立った脛が崩れた。只、醜い死骸がじりじりと焦げている。

「あァ――」

幻滅にルリはよろめいた。とろけかけた白い四肢が、むなしくひくひくと喘ぐ。隠坊の侶九は、その行き暮れた妖婦の肉体を、何も知らずに抱き上げたのである。

男の体臭――。

「旦那、いかがで……。殺生なもんでさ。惚れた亭主の五体が、未だ灰にならえうちから罪のねえ隠坊にちちくってくれといやがる。あっしゃもう、幽霊に首っ玉を締められたようで……」

ぞおっとした侶九は、いきなり女の髪をつかむとぐいと曳いた。侶九の首にからんだ白



い腕は離れなかった。只、女の咽喉が上向きにそり返っただけである。女の吐く息が、侶九の鬢面を舐めずった。

「な、なにをするッ！　ほ、ほとけが……」

　怨みますぜ、と吃る侶九の口をおさえて

「いいわよ！　呪われたって。それより、あたし淋しいの。ほんとに死にそうだわ」

　女は怯える隠坊に哀願するのである。その面ざしに妖しい炎が揺れていた。

「そそげいうたって、おめえさん……」

　いつか、無智な心の裏をくすぐるみだらな笑いを、侶九は殺すことも出来ず、只もうおろおろとするばかりだった。

「憶病なひと、あなたのその顔に似合わなくってよ」

　ああ、とたじろぐ隠坊の鼻面に、毒花に似た微笑をのこして片限の席の上に女は素早く伊達帯……赤い腰紐を解いた。はらりと地面に崩れる緋の長襦袢を、天井の薄黄い灯が追う。襦袢の裾を割って剝き出た片方の白い脛が、暗がりの中で白蛇の如くうごめいた。あられもない姿で、女は侶九の足下に横たえたのである。

「お、おめえさん、ひひとが来たら、どうするんでえ」

「じれったいわねえ、誰もいやしないじゃないの」

　女は邪慳に隠坊の片腕をひき寄せた。思わず侶九は片唾をのんだ。

　背後から誰かが、うしろ髪を……発作のように侶九は、火の中の死骸を流し見た。只のむくろだ。化けて出るわけでもあるめえ。隠坊は死骸に鈍なものである。

「誰もいねえ……」

　侶九は腹の中で反芻した。隠坊と女を見る者は、只、天井にぶらさがった電灯、死臭を吐く焰にすぎない……おまけに黄昏れた森の中だ。

「どのみち、おらァ片田舎の隠坊よ。地獄さ足一本いれてみた所で、こげなええ女にありつけようたァ思わねえ……」

　遠く、夜鳥が啼いた。燃えてゆく死骸がケッケッと音だてる。二人の淫毒な姿態に揺れる隠坊の火影が、次第によわくなって、いっか、火葬場の暗い寂寥を破るものは、外のす

り泣くような風の音ばかりだった。

奈落（ならく）の情痴（じょうち）

「いけねえ！　ほとけの火が消えやがった」
侶九が立ちあがろうとした所を、
「いやッ！　行っちゃァ」
帯のない長襦袢を曳きづって女がしがみついた。
「ねえ、あたしと一緒になってよ」
侶九ははっと女の眸を瞶めた。隠坊の侶九には、この珠のような女を、ずうっと毎日、乳繰りてえ――という、欲まではなかったのだ。これがまどろみの白昼夢でないならば、嬉し涙を流して女の足下に跪きたいところだが……。
「め、めっそうな。おれァ」
女主人の身は知らぬ。もっぱら首飾を路銀にと狙う、水臭い芸人連の宿へ戻った所で何になろう。どうせ瘢れる身なら、惚れた男と呪われの年貢を納めたいもの――と、女は切々と口説くのである。
「お、おれにゃ、わからねえ……」
田舎者の侶九には、艶な女の口説をもて余すばかりでケリがつかない。

その時。ギーと音を立て、木戸が開いたのである。そこに青白い男の姿が……。女は蒼ざめて侶九の背にかくれた。
「どうせ、こんなていたらくだろうと思ったよ」
毒々しく嗤う男は、兄哥分の役者だった。
「畜生!!」
途端に役者の草履が侶九の面を蹴った。
「隠坊のくせにしてよ。このザマァどうしてくれるんでえ！」
男の鋭い眼に、嫉妬が青く燃えていた。のけぞり返った侶九の右手は、意外にも側にあった鉈を握っていた。
刹那。
鉈が宙に躍った。
「ギャッ！」
役者の白眼に生血がどろりと垂れた。
「やっちまった……」
俯伏せに倒れた男の側で、隠坊は茫然と鉈を見詰めていた。長襦袢の女が寄って来た。呪われた宿命の二人に、幽鬼の漂う屍室の空気がしみた。
「と、いうわけなんで、旦那。あっしァもう観念しゃした。凶運から浮べねえ男だっぺ、今更……てんで、女とずらかって日蔭の巣を見つけたのが、はま（波止場）に近え古アパート。ルリ奴、ズベ公を仲にダイヤをうまくさばいたっけ。その銭でドヤの調度を豪奢に飾ったんでやすが……そげなルリの遺い口が、直ぐと消えっちもう虹みてえで、全くつれなうて堪らねえ。あっしァ、思わず涙をこぼして奴を斯うぐっと抱きすくめたもんで。するとヤッコ（奴）さん『あなたが曳かれたら、あたし死んじゃうつもりなの。それまでうんと可愛いがって』というんでさ。旦那、全くいじらしいじゃござんせんか。えッ、なんでやすか、そんなええおんなをなぜ殺したかって……そ、そこなんで――」
ちょっと、侶九は切なげに瞼をしょぼつかせた。隠坊くずれの人殺し。あがいたって浮び所のねえ奈落の底だ。所詮、サツにバラされるまでのいのちが花とばかりに、刹那的な快楽に耽ってはみたが、日蔭者の心はいつか萎ぶもの。赤いドレスにしみた香水の匂いのうすれるように、やがて侶九は、ルリの肌からあのしびれるような匂いを感じなくなったのである。
「旦那、ルリのからだがあっしの心をごまかしてくれなくなりァ、一体なにがあっしを慰めてくれるんで。なんにもありァしねえ。あ

っしゃ、段々、暗え男になりゃした……」
それは、あばらの軒屋根に雪のたばしる夜の出来事である——。
ガストーブの燃えるドヤのベッドに、侶九の情婦は身を横たえていた。
「ルリ……お、おれ自首する」
よろりと立ち上った侶九の貌に色がなかった。女は寝台に上半身を起した。何かあざ嗤う如くに隆起した乳房に、フロアスタンドの赤い灯影がゆらりとかげろう。
「何よ！今更……『首っ玉を落されるまでァおめえを離さねえ』といったのは、どこの誰よ！　めめしいったらありァしない」
と毒づく女の唇の生々しさが、毒蛇の赤い斑点を思わせる。
（この女だ！　こいつがおれを、地獄に陥しゃがったんだ）
ピシッ！
呪いの声もなく、革のベルトが女の素肌に躍りかかった。
「あっ！」
白い肉塊が絨毯の上に、芋虫の如くころげ落ちた。間髪いれず、次の一撃……。
「痛い！　よ、よして！」
象牙色のしなやかなふくらはぎが、宙を蹴る。あぶらぎった臀部が、くねくねとのたうつ。女は髪を乱して絨毯上をころげまわった。侶九はもだしたまま、激しく鞭を振り続けた。それは、奈落に喘ぐ男の、声なき不気味な嗚咽のようであった。
異常な虐待が、雪を欺く女肌に紅蛇の刺青を刻む。
「ねえ、ユ、赦して！　あ、あァ」
もんどりうつルリの肉体は、やがて絨毯の上を一寸刻みに匐ってぐったりと俯伏したのである。ふっと、うすれる意識の中に奇っ怪な幻が揺れる。火葬場の焰の中に見たあの……ルリのムチにのたうつ高田浩二の姿だ。その情痴絵図と、四つ這いに喘ぐ自分のむごたらしい裸姿が錯綜した。五体を打つ鞭の音が遠く、ずうっと遠くきこえる……。
「ああ、し、しびれる。……しびれるわ。打って、もっと打って」
サジズムの女体の中には、それと相反したマゾヒズムが宿っていたのであろうか。断末魔に似たルリのうめきが、いつか妖しい悦楽の吐息になっていた。ギョッとして侶九は、絨毯にのけぞった女の凄まじい姿を瞶めたのである。血腥いみみずばれの肌に朱のひとすじ、妖艶の女肌を濡らすずいきの汗が、人魚の鱗のよう。その余りにも蠱惑的なルリの姿は、憎しみに猛った侶九をまごつかせるのに充分であった。はからずも侶九のいてついた官能が、猟奇の青い影を曳いて不気味に燃えたつ……。
「ルリ……」
白刃の如く、鞭が虚空を切った。それは奈落の恐るべき淫楽だったのだ。
「旦那、斯うなっちゃァ、もう、なにもあったもんじゃねえ。あっしら二人は、その魔楽をガツガツとむさぼったんで……揚句が」
一月十七日。はま（波止場）の銅鑼がきこえる夜の街は、雪に埋もれて路地に迷う風がすすり泣きしていた。
ピシッ！　ピシッ！　淫楽の鞭に、毒婦の裸身が絨毯の上をころげまわる。卓上の、洋酒の空瓶がガタガタと音だてていた。その夜も、地獄の情痴が……。
「ああ、今夜はとてもしびれるわ。ねえ、とてもしびれるの。打って。もっとつよく……あァ——しびれる。気がとおくなるわ」
生々しいべにあざ（紅痣）の肢態を、半殺しの青大将の如くゆるりとくねらせるその夜の、ルリの執念は、どうしたのか、いつものとはちがって底知れなく思われた。侶九は、

もうくたくたに疲れていたのである。

「おめえ、今晩は、ど、どうかしとるぞ」

侶九はなんだか薄気味わるくなった。

「どうかしてて好いじゃないの。ねえ、こんなにしびれるの。ああ苦しいわ。はやく……」

「よし！　待ってろ！　今にしびれを止めてやらァ」

何を思ったのか、侶九は不吉なダメ声を吐いた。夢うつつのルリの側へ突っ立った侶九の右手に、いつの間にかジャックナイフが冷めたく光っていた。

「あァ！」

女の何とも表現のない凄まじい叫びが、四壁に吸いこまれた時、鮮血が乳房に刺さったドスへとばしりを上げていた。

「い、い、いい……」

異常な悦楽の仮面を装う奈落へ陥されれルリの肉体はもはや、生も死もない。ドスを引き抜くと、侶九は生血の噴き出す傷口に吸いついた。

「しめえにゃルリの奴、黙りこくってウンともスンともいわねえ。さすがのあっしも、奇っ態なあま（女）め、と……その時でさ。ばさりと、あっしの首にからませた白蠟みてえな腕が、絨緞の上におちゃがった。あっしゃギョッ！　とどびのいた……旦那、これで何もかも」

（完）

【読者体験記】

ゴムマニアのプレイから

森下雨奇男

夏場所はどうしても肌の露出する部分が多くなるので、余り傷だらけの肌で外出させることもできず、責めるのもむずかしい。レインコートでむしたりすることが多くなるが、これからの季節は少々傷がついても衣服でかくせるから、また楽しみもふえようというものである。

　さて、それでは前回に引きつづき、今まで経験してきた数々のプレイの紹介に移ろう。

一

　ゴム引レインコートを前後を逆にして着けさせることも面白いので時々やらせている。しかし、これはフードをつけてこそ面白いもので、フードなしでは、コートの色にもよるが、支那服を着せているような感じだけ（前から見ると）だが、フードを前から引上げて顔にかぶせると、別に猿ぐつわをかませなくても、フード裏のゴム引の匂いが鼻をつくとともに、目かくしされた形になり、行動が大きく制限される。そこで色々なことを命じ、その動きを楽しんだり、またその上からもう一着を普通に着せて、前後から包んでしまう（サンドイッチコートと呼んでいるが）のも面白い。

　一度、レインコートを普通にきせ、その上から黒ゴム雨合羽を逆にきせて、長い白ブーツをはかせた両手を前でしばり（合羽の前後からみると後手にみえる）、ゴム長をはかせて大雨の一日庭へ立たせてさらしておいたことがあり、このときなどひどい風雨であったが、たとえきれなくなって坐りこんでしまったまでの約二時間ほどの間、雨は全然中へ入りこまなかったようで、その代りゴムの匂いと汗が目にみえない体を強くたたく雨とともにたえきれぬ〝責め〟となったようだ。

　このときはそのまま、なお一時間ほど正坐

させて雨中へさらしておいてから、ナワをといて屋内へ入れてやったが、坐りこんでしまった罰として、その日はずっと別のコートを逆にして着せておいた。この姿にして全身を雁字がらめにしばり上げ、ムチで打ったりすると、床の上をのたうち回るその姿は全く異様な物体を感じさせる。

二

次は妻の食器にゴム雨具を使う話である。罰が軽いときは私と向かい合って膳に坐っても一足のブーツを与えるだけで、だから片方に御飯を、片方に菜を入れて食べさせる。ゴムめしとでも云おうか、楽しかるべき食事時もむせかえるゴムの匂いで痛めつけようというわけである。時には一足のブーツから湯気の出ているさまなど全く異様である。大抵ときは食事がすむと、すぐその空いたブーツを自分の手で口、鼻にあてた猿ぐつわをさせそのまま後片付け、洗い物をさせる。

これが少し重くなると、食事の準備をさせてから、私の膳の向う側にレインコートなり雨合羽をひろげてしかせ、完全に「囚衣」をつけさせて、後手にしばり、このひろげた〝ゴムシート〟の前へひざまづかせる。そして私は食事をしながら（飲みながらということの方が実は多いが）時々、妻の分をそのシートの上へ投げ与える。それを犬のようにしてくえというわけである。汁気のものなど、シートの上へ流してやると、広がってタタミを汚さぬようにあわててレインコートに吸いつかねばならない。

他にも色々な仕方をしている。前手しばりにして、その手のひらへ与える方法、パンくい競走のようなやり方をする方法など。

ある日、朝からレインシューズを一日中、口にくわえていろと命じたが、片方とはいえ相当重いものだから数分もすると、歯がガタガタしてくるようだ。だから仕方なしにシューズを支えるために何かの台へ近寄って休んだり、柱へもたせて支えたり、或いは横に寝ころぶなどせねばならない。しかし、とうとうひる前に耐えきれなくなってバタリと落してしまったらしい。私は直接、その現場をみていなかったのだが、妻はすぐに涙を目にいっぱいうかべて、正直に、或いはもうこの口を一定に空けていなければならない仕置に耐えられようもないと思ったのか、落した事を謝まりに来た。

「そうか、それほど口の空けるのが嫌いか」ということになって、囚衣、くつわ、しばり上げとなったのだが、昼食時はわざわざくつわをはずして私の食事をそばで眺めさせるだけで与えず、夕食時、外からとった少し豪華な二人分の食事も私が食べるだけで、くつわをはずして涙を流す妻をいたぶり、わざわざ鼻のそばまでもっていったりするが全然与えず

「どうだ、ハラがへったろう、口を開いてメシをたべたいだろう」

「ハイ、おなかもすいていますが、ノドがからからでもう倒れそうです。水でものませて下さい」

「なに、のませてくれと、勝手なことを云うな、朝はどうしたんだ。思い知ったか」

ピシッと一つ、平手打ちをかませる。のけぞる妻の額には脂汗が浮かんでいる。可哀想にもう十時間ほども飲食を禁止され、六時間余もしばり続けられてぐったりしている妻、胸をぐるぐる巻きにしたナワをかき上げ、ずり下し、コートのボタンをはずして乳房をいたぶりながら、大分強く？　なってきたがもうこの位で許してやらねばならんだろうと考える。

「よし、水をやろう、メシをやろう、その前に正坐して許しを乞うんだ」と命ずる。



不自由な体をもがいてやっと立つと、キチンと坐りなおして、慣例の『許可願』を妻は始める。

「ご主人様、ふしだらな私めのためにいつもお骨折りいただきまして有難うございます。それにもかかわりませず、私めはこの有難いお骨折りに耐えることができません。これは私めが本当にまだよく夫に仕えることができない証拠ですから、十分仕えることができるようにお仕置いただきたいと思いますが、それに備えるために今しばらく休憩の許可を下さいますよう、伏してお願いいたします』

三

この時に引続いて与えた罰が、今までゴム雨具を食器として用いてきた時の一番重いと思われる仕置——すなわち、便器兼食器として一足のブーツで三日間をすごせという命令である。

まず、翌日の朝から用便の時間を制限、指定した。朝、透明ビニールのレインコートを一枚着せて戸外へ追い出し、ガラス張りの室内からよく見える位置へかがませてブーツの片方ずつへ各々大・小便を分けてさせる。用便をすませると、そのブーツを両手で前に捧げる形で、庭へしばらく立たせておく。猿ぐつわはかませていないので、自らの汚物の匂いに悩まされ、またその重みに耐えねばならぬ妻の姿をこちらは先に室内から楽しみながら食事をすませる。

やがて、「便をすててこい」と命じ「それで食事をせよ」と云いつける。雨合羽を庭の縁先にひろげさせて正坐させ、さらに「早く食わんか、メシはもう要らんのか」と頬べたを突つつきながら催促する。さすがに、これだけは涙を流し、必死になって他の刑罰なら

必ずこらえますからと哀願したが、これを許さず、少しでも食べろと命じて、一握りのメシと少しのつけものを放りこんで、三分間以内にこれを食ってしまわねば一カ月の長期刑だとおどして、無現矢理ノドへ通させた。

「今回はこれで許してやる。それを口へつけておけ、まだ従順になれんようだからゆっくり仕込んでいってやる。世話のやけるこのアマめ！」

足蹴にしてふんづけ、ビニールのレインコートが破れてチリヂリになるまで打ち、蹴ころがす。

四

海老責めにして楽しむために、割合目のあらい金あみを買ってきて、約五〇センチ立方の、丁度ネズミとりを大型にしたような箱を最近作り上げたが、もうすでに数回、この中へ放りこんで転がしてみたり、水中へ浸してみたり「実験」している。

きっちりと「囚衣」をつけ、小さい四角な箱に収まるように不自然な形にひしひしとしばり上げられたさまを、箱の外から木の小枝か何かでつついて責めながら庭でコロコロと転がしたり、木へ吊るしてみたり、狭い湯殿へもちこんでむしたり、水刑にしたり、夜は私の寝床の横へもちこんで一晩中その中へ入れておいたり、この時は夜中にふと目がさめた時、オリの中のうつむきかげんにしばられたフードと猿ぐつわの間から涙にぬれて光る妻の両眼とバッタリ視線が合った時など、一瞬、何かオリの中の恨めしそうな猛獣に襲われかけるものと錯覚をおこしかけたほどである。

五

妻をイスや或はマクラの代り――つまり敷物にして責めることもよくやる、つい先日も寝床で「囚衣」にきっちり身を包んで後手にしばり上げて、ひざを揃えて正坐させ、二の足をしばって私のマクラのところへ坐らせ、ひざをマクラ代りに一晩すごしたが、それよりも股を開いて坐らせて、テレビをみる時の座イス代りにもたれたり、踏み台にしたりすることが多く、また妻よりは遙かに重い私を背負わせて長時間家の中を歩かせたり（もちろん、猿ぐつわもかませて息を絶えだえにさせながら）メシを与えない罰の時はわざと私のお膳を手で捧げさせたり、何か書きものなどする時、机代りに大きな板を支えさせて、少しでもゆれたりすると、また仕置をふやしていったりしている。

六

ところで、十一月号で津田亜紀子さんはゴム引レインコートは長く使うと、あのネチネチしたゴムの魅力が老化のためになくなってくると述べておられますが、おっしゃるとおり確かにカサカサになってきますので、私の場合は沢山のレインコートをなるべく交互に使うことでこれを防いでいます。確かに最近は〝ゴム引〟のものは売っていないので、時々無理に妻に探してこいと命じて、恥ずかしい思いをさせながら場末の古物屋やスラム街の立ち売りなどから買ってこさせています。ゴムの感触や長もちする点では確かに黒ゴム雨合羽の方がよいでしょうが、一面、やはり色とりどりのレインコートの魅力もすてがたいものです。

このような状態ですから家の裏の軒にはいつも二、三着のレインコートを蔭干しにしたり、洗って吊ったりしており、また数足のブーツ、レインシューズなど並べてありますので、不意に親しい来客などがあって家の中へ上ってくる時など（滅多にありませんが）あわててこれらを妻がかくさねばなりません。一体、いまどき古い流行のゴム雨具などたくさん揃えて何をしているのかと疑われるから

ですが、それよりも一度、夕方妻をしめ上げて責めている時、不意に郷里から中学時代の友達が私を訪ねてきて、事情があって一晩泊めねばならなかった時は実際困惑しました。厳重にしばり上げてあったので、少しの時間で妻の縄を解くことができず、仕方なしに裏庭へそのまま引立てて狭い物置の中へ押込めておいてから、さりげな「今日は妻が外出しているから丁度よいよ」とか、何とかいって結局、翌日のひる過ぎまで、妻をそのまま放置しておいたことがありました。

延々二〇時間におよんだゴムぐつわによる顔面の責苦、縄目のきびしさ、空腹、放尿、放置されたままの恐怖に、友が帰ったあと、物置の戸を開けた時はさすがに涙が汗にうるんだ瞳もうらめしさ一杯の様子で、不自然な姿勢をくねらせて、私の足許にひざまずいて許しを乞う様子――この時ほどいじらしい、哀れな、可愛い妻を感じたことはそうなかったほどの情景でした。

その晩は床の中で頰をつねり、フードで顔を、コートで身体をすっぽりとくるんでやりながら、友の話を聞かせ、最後には妻が男物の雨合羽を、私はピンクのレインコートを、どちらもフードをすっぽりかぶって、お互い

の腰をロープでしばりつけて眠ってしまいました。

　私はいつも本誌を二冊求めています。これはグラビアを別のアルバムに貼るためと、もう一つは妻の〝教育用〟に使うためです。というのは読物の中の何かを指定して、それを日限を決めて暗記させ、朗読させるのです。もちろん、覚えていなかったり、間違ったりつまったりすると「罰」は倍加されていきます。この日限内に、しばりつけられるような別の仕置があったりしますと、とても暗記できませんから、特に気を使っていなければなりません。両手にブーツをはかされているのでページをくるのに弱っている姿、便所の中や、寝床の中でまで一生懸命に覚えようとしているさまや、しばられ、転がされていてもくつわや肩でページをくろうともがくさま、私は本を足でけとばす。それでもゴロゴロと転がっていって何とかページを開けようとする姿。――

　あけてもくれても〝責め〟から解放されようのない哀れな、可愛い妻よ、お前はもはや私から逃れられなくなってきたようだ。この妖しい「ゴム」に明けくれる夫婦の生活が続く限り私は幸福だ。さあ、ぽつぽつまた妻をいじめにかからねばならない。（終）

〔本誌既刊号総目次〕

昭和三十六年七月号　（定価一五〇円）

昭和三十六年八月号　（定価一五〇円）

昭和三十六年九月号 (定価一五〇円)

昭和三十六年十月号 (定価二〇〇円)

四馬孝画

浣腸責絵画

原画原寸大複写

女体浣腸図絵

B4判　各一枚　二〇〇円

一、女学生　略号「かき1」

セーラー服の可憐な少女、嗜虐的な養護教師二人に便秘を直すためだといって、太いガラス製浣腸器で無理矢理に浣腸される。上半身と足首とを縛られた少女は、今や治療という域を超越して、二人の男女の教師によって、激しい浣腸責めを加えられることになるのだ。

二、看護婦　略号「かき2」

美しい見習看護婦が若き医師の実験台となって、医院の一室で浣腸を施される。部屋の柱に両手を縛られて抱えさせられ、右足は柱に、左足は挙げて壁に括られ、真白く可愛いヒッチを晒したまま、強烈な浣腸液をガラス製浣腸器によって、次々と注入されるのである。

三、ヒマシ油　略号「かき3」

数度にわたる浣腸によってても女が飲み込んだダイヤは出て来なかった。今は最後の手段だと押さえつけた口の中へ、ドロドロとしたヒマシ油を浣腸器の先へとりつけたゴムの管によって注ぎ込む。嘔吐を催しそうになる油剤は、彼女の意志に反して腹の中へ流れ込んでゆく。

四、空気ポンプ　略号「かき4」

清純な乙女が捕われの身となって、ズベ公の手によって腸の中に空気ポンプから空気を強制注入されようとしている。自動車のタイヤに空気を入れるそのポンプは、強い力で乙女の腸内にシュッシュッと激しい勢で空気を送り込む。やがて腹部は張りきるばかりに膨満することだろう。

五、逆吊り浣腸　略号「かき5」

両手と両膝を開いて竹に括られ、両足首を吊るという逆さ吊りのポーズで釣り下った美しい女体。嘴管を受け入れる臀部が丁度目の高さで待っている。老人は、恐怖の浣腸器を手にして負圧の腹部に対して強制的な注入を行おうとする。口を開けてこの酷い仕打ちに耐えようとする八等身の娘。

六、大の字浣腸　略号「かき6」

二本の樫の棒に、両手と両足を文字通り大の字に縛り上げられて高々と空間に吊り上げられた女体。今や彼女の腹の中のものを余まさず便器の中へ排出させてしまおうと、太い浣腸器の中へ、たっぷりと薬液を吸い込ませて、サジスチックな楽しみを噛みしめながら、菊花の中へ注入してゆく。

七、強制洗腸　略号「かき7」

これから、お前のお腹の中をすっかりきれいに洗滌してやろうと、若い女は処置台の黒いレザーの上に坐らされ、両足首は高々と天井から下った縄に釣られた。イルリガートルから流れてくる薬液は、彼女の口から腹の中へ注ぎ込まれる。胃と腸に充満した液体は、洗面器の中へ吐き出させられ、再び注入されるのである。

八、リスリン浣腸　略号「かき8」

三日間の排便を禁止させられた女の腹部は、ぷっくりと大きくふくらみ、革のベルトで胸から脚を縛られ、片足を宙に吊られて、恥しいリスリン浣腸を拒む術とてない。溜りに溜った彼女の便は、激しい勢いで体外に噴出するのも、今や時間の問題となった。ああ、その目ざましい光景よ。

絵画

妊婦の媚態

四馬孝・画

略号「にん3」

A5判感光紙極鮮明焼付　三枚一組　四〇〇円

一、診察を受ける妊婦

産み月近くなった若き妊婦、全裸となって医師の前に立って全身の精密な触診を受ける羞らいのポーズ。

二、シャワーを浴びる

大きな腹部、大きな臀部、全裸となって立ったまま、シャワーを浴びる臨月の妊婦の見事な姿態。

三、入浴を終えて

久方ぶりの入浴にさっぱりしたグラマーの妊婦、大きなお腹をかかえて、全裸で脱衣場の鏡に美しい全身を写しているポーズ。

【新版】女体緊縛コレクト・フォト集

各組一枚一組（送料共）

E組百花選

大手札印画紙（9×13糎）焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E1 全裸の悦虐プレイ（愛川）
E2 仕置を受ける裸身（大塚）
E3 荒縄に苦悶する肌（愛川）
E4 ムチに耐える美肌（関谷）
E5 豊臀と豊胸しばり（愛川）
E6 捨身の後手観念像（大塚）
E7 足から眺めた裸身（水本）
E8 全裸エビ責尻強調（関谷）
E9 ハリツケられた娘（大塚）
E10 強烈後手高手小手（愛川）
E11 責め抜かれた疲労（梨花）
E12 逆エビにもだえる（大塚）

E13 拘禁された美囚女（大塚）
E14 浴室に覗く股間縛（愛川）
E15 海老責に泣く足首（大塚）
E16 乳房強烈締めつけ（愛川）
E17 牢獄で泣く縛り娘（大塚）
E18 美しき全裸股間縛（大塚）
E19 全身に溢れるマゾ（関谷）
E20 ベッドにもだえる（関谷）
E21 身体中に強烈な縄（愛川）
E22 放置された海老責（東浦）
E23 ゴム衣で縛られる（東浦）
E24 ローソクで責める（大塚）
E25 寝台の排便ポーズ（絹川）
E26 足指先に漂う媚態（関谷）
E27 後手吊り正面裸像（関谷）
E28 厳重な高手小手縛（東浦）
E29 女体の全部を晒す（愛川）
E30 激しいムチ打の果（関谷）
E31 若肌も縄にくびれ（東浦）
E32 投げ出した脚線美（絹川）
E33 臍中心の腹部緊縛（梨花）
E34 セーラー服の哀歓（梨花）
E35 赤いムチ痕の臀部（関谷）
E36 仰向けの囚衣の女（梨花）
E37 制服の女学生縛り（梨花）
E38 悦虐にむせぶ若妻（関谷）

E39 痛打にくねる裸身（関谷）
E40 乳房に加える金具（大塚）
E41 鼻責めにあえぐ顔（大塚）
E42 あぐら縛りを拒む（大塚）
E43 浣腸ポーズの裸身（梨花）
E44 激烈なエビ責苦悶（大塚）
E45 敷布の上にのびて（絹川）
E46 鼻いじめのアップ（梨花）
E47 柔肌に喰込む麻縄（東浦）
E48 縄にくびれる裸身（東浦）
E49 椅子に晒された女（大塚）
E50 臍そうじをされる（大塚）
E51 荒縄のトゲに狂う（絹川）
E52 火のついた煙草責（四方）
E53 踏みつけられた胸（梨花）
E54 裸身をゆだねた娘（大塚）
E55 手足猪吊りの美態（絹川）
E56 囚女の美しき緊縛（絹川）
E57 諦めた観念全裸像（水本）
E58 縄にもだえぬく姿（絹川）
E59 黒髪を吊られた女（大塚）
E60 女奴隷美しく悶ゆ（絹川）
E61 袋の中の緊縛裸身（竹本）
E62 ビニール袋に蒸す（竹本）
E63 亀甲型の雁字搦目（大塚）
E64 緊縛裸像の舞踏会（絹川）
E65 野外の後手宙吊り（梨花）
E66 足首に鎖錠実施中（四方）
E67 室内の後手宙吊り（梨花）
E68 雨装束の悦虐姿態（梨花）
E69 乳房いじめ踏つけ（大塚）

E70 足の裏ハネ擽り責（梨花）
E71 乳首プライヤ挾み（竹本）
E72 野外の逆さ吊り責（梨花）
E73 梯子責にあう美女（梨花）
E74 逆さ吊りに揺れる（梨花）
E75 娘十六しばり加減（花坂）
E76 踏みにじられた顔（大塚）
E77 逆エビニ反る足先（大塚）
E78 両手吊りのお仕置（絹川）
E79 責折檻に呻く若妻（梨花）
E80 豊麗を誇る正面像（大塚）
E81 食卓上の縛り人形（大塚）
E82 むしられる下着（大塚）
E83 月経帯の羞恥縛り（梨花）
E84 寝台上の若妻狂態（関谷）
E85 強烈全裸エビ縛り（東浦）
E86 褌姿後手縛り吊り（東浦）
E87 後手縛豊満臀部晒（関谷）
E88 黒髪いじめ凌辱図（大塚）
E89 令嬢後手高手小手（絹川）
E90 臍部乳房強調緊縛（東浦）
E91 責衣にくるまれて（東浦）
E92 全裸逆エビ責め（水本）
E93 ローソク乳首ゼメ（梨花）
E94 全裸後手縛り閨晒（関谷）
E95 強打全裸のあえぎ（関谷）
E96 肉体美の責衣ゼメ（東浦）
E97 バンド二ツ折縛り（梨花）
E98 全裸正坐縛り猿轡（関谷）
E99 豆しぼりの猿轡（絹川）
E100 強烈縛り臍いじめ（東浦）

(代理部新版分譲品)

自己愛の女神、長野良子

臨時増刊号のグラビヤにて初めて登場して、満天下ファンの絶讃を博した美人モデル長野良子嬢のとっておきの緊縛ポーズを特にマニヤの方にごらんにいれます。

全裸脚挙姿態

大手札　三枚一組　三〇〇円
モデル　長野良子
略　号　(てい)

可愛いい容貌と初々しい肢体の持主でありながら、齢に似合わぬ大胆さで自己愛を満足させる露出癖の長野良子嬢が肉づきのよい脚を挙げて緊縛の肢体をくねらし、自慢の全身をレンズの前にさらけ出したとっておきの三葉。

全裸アグラ縛り

大手札　三枚一組　三〇〇円
モデル　長野良子
略　号　(てへ)

これこそ露出癖の長野良子ならではの大胆きわまりないポーズ。後手高手小手で両手の自由のきかぬ彼女が、自ら逞ましい両足をアグラにしてポーズをとった他のモデル嬢では見られないフオト。

全裸屈伸縛り

大手札　三枚一組　三〇〇円
モデル　長野良子
略　号　(てほ)

巨大な乳房、逞ましきヒップ、膨満した腹部、白い脂肪のかたまりのような長野良子の美しい縛しめの全身が、その裸身が異性の前に誇るように投げだされた涎の垂れるような素晴しい迫力に満ち満ちたボリウム自慢のフオト。

六尺褌の変形姿態

大手札　三枚一組　三〇〇円
モデル　長野良子
略　号　(てに)

きりりと締め込んだ白晒フンドシのよく似合う豊満な肉体が、フンドシこそ、恰好の小道具だとばかりに、脚を伸ばし身体をそらし、さまざまの姿態をくりひろげる長野良子の六尺フンドシ変形ポーズ。

蹲踞と拍手

大手札　二枚一組　二〇〇円
モデル　長野良子
略　号　(てり)

六尺褌を締めた良子が、相撲の仕切りの時にするように蹲踞の姿勢で両股を真一文字に開いて正面を向いたところと、同じ姿でカシワ手を打っているところの二態。

鬼面と接吻する

大手札　二枚一組　二〇〇円
モデル　長野良子
略　号　(てち)

鬼の面にキッスする全裸の美女の立像。妖奇と裸美のかもし出すあやしい雰囲気が写真面いっぱいにひろがった、アブ好みと自称する長野良子が、自らすすんで演じたアイデア。正面向いたあどけない顔と、異様なばかりに美しい起伏を見せた正面裸身が素晴しい。

強烈エビ責め

大手札　三組一組　三〇〇円
モデル　松本アサ子
略　号　(まと)

「臨時増刊号」に初めて登場した愛読者のモデル志願者が自己のマゾ性を満足させるために、すすんで最も強烈な縛りを要求したカメラの前に晒した全裸エビ責めのポーズ。両足先が顎近くまで折曲ったこのエビ縛りは、時間が経つに従って、苦痛が増してくる。全身脂汗を流して耐えるシーン。

裸身に羞らう

大手札　三枚一組　三〇〇円
モデル　松本アサ子
略号　(まつ)

誌面のグラビヤでは、あからさまに顔を出すことをためらっていた松本アサ子嬢も分譲写真となれば、そのためらいもかなぐりすてて、大胆なポーズで顔を正面むけて、マニヤの方たちを凝視してやまないマゾ性の発揮の一場面。

女賊捕縛

大手札　三枚一組　三〇〇円
モデル　大塚啓子
略　号　(へい)

白晒のフンドシ、胸高にしめた腹巻、白鞘の短刀を落ち差しに、頬かむりをした女賊が、捕えられてきりきりと後手高手小手に縛しめられ、柱に括りつけられて逃げようともがく有様。

女賊処刑

大手札　三枚一組　三〇〇円
モデル　大塚啓子
略　号　(へは)

捕えられた女賊は、逃れんとしても、その術なく観念してうなだれ処刑の辞をきく。自ら持った短刀は男の手に抜きはなたれ、ドキドキとする抜身が女の首筋に当てられ、今まさに振り下されようとする緊迫した一瞬。

血紅使用腸露出

女体切腹シリーズ

大手札印画紙焼付
十二枚一組　一〇〇〇円
モデル　大塚啓子　略号（せい12）

左脇腹へぐさりと鋭く光る短刀の刃先を突き刺し、忽ち下腹ににじみ出る血汐のワンカットから初まり、最後に咽喉元をかき切り、左乳房の下を一抉りして絶命するに至るまでの凄惨な女体切腹の過程を、十二枚一組の連続写真として完成。臍下から右脇腹へかけて深々と切ってゆけば、腸が傷口からはみ出て真に迫る女体切腹シーンを展開しています。最近とみに濃艶さを増してきた大塚啓子嬢の手に汗を握る好演技と美しいポーズによって見事な切腹姿態をキャッチしました。何卒、女体切腹写真の最優秀作品としてお手元にて御愛玩下さい。

絶命ポーズ

血紅切腹
梨花悠紀子

大手札印画紙焼付
四枚一組　四〇〇円
モデル　梨花悠紀子　略号（せん）

愁いを帯びた悠紀子が自らの手で下腹を真一文字にかっさばけば傷口から一すじ二すじと、たらたら流れる血汐。やがて思うさま、きりきりと切り果てた上、下腹を血まみれにして仰向けに倒れる女体。傷口を上に、血塗られた短刀を右手にしたまま倒れて、今や自虐の恍惚境の中に全身をゆだねて、静かに絶命してゆく可憐な姿態。切腹と絶命の二様を味える迫力作。

新版血紅切腹フォト

祭壇の女体切腹

大手札印画紙焼付
三枚一組　三〇〇円
大塚啓子　略号（せぬ）

白布をめぐらした背景、白布をひきつめた台上に、白フンドシ一つの裸女が、いけにえの白い肌を晒して、肉づきのよい下腹を白鞘の短刀で切りさばいてゆく。白一色の中に赤い血が美しく彩り、苦悶に乳房を摑かみ、のどに手を当て、台上にて転々と身をくねらすさまはマニヤの心をゆさぶるでしょう。

褌裸女血紅切腹

大写し連続フォト

大手札印画紙ネガ全面焼付
連続　五枚一組　五〇〇円
大塚啓子　略号（おお）

股に喰い込むばかりに、きつくきりりと締め込んだフンドシ一本の臍下を刃先だけを出して白紙で巻いた短刀でぶすりと突き刺し、真一文字にじりじりと切りさいてゆく有様を血紅を用いて迫真的描写。乳房から下、太股から上のアップによって、女体切腹の妙味を最大限に発揮。切腹マニヤの指導による連続五枚の秘蔵品。

女体切腹血紅使用

苦悶表情悦楽篇

大手札印画紙ネガ全面焼付
五枚一組　五〇〇円
大塚啓子　略号（くえ）

最近益々悦虐の表情の豊かさを見せはじめた大塚嬢が、その豊満なヘソ下を思うままに深々と切りさばき、溢れる血汐を飛び散らせて、凄惨きわまりない切腹ポーズを演じ、苦悶に美しくゆがむ顔面の表情と、痺れるように痙れんする全身肢体の真に迫る表情とをハイスピードシャッターによって刻明に捕捉しました。数多く撮影した中から、特に素晴しいものばかりを選んで提供いたします。この肢体と顔面の表情によって皆様の切腹熱は一段と高まるでしょう。

ナルシスの女王

裸身切腹擬態写真

大手札印画紙焼付
五枚一組　五〇〇円
長野良子　略号（なせ）

自分の裸体のすみずみまでを誇示したい長野良子が、大胆なポーズで下腹に刃を擬して一本の白刃に托して彼女得意の自己愛の表現をカメラの前にて演じた一篇。

凄んだ女賊

大手札三枚一組　三〇〇円
大塚　啓子　略号（へに）

ドスを逆手に握った女賊が相手をおどすために、ふりかざし、ふり上げ、脅迫する場面を、女の腹巻フンドシ類かぶりの女賊スタイル・マニアの方々のために企画しました。白鞘の九寸五分使用。

バンド・ゴム見せ

大手札五枚一組　五〇〇円
東浦ひかる　略号（へみ）

前当てをはずして替ゴムをあらわに晒して恥しげに月経帯を着用したところ、バンドの種類を変え替ゴムのタッチをいきいきと写真化して手にとる如く目前にお見せするバンドフォトの綜合版。

今月の新版分譲品

女体切腹「血紅立腹」

大手札五枚一組　五〇〇円
モデル　大塚　啓子
略号（るな）

フンドシ一本の裸身ですくっと立った大塚啓子が下腹を血だらけにしながら、キリキリと切りさばいてゆく連続切腹フオト。

木馬責三態

大手札三枚一組　三〇〇円
モデル　大塚　啓子
略号（もく）

後手高手小手に縛しめられて、両手の自由のきかない女体を鋭い三角板の頂点にまたがされて、痛い痛いと悶え苦しむ木馬責め。

椅子責の果

大手札三枚一組　三〇〇円
モデル　大塚　啓子
略号（いす）

二月号の口絵にのった椅子しばりの女体を、弓のように逆エビに反ったまま、あっちへ転がし、こっちへ転がし、さんざんに責んだ果、太鼓のような胸部腹部の正面からその苦痛のさまに狙いをつけました。

双胸の強調縛り

大手札三枚一組　三〇〇円
モデル　長野　良子
略号（そう）

全く素晴しく大きく恰好のよい乳房ですね。彼女は自分でもそれを意識して殊更強調しょうとします。縄は只さえ巨大な乳房をくくり上げて更に大きくくびる。

動感エビ縛り

大手札三枚一組　三〇〇円
モデル　大塚　啓子
略号（とう）

柔肌を喰い込むばかりに縛られたばかりか、胸、二の腕の厳しい縄目と両足首の縄目を連結した上右に左に、ごろごろと転がし、お尻を中心にぐるぐると回したりする。喰い込む縄にもだえる表情と姿態を早いシャッターでキャッチしました。

色褌開股縛り

大手札三枚一組　三〇〇円
モデル　長野　良子
略号（いふ）

縛られた縄もはじきかえすばかりのボリウム。喰い込む色フンドシ一本で、思うままにあばれまわる美麗な裸身のもだえ。

分譲品御注文の栞

○代理部の分譲品は、すべて前金にて御注文願います。直接の訪問並に代金引換はお断りします。

○御注文品は注文書到着と同時に発送申し上げます。

○御送金は、現金書留（封筒は一枚三円にて局が売っています）小為替、定額小為替（小額のときは御便利です）振替（用紙は郵便局にあります）切手代用（十円、二十円、三十円、四十円などの切手で、絶対紙にはりつけないでお送り下さい）等を御利用願います。

○御注文品は、雑誌では何年何月号、或は略号の付してあるものは略号。フオトの類はすべて略号をお書き下さい。品名をお書きになると間違いが起り易いので、必ず略号のみ、お書き願います。

○送料は日本国内に限り、すべて当方にて負担させて頂きます但し速達並に書留それに外国便は、実費御負担下さい。

○局留にてお受取り希望の方が増えてきておりますが、せいぜい御利用下さい。御注文の際、お受取りになりたい郵便局名（特定局でも結構）とお名前（仮名にて可なれど市販の認印なんかを準備した方がよい）とを当方へ御連絡下されば、その御指定の局に局留としてお送りします。別に局からは通知がありませんから、局へ出向かれて、お名前をいってお受取り下さい。局での郵便物の留置期間は十日間です。十日間を過ぎると差出人へ返戻されます。

○御注文の宛先は大阪阿倍野郵便局私書函第十四号、天星社です。（私書函番号を明記するよう依頼されましたので右の通りお願いします）

○尚、御注文の際、もし代品として第二希望品がございましたら添記頂けますと、万一分譲中止、品切などのとき迅速に処理できて助かります。

○分譲品の新しいものは、毎月号の誌上で『新版案内』として発表しております。又、古くなりましたものは漸次打切りにします。

○御注文の宛先は必ず楷書ではっきりとお書き願います。肩書きがございましたら、それもお忘れなくお書き添え願います。

○御注文者の御氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません故御安心下さい。

○金額にして五千円以上のフオトをまとめて御注文の際は金額に応じて優秀フオトのサービス品を贈呈させていただきます。

新人異色原稿募集

一、告白

「私は、こんな趣向を持ちます」

○自分はこのような人に言えぬ変った趣向を持っているという方はペンに托して、その偽らざる真実の告白をお寄せ下さい。どのように奇想天外のものでも驚きませんから、どうか、全国のファンの方々に、貴方（貴女）の真実の告白を引っさげて、お呼びかけ下さるよう心からお待ちします。

二、手記

「私は、このように思います」

○真面目な御批判をお寄せ下さるよう、お待ちします。御自分の生活のこと、社会一般のこと、本誌のこと、同好者への呼びかけ等なんでも結構です。

三、体験

「私はこんな変った体験をしました」

○長い人生の中には、誰でも一度や二度は凄い体験をするものです。ぜひ、とっておき異色体験記をお書き下さい。また、特に変った体験でなくとも、御自身で非常に強い印象を受けられた事柄を、この際再び追体験して下さい。

◎以上の「告白」「手記」「体験」の三項目の応募原稿は、近く発行予定の『特集号』に一括掲載したいと思います。採用篇には、相当稿料お支払い致します故、奮って御応募あらんことを。

◎締切日、毎月三十日

愛読者原稿募集

＜体験、告白、手記＞

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたとえ、どうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

＜創作、小説、物語＞

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

＜（映画、雑誌）通信＞

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

＜レポート マニヤ通信＞

新聞記事等で関心をお待ちの事項或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フオトを贈呈いたします。

＜読 者 通 信＞

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思い出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の栞 ☆

一月分（1冊）二五〇円〈送共〉
三月分（3冊）七〇〇円〈送共〉
半年分（6冊）一三〇〇円〈送共〉

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ　定価二五〇円
三月号（第十八巻第三号 通刊第一八七号）
昭和三十八年二月二十日　印刷
昭和三十九年三月一日　発行
編集印刷兼発行人　箕田京二
阿倍野局私書函第十四号
発行所　天星社
（振替口座大阪五〇〇四二番）
（昭和三年四月三日第三種郵便物認可）
（国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号）

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目録を御請求の上ごらん願います。

○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫していますから、売切れぬ中御注文願います。

○口絵写真の複写転載は固く禁じます。